

聖なる殉教者

セバスティアン・カラガンディンスキー（フォミン）

目次:

聖なる殉教者 セバスティアン・カラガンディンスキー（フォミン）	1
長老スキアルヒマンドリト・セバスティアンの生涯	5
特別移住者	12
セバスティアン神父のカラガンディNKVD収容所への収容	15
セバスティアン神父の病気	24
バチューシュカの子供たち	35
フェオドシア・フェドトヴナ・プロコペンコ（シュヴァーゲル）	35
ニーナ・ホフルシュカ	36
アナスタシア・ペトロヴナ・パルシナ	38
イオアン・ティマコフ神父、非常勤司祭、カラガンダ市	39
ヴェラ・アフアナシーエヴナ・トカチェンコ、神父の侍女	41
マリア・オブラツォワ、神父様の侍女	42
イジュモワ・タチアナ・アルテムヴナ	46
アンナ・ヴァシリエヴナ・ザイコワ	48
マリア・ヴァシリエヴナ・アンドリエフスカヤ	50
マトローナ・ティホノヴナ・フロロワ	51
リディア・ウラジーミロヴナ・ジュコワ	52
サマルツェフ家	53
ヴァシリー・イヴァノヴィチ・サマルツェフ	53
ニーナ・ペトロヴナ・サマルツェヴァ	54
ヴァレンティーナ・セルゲイヴナ・ポポヴァ	54
修道女ニーナ（コルシュノヴァ）	54
タイシア・グリゴリエヴナ・フォミナ	56
アントニナ・イワノワ	57
パノワ・ヴァレンティーナ・ペトロヴナ	58
フミロフ家	59
修道士セバスティアン（アレクサンドル・アレクセイエヴィチ・フミロフ）	59
修道女エヴニキヤ（アレクサンドラ・フロロヴナ・フミロヴァ）	60
修道士セバスティアン（フミロフ）	62
オルガ・セルゲイヴナ・マルティノヴァ	62
マリア・フェドロヴナ、オルガ・フェドロヴナ・オルロヴァ	67
マリア・フェドロヴナ	67
オルガ・フェドロヴナ（バチューシュカの主治医）	68
マリア・フェドロヴナ	73
オルガ・フェドロヴナ	74
ライサ・イヴァノヴナ・クズミチェヴァ	75
タチアナ・ウラジーミロヴナ・トルテンステン	77
プロトディアコン・ヴァシリー・デネジキン	85
プロトイェレイ・エフスタフィイ・プロコプチュク、カラガンダ市 聖母マリアの降誕教会	90
エレナ・アレクサンドロヴナ・アガフォノヴァ	93
ヴァレリー・ザハロフ大司祭、アルマ・アタ市聖ニコラス大聖堂主任司祭	94
ヴォロコラムスクおよびユリエフのピティリム大主教の回想録より	95
カラガンダの聖母マリア降誕教会主任司祭、アレクサンドル・キセレフ大司祭	95
長老セバスティアンに関する回想、そして彼の霊の子たちによって記録された教え	99
祈りについて	99
謙遜、高慢、信仰について	100
病気について	102

病人の世話と憐れみについて	103
聖体拝領と断食について	104
祝日と聖人の崇敬について	105
イコンについて	106
教会での作法について	106
歌について	107
服装について	107
孤児について	107
子どものしつけについて	107
従順について	108
葬儀について	108
神父の懺悔について	109
饒舌について	109
笑いと無作法な振る舞いについて	110
神の助けと墮落について	110
非難について	111
節制について	111
自分自身について	112
修道生活と世俗について	112
スキアルヒマンドリト・セバスティアンの説教より	114
悔い改めた罪人についての説教	114
守護天使について	114
隣人への愛についての説教	114
夕暮れ、番小屋でのセバスティアン神父の言葉	114
神学者ヨハネ——愛の使徒——の記念日	115
大斎の始まり	115
アルヒマンドリト・セバスティアンの説教	115
アルヒマンドリト・セバスティアン神父の守護聖人の日	115
サマリアの女について	116
主の昇天	116
聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの記念日	116
守護天使について	116
日曜日	117
洗礼者ヨハネの首の切断	117
「時間」についての言葉	118
大天使ミカエルの祝日	118
日曜日	118
復活祭	119
カラガンディの修道女たち	119
修道女アグニア	119
ライサ・ニコラエヴナ・アニシモワ、チェリャビンスク市	120
イグメン・ニコライ（カルポフ）、シュチチンスク市	124
修道女アナスタシア	127
1970年。棕櫚の日曜日	131
偶然か、それとも奇跡か	131
タイシア・グリゴリエヴナ・フォミナ	132
アントニナ・イヴァノヴァ	133
アンナ・シェフチュク	134
マリア・フェドロヴナ・オルロヴァ	135
オルガ・セルゲイヴナ・マルティノヴァ	135
ニーナ・ホフルシュカ	136
修道士セバスティアン（フミロフ）	136
修道女エヴニキヤ（フミロワ）	136
マリア・ニキティチナ・オブラツォワ	138
リディア・ウラジーミロヴナ・ジュコワ	139
ミハイル・ネイグム大司祭	139

1997年10月、聖人列聖に関するシノダル委員会の決定およびアレクシオス2世総主教の祝福により、敬虔な長老セバステアン・カラガンディンスキー（殉教者）の地方聖人列聖式が執り行われた。

1997年10月22日、聖セバステアンの聖遺骨が発見された。半年間、長老の聖遺骨は、長老自身が建立した聖母マリアの降誕教会に安置されていたが、1998年5月2日、復活祭の聖歌が響く中、厳粛な十字架行列が行われ、聖セバステアンの聖遺骨を収めた聖遺骨箱は、カラガンダ市の主教会となった聖ヴィヴェディン大聖堂へと移送された。この移送は、アルマ・アタおよびセミパラチンスクの大主教アレクシイによって執り行われ、教区の聖職者、カラガンダの正教徒、そしてカザフスタンやロシアの各地から訪れた多数の巡礼者たちが同行した。

聖セバステアンの聖遺骨は、中央側祭壇の右側に安置され、参拝に供されている。また、色とりどりの金属に象嵌を施し、聖セルギイ・ラドネジスキーの聖遺骨箱と天蓋を彷彿とさせる壮麗な聖遺骨箱とその上の天蓋は、セルギエフ・ボサドの職人によって制作された。

2000年8月、記念主教会議において、カラガンディの聖セバステアンは、全教会による崇敬の対象として、ロシアの新殉教者および信仰告白者の列に加わった。

2000年8月、記念主教会議において、カラガンディの聖セバステアンは、ロシアの新殉教者および信仰告白者の聖人として列聖された。

「修道士たちの光は——聖ヨアン・レステヴィチクは言う——天使そのものであり、すべての人々にとっての光は、修道生活である。」しかし、キリスト教そのものの真髄であり、修道生活の最良の表現こそが、長老制である。

預言者の奉仕を直接引き継ぐものとして、長老制は初期キリスト教の時代に、修道生活の誕生とともに、その指導的原理として現れた。それは、内面的修養という隠遁の業と、霊的な必要も世俗的な必要もすべて含めた、世界への奉仕とを完全に融合させたものであった。

ルーシにおいて、この霊的業を特に体現していたのが、コゼルスカヤ・ヴヴェデンスカヤ・オブティナ・プスティンであった。そして、オブティナの心臓部であり、その生命の鼓動が脈打つ場所、すなわち修道院の住人の生活を聖別する恵み深い力が発せられていた場所は、有名なオブティンスキー・スキート——聖なるオブティナの長老たちが住まっていた場所——であった。

その創設の構想は、修道生活と長老制度の守護者であり、後にキエフ都主教となるフィラレート司教によるものであった。彼は、ロ斯拉ヴリの森に住んでいた聖パイシイ・ヴェリチコフスキーの弟子たちや信奉者たちを説得し、オブティナ・プスティンにスキートを設立させた。こうして、モイセイ（プティロフ）神父は弟のアントニーと共にオブティナ・プスティニに到着した。その後、モイセイ神父がオブティナ・スキートを設立（1821年）した後、修道院全体の院長（1826年）に就任すると、アレクサンドロ・スヴィル修道院から、神に賢明な祈りの人であるレオニード神父（修道名：レフ、1829年）がスキートにやって来て、ここで長老制度の礎を築いた。それによって、オブティナ・プスティンが存続し繁栄する最期に至るまでの丸100年間にわたり、後世のスターツィたちを鼓舞し続ける原動力が与えられたのである。後継のスターツィであるマカリイ神父とアンブロシイ神父もまた偉大なスターツィであり、彼の直弟子であった。

聖父マカリーが、教父文学の翻訳に、社会の教養ある層に属する多くの人々を巻き込んだ頃から、オブティナ・プスティニは当時の作家たちの間で知られるようになりまし

た。長老たちの多くの神に恵まれた才能、そして同様に重要なこととして、オブティナの修行者たちとの絶え間ない継承の絆が、オブティナ・プスティニに全ロシア的な名声をもたらした。長老アムブロシイの時代——彼は、修道見習いの頃、父レフが亡くなる前に「直接」父マカリイに引き継いだ人物である——オブティナは最盛期を迎えた。長老の名声はロシア全土に響き渡り、各地から人々が彼のもとに押し寄せた。その後を継いだ長老たち——長老アムブロシウスの弟子であるアナトリー（ゼルツァロフ）神父、ヨセフ神父、そして長老ヴァルソノフイイ——は、神の恵みによって啓示を受けた者たちとして、それぞれの師に匹敵する存在であった。

オブティナ・プスティンには、多くの著名な宗教家、哲学者、作家の名前が結びついている。ここには、ゴーゴリ、ドストエフスキー、ウラジーミル・ソロヴィヨフ、この修道院で密かに修道服を授かったコンスタンチン・レオンティエフ、そしてオブティナの壁の中で長老たちの隣に埋葬されているキリエフスキー兄弟らが訪れました。死の床にあったトルストイの最後の願いは深く象徴的でした——オブティナへ、そして彼にとってそれは、キリストの教会へという意味でした。「いかなる本や思考よりも重要なのは」とイワン・ヴァシリエヴィチ・キリエフスキーは記している。「あなたを導いてくれる正教会の聖なる長老を見つけ、その長老に自分のあらゆる考えを打ち明け、それに対して、多かれ少なかれ賢明な彼の意見ではなく、聖なる教父たちの裁きを聞くことである。」

最後の長老たち——賢者テオドシイ（†1920）、慰め主アナトリー（ボタポフ、†1922）、そして驚くべきネクタリー（†1928）——は、その伝統を受け継いでいる。彼らには、何世紀にもわたるロシア国家という建造物が崩壊し、無神論者・神を否定する者たちの政党が国を掌握する時代まで生き延びる運命が与えられた。長老フェオドシイとアナトリーには、オブティナ・プスティニが閉鎖される（1923年）前に永遠の御国へ旅立ち、聖なる修道院の敷地内に埋葬されるという神の定めがあった。

長老ネクタリーは、ホルミシチ村で厳重な監視下に置かれた追放生活を送り、誰をも受け入れてはならないという禁止令に縛られながらも、福音書の言葉「わたしのもとに来る者を、決して追い返さない」を心に留め、革命による無神論の真っ只中で霊的な支えを求めて長老のもとへ駆け寄る民衆の霊的な渇きを癒やし続けた。

次第に衰弱していった長老は、1928年4月29日、この世の儚い生活から静かに永遠の命へと旅立ち、コゼリスクから60キロメートル離れたホルミシチ村のひっそりとした村の墓地に埋葬された。[1989年7月16日、長老ネクタリオの遺骨がホルミシュチェ村の墓地からオブティナ・プスティニのヴヴェデンスキー大聖堂へ移送された。]

オブティナ・プスティナで行われた最後の徹夜祷の一つは、1924年6月15日、聖ティホーン・カルージスキーの記念日に、修道司祭ニコーン（ベリャエフ）によって執り行われた。ニコン神父は、長老ヴァルソノフイイの愛弟子であり、その側近でもあった。彼は年齢こそ若かったが、霊的な知恵においては、白髪交じりの他の長老たちをも凌駕していた。神の御心により、まさに彼こそが、霊的な慰めと助言を求め、今もなお信者たちが集う愛すべき修道院を最後に去らねばならなかった。そしてニコン神父は、霊的指導者としての責務だけでなく、長老としての責務も引き受けた。徹夜祈祷はもはや修道院の聖堂ではなく、病院の厨房で行われるようになった。そしてその後、迫り来る災難を予感しながら、ニコン神父にとって、コゼリスクでの悲しみ多く、慣れない、極めて困難な生活が始まった。そこには、オブタ修道院の兄弟たちや、荒廃したシャモルディン修道院の修道女たちが定住していた。オブタの修道者たちがどのように、何によって生計を立てていたのか——それを知っているのは主ただお一人である。

初代オブティナの長老である聖ヒモナフ・レフは、ある時、「やがて、我らのスキートが荒れ果て、そこには猫だけが住むようになる時が来るだろう」と語った。そして、安らかな最期（†1841）を迎える前に、彼は次のような祈りを捧げた。「慈悲深き私の創造主、主よ、来るべき

時代に待ち受けるあの災いと悲しみを、私が免れたことを感謝いたします。しかし、あなたがたがそれらを免れるかどうかは分かりません。」この最後の言葉は、長老の侍者に向けられたものだった。

革命のずっと前から、長老ヴァルソノフイイは、まるで父親が息子に語りかけるように、弟子であるニコン神父（当時はニコライ）にこう語っていた。「私はあなたたち、若々しい若者たちを見て、自分はあの恐ろしい日々を生き延びられないだろうが、あなたたちは生き延びるだろうと思う。修道院は大きな迫害と弾圧にさらされるだろう…… オプティナでも厳しい時代が来るだろう……真のキリスト教徒たちは、小さな教会に身を寄せ合うことになるだろう……おそらく、君たちは再びキリスト教徒が苦しめられる時代を生き延びることになるだろう。私が言っているのは、古代のような苦難のことだ……古代のキリスト教徒たちが受けた迫害と苦難が、おそらく繰り返されるだろう…… あなた方はその時代まで生き延びるでしょう。私の言葉を覚えておいてください。その時、あなた方はこう言うでしょう。「ああ、覚えている。これらすべてをヴァルソノフイイ神父が私に話してくれた……あれから何年経ったことか!」「恐ろしい日」を目にするという私の言葉を思い出してください。そして、私は改めて言います。あなた方が恐れる必要は何もありません。神の恵みがあなた方を覆ってくださるのです。」

ニコン神父の遺体は、遠く離れたアルハンゲリスク州のピネガに眠っている。彼は1930年にボルシェビキによって「自由流刑」としてそこに追放され、1931年6月25日、そこで肺結核により亡くなった。

最後の長老の一人として〔オプティナ修道院の最後の長老には、以下の人物も挙げられる： イェロスヒモナフ・マカリー（イノゼムツェフ、旧暦1970年5月4日没）、トゥーラ州ベレフ市； スキモナフ・イオアサフ（モイセーエフ、†1975年3月25日 旧暦）、リベツク州グリアジ市； スキアルヒマンドリト・アムブロシウス（イワノフ、†1978年10月2日 旧暦）、カルーガ州バラバノヴァ村； スキイグメン・パヴェル（ドラチェフ、†1981年3月16日 旧暦）、トゥーラ州チェルカッシー村。〕、革命前のオプティナ修道院の伝統に根ざして成長した人物として、スキアルヒマンドリト・セバスティアン（フォミン、†1966年）が挙げられる。——長老ヨシフの弟子であり、その死後は長老ネクタリオスの弟子であった。オプティナ・プスティニの伝統と聖父たちの恵み深い精神を深く吸収し、鉄が炉で鍛えられるように、激しい試練の炉で鍛えられ、追放やソ連の強制収容所への収監を乗り越え、神の測り知れない御心により、中央カザフスタンの灼熱の草原の首都、苦難に満ちつつも祝福されたカラガンダで長老としての奉仕を全うした。この地では、1930年代から50年代にかけて、今世紀における神に敵対するドラマの中でも最も悲劇的な出来事の一つが繰り返されたのである。殉教者たちの血に染まり、彼らの祈りによって聖別された広大なカザフスタンの草原は、まるで一面のアンティミンスのように広がっており、その上空に、オプタ修道院の長老、至福の記憶を持つスキアルヒマンドリト・セバスティアンが、その力強い翼を広げている。

長老スキアルヒマンドリト・セバスティアンの生涯

至福の長老スキアルヒマンドリト・セバスティアン（ステファン・ヴァシリエヴィチ・フォミン）は、1884年10月28日 / 11月10日、オルロフ州コスモデミャンスコエ村の貧しい農民の家庭に生まれた。父の名はヴァシリイ、母の名はマトローナであった。彼らには三人の息子がいた。長男は1872年生まれのイラリオン、次男は1877年生まれのリマン、そして末っ子は、彼が生まれた日に記念される、カノンの制定者である聖ステファン・サヴァイットにちなんで、洗礼の際にステファンと名付けられた。

1888年、両親は子供たちをオプティナ・プスティンに連れて行き、長老アムブロシウスを訪ねた。当時ステファンは4歳だったが、この訪問と、恵みに満ちた長老の優しい眼差しをしか

りと記憶していた。将来のセバスティアン神父は、4歳で父を、5歳で母を亡くし、孤児となった。「両親が亡くなった時——」と長兄のイラリオンは回想した。「私は17歳だった。私たちには9デシティナの土地があり、それを自分の手で耕さなければならなかった。農場は小規模だったが、誰がそれを切り盛りすればよいのか？ 私たち三兄弟は、口論し、殴り合いまでした——誰が私たちを引き離し、和解させてくれるというのか？」家族を固めるため、両親の死から1年後、長兄のイラリオンは結婚した。

5歳のステファンは、優しい魂と柔らかな心を持つ次兄のロマンに深く慕われていた。しかし、ロマンは修道者の道を志し、1892年にイラリオンに懇願してオブティナ・プスティンへ連れて行ってもらい、そこでヨハネ・洗礼者スキートの見習い修道士として受け入れられた。

イラリオンは性格が異なり、厳格で冷淡な人だった。ステファンは幼い頃から孤児であることの辛さを身をもって知った。幼少期を振り返り、長老セバスティアンはこう語った。「せめて女性なら誰か一人でも残っていればよかったのに。祖母でも、姉妹でも、叔母でも、その年齢の自分の面倒を見てくれる人がいればよかったのに。母親がいないのは辛いものだ。たとえ嫁がいたとしてもね。覚えているが、私が8歳の頃のことだ。嫁にミルクをねだったところ、彼女は『ちょっと待って』と言った。私は腹を立て、嫁が漂白して天日干ししていた麻の布を地面に投げ捨て、泥をまき散らした。嫁は兄にそのことを訴えた。兄は私を叱り、殴った。殴ったり叱ったりしてくれる人はいたが、私を憐れんでくれる人は誰もいなかった。」

ステファンは勉強が得意で、教区の3年制の学校を卒業した。教区の司祭は彼に本を読ませてくれた。ステファンは生まれつき体が弱く、畑仕事にはあまり従事せず、主に牧場で羊飼いとして働いていた。彼は家畜を愛し、その扱いも上手だったので、農民たちからも重宝されていた。しかし何より、彼には本を読んだり祈りを捧げたりする時間があつた。同年代の子供たちは、彼が謙虚で温厚な性格だったため、彼を快く思っていなかった。彼らは彼を嘲笑し、「修道士」とからかった。さらにひどいこともあつた。彼が人間だけでなく動物に対しても思いやりがあることを知っていた彼らは、ある時猫を捕まえて、犬たちの群れに投げつけ、犬たちが猫を引き裂くまで放っておいた——このことについて、セバスティアン神父は後に悔やみながら語っていた。ステファンにとって、農作業のない冬の時期にオブティナ・プスティニにいる次兄を訪ねることは、大きな喜びであり慰めだった。こうした訪問はステファンに大きな霊的な影響を与え、彼が成長すると、イラリオンにオブティナ・プスティニへ行くことを許してほしいと頼むようになった。しかし、兄は許さなかった。「お前が修道士だなんて、ありえないだろう？」と兄は言った。「お前はどこにも役立たない。それに、農場の仕事を誰が手伝ってくれるというのだ？」こうしてステファンは、兄の手伝いをするためにその場に残ることになった。

1908年、次兄のロマン・フォミンは病気のため、独房でラファイルという名で修道誓願を立て、1908年12月16日、聖マリア・エジプトの修道院教会にて、修道院長クセノフォント神父によってマントを授けられた。

この頃には、長兄の若い家庭も安定しており、ステファンは修道生活への志を固めて、オブティナ・プスティニのスキートにいるラファイル神父のもとを訪れた。そこで1909年1月3日、彼は長老ヨシフのケレイニクとして受け入れられた。

長老のもとで過ごしたステファンは、彼を偉大な霊的指導者として見出した。その後、彼はその頃のことをよく回想していた。「私たち（もう一人の従者）は、長老を実の父のように慕って暮らしていました。彼と共に祈り、共に食事をし、共に聖書を読み、あるいは彼の教えに耳を傾けていました。」

長老イエロスヒモナフ・ヨシフは、偉大な長老イエロスヒモナフ・アンブロシウスの最も親しい弟子でした。彼が最も身近な弟子であったのは、外見だけでなく、精神においても、従順さ、献身、そして愛の深さにおいてもそうであった。彼はまさにアムブロシオス師の「愛する子」であり、アムブロシオス師は、偉大な長老レフとマカリオスの教えが染み込んだ、謙虚で質素

な「粗末な小屋」の中で、彼を霊的に育て上げたのである。ここ、ヨセフ神父にとって敬虔の学びの場となったこの狭い独房で、彼は実践を通じて最も高貴な学問——修道生活——を修め、やがて自らも修道士たちの指導者となった。

12年間、彼はスキトの責任者およびスキトと修道院の長老の職を務めたが、1905年の病気によりこの職を退いた。彼はすでに晩年を迎えており、体力が著しく衰えていた。この修道生活の灯は静かに消えつつあったが、肉体は衰えても、精神は冴え渡り、明晰であった。1905年、聖シノドの勅令により、イグメン・ヴァルソノフイイがスキト長の職に任命された。

1910年、ヤスナヤ・ポリャナから密かに旅立った後、レフ・トルストイがオブティナ・プスティンに到着した。ステファンはこの出来事を目の当たりにした。

レフ・ニコラエヴィチはコゼルスクからオブティナに夜遅く到着し、修道院の宿泊施設に泊まった。宿泊担当のミハイル神父は後年、お茶を飲みながらトルストイが長老たちについて詳しく尋ね、誰が面会を受け付けているか、ヨシフ長老は受け付けているかと尋ね、長老たちに会って話をしに来たのだと語っていたと語っている。

「そして、二人がやって来たのです」とミハイル神父は語った。「ドアをノックしました。私が開けると、レフ・ニコラエヴィチが『入ってもよろしいでしょうか？』と尋ねました。私は『どうぞ』と答えました。すると彼は『もしかすると、私は入れないかもしれません。私はトルストイですから』と言いました。『なぜですか』と私が言うと、『私たちを訪ねてくださる方なら、どなたでも歓迎しますよ』。すると彼は、『さて、こんにちは、兄弟』と言いました。私は『こんにちは、閣下』と答えました。彼は『私があなたを「兄弟」と呼んでも、気分を害しませんでしたか？ 人は皆、兄弟なのですから』と言いました。私は答えた。「とんでもありません。確かに、皆兄弟です。」そうして彼らは私たちのところに泊まることになった。私は彼らに一番良い部屋を用意した。そして早朝、私は使用人をスキートの長であるヴァルソノフイイ神父のもとへ送り、トルストイがスキートに来ることを知らせるようにした。」その後のことについて、セバステイアン神父は次のように語った。「長老ヨセフは病気で、私は彼のそばに座っていた。そこに長老ヴァルソノフイイがやって来て、ミハイル神父から『L・トルストイがこちらへ来る』という知らせが届いたと伝えた。『私は彼に尋ねた。「誰がそう言ったんだ？」すると彼は『トルストイ自身が言った』と答えた。』長老ヨシフはこう言った。「もし来られるなら、愛情と敬意、そして喜びをもって迎えよう。彼は破門されていたとはいえ、自らやって来たのだから、誰も彼を強制したわけではない。そうでなければ、私たちにはできない。」その後、私は塀の外を見に行くように命じられた。私はレフ・ニコラエヴィチを見かけ、彼が家の近くを歩き回り、近づいたり離れたたりしていると長老たちに報告した。長老ヨシフは言った。「彼には辛いだろう。彼は生ける水を求めて私たちのところへ来たのだから。行け、もしここに来たのなら彼を招き入れなさい。彼に尋ねてみろ。」私が行ってみると、彼はもういなくて、去ってしまっていた。まだほんの少ししか離れていなかったが、彼は馬に乗っていたため、私には追いつくことができなかった。その後、彼の妹である修道女マリアから長老たちに、彼がシャモルディナから彼女のもとを去ったという連絡があった。それからアスタボヴォ駅から、L・Nの病気に関する電報が私たちに届き、その電報には彼の名義で、長老に彼のもとへ来てほしいという依頼が書かれていた。ヴァルソノフイイ神父は直ちに出発したが、トルストイの周囲の人々は彼をレフ・ニコラエヴィチのもとへ近づけなかった。ヴァルソノフイイ神父は、彼の娘アレクサンドラに手紙を託した。その手紙には、「私がここへ来ることは、ご父上の御心である」と書かれていた。それでも面会は許されなかった。彼の妻ソフィア・アンドレーエヴナも同様に面会を許されなかった。彼女は自分の客車でやって来て、駅でその客車に滞在していた。ヴァルソノフイイ神父はこの一連の出来事を非常に辛く受け止め、自身もほとんど病人のような状態で戻り、このことを思い出すたびにいつも心を痛めていた。そしてこう言っていた。「彼はレフとはいえ、鎖を断ち切ることは

できなかった。「残念だ、本当に残念だ」と。長老ヨシフも彼を憐れんでいた。「誰かが私を遣わしたというのは、事実ではない。レフ・ニコラエヴィチ本人の願い一つだけで、私はアスタボヴォへ向かったのだ」と、ヴァルソノフイイ神父は断言していた。」

1911年4月、復活祭の3日目に、長老ヨシフは臨終の病に倒れた。5月9日、彼の魂は苦難に満ちた肉体から静かに離れ、5月10日午前2時半、スキートの鐘が3回鳴り、続いて修道院の鐘が鳴り響き、長老の死を告げた。5月12日、修道士たちの手によって、彼の遺体を納めた棺は、長老アムブロシイの墓の近くに用意された墓穴に下ろされた。偉大な長老のもとで30年間を過ごした謙虚な弟子は、師の足元で永遠の安息についた。

長老の死を前に、ステファンの悲しみは計り知れないものだった。しかし、主は彼を慰めないままにはしておかなかった。ヨシフ神父の独房には、ネクタリオス長老（アナトリー（ゼルツァロフ）神父とアムブロシオス神父の霊的息子）が移ってきた。ステファンは彼の侍者として残り、その長老の指導下に入った。1912年、ステファンはラソフォール（修道見習い）の戒律を受けた。

同年4月、陰謀と誹謗中傷の結果、長老ヴァルソノフイイはオブティナ・プスティニからスターロ・ゴルトヴィン修道院の院長として転任することになった。スキートを去る際、送別の祈りを捧げた後、長老ヴァルソノフイイは悲しみに暮れる兄弟たちを慰めるためにこう語った。「この修道院で最近亡くなったマルコ修道院長が私に話してくれたところによると、マカリイ神父が臨終の際、自分の後にはアムブロシイ神父、イラリオン神父、アナトリー神父が長老となり、スキートには長老の系譜が途絶えることはないだろうと予言したそうです。そして、今後の長老たちの中には、レフ神父、マカリイ神父、アムブロシイ神父、アナトリー神父といった偉大な長老たちよりも、さらに高い霊的賜物を持つ人々が現れるだろう。」オブティナからの転任に伴い、ヴァルソノフイイ神父の決定により、長老たちの集まりによって、ネクタリイ神父が兄弟たちの霊的指導者兼長老に任命された。

ネクタリオス神父は人目を避け、陰に身を潜め、目立たないように振る舞うことを心得ていた。彼はたとえ話や謎かけを用い、少し狂人のような佇まいを見せつつ、しばしば鋭い洞察力をのぞかせて語っていた。長老の同時代人たちは、彼を直接見たことがない者は、語り聞かされた話だけでは彼の姿を明確に思い描くことはできず、その性格や、体現された謙遜、並外れた柔和さと謙虚さ、愛、そして言葉では言い表せない彼の個性の魅力といった、驚くべき資質について判断するのは難しいと主張している。彼は、その深い謙遜ゆえに、自らを長老とは見なさず、常にこう語っていた。「私はまだ初心者の身であり、学んでいる最中だ。あらゆる意味を見失ってしまった。どうして私がかつての長老たちの後継者などになれるだろうか？彼らには恵みが山ほどあったが、私にはほんのひと切れしかない。」また、訪問者たちにはこうも語った。「そのことについては、私の侍者ステファンに尋ねてほしい。彼は私よりも良い助言をしてくれるだろう。彼は先見の明がある。」ネクタリオス神父には素晴らしい人間的な素朴さがあり、最も頑固で憤りやすい魂でさえ、彼の偉大な愛の誠実さを感じ取ることができた。その愛について、長老自身はある時こう語った。「わが子よ！我々は決して変わることをない愛をもって愛している。あなた方の愛は一過性のものだが、我々の愛は今日も、そして千年後も、変わらず同じである。」

こうして、長老の導きのもと、弱き人間の魂のための静かで平和な安息の地において、その弟子であり、将来の長老となるセバステイアン神父は、その驚くべき師の愛と知恵、そして謙遜を魂に染み込ませながら、霊的に成長していった。

長老ネクタリオには二人のケレイニクがいた。年長のケレイニクはステファン神父で、その優しい心と慈悲深さから「夏」と呼ばれていた。年少のケレイニクはペトル（シュヴィレフ）神父であった〔修道服を着た修道士ペトル（シュヴィレフ）——元船員で、革命前はアトス山に通っていた。長老ネクタリオスの末の侍者であり、長老に偽りなく献身していたため、長老からも愛されていた。素朴で、素朴な農民のような気質を持っていた。鉾山で働いていたが、事故で

亡くなった。]。彼は「冬」と呼ばれ、より無骨で厳格な性格だった。小屋に集まった人々が、長老を待ちくたびて落胆し、不平を言い始めたとき、ネクタリオス長老は慰めとしてステファノス神父を送り込んだ。一方、待ちわびた人々が騒ぎ立てると、ペトロ神父が出てきて、厳格な態度で人々を鎮め、落ち着かせた。

また、時には次のようなこともあった（セバスティアン神父自身がこのことを語っていた）。通常、長老のネクタリウス神父は午後2時から3時頃と、遅くに小部屋から出てきた。人々はたびたびステファノス神父を送り込み、長老に「待っている」「多くの人が家に帰らなければならない」と伝えるよう頼んだ。

ステファン神父が長老の独房へ向かうと、長老はすぐに「今、準備をして服を着て、すぐに行く」と言うのだが、出てこなかった。そして、ようやく出てくると、皆の前でステファン神父にこう言った。「なぜ、これほど多くの人々が私を心待ちにしていることを、今まで一度も教えてくれなかったのか？」すると、ステファン神父は許しを請い、彼の足元に頭を下げた。

1913年4月13日の聖土曜日、聖衣の行列が行われている最中、ステファン神父の兄弟であるラファエル神父が、約3週間の闘病の末、肺結核のため病院で息を引き取った。最期の数日間、彼は毎日聖体拝領を受け、死の前日にはスキーマ修道士に叙階された。スキートの年代記によると、ラファエル神父は主任園芸担当の務めを果たし、時には右側聖歌隊の指揮者を代行していた。彼は寡黙で物静かな人柄であった。

ステファン神父は、運命の年である1917年に、殉教者セバスティアン（12月18日 / 31日の記念日）にちなんで「セバスティアン」という名で修道服を授かった。革命が勃発した。何世紀にもわたるロシア国家の体制は崩壊した。キリストの教会に対する迫害の時代が始まった。

避けられない変化を待ちながら、オブティナ修道院の修道士たちは静かに、ひっそりと修道院での生活を続けていた。彼らのもとには、すでに教会や修道院の閉鎖、そしてそのな財産の没収に関する知らせが届いていた。オブティナでも、修道院の壁に、修道院を襲って略奪するという脅迫を含む、不吉で挑発的な落書きが現れていた。同様の声明は口頭でも耳にしていた。

1918年1月10日 / 23日、最高会議（SNK）の布告によりオブティナ・プスティン修道院は閉鎖されたが、修道院は農業協同組合を装って存続し続けた。多くの人々、特に若い修道見習いたちは、厳しい要求が課される農業協同組合での仕事に満足できず、修道院を去っていった。残った修道士たちは、その大半が高齢者であったが、追い出されるまで、最後の瞬間まで修道院を離れないと固く決意した。皆は恐怖の中で暮らし、毎日、毎時間、追放、逮捕、投獄、そして死を待ちわびていた。

修道院の敷地内には「オブティナ・プスティン」博物館が設置された。スキートはすでに存在していなかったが、長老ネクタリイは弟子たちと共に長老用の粗末な小屋に住み続け、悲しみの重荷に押しつぶされそうになりながらも、人々の受け入れを続けていた。

1923年、大斎の第5週の終わりに、修道院で清算委員会が活動を開始した。教会での礼拝は中止された。修道士たちは徐々に立ち退かされた。修道院は「グラーヴナウカ」の管理下に移管された。修道院の建物は、児童養護施設、博物館の事務所、民間のアパートとして占拠された。修道院の住居の大部分は、博物館を通じて別荘所有者向けの賃貸住宅として貸し出された。オブタ修道院の修道士たちの大半は、コゼルスクや近隣の村々に移り住んだ。中には小さな家を購入し、数人で共同生活を送る者もいた。彼らには、すでに閉鎖されていたシャモルディンスキー修道院や他の女子修道院の尼僧たちも加わった。彼女たちは以前、オブタの長老たちから指導を受けていた者たちであった。住む場所も、食べるパンもなく、将来の見通しも全く立たないまま取り残された修道士たちにとって、唯一の慰めは祈りだけだった。スキートでは、セバスティアン神父の指示により、長老たちの独房が内外ともに当初の姿通りに修復された。

1923年、修道院が閉鎖される2ヶ月前、セバスティアン神父は司祭助手の叙階を受けた。

1923年3月、長老ネクタリーは逮捕され、県外へ追放された。伝えられるところによると、逮捕の際、当局がバチューシュカに訪問者の受け入れを断るよう要求したとき、オブタの長老

たちが全員彼の前に現れ、「もし我々と共にいたいのなら、あなたの霊的な子らを拒んではならない」と言ったという。そして彼は拒まなかった。

当初、長老はプロヒノ村（コゼルスクから45ヴェルスタ）に住んでいたが、その後、ブリャンスク州のホルミシチ村（コゼルスクから50ヴェルスタ）に移った。長老が逮捕された後、セバステイアン神父はオブティナの兄弟団と共にコゼルスクに住み、追放された長老を頻繁に訪ねた。1927年、カルーガの司教によって、セバステイアン神父は修道司祭に叙階された。1928年4月29日、ネクタリオ長老は永眠した。彼は、キエフから駆けつけた霊の子であるアドリアン・リマレンコ神父（のちのロックランド大司教アンドレイ、†1978）が身に着けていたエピトラヒリの下で、その聖なる魂を神に委ねた。セバステイアン神父は、葬儀の場、そしてその後長老の墓前で、涙を止められずに泣いた。長老の死後、教区で奉仕するために旅立つという長老の祝福に従い、セバステイアン神父はまずコゼルスクへ、次にカルーガへと赴き、その後、コズロフ市のイリインスカヤ教会の主任司祭であるプロトイェレフ・ウラジーミル・アンドレーエヴィチ・ネチャエフ [現在存命のヴォロコラムスクおよびユリエフスク都主教ピティリム（ネチャエフ）神父。] の招きによりコズロフへ赴き、タンボフおよびコズロフ主教ヴァッシアン（ピャトニツキー）からイリインスカヤ教会への任命を受けた。そこで彼は1928年から1933年まで、逮捕されるまで奉仕した。この期間、彼はコズロフにおいて革新派とのためめぬ闘いを繰り広げた。

セバステイアン神父は、離散生活を送っていたオブティナ・プステニの兄弟たちとの連絡を保っていた。例えば、1929年には、クズイル・オルダからの流刑地から戻り、死の床にあったイエロディアコン・キリル（ズレンコ、†1932年7月19日 旧暦）——かつて長老ヴァルソノフィの書記を務めていた人物——に、聖なる秘跡を授けて送った。

まもなく、プロトイェレイのウラジーミル・ネチャエフが逮捕され、セバステイアン神父は彼の家族——妻のオルガと子供たち——の世話を引き受けた。

教区教会での礼拝は、その祈りの雰囲気において、バトゥーシュカが慣れ親しんでいたオプタ修道院の敬虔な礼拝とは著しく異なっていた。ある祝日には、彼が教会から落ち込んだ様子で戻ってくることもあった。彼は祈りの精神に欠ける楽譜通りの歌唱を好まず、聖歌隊には修道院で歌っていたような歌い方を望んでいた。一方、聖歌隊長は、もっと大きく、もっと陽気な歌い方を好み、さらに足でリズムを刻むことにも抵抗がなかった。神父は、礼拝の前に聖歌隊長が、何をどのように歌うかについて祝福を受けるよう強く求めた。神父はこう言った。「人々が祈りたくなり、涙を流したくなるような歌い方をしなければならない。」しかし、聖歌隊長は「祭壇は神様のもの、聖歌隊は私のものだ」と反論した。だが、神父はそのような勝手な振る舞いを許さず、祝福された通りに、修道院流の歌い方で歌わせた。

また、大きな祝日の際には、男性聖歌隊員たちがワイン代を要求することもありました。しかし、セバステイアン神父は決してその要求を聞き入れず、たとえ許可したとしても「カゴール」を、それも水で薄めたものだけでした。昼食は腹いっぱい食べさせ、一人に一枚ずつシャツを買ってあげ、何でもして慰めてくれたが、ウォッカだけは与えなかった。そしてこの「嫌悪」のせいで、神父は生涯を通じて男性たちから嫌がらせに耐えなければならなかった。

コズロフには、セバステイアン神父のもとへ、精神的な姉妹たちが集まり始めた。最初に到着したのはシャモルディンスキー修道院の修道女アグリッピナで、神父は彼女を聖歌隊に配属した。続いて、同じ修道院の修道女フェヴロニアがやって来て、神父は彼女を家政担当に任命した。ある日、家事を終えた彼女は、一息つくために家の庭へ出た。「なぜ私はここに来たのだろうか？ 神父様は他の神父様と何ら変わらず、仕事も家と変わらない」という考えが頭をよぎっていた。すると突然、神父様が家から出てきて、彼女の隣に座り、「なぜ私のところへ来たのですか？ 私は他の神父たちと同じだ」と。彼女は、神父が自分の考えをすべて見透かしていることに気づき、神父の足元にひれ伏して許しを請いました。そして、セバステイアン神父こそが、他の誰とも違う存在であることを悟ったのです。フェヴロニア修道女は、その後ずっと神父のそばに留

まり、神父がカルラガに投獄されていた間も傍らに寄り添い、カラガンダで最期を迎えるまで共に暮らしました。

まもなく、商人の家系の二人の少女が神父のもとを訪れた。そのうちのひとり、修道女バルバラは、12歳の時に両親によってシャモルディノに預けられていた。彼女たちは都会風の服装——パンプス、可憐なドレス、そしてコシンカ——を身にまとって神父のもとを訪れた。神父は彼女たちを見て、フェヴロニア修道女にこう言った。「この娘たちに『フェゼウシュナ』のブーツ、ジャケット、そしてスカーフを持ってきてくれ。着替えてから教会へ行きなさい。」彼女たちは文句一つ言わずに従い、持参された服を着て教会へ向かった。そこでは、誰にも見られず、若い娘たちに視線を向けられないよう、入り口のすぐそばのストーブの横に立った。こうして神父は時折、彼女たちを謙虚にさせようとしたのである。

修道女ヴァルヴァラは、美しいアルトの声と、優れた記憶力を備えていた。彼女はまた、規則の管理者でもあった。さらに、争う者たちを和解させたことから、「平和の使者」とも呼ばれていた。神父は彼女についてこう語っていた。「もしヴァルヴァラが修道士だったら、修道司祭になっていただろう。」

当時、コズロフには、荒廃した修道院から逃れてきた他の修道士や修道女たち、そしてかつてオブティナ・プスティンに通っていた信徒たちも住んでいた。そして、神の霊の創造的な力によって救いを真摯に求める人々の心は、セバスティアン神父に引き寄せられていた。これは、地元の当局の注目を免れることはできなかった。

1933年2月25日、セバスティアン神父は、修道女のバルバラ、アグリッピナ、フェヴロニアと共に逮捕され、取り調べを受けるためタンボフのOGPU（国家保安局）へ送致された。取り調べの中で、捜査官はセバスティアン神父が精神的に通じ合う人々との接触や、ソビエト政権に対する彼の態度を明らかにしようとした。これに対し、神父は率直にこう答えた。「私はソビエト政権のあらゆる措置を、神の怒りとして見ており、この政権は人々に対する罰である。私はこうした見解を、身近な人々だけでなく、この話題について話す機会のあった他の市民たちに対しても述べてきた。その際、祈らなければならない、神に祈り、愛をもって生きなければならないと語った。そうして初めて、我々はこれから解放されるのだ。教会や修道院が閉鎖されたことについて、私はソビエト政権にほとんど満足していなかった。なぜなら、それによって正教の信仰が破壊されてしまうからだ」[タンボフ州連邦保安局（УФСБ）、事件番号P-12791、第1巻]。

外部からの差し入れはGPUでは受け付けられなかったため、自由の身であった神父の信徒たちは、電報で神父の遠縁の親戚をタンボフに呼び寄せた。彼らは彼女を刑務所まで見送り、彼女は差し入れを渡し、神父と話をした。また、姉妹たちは昼食の時間、囚人たちが刑務所から連れ出され、中庭を歩いて食堂へと連れて行かれる際、門のそばに立ち、隙間から中を覗いていた。神父は門の前を通り過ぎる際、彼女たちに祝福を与えた。

1933年6月2日、OGPU特別捜査局（イチョ）のトロイカによる非司法審理の会議で、次のように決定された。「刑法第58条の10、第II項により起訴されたステパン・ヴァシリエヴィチ・フォミンを、1933年2月25日から7年間の懲役労働収容所に収監する。」

神父は髪を短く刈り上げられ、髭も剃り落とされた。そして、彼が最後に門の前を通り過ぎたとき、悲しみのあまり頭さえ上げることができなかった。

タンボフ州FZITKの医療委員会は、左肘関節の可動域が制限されていること（神父は幼少期に左手を負傷していた）を理由に、彼が重労働に適さないことを認めた。委員会の結論にもかかわらず、セバスティアン神父はタンボフ州の伐採現場へ送られたが、それは彼には到底無理な仕事だった。信徒たちは伐採現場の場所を突き止め、距離の遠さをもものともせず、できる限りの物資を届け、慰め、支えようとした。日曜日には、受刑者たちは自宅へ帰ることが許されていた。コズロフの自宅までは遠かったが、森のこちら側にある小さな村にも、土曜日の夕方に彼を待ち受ける信徒たちがいた。そこには、体を洗い、着替え、食事をし、祈り、休息をとるためのあらゆる環境が整えられていた。日曜日は祈りと会話に費やされ、神父自身もこう語っていた。「まるで復活祭のようだ！まるで楽園にいるようだ！」そして月曜日には、再び森へ仕事に行かな

ければならなかった。しかし、それも過ぎ去った。1年後、セバスティアン神父はカラガンダ収容所のドリнка集落へ移送され、1934年5月26日に到着した。

歴史的背景

カラガンダの成立の歴史を調べてみると、この都市の歴史は、まさにカルラガの歴史であり、1930年代の特別移住農民たちの歴史に他ならないことがわかる。1930年代初頭まで、カラガンダという都市は存在していなかった。現在の「旧市街」〔現代のカラガンダの地区の一つ〕にあたる小高い丘の上に、ツァーリ時代、イギリス人によって建設された、ボルドー色のトタン屋根を備えた赤レンガ造りの別館が建っていただけである。彼ら（つまりイギリス人）によって、後に「コステンコ鉱山」となる場所に最初の試掘坑が掘られ、最初の石炭が採掘され、それはラクダで運び出された。また、この草原地帯には、世紀の初頭にできたいくつかの移住者集落——スタラヤ・ティホノフカ、ポリシャヤ・ミハイロフカ、ドゥボフカ、フェドロフカ、ドレシェノフカなどがあり、そこにはロシア人入植者が住んでおり、いくつかの集落には正教会の教会が建っていた。これらが1930年、いわゆる「大転換」の年までの状況である。この年、ロシア全土で全面的な集団化、すなわち農民に対する大規模な迫害が始まった。

特別移住者

短期間で国家の基盤を固めようとした新政権の最初の五カ年計画には、中央カザフスタンの未開墾地の開拓と、カラガンディ石炭盆地の開発という課題が含まれていた。この任務の遂行には極めて安価な労働力が必要であったため、1931年初頭、アンドレイ・アンドレイエヴィチ・アンドレーエフを委員長とする委員会が設置され、OGPU（国家保安人民委員会）と共同でこの問題の解決に取り組み始めた。そして委員会は、5万2千の農民家族を中央カザフスタンへ追放することを決定した。これには子供や高齢者を含め、約50万人が含まれていた。こうして1931年2月から3月にかけて、農民に対する大量逮捕が始まり、彼らは中央カザフスタンの灼熱の草原へと移送されていった。当初、アクモリンスクから将来のカラガンダに至る鉄道の建設のため、各世帯の家長と長男たちがアクモリンスクへ送られ、彼らはこの鉄道を信じられないほど短期間で完成させた。4ヶ月後、すなわち1931年5月までに、その鉄道はすでに完成していた。その後、道路建設労働者の家族がカラガンダ州およびオサカロフ地区へと移送されるようになった。OGPU（国家保安人民委員会）の厳重な警備の下、農民の家族でぎゅうぎゅう詰めになった列車がカラガンダ方面へと向かった。彼らは、アストラハン州からチュヴァシヤやモルドヴィヤに至るまでのヴォルガ川流域全域、ペンザ州、タンボフ州、クルスク州、ヴォロネジ州、オルロフ州、さらにはハリコフ州やオレンブルグ州から集まってきた。彼らは、密閉された牛用貨車に詰め込まれ、灼熱のステップを運ばれていった。車内には、車全体でたった一つの便器しかなかった。その貨車には、妊婦、授乳中の母親、子供、老人たちが乗っていた。すでに貨車の中で人々が亡くなり始め、遺体は生存者たちと共に目的地まで運ばれた。そして再び、新たに到着した人々の中から、カラガンダーバルハシュ間の道路建設のために、最も体力の強い若者たちが選抜された。建設作業員一人当たりの1日のノルマ（冬でさえ）は、土8トンだった。道具は、手押し車、バール、つるはし、シャベルだった。ノルマを達成できなかった者には食糧配給が削減された。そして人々は次々と倒れて死んでいった。彼らのために墓を掘ることはなく、そのまま鉄道の盛土の上に横たえられ、土で埋められた。つまり、アクモラからバルハシュに至るこの道路は、文字通り人々の骨の上に築かれているのである。

こうして、1931年の夏から初秋にかけて、5万2千の農民家族が、後のカラガンダ市および同州となる地域へ連れてこられ、住居も、十分な食糧も、水もないまま、野原に放り出され、運命に任された。人々は、自分たちで急ごしらえに掘った穴に身を寄せ、古ぼけたぼろ布で覆い、灼熱の太陽や肌を乾かすようなステップの風から身を守った。そして、この異常に暑い1931年の夏、6歳未満の子供たちのほぼ全員が赤痢と飢餓で命を落とした。残りの人々——10歳の子供から老人まで——は、土造りのバラックの建設に動員された。冬までにバラックの建設を完了させる

ことはできず、11月、すでに雪が降り、厳しい寒さが襲う中、未完成で断熱も暖房も施されていない、時には屋根さえもないバラックへの入居が始まった。50平方メートルのバラックには、100人以上が詰め込まれた。そして1931年から1932年の冬にかけて、大規模な死亡の波が押し寄せた。人々を死に至らしめた主な原因は、寒さ、飢餓、流行性チフス、壊血病であった。その結果、隔離収容所となった集落では、農民の総数の半分以上が死亡した。とはいえ、死者の記録を誰一人としてつけていなかった。あったのは、コメンダトゥラに所属する埋葬班だけであり、彼らは死者を荷車に積み込み、集落の周辺に掘られた溝に投げ捨てていた。

1932年の晩秋、ほぼ全員が凍死したオサカロフスキー地区に、亡くなった特別移住者の代わりに、数本の列車で運ばれてきたクバン地方出身の弾圧被害者たちが補充として到着した。そして1933年、国のほぼ全域を飢饉が襲った際、特別移住者たちの間で新たな死の波が押し寄せた。

この恐ろしい数年間、カラガンディ州全域に正教会の教会は一軒も存在しなかった。特別移住者たちは、地下小屋で密かに集まって祈りを捧げていた。まさに彼らこそが、後にカラガンディ教会の最初の共同体を形成し、1942年から、炭鉱や新しく形成された集落に正教会の教会や礼拝堂を開設するよう請願したのだ。

では、最初の五カ年計画についてはどう言えばよいだろうか。もちろん、それらは達成された。特別移住者である「ペルヴォツェリンニキ」たちは、何千ヘクタールもの未開墾地を開拓し、1930年代半ばまでにカラガンディ州およびオサカロフ地区の領土内に25の経済的に堅実なコルホーズを設立し、カラガンディ石炭盆地の最初の炭鉱を開発した。

しかし、1931年から1933年にかけてここで犠牲となった農民・特別移住者の数を総括しようとすれば、4人に1人しか生き残らなかったという事実を踏まえると、アクモラからバルハシュに至るまでの、辺境に急ごしらえで設けられた特別移住集落の溝や鉄道の盛土の下には、すでに60年余りの間、およそ40万人の農民とその子供たちの遺骨が眠っていることになる。

「ラスクラチ」された特別移住者の移送と同様に、カザフスタンの人里離れた草原を開拓するために、どこから安価で気取らない労働力を確保するかという同様の問題——家族から離れており、場所から場所への移動に抵抗がなく、整備された住居も病院も学校も必要としないような労働力——という問題は、同様に単純な方法で解決された。

1931年12月19日、中央カザフスタンにGULAGの支部の一つであるカルラグを設立する決定が下された。これは当初「OGPUカラガンディ巨大国営農場」と命名され、その設立目的は、急速に発展する中央カザフスタンの重工業のための農業生産の基盤を築くことにあった。初期の指令文書の一つには、次のように記されている。「1931年に組織されたOGPUカラガンディ巨大国営農場は、中央カザフスタンの広大な地域を開拓するという、名誉あるかつ責任ある任務を課せられている。」そして、この開拓は、1931年末、ソビエト連邦各地から、犯罪者たちと共に、政治的弾圧の犠牲者たちがサリ・アルキの古くからの草原へと次々と移送されてきたことから始まった。2,567人からなる最初の移送団は、四方を有刺鉄線で囲まれたテントキャンプに収容された。囚人の数は年々増え続け、それに伴って巨大な国営農場も成長・発展していった。その影響力はアルタイからベットパク・ダリまで、「カザフスタンのスイス」からザイリイ・アラ・タウに至るまで広がっていた。カルラグの領土はフランスの国土に匹敵した。カルラグの首都はドリンカ集落（カラガンダから33キロメートル）であり、囚人たちが通過する玄関口はカラバス駅であった。そして、中央カザフスタンの果てしなく広がる草原全体が、数え切れないほどの囚人たちの共同墓地となった。

カルラグは実権、武器、輸送手段を掌握し、郵便や電信の設備も備えていた。それは、ドリンカから半径2キロメートルから400キロメートルの範囲に配置された26の分所（「拠点」）から構成されていた。各分所は統一された経済計画に組み込まれており、この計画が実行されないという事例は一度もなかった。ここでの需要は特殊なものだった。ドリンカの周囲には、それをきつく取り囲むように、収容所体制のあらゆる技術的要件を満たした収容所区域も形成されてい

た。有刺鉄線の屋根付き柵、監視塔、耕作・耕起された監視帯、そして警備犬が配置された円形の哨所などである。ドリンカの中心部には第3部門（後に第1部門と改称）が置かれていた。そこは「刑務所の中の刑務所」であり、そこで囚人たちは刑期を延長され、拷問を受け、銃殺された。

カルラガでは、カラガンディ地方裁判所の3名で構成される巡回合議体、いわゆる「トロイカ」が活動していた。判決は現地で執行された。死刑囚は、他の囚人たちがあらかじめ掘っておいた穴の縁にひざまずかされ、後頭部を撃たれた。銃殺された者は「死亡」の印が付いた名簿に登録され、個人ファイルは破棄された。

カルラグの経済は繁栄していた。カルラグには安価な労働力だけでなく、強力な知的拠点も存在していた。そこには、世界的に著名な科学者、軍司令官、文化人、政治家、聖職者、修道士らが収容されていた。有刺鉄線の向こう側、の草原地区には、あらゆる分野の高度に熟練した農学者、畜産技術者、医療従事者、経済学者が多数集められていた。カルラグの収容者の生活環境は耐え難いものだった。1941年2月5日付で、グラークの監査官によって作成された報告書には次のように記されている。

「収容者は標準的なバラックに収容されている。バラックの壁は土壁で、内部設備は二段ベッドである。床は土間であり、冬用の窓枠はない。泥だらけで湿気がひどく、バラック内のストーブは毎日暖められていない。男性用バラックの気温は+4°、女性用は+16°である。多くの収容者に寝具がない。燃料不足のため、風呂場、洗濯場、消毒室は頻繁に稼働が中断されている。シラミの大量発生や、交換も洗濯もされていない下着の不足が確認された。冬用の衣類が支給されている受刑者は50%未満である。大半は季節にそぐわない服装をしており、足元には夏用の靴を履いている。バラック内でも作業現場でも、沸かした水は供給されていない。作業現場には生水さえもない。受刑者たちは水の代わりに雪を食べている。食事の質はカロリーに見合っていない。靴や衣服が不足しているため、作業に出られないケースがある。こうした理由で作業に出なかった受刑者は、作業拒否者とみなされ、拒否者用の配給食が支給される。彼らはさらには懲罰隔離房（SHIZO）に送られることさえある。」

カルラガでは、頻繁に脱走未遂事件が発生していた。それらはすべて「殲滅」という結末を迎えた。

こうした状況の中、ソ連内務省（MVD）カラガンディ国营農場（時代とともに名称は変わっていた）とその農業試験場の名声は、全国に轟いていた。ここではキャベツ、キュウリ、トマトが記録的な収穫量を上げていた。育種家たちは前例のない成果を上げた。彼らは冬作物、春作物、飼料作物の新品種を開発した。第58条により25年の刑を宣告された農学者ミトロシナは、ジャガイモの品種「エピクルス」を開発し、1ヘクタールあたり60トンの収穫量を上げていた。さらに、畜産事業も組織されていた。例えば、モスクワで開催された全ソ連博覧会では、「モロシユカ」という愛称の雌牛が展示され、年間1万2千リットルの牛乳を生産していた。夏の中頃から晩秋にかけて、カルラグの各支部からペトロパヴロフスキー食肉加工工場まで、巨大な羊の群れが自力で移動していった。カルラグには製糖工場やガラス工場があり、ピマ綿の紡績や皮革加工も行われていた。RMZの第3作業場では、戦時中にM-82地雷が製造されていた。至る所で囚人たちが働かされていた。カルラグは軍に食糧を供給し、国家に穀物、肉、武器、衣類を提供していた。しかし、囚人たちは人間として扱われていなかった。食事は薄っぺらなスープと、「アニェティナの瞳」と呼ばれる大麦だけだった。毎日、ドリンカから裁判官がやって来て、誰かがニンジンやビートを盗んだという理由で囚人を裁いた。

そして、カルラグでの死亡率が非常に高かったという事実は周知の事実である〔その存続期間（1931年から1956年）にわたり、カルラグは約100万人を収容した。しかし、カルラグの公文書は今日に至るまで機密扱いされているため、犠牲者の数について、おおよその数字すら明らかにすることはできない。〕。

「結局のところ」——実験ステーションの科学報告書の一つにはこう記されている——「内務省傘下の国营農場のあらゆる経済活動は、極めて乾燥した草原や半砂漠の土地における農業

開発の成功という、壮大な生産的試みと見なすことができる。」まさにその通りだった。しかし、これらすべては、囚人たちの手によって、彼ら自身の骨を犠牲にして設計され、建設されたのである。

セバスティアン神父のカラガンディNKVD収容所への収容

こうして、1934年5月、中央カザフスタンの灼熱の草原にあるカルラグの分所の一つに、オプティナ・プスティニの修道士セバスティアン神父が移送されてきた。

収容所での生活について、神父は、そこで殴られ、拷問を受け、ただ一つ「神を否定せよ」と要求されたと回想している。彼は「決して」と答えた。すると、彼は一般の受刑者たちがいるバラックに送られた。「あそこなら」と彼らは言った。「すぐに再教育されるだろう。」年老いて体力の弱った司祭に、一般受刑者たちが何をしたかは想像に難くない。

健康状態が弱かったため、神父はパン切り機での作業、その後、収容所内の倉庫の警備員として働かされた。夜間の当直中、神父は決して眠ることを許さず、祈りの務めを全うしていた。そのため、検査にやってくる上層部は、いつも彼が目覚めている姿を目撃していた。神父は、時々収容所に映画が運ばれてきて、すべての囚人がクラブに集められていたことを語っていた。「私は映画には行かなかった」と彼は回想した。「みんなが行く中、私は相棒に『君が私の代わりに映画に行ってくれ。その間、私が君の代わりに当直をするから』と言ったものだ。」もし行かざるを得ない場合は、バチューシュカはクラブに早めに着き、人目につかない隅やベンチの下などで横になった。そこで眠ったり、休んだり、祈りを捧げたりした。

収監生活の最後の数年間、バチューシュカは護送から解放され、ドリンカ付近にある収容所の第3区画の物資保管庫で暮らしていた。彼は牛を使って、ツボ（中央産業菜園）の住民たちに水を運んでいた。冬になると、水を運んできた後、牛のそばに近づき、凍えきった手を牛の体に当てて温めることがあった。すると、誰かが手袋を持ってきて、彼にプレゼントしてくれた。しかし翌日、彼はまた手袋なしでやってくる（誰かにあげたか、取り上げられたのか）と、再び牛の体に手を当てて温めていた。彼が着ていた服は古くてボロボロだった。夜、神父が寒さに震えると、家畜の飼料桶に潜り込み、動物たちの体温で体を温めていた。ツボの住民たちは彼にパイやラードといった食料をくれた。彼は食べられるものは何でも食べたが、ラードは収容所の囚人たちに届けていた。「収監されていたが」とバチューシュカは回想した。「断食の戒律は破らなかった。肉片の入った粗末な食事が出されても、私はそれを食べず、余分なパンと交換していた。」

バチューシュカと共に逮捕された姉妹のヴァルヴァラとフェヴロニアには、刑期は科されなかった。姉のアグリッピナは極東へ送られ、そこで1年後に釈放された。彼女は故郷へ帰る意向をバチューシュカに手紙で伝え、彼は彼女に直ちにカラガンダへ来るよう祝福した。1936年、彼女はカラガンダに到着し、神父との面会を果たした。神父は彼女に、カルラグに近いポリシャヤ・ミハイロフカ集落の近くに小さな家を購入し、そこに住み、毎週日曜日には「どんな車ででもいいから」便に乗せて彼のもとを訪れるよう提案した。2年後、姉妹のフェヴロニアとヴァルヴァラもカラガンダにやって来た。そして、ニジナヤ通りに一軒の家——天井がたわんだ古びた小屋——が購入された。彼女たちはその中に2つの部屋、台所、物置を整備した。菜園と井戸もあった。アグリッピナとバルバラの両姉妹はノヴォゴロドの病院で働き始めましたが、フェヴロニアは読み書きがほとんどできなかったため、コルホーズで働きました。他にもキラ、マルファ、マリヤといった修道女たちがカラガンダにやって来ました。彼女たちはティホノフカに定住しました。シスターたちは信者たちと知り合い、少しずつ集まって共に祈りを捧げるようになった。ドリンカにセバスティアン神父がおられることを知ると、信者たちは彼を助け始めた。日曜日には、シスターたちが病棟にいる神父のもとを訪ねた。食料や清潔なリネンに加え、聖体、ポルーチ、エピトラヒルも持参した。皆で一緒に小森へ出かけ、神父様はご自身で聖体拝領を行い、修道女たちの告解を聞き、聖体拝領を授けました。収監者たちや収容所の幹部たちも神父様を慕うよう

になりました。神父様の心に宿る愛と信仰が、憎しみや敵意に打ち勝ったのです。神父様は収容所にいる多くの人々を神への信仰へと導きました。それは単なる信仰ではなく、真の信仰へと導いたのです。そして、神父が釈放されたとき、収容所には彼の霊的な子供たちがおり、彼らは刑期を終えるとミハイロフカに彼を訪ねてきました。それから何年も経ち、ミハイロフカに教会が開かれたとき、ドリンスキー中央労働収容所支部の住民たちがそこを訪れ、威厳ある老神父の姿に、かつて自分たちの水運びをしていた人物を見出したのです。

服役期間が終盤に差し掛かった。神父は1939年4月29日、主の昇天祭の前日に収容所から釈放された。彼は、床が黄色い粘土で塗られ、台所の屏風の向こうにある大きなトランクが寝床になっていた、ごく小さな小屋に住む修道見習いたちのもとへ戻ってきた。そこで暮らしていたのは、フェシャ修道女、ヴァリャ修道女、グルシャ修道女、そして後に収監先から戻ってきたエカテリーナ修道女、そして神父だった。朝は早く起きて定められた祈りを捧げ、修道女たちは仕事に出かけ、神父は家に残った。彼は水を汲みに行き、昼食を作り、靴を修理し、磨き上げた。修道女たちはこれを気まぐず思っていたが、ティホノフカに住む年長の修道女たちは彼女たちにこう言った。「神父様が何をしているのか、あなたたちは理解できないのだから、黙っていなさい。」聖体礼儀は密かに行われ、神父様は毎日、一日の礼拝の全課程を唱え終えていた。

戦前、彼はタンボフ州を訪れていた。収容所からの帰還を長年待ち望んでいた神父の霊的な子らは、彼がロシアに残って自分たちと共にいてくれることを願っていた。しかし、神父は自らの意志の成就を求めるのではなく、神の御心に身を委ね、スホティンカ村で一週間過ごした後、再びカラガンダ——神の摂理によって彼に定められたその地——へと戻った。

当時のカラガンダの住民は、「永久」という印が押された石炭鉱山に配属された、相変わらずの特別移住者たち、そして「カラガンダへの永久流刑」という証明書を持って釈放された元カルラグ収容所の囚人たちで構成されていた。市の人口の3分の2以上がパスポートを持っていなかった。流刑者たちは薄暗い物置や地中小屋、小さな納屋で暮らし、10日ごとに司令部へ出頭して登録を済ませなければならなかった。

カラガンダは飢餓に苦しむ街であり、特に戦時中や戦後はパンが極めて不足していた。神父は自ら店へ行き、配給券でパンを受け取っていた。彼はごく普通の老人のように、ごく質素な灰色のスーツを着ていた。そして列に並んだ。順番が回ってくると、彼は押しのけられ、また列の最後尾に並ぶことを、何度も繰り返した。人々はそれに気づき、彼の悪意のない穏やかな人柄を見て、順番を飛ばして神父を先に通し、パンを渡すようになった。

1944年、神父とシスターたちは、ザパドナヤ通りにあるもう少し大きな家を購入した。神父は家の中を歩き回り、家主らしく隅々まで目を配りながら、何をどのように改装すべきかを話していた。「でも、どうしてそんなことをなさるのですか、神父様」とシスターたちは反論した。「私たちがカザフスタンで一生を過ごすわけでもないでしょう！ 戦争が終わったら、皆さんと一緒に祖国へ帰りますよ。」「いいえ、姉妹たちよ」と神父は言った。「私たちはここで暮らすのです。ここでの生活は全く異なり、人々も違います。この人々は心温かく、自覚があり、苦難を味わってきた人々です。ですから、愛する姉妹たちよ、私たちはここで、に暮らしましょう。私たちはここでより多くの貢献ができるし、ここは私たちの第二の故郷だ。何しろ、もう10年も経って、すっかり慣れたのだから。」こうして彼女たちは、死ぬまでずっとカラガンダに留まることになった。そして、ミハイロフスキー墓地では、全員が神父のすぐ隣に埋葬されている。修道女のうち3人——アグリッピナ、ヴァルヴァラ、エカテリーナ——は、彼女たちが神父よりずっと年下であったにもかかわらず、神父自らが埋葬した。彼女たちは皆、ニジナヤ通りの小屋が暴漢たちに襲撃された後、心臓を病んでしまったのだ。死ぬほど怖がり、それが健康を損ねてしまったのである。フェヴロニア修道院長はあの夜、家にいなかったため、彼女だけは3人全員より長生きした。バチューシュカは災難を予見し、修道女たちをメルコムピナート地区へ移住させるよう強く勧めていた。しかし、そこはB・ミハイロフカから遠く離れており、修道女たちは決して教会から遠く離れた場所へ行くことを望まなかった。結局、長老の忠告に従わなかったため、その代償を払い、次々と心臓発作で亡くなった。襲撃の直後、神父は彼女たちのために教会の

隣に家を購入したが、3人の修道女の体力はすでに衰えていた。彼女たちの修道名は、アレクサンドラ、ヴェラ、エレナである。フェヴロニア修道女は、神父の死後、フェクラという名で出家した。1976年に亡くなった。

そして当時、1944年、ザパドナヤ通りにある新しい家には小さな家庭教会が設けられ、セバステアン神父はそこで密かに聖体礼儀を執り行っていた。神父の家には常に清潔さと静けさ、そして並外れた安らぎが満ちていた。部屋には多くのイコンが飾られており、その前ではランプの灯りがほのかに揺らめいていた。

時が経つにつれ、ミハイロフカの住民たちはバチューシュカのことを知り、彼を自分たちの家へ招くようになった。儀式を行う許可は下りていなかったが、バチューシュカは断ることなく訪れていた。カラガンダの住民たちは誠実で、彼を密告するようなことはなかった。ミハイロフカだけでなく、他の地域でも人々はバチューシュカを慕い、彼の祈りの力を信じるようになった。あらゆる地域から、霊的な導きを求める修道者や信徒といった、長老の霊的な子らがカラガンダに集まり始めた。ロシアのヨーロッパ側、ウクライナ、シベリア、北方の辺境や中央アジアからも人々がやって来た。彼は皆を愛情を持って迎え入れ、新しい土地での生活を落ち着かせる手助けをした。当時のカラガンダでは、小さな家は安価で売られていた。それらは特別移住者たちの所有物であり、彼らは時が経つにつれて自分たちのために新しい家を見て、土壁の粗末な小屋を売り払っていた。神父は、購入資金のない人にはそのための資金を渡し、資金が足りない人には足しをくれた。そのお金は時が経つにつれて彼に返され、彼はそれをまた他の人に渡す、という具合だった。

カラガンダ周辺では新しい炭鉱や鉱山が開設され、仕事に就くのも難しくはなかった。やがてミハイロフカには「神父さんの人々」が大変多くなり、その数は増え続けたが、神父は常に明るく、愛情深く、誰に対しても優しく、誰にでも親しみやすい人だった。ある時、彼は修道女の MARIA とマルファと共に、ティホノフカの向こうにある共同墓地へ向かった。その墓地の中央には共同墓があり、そこには飢えや病気で亡くなった特別移住者の遺体が一日二百体も埋葬され、埋葬式も執り行われず、土盛りも十字架もなく——長老は、その光景をすべて見渡し、すべてを聞き終えると、こう言った。「ここでは昼も夜も、この殉教者たちの共同墓の上で、地から天へと蠟燭が燃え続けている。」そしてセバステアン神父は、彼ら全員のために祈りを捧げた。

カラガンダは成長し、発展していった。その過程で、牧草地や鉱山、採掘場によって分断されていた古い移住者集落、1930年代の特別移住者集落、戦時中にヴォルガ川流域からカラガンダへ追放されたドイツ人たちの集落などを吸収していった。最初に建設されたのはコパイ・ゴロドで、次に第1および第2鉱山の集落が建てられ、その後、大規模な炭鉱の近くに旧市街が建設された。そして戦後、地方の産業中心地として本格的な規模で建設が始まったのが、高層ビルが立ち並ぶ新市街であった。ミハイロフカは、新市街に隣接する最も近い地区であった。そして、カラガンダには教会がたった一つ——第2鉱山にのみあった。

1946年11月、長老の祝福を受けて、ボリシャヤ・ミハイロフカの正教徒たちは、地元の関連当局に宗教共同体の登録申請を提出した。現地で肯定的な結果が得られなかったため、信者たちはアルマアタにあるカザフスタン宗教問題担当全権代表に請願を行った。この請願に対し、1947年11月、カラガンディ州執行委員会に「セバステアン・フォミン神父に対し、無断で開設された教会での礼拝を禁止する」という指令が下された。1947年および1948年にも、アルマアタへ再申請が送られた。信者たちはモスクワへ陳情に赴き、アルマアタ教区管理局に支援を求めた。大祖国戦争で戦死した兵士たちの両親は、カラガンディ州の軍事委員会に手紙を送った。彼らにとって唯一の慰めは、戦死した息子たちのために祈ることだった。「しかし、私たちからは——手紙にはそう書かれていた——その機会さえも奪われている」[カザフ・ソビエト社会主義共和国（KSSR）評議会宗教問題委員会、担当官との書簡、D. 1、l. 12; D. 4、l. 45。]

ボルシェミハイロフスキー教区には、ノヴォゴロドのほか、メルコムピナート地区、フェドロフスキー炭田、ミハイロフスカヤ鉄道駅、サラニ地区、ドゥボフカ地区、10のレンガ工場

、ノヴォストロイカ地区、カラガンディの5つの露天掘り炭鉱地区、数カ所の炭鉱、その他（計20箇所）が含まれていた。しかし、神父はたった一人であり、彼を助けていたのは修道女たちだけだった。

信者たちは、せめてキーロフ第2鉱山にある既存の礼拝堂の分院としてでも、この礼拝堂を登録するよう求めた。

その結果、1951年に、しばらくの間は礼拝が行われていたミハイロフスキー礼拝堂は、ついに閉鎖された。そして1953年になってようやく、ボルシェミハイロフスキー礼拝堂において、洗礼、葬儀、結婚式、告解といった教会の秘跡や儀式を行うための公式な許可が得られた。これで、バチューシュカに相談できる人々の数ははるかに増えたが、バチューシュカが聖体礼儀を執り行えるのは、信者たちの私宅でひそかにだけだった。そして、疲れ果てた一日の労働を終え、私室での祈りを捧げた後、小柄で痩せた体つき、長い黒いコートと黒いスコーフエイカを身につけた神父は、夜中の3時に、軽やかで素早い足取りでカラガンダの暗い通りを歩き、あらかじめ約束された家へと向かった。そこには、正教徒たちが一人、あるいは二人ずつ集まっていた。大祝日には、深夜1時から徹夜祈祷が行われ、短い休憩の後、神聖な聖体礼儀が執り行われた。光が漏れないよう、窓は毛布でしっかりと覆われていたが、家の中は明るく、多くの人で賑わっていた。礼拝は夜明け前に終わり、人々は再び暗い通りを、一人あるいは二人ずつ、それぞれの家へと帰っていった。

この時期、高い霊的生活を送る二人の修道女——アグニア修道女とアナスタシア修道女——がカラガンダを訪れた。セバステイアン神父は、オブティナ・プスティニの頃から彼女たちをよく知っていた。アグニア修道女——長老ヴァルソノフィイの霊的な娘であり、才能ある画家——は、若い頃からズナメノ・スホティンスキー修道院でイコン画の技法を学んでいた。彼女は博識で、聖父たちの著作に精通し、内面は非常に控えめで知性的であった。アナスタシア修道女は、ネクタリオ長老の祝福のもと、聖なる狂人の業を実践していた。彼女はしばしば常識に反する行いをしたが、その真意は後になって明らかになることが多かった。そして、すべての人への思いやりや、魂に宿る天使のような優しさを、外見の厳しさの陰に隠そうとし、時には周囲の人々に鋭い指摘をし、彼らの罪や欠点を糾弾することもありました。しかし、アナスタシア修道女を恐れたのは、まだ彼女に慣れていない人々だけであり、彼女を知る人々は、同じ愛と深い敬意をもって彼女に報いた。この二人の老修道女は、神の恵みによる賜物に恵まれていた。彼女たちは人の本質を見抜き、多くのことを先見の明をもって予言したが、深い謙遜の心を持って、セバステイアン神父の指導の下で暮らしていた。

そして、教会の開設に向けた奔走は続いた。神父に献身的な人物であるアレクサンドル・パヴロヴィチ・クリヴォノソフは、何度もモスクワへ赴き、ついに1955年、彼が働きかけて得た、ボリシャヤ・ミハイロフカにおける宗教共同体の登録に関する文書を持ち帰った。

住宅を教会堂へと改築するための改修工事が始まった。すべてをバチューシュカが指揮した。壁の間仕切りは取り除かれ、屋根には、森の隠修院にある古い教会に見られたような青いドーム型の屋根が築かれた。工事の進捗を鋭く監視していた地方当局の代表者たちは、教会の屋根をたとえ1センチでも高くすることを断固として禁じた。そこで神父は、ある夜、人々が密かに集まることを許可し、その夜中に教会の床を1メートル深く掘るよう命じた。人々はシャベルを手に取り、一晩でトラック50台分の土を運び出した。こうして、床から天井までの高さは以前より1メートル高くなった。床はすぐに板で覆われ、翌朝にはすでに教会で祈祷会が執り行われていた。

中庭には「番小屋」と名付けられた建物が建てられ、そこに徐々に4つの部屋が増築された。それは、台所付きの食堂、修道女たちの部屋、そして暖かい玄関ホールのある明るく広い部屋で、後者は神父の部屋となった。さらに中庭には、復活祭の早朝礼拝や洗礼祭の水の祝福を行うための屋外礼拝堂が設けられ、台所には、特に祝祭日には大勢訪れる来訪者のための寝台が設置された（数年後、市議会の命令により寝台は撤去された）。ミハイロフカの住民たちは、自分た

ちが保管していたアイコンを持ち寄るようになった。そのうちのいくつかは、1928年に旧ミハイロフスカヤ教会が閉鎖された際に、住民たちによって救い出されたものでした。例えば、かつてベラルーシからの移住者であるポリシャヤ・ミハイロフカの最初の住民たちがアトス山に発注した、驚くほど美しい「速やかに聞き入れる聖女」のアイコンを、神父はイコノスタスに安置することに決めました。アグニア修道女は、聖母マリアのアイコンと同じ大きさで、福音書を持った救世主のアイコンをイコノスタス用に描いた。また、彼女はミハイロフスカヤ教会のために他にも多くのアイコンを描いている。教会の祭具、典礼書、教父書は、モスクワの から、かつてカルラグ収容所に収監されていたプロトディアイコン・ヤコフによって送られてきた。そして1955年、主の昇天という大祝日に、ポリシャヤ・ミハイロフカで聖母マリアの降誕を記念する教会が奉献された。

神父たちは、バチューシュカ自身が選んでいた。まず様子を見極め、その後呼び出してこう告げるのだ。「あなたは神父になるべきだ」。アレクサンドル・パヴロヴィチ・クリヴォノソフの場合もそうだった。彼は当時、州執行委員会で農業担当の指導的役職に就いていた。彼はその言葉に怯え、家に帰ってから眠れず、泣き続けた。しかし、逆らう勇気はなく、バチューシュカのもとへ行き、「ご加護をください。承知いたしました」と言った。「よし、それならいい。まずは勉強し、その後アルマアタへ行って聖職の位を受けなさい。」

長老セバステアヌスがアルマ・アタおよびカザフスタンのニコラエ（モギレフ）大主教に宛てた手紙が現在も残されている：

「ご尊厳なる聖ニコライ大主教様、聖職者としての御祝福を賜りたく存じます。あなたの修道見習い、不肖のセバステアンより。聖なる大主教様、もし可能であれば、アレクサンドル・パヴロヴィチ・クリヴォノソフを司祭に叙階してくださるよう、切にお願い申し上げます。私の健康が衰え、教区の務めを果たすのに多大な苦勞を強いられているためです。今まさに聖四旬節を迎え、告解や聖体拝領を求める信徒が多く訪れますが、私一人ではこの聖なる務めを果たすのが困難な状況です。それゆえ、罪深い私ですが、私の願いを拒まず、私の教区民のためにも、アレクサンドル・パヴロヴィチを司祭に叙階して下さいますようお願い申し上げます。アレクサンドル・パヴロヴィチは、道徳心があり、節度があり、あらゆる点において司祭の称号にふさわしい人物です。」

アレクサンドル・パヴロヴィチ・クリヴォノソフについては、もう少し詳しく述べておくべきだろう。彼は若い頃、シャモルディン女子修道院に通っており、そこで暮らしていた至福のペラギアは、彼の将来の人生について多くを語っていた。彼女は、彼が正教会から離れ、様々な宗教的・政治的潮流に傾倒し、最期には「ディヴェエヴァのアルヒマンドリト」になると語った。その後、彼女の言葉は的中した。彼は正教会から離れ、古儀式派に加わり、他の宗教的潮流にも傾倒した。しかし、カラガンダで長老セバステアンと出会った際、長老の教えに深く感化され、彼は決定的かつ不可逆的に正教に帰依し、聖職に就いた。アレクサンドル神父は、慈愛に満ちた牧者となり、イエスの祈りの実践者となった。彼は死ぬまで、至福のペラギアの予言が成就するのを待ち望み、こう語っていた。「彼女が私に予言したことはすべて成就した。ただ一つだけ、成就しなかった。」しかし、より広い視点で見れば、すべては成就したと言える。この預言から、長老セバステアンがカラガンダに「ディヴェエフ修道院」、すなわちディヴェエフの共同体と同様の女子共同体を築いたと結論づけられる。長老の死後、アレクサンドル神父が院長となった。つまり、神の御目には、彼は「ディヴェエフのアルヒマンドリト」であり、それこそが至福のペラギアが予見していたことだった。アレクサンドル神父は1971年7月5日に主の御許に召された。

もう一人の司祭、セラフィム・ニコラエヴィチ・トルファノフは、司祭である父の希望により、かねてより聖職に就いていたが、長い間経済学者として働いていた。彼は、アレクサンド

ル神父と同様、独身であった。その後、バチューシュカは、教会長であるパヴェル・アレクサンドロヴィチ・コヴァレンコを叙階させるため、アルマ・アタへ派遣した。パヴェル神父は4人目の司祭となった。独身誓約を立てた助祭のニコライ・サマルツェフ神父も、バチューシュカの側近であった。

神父は1955年から1966年まで、亡くなるその日まで、11年間にわたり教会の主任司祭を務めた。

1957年12月22日、聖母マリアのイコン「予期せぬ喜び」の祝日に、ペトロパヴロフスクおよびクスタナイの大司教ヨシフ（チェルノフ）により、バチューシュカはアルヒマンドリトの位に叙され、「聖教会への献身的な奉仕」に対して総主教の表彰状を授与された。

1964年、名前の記念日に、前例のない荣誉として司教の杖を授与された。安らかな死を迎える前、バチューシュカはスキーマ（修道服）を授かった。

ヴヴェデンスカヤ・オブティナ・プスティニのスキートでの修道見習いから、修道院長職、そしてアルヒマンドリトの位への叙任に至るまで、バチューシュカは1909年から1966年までの57年間にわたり、正教会へのたゆまぬ献身的な奉仕を全うした。

バチューシュカは、教会規律を完璧に遵守し、礼拝において省略や短縮を一切許しませんでした。教会礼拝は、彼にとって内面的生活の不可欠な条件であった。バチューシュカは、主の昇天と聖三位一体の祝日に特に深い敬意を払っていた。それらは、救い主キリストの業を完結させるものであり、すべてのキリストの秘儀の頂点であるからである。会話の中で彼が好んで取り上げたのは、神学者ヨハネであり、その記念礼拝を特に荘厳かつ敬虔に執り行っていた。彼は、この「愛の使徒」が信徒たちから相応しい敬意を払われていないことをしばしば嘆き、こう語った。「ほら、今日は聖ニコラオスの聖遺骨移送の記念日だ——教会は人で溢れている。しかし昨日は、聖使徒兼福音記者ヨハネ・テオロゴスの祝日だった——教会は半分も空いていた。どうして、どちらがより尊く、どちらをより深く崇めるべきか、理解できないのか？ どちらの祝日がより重要なのか？」また、彼は主の先駆者であり洗礼者である聖ヨハネの七日間の記念日や、自身の生まれ故郷の守護聖人である聖コスマスとダミアノ（7月1日 / 14日）の記念日を特に尊んでいた。

神父は、人々がろうそくを灯すことを非常に重要視していた。時折、彼は自分の霊的な子や信徒の誰かを呼び寄せ、ろうそくの束を渡してこう言った。「祈り、もっと頻繁にろうそくを灯しなさい。」その人に何か危険が迫っていたのか、あるいは神父が、その人がめったにろうそくを灯さないことに気づいていたのか。その理由は、後になって明らかになることが多かった。しかし、修道生活を送るある霊的な娘に対しては、ある時こう言った。「あなたにはろうそくを灯す必要はない。あなた自身がろうそくになりなさい。」同様に、神父はイコンを敬うことを教え、イコンについて畏敬の念を込めてこう語った。「正教の勝利——それが祝日だ。では、何を祝うのでしょうか？ それは、聖像破壊の異端が打ち負かされ、打ち倒されたことです。聖像には神の恵みが宿っています。それらは神から私たちを助けるために与えられ、闇の力から私たちを守ってくれます。聖霊の恵みが蓄積される特別な聖地があります。そして、恵みの栄光において特別な聖像もあります。何世紀にもわたって祈りが込められた奇跡を起こすイコンがあり、それらは小川のように、主からの恵みを運んでいるのです。」神父様は、誰かがイコンに額をつけないのを見かけると、その人にこう言いました。「君よ、何かを熟考し、拒絶するときは、心と頭の中に正しい判断力を持ちなさい。」ある人にはこう言いました：「君よ、まず、多くのことを理解するのは難しいということ、それゆえに誤りやすいということを理解しなさい。さもないと、人々は自分の無知を、知恵だと勘違いしてしまうのだから。」ある時、会話の中で神父様は、長老ネクタリオスが常にこう言っていたと語りました。「知恵、理性、分別——これらは聖霊の賜物である。それらは敬虔さへと導く。そして、分別という賜物を欠いた人は、しばしば自分こそが他者より優れていると思い込む。「悪の力から身を守るには、高慢ではなく謙遜を身につけること以外に、どこに守りを求めようか。」

神父様の絶え間ない関心事は、自らの意志を切り捨てることによって、人々の魂に深い平安をもたらすことでした。世の中であって、自分自身や信徒たちの生活を、修道院での生活に近づけるよう努めていました。誰かが彼の助言に耳を傾けず、従わなかった場合、彼は深く心を痛めました。それは常にその人にとって害となり、しばしば不幸を招くことだったからです。彼は悲しみのあまり、心を痛めるほどでした。叱責し、背を向け、祝福も与えませんでした。しかし、涙を見たり、その人が悔い改め、最終的に彼の助言に従ったのを見れば、大いに喜び、その人を憐れみ、しばらくして自ら何かで喜ばせてあげました。ある時、彼はある若い女性にこう言いました。「あなたは私の言うことを聞かなかったのに、なぜ今になって泣きながら頼みに来たのですか？これからは我慢するしかありません。」そして、女性たちの方を向いて言いました。「なぜ私の言うことを聞かないのですか？なぜだ？だって私は……——言葉を詰まらせ——いつも間違っているわけではないのだから。」これが彼の謙虚さだった。信徒たちの不従順に、バチューシュカは涙を流すことさえあった。同様に、懺悔を聞く際にもよく泣いた。なぜだろうか？罪の恐ろしさに戦慄したのか、あるいは十分な悔い改めが見られなかったのか、それとも何かを予見していたのか……

神父の愛は優しく、思いやりに満ちていた。時には怒ることもあったが、めったになかった。その様子はまるで子供じみていた。「さあ、棒を持ってきて、そうやって叩いてやる、棒で叩いてやるぞ！」と言うのだ。人々はこうした時、しばしばひざまずいて許しを請うた。もちろん、怖いのは棒そのものではなく、バチューシュカを悲しませてしまったことだった。ある時、率直な会話の中で、彼はうっかりこう口走ってしまった。「私はどれほど多くの人の命を延ばしてきたことか……」

神父は繊細なユーモアの持ち主で、冗談を言うのが好きでしたが、その内容は常に非常に親しみやすいものでした。彼は人との会話に惜しみなく時間を割いてくれました。彼のアドバイスはどれも、人々の幸福につながりました。神父様の忠実な信徒たちの生活は、秩序の模範でした。彼らは「神父様の信徒たち」と呼ばれ、ミハイロフカの半分近くが、まるで暗黙の修道院のようだと語られていました。

神父の健康状態は優れませんでした。特に食道狭窄に苦しんでいました。食事中は決して神父を邪魔したり、会話で気を散らしたりしてはならないことは、誰もが知っていました。そうするとすぐに咳き込み始め、時には嘔吐に至ることもありました。この病気は、長老が長い人生で数え切れないほど経験した精神的な衝撃の結果だった。彼は常に緊張状態にあった。教会がまだ登録されておらず、神父がごく親しい者たちだけで密かに聖体礼儀を執り行っていた頃、彼は絶えず恐怖を感じていた。彼はこう言ったものだ。「ほら、神父さん、礼儀を執り行え！私がどんな思いでいるか、君たちは分かっているか？」と語っていた。何しろ彼は法律に違反していたのだから、いつ誰が来て、全員を逮捕してもおかしくない状況だった。その後、教会で公然と礼拝が行われるようになって、神父のその恐怖は少しか残っていた。時折、軍服を着た人物が教会に入ってくることがありましたが、神父はすでに「今にも近づいてきて、礼拝を中断させ、逮捕されるかもしれない」と考えていました。ある時、信徒の一人が神父に「私はあの人を怖いんです」と言いました。すると神父は微笑んでこう言いました。「そう？でも私はあの人を怖がらない。私は誰をも恐れない。ただ、教会が閉鎖されることだけは恐れている。それだけは怖い。自分のことは恐れていないが、あなたたちのことは心配している。私は自分がどうすべきか分かっている。だが、あなたたちがどうするかは分からない。」これが神父の言葉だ。

神父様が元気だった頃、毎回の聖体礼儀の後には祈祷会を執り行っていた。聖歌隊が歌い、二つのアカフィストが朗読された。しかし、体力が衰えると、アカフィストは半分だけ朗読されるようになった。祈祷会の終わりに、神父様は十字架に口づけをさせ、必ず短い言葉を述べていた。かすれた声であっても、常に何らかの教訓を与えてくれた。もちろん、祈祷会には教会の人々が全員残っていた。教会には多くの若者たちがいた。聖歌隊席には、17歳までの少女たちが並んで歌っていた。しかし、当局の検査官がやってくると、皆隠れてしまった。「当局が来た！」と知らせられるやいなや、皆が身を隠すのだ。担当官には8人ほどが同行していた。教会に入

ると、聖歌隊席には年老いた女性たちだけが立っている。当局は皆、教会を閉鎖することを夢見ており、神父は頻繁に「あちら」へ呼び出されていた。神父がやって来ても、彼らは何も言えなかった。「あの老人は何者だ——と彼らは言う——なぜ我々は何も言えないのか？　まあ、しばらくは年老いていさせておこう。だが、その老いも過ぎ去れば、教会を閉鎖してやる」と。そして、地方当局の代表者たちは、あらゆる話し合いをアレクサンドル神父と行うことを好んだ。神父の霊的な高みは彼らにはっきりと感じられ、それはまるで彼らを恐れさせ、畏敬の念を抱かせているようだった。ある日、州執行委員会所属の宗教担当官が、神父の教会の村長に対し、聖職者たちがサラン市やドゥボフカ集落へ出向くのをやめるよう要求し始めた。それらの地域は別の管轄区に属しているからだ。教会長はこの要求を神父に伝え、神父は翌日、教会長と共に自ら州執行委員会へ向かった。そして、神父が担当官に話しかけると、担当官はすぐに口調を変え、説明を始め、さらには神父に謝罪さえした。神父は彼にこう言った。「担当官同志、鉦夫たちの要望に応じて、サランやドゥボフカ、その他の集落で礼拝を行うことをどうか許可してください。時には、病気の母親に聖体拝領を授けてほしい、あるいは故人の葬儀を執り行ってほしいと頼まれることもあるのです。」担当官は快くこう答えた。「どうぞ、セバステイアン神父、おやりください。彼らを断らないでください。」そして、神父がどんな依頼をしても、彼はほとんど何も断らず、その後、村長もこの件について二度と口にすることはなかった。

神父の信徒たちにとって、彼の守護聖人の日と誕生日は祝賀行事だった。誰もが神父のもとへ行き、お祝いの言葉をかけ、たとえささやかな贈り物でも渡したいと願っていた。しかし、神父は栄誉も、自分への特別な注目も好まず、贈り物を受け取ることも好まなかった。皆が祝福のために集まっているのに、彼は夜遅く、あるいは翌日に帰ってくるのだった。ある日の守護聖人の日、神父は夕方に帰宅し、修道室の扉を開けた。まだ中に入ってもいないのに、彼は突然叫んだ。「誰だ?!　誰が私の魂と独房を汚すことを許したのだ?!」と叫んだ。その反応に不安を覚えた修道女たちが独房を覗き込むと、神父のベッドのそばに新しいローブが置かれているのが見えた。誰かが神父の許可なくそれを置いていったのだ。

また、バチューシュカは、誰かが特に称賛されるのを好まず、その人の欠点をすぐに指摘した。一方で、誰かが貶められているのを見れば、その人の最も優れた資質を即座に見出していた。どんな罪を犯していようとも、良いところを見つけ出すのだ。

神父は自分自身に対して非常に厳しい要求を課していました。彼は、自分の義務は揺るぎなく果たさなければならないと、よく繰り返していました。ある人が追悼礼拝の後、彼にこう言いました。「今日もまた、とてもお疲れですね。追悼礼拝をととても長く執り行われましたから。」すると彼は机の上からパンを一つ取り、それを見せながらこう言いました。「ほら、ご覧なさい。このようなパン一つひとつについて、私は祈りを捧げなければならないのです。」その一方で、神父は常に、あらゆる面で節度を保っていました。「王の道を歩まなければならない——つまり、何事においても中庸を保ち、そして何より、常に神の御心と神の摂理に委ねなければならないのです」と彼は語っていました。

彼は自然を深く愛し、動物を慈しみ、特に優しい心を持っていた。ある日、台所に住んでいた猫が5、6匹の子猫を産んだ。料理人が、子猫たちを溺れ死なせるべきだと話し始めた。たまたまその場を通りかかった神父は、その会話を耳にしました。彼は全身を震わせ、身震いし、ほとんど叫ぶように言いました。「溺れさせるなんてとんでもない!　みんな育てよう!」子猫たちはそのままにされ、成長すると、ミハイロフ教区の信者たちは「神父様の祝福を願って」、ほとんど喧嘩になりそうになりながら、その子猫たちをすべて引き取りました。

神父は、ドゥボフカ、サラン、フェドロフカ、トバルといった集落によく足を運んだ。家庭で洗礼を授け、家庭で葬儀を執り行った。彼が訪れた場所には、今や彼の祈りによって教区が設立されている。彼は、刑期を過ごしたドリンカという集落にも足を運んだ。そして、ドリンカの収容所——彼が収監されていた場所——には、神父が自らの手で木に彫った十字架が今も残っている。それ以来、木は成長し、それに伴って十字架も大きくなった。そこ、ドリンカでは、ほぼすべての木の下に人が埋葬されており、受刑者が眠り、ほぼすべての木の下に墓がある。

しかし、バチューシュカは特にメルコムピナトの集落を訪れるのが好きだった。彼は、ミハイロフカには自分の「オブティナ」があり、メルコムピナトには「スキート」があると語っていた。そこへ彼は孤児や未亡人たちを集め、で小さな家を購入して、彼らを世話していた。そして、彼がメルコムピナートに祈りを捧げにやってくると、人々は手元の仕事や心配事を放り出し、一人また一人と、ただ祝福を受け、慰めを得るためだけに、神父様のいる場所へと急いで駆けつけた。神父様は一人ひとりを愛情を込めて迎え、それぞれに教訓を授けた。そこには平和な雰囲気満ちていた。

メルコムピナートには、バチューシュカを訪ねてきた、妻を亡くした彼の兄イラリオンが、末娘と孫娘のタイシアと共に暮らしていた。彼はすでに、背が高く、背筋の伸びた、深遠な長老であった。日曜日や祝日には、イラリオン・ヴァシリエヴィチは娘と孫娘を連れて教会を訪れていた。バチューシュカに祝福を請う際、彼は地面に頭をついて深々と礼をし、敬虔にその手を口づけし、懺悔の際にはひざまずいた。死の直前、彼はラソフォール（修道見習い）の戒律を受け、バチューシュカ自らが、長兄である修道士イラリオンに最後の祈りを捧げた。

修道院の伝統を受け継いで、神父は特に追悼の礼拝を執り行うことを好んでおり、毎日自ら追悼の礼拝を執り行っていた。彼は、女性たちの罪ははるかに少ないから、女性の葬儀や追悼を執り行う方が好きだと語っていた。彼には、亡くなった人々の罪が見えていたのだ。時には、午前3時や4時に修道女たちを起こし、追悼の祈りを捧げさせることもあった。そして、神父の死後、人々は次のような夢を見るようになった。多くの教会が立ち並んでおり、どれも金色で高くそびえ立っているが、その中に、十字架で覆われた小さな教会が一つあるのだ。人々は「この十字架だらけの教会は誰のものですか？」と尋ねると、「それは」と答えが返ってくる。「スキアルヒマンドリト・セバスティアンの教会です。彼は故人のために祈ることを愛していたので、この教会は十字架で囲まれており、誰も何もできないようになっています。」そして、その教会はすでに40年間もそこに建ち続けている。

神父様とお話ししていると、魂は永遠に生き続け、死によって人生が終わるのではなく、ただ肉体が消滅するだけだということが、自然と、そして疑いようもなく明らかになっていった。それは単純なことであり、神父様もそれを率直に語っていた。間違いなく、バチューシュカには先見の明という賜物があつたが、彼はその賜物を表立って示すことはなかった。彼の先見の明が公然と現れるのは、状況がそれを必要とする時だけだった。

ある時、神父は追悼の礼拝を執り行い、追悼される人々の名前が書かれたメモを読み上げていた。「イオアンナ、シメオン、オルガ、マリア……」読み進める途中で彼は立ち止まり、メモを手を持ちながら振り返った。「誰が追悼の依頼をしたのですか——ヨアンナ、シメオン、オルガ、マリア？」「私です、神父様」と、一人の女性が答えた。「シメオンはいつ亡くなったのですか？」「ずいぶん前ですよ、神父様」「そのメモをお取りください。私は追悼しません。彼の死亡証明書を持ってきてください。」女性は顔を赤らめて言った。「何をおっしゃるのですか、神父様。私はもう若くありませんから、そんなことできません！」（生きている人の名前を追悼の祈りに書き込むと、その人はひどく不安になり、自分をそう祈っている人のもとへ戻りたくなるという、荒唐無稽な迷信がある）。—「それならいい。証明書を持ってきてください。」神父はこの女性を知らなかった。彼女はよそ者だったのだ。そうでなければ、彼を騙そうなどとはしなかっただろう。

他にもこんな出来事があつた。教会で聖歌隊として歌っていたマリア・スタカノヴァという少女がいた。彼女は乳児院から児童養護施設に入所し、そこで育ったため、自分の両親については何も知らなかった。ある日、マリアが神父に近づき、両親の名前や国籍が分からず、彼らのことを偲んだり、安らかな眠りを祈ったりできないことを悲しんでいると打ち明けた。「今は手が離せない」と神父は言った。「明日また来てくれ、話そう。」翌日、神父は自ら彼女を呼び寄せ、こう言った。「マールーシャ、君の両親はロシア人で、正教徒だった。追放されたんだ。父

親の名前は……」——そして彼は父親の名前を挙げ、母親の名前も告げた。マリアは大変喜び、両親のために追悼の祈りを捧げるようになった。

神父は公然と誰かを癒やしたり、説教したりすることはなく、その謙虚さと素朴さから、いつもこう言っていた。「いや、私は誰も癒やさないし、説教もしない。病院へ行きなさい。」「私は」と彼は言った。「魚のように、声を持たない者だ」——そうして彼は自らを卑下した。彼は密かな祈りによって人々を助けていた。悪霊に取りつかれた人々については、こう語った。「ここでは耐え忍ぶことになるが、あの世では試練が痛みなく過ぎ去るだろう……私はあなた方から十字架を取り去りたくない。ここでは耐え忍ぶことになるが、天国では大きな報いを得るだろう」と、苦しむ人々を慰めた。神父には霊的な知恵と、並外れた忍耐力があった。誰かが隣人に対して不平を漏らすと、彼はこう言った。「私は皆さん全員を忍耐強く受け入れているのに、皆さんはたった一人を忍耐できないのか」。誰かと折り合いがつかないと、彼は心配した。「私は修道院長なのに、皆さんの話に耳を傾けているのだ」。彼は一人ひとりの救いを気遣い、それが彼の目標だった。神父は「もっと穏やかに暮らしてください」と懇願した。ある時、礼拝に出かけた際、香炉を忘れてしまった。皆が互いに非難し合った。神父は「私のせいだ」と言い、皆は黙り込んだ。神父はこう言った。「ほら、私はここに、目が見えない者、足の不自由な者、この世の者やあの世の者を集めてしまった。私自身も病人で、病人を集めてしまったのだ」と。彼と共に奉仕していたアレクサンドル神父は声が出ず、パヴェル神父の声もかすれていた。「さあ、集まったのだから、少しずつ奉仕していこう、病弱な者たちよ！」

神父は、修道院を巡ることを推奨しませんでした。「ここには」と彼は言った。「ラヴラも、ポチャエフも、オブティナもある。教会では礼拝が行われている——必要なものはすべてここにある。」もし誰かがどこかへ移り住もうとすると、彼はこう言った。「どこにも行かないでください。どこにも災難があり、どこにも混乱があります。カラガンダにはほんの少ししか影響が及ばないでしょう。」

セバスティアン神父の病気

アレクシー1世総主教閣下は、バチューシュカに会って話をしたいと強く望んでおられました。総主教閣下は、ピティリム（ネチャエフ）主教に対し、せめて飛行機でバチューシュカを連れてくるよう祝福を与えました。しかし、バチューシュカはすでに体力が衰えており、同意しませんでした。「私は飛行機に乗るには不向きだ」と長老は答え、カラガンダに残りました。

こうして、愛と、神および隣人への献身的な奉仕という偉業の中で、年月が過ぎていった。バチューシュカの衰弱は著しくなった。衰弱、息切れ、全身の痛み、食欲の完全な喪失が進行していった。ヘルニアの部位や胸郭には、ほぼ常に痛みがあった。担当医師たちは総合的な治療を行ったが、バチューシュカの容体は改善せず、苦痛が一時的に和らぐだけだった。それでも、毎日、礼拝の時間になると、神父様は教会に足を運ばれました。神父様はこうおっしゃいました。「もし私が神聖な典礼や徹夜祈祷を家で過ごしてしまうなら、一体どんな聖職者だということのか？」神父様は毎日追悼の祈りを捧げられていましたが、典礼を執り行うのはすでに祝日のみとなっていました。

当時、長老セバスティアンがアルマ・アタおよびカザフスタンの大司教ヨシフ（チェルノフ）に宛てた手紙が現存している：

「至聖なるヨセフ大主教様。私たち全員に聖なる祝福をお与えくださいますようお願い申し上げます。また、これまでお返事を差し上げることができず、お詫び申し上げます。かねてより、大主教様に手紙を書き、祝日のお祝いを申し上げようとしておりましたが、なかなかその機会が得られませんでした。電報でお祝いの言葉を申し上げましたが、返事ばかりが遅れております。病気や体の衰え、そして奉仕活動、家事を巡る心配事、さらには祈願など、すべてが病弱な私を疲れさせています。病気のせいで、夜でさえ安らぎを得ることができません。咳とヘルニアがひどく悩ませています。しかし、時は待ってくれません。つい先日、キリストの降誕祭がありましたが、それからすでに三週間が過ぎました。祝日は穏やかに、無事に過ごすことができました

た。今のところ、私たちは平和と調和の中で暮らし、奉仕しています。ニコライ神父を司祭に、そして長老のパヴェル・アレクセエヴィチを助祭に叙階したかったのですが、彼は聖書の朗読や聖歌に非常に熱心であり、今どきそのような信仰深く熱心な信者は少ないからです。それについては、神の御心に従い、また貴殿の聖なる祝福が得られるかどうか次第です。建設工事に関しては、今のところ進展がありません。貴殿のもとでアレクサンドル神父とアンドレイ神父をお迎えしたグレボフは、ずっと体調を崩しており、私たちは、建設が許可される場所が旧場所か別の場所か、あるいは完全に却下されるのか、正確な結果を知りたかったのです。建築資材は少しずつ手配していますが、建設場所が確定していないため、どこに積み上げ、保管すればよいのか分かりません。ヨセフ大主教様、私が定年退職し、自身の魂の救いに専念できるよう、聖なるご祝福を賜りたく存じます。そして、アレクサンドル神父、あるいはセラフィム神父、あるいはニコライ神父のいずれかに、主任司祭を務めていただきたいと思います。私は頭が弱く、体調も優れないため、こうした事柄に対処することができません。特に、建設に伴う諸々の心配事や労務、そして礼拝の務めについては、私の健康状態では到底対応しきれないのです。どうか私に引退の祝福をお与えいただき、アレクサンドル神父を、貴殿および信徒の皆様のご同意を得て、主任司祭に任命していただけますようお願い申し上げます。私のような不肖の修道見習いから、アレクサンドル神父、セラフィム神父、ニコライ神父、聖職者たち、教会の関係者全員、そしてすべての信徒に至るまで、皆があなたに頭を下げ、聖なるご祝福と聖なるお祈りをお願い申し上げます。」

教会内では、彼の追悼式のために仕切りで区切られた小さな部屋が用意され、それは「カユートカ」と呼ばれていました。奥の壁のカーテンの向こうにはベッドが置かれており、礼拝中に痛みや激しい倦怠感に襲われた際、そこで休むことができました。窓のそばには小さな机があり、その前には椅子があり、その上には母アグニアの筆による聖三位一体の大きなアイコンが掛けられていた。時折、神父は声を上げ、寝台に横になり、足を少し高くするために足元にクッションを敷いてもらった。彼は半マントを身にまとい、エピトラヒリオンとポルーチャを身につけていた。また、エクテニアを横になったまま唱えることもあった。福音書の朗読の際は必ず立ち上がり、フェロンを身に着けて、フェロンを着たまま福音書を読み上げた。

神父は、椅子に座ったまま懺悔を受け付けていた。来訪者との会話を減らし、もはや全員を受け入れることはできなくなっていた。他の都市から訪れた人々だけは断らなかったが、やがて彼らとの会話も短くするようになった。

1965年12月、40°にも達する厳しい寒波が訪れた。自分の独房から教会へ中庭を通り抜ける際、神父は激しく咳き込み始めた。彼の健康状態を診ていたオルガ・フェドロヴナ・オルロヴァ医師とタチアナ・ヴラディミロヴナ・トルテンステン医師は、「これほど厳しい寒さの中、中庭を歩いてはいけません」と忠告した。神父は不満げな表情を浮かべて、「飛んで行くよ」と答えた。

1966年1月から、彼の健康状態は著しく悪化し、慢性疾患が悪化した。

主治医のオルガ・フェドロヴナ・オルロヴァは、以下の疾患を診断した。気管支拡張症および微小膿瘍を伴う慢性気管支炎、肺気腫、食道狭窄、前立腺腺腫およびそれに伴う合併症：重度の症候性高血圧を伴う慢性腎盂腎炎、頻繁な部分嵌頓を伴う両側鼠径ヘルニア。神父は数年にわたり、これらの病に苦しんでいました。

神父様にとって、聖体礼儀を執り行うことが困難になったことは非常に辛いことでした——礼儀の最中に頻繁に咳き込み、息苦しくなっていたのです。医師たちは、礼儀前の朝に注射を受けるよう提案しました。神父様は喜んでそれに同意しました。注射と短い休憩の後、彼は、たとえ苦労はしたものの、教会へ歩いて行き、礼拝を執り行うことができた。しかし、病気は進行し、やがて注射を打っても教会までたどり着けなくなってしまう。彼の苦しみを目の当たりにした医師たちは、修道見習いたちに椅子に乘せて教会まで運んでもらうよう神父に提案した。当初、彼は承諾しなかったが、長い説得の末、主治医のタチアナ・ウラジーミロヴナが患者の言

うことを聞かないことに涙を流すと、神父は彼女の頭に手を置き、「泣かないで、運ばせてあげなさい」と言った。

少年助祭であり、バチューシュカの修道見習いであるアレクサンドル・キセレフ〔現在はプロトイェレイ・アレクサンドル、聖母マリアの降誕教会の主任司祭。〕、アレクセイ・ヴェレテニコフ〔故イェロモナフ・ゲルマン。〕、ペトル・ゴロシュコ〔現在はイグメン・ペトル。同教会で奉仕している。〕、ヴァシリー・ピサレフ〔故修道士ヴァシリー。〕は、アルミパイプで軽量の椅子を素早く組み立て、修道院の女中が神父の口を暖かいスカーフで覆い、神父を椅子に座らせて教会へと運んだ。当初は大変恥ずかしがっていたが、やがて慣れていった。彼は微笑み、冗談を言った。修道女が服を着せてくれるたびに、少年たちを待ちながら、「さあ、準備完了！ 僕の馬たちはどこ？」と言っていた。ある時、彼を運んでいる最中にタチアナ・ウラジーミロヴナが横を歩いていたとき、「ほら、また一頭、馬が加わったな」と言った。

神父の担当医たちは、彼がこれほど従順で、忍耐強く、優しい患者であることに驚いていた。彼は指示された治療を文句一つ言わずに実行したが、その前に、どのような薬が処方されるのか、その作用は何か、治療期間はどのくらいか、と詳しく尋ねていた。

神父は医療従事者を尊敬し、看護助手から医師に至るまでの働きを高く評価していた。学業の祝福を求めて人々が訪ねてくると、彼はたいてい医療専門学校への進学を祝福し、たまに大学への進学を祝福し、仕事については病院での看護助手としての勤務を勧めていた。「治療を受けることは罪ではない」と彼は言いました。「病院で働くことは、人々を世話するという救いの道であり、善行である。」手術による治療については、保存療法では効果が期待できないと確信した場合に限り、やむを得ない必要性があるとして推奨していました。彼の祝福を受けて手術を受けた人々は、その結果、完全に回復しました。神父ご自身も優れた診断眼をお持ちでした。担当医のオルガ・フェドロヴナを患者の診察に派遣する際、彼はこう言いました。「オルガ・フェドロヴナ、どうか患者さんを診察してください。私は、彼にはこのような病気があると思います。」彼が述べた診断は、後に裏付けられました。

日が経つにつれ、神父様の容体は日ごとに悪化していった。2月、イオシフ主教がカラガンダを訪れた。神父様は、体力が衰えていたものの、主教と共に礼拝を執り行った。別れ際、主教はこう言われました。「さて、私は復活祭の後にまた訪ねてきて、あなたに贈り物——ブドウの籠——を持ってきます。」皆、これから涙が待っていることを悟りました。

神父はしばしば死や、永遠への移行について語っていました。「あなたがいなくなったら、私たちはどうやって生きていけばいいのでしょうか」と尋ねられると、彼は厳しくこう答えました。「私は一体誰だというのか？ 神は過去にも現在にも未来にも存在されるのだ！ 神を信じる者は、たとえ私から何千キロも離れた場所で暮らしていても、救われるだろう。しかし、たとえ私の修道服の裾にすがりついていても、神への畏れを持たない者は、救いを得られない。私のことを知り、私の死後に私を見た者たちは、私を知らず、私を見たこともない者たちよりも、私を低く評価することになるだろう。」「近くても滑りやすく、遠くても深い。」

大斎が始まった——長老の人生における最後のものだった〔長老セバスティアンの最期の日々および死に関する記述は、長老の主治医であったタチアナ・ウラジーミロヴナ・トルテンステンとオルガ・フェドロヴナ・オルロヴァの原稿に基づいて作成された。〕「赦しの主日」には、彼は聖体礼儀を執り行い、夕方には赦しの儀式を行った。彼は元気で、顔色も明るかった。

大斎の最初の週の最初の4日間、教会では、水曜日の「聖体礼儀」後のスープを除き、調理されたものは一切口にしなかった。この日、体力の弱った者に対しては、神父は聖体拝領を許可した。金曜日までの残りの日は、何も煮込まず、お茶さえも沸かさなかった。食事は「大晩課」の後にとった。黒パン、ザワークラウト、塩漬けのキュウリ、生の玉ねぎが供された。胃の弱い人々には、神父様は温かい焼きジャガイモと焼いた玉ねぎを食べることを許可していた。金曜日には、聖体礼儀に多くの聖体拝領者が集まった。聖体礼儀の後には食事で、キノコのスープと甘い

お粥が振る舞われた。夕方には、昼食の残りのお粥、白いクラッカー、そして白パンが供された。

断食の最初の週、バチューシュカは毎日礼拝を執り行い、自ら明瞭ではっきりとした声で、聖アンドレイ・クリツキーの『大悔悛カノン』を朗読した。日曜日の「正教の祝祭」には、聖体礼儀を執り行った。この数日間、バチューシュカは誰とも会話を交わさず、誰の面会も受け付けなかった。

大斎の第二週、第三週が過ぎていった。すべてはいつも通り進んでおり、神父様はいつもでも私たちと一緒にいてくださるかのようだった。

3月13日、キエフ大学教授の息子である若き聖職助祭パヴェル神父が、キエフからバチューシュカのもとを訪れた。彼はパリで生まれた。その家族は10年ほど前にロシアに戻ってきた。

第4週の間、パヴェル神父は教会で聖書を朗読した——その朗読は実に美しく、表現力豊かで、一語一語をはっきりと発音していた。また、祭壇で奉仕を行い、自由な時間はすべてバチューシュカのそばにいるよう努めていた。バチューシュカは彼と長い時間語り合った。神父様だけでなく、教会に関わるすべての人々がパヴェル神父を慕うようになった。彼は非常に謙虚だったが、そのすべての振る舞いから高い教養が感じられた。神父様は彼を注意深く観察していた。

3月21日、オサカロフカ村からアンドレイ神父が到着した。彼はバチューシュカに、教会での朗読や聖歌隊の指揮を手伝ってくれる人を誰か派遣してほしいと頼んだ。バチューシュカは、経験豊富な女性聖歌隊員一人を派遣することを許可し、さらに突然、パヴェル神父にも彼女と共にオサカロフカへ行くよう許可を与えた。パヴェル神父と神父の間で、非常に感動的な会話が交わされた。もちろん、パヴェル神父がパリからロシアへ、そして神父のもとへやって来たのは、ただ人里離れた荒野で一人きりになるためではなかった。彼はバチューシュカのそばにいたいがために来たのだが、バチューシュカが彼を追い返そうとしたため、こう言った。「私が故郷へ帰ることをお許しください。私はキエフ近郊の自分の隠遁所へ戻ります。」バチューシュカ：「隠遁所など与えるものか！ お前が私のところへ来たのだから、私はお前を受け入れたのだ。お前は自分の意志で来たのだ、私が呼んだわけではない。さあ、オサカロフカに修道院をやるぞ！」パヴェル神父：「私を解放してください。あなたのもとを完全に離れるよう、祝福してください。」バチューシュカは激昂した。「キエフなんてやるものか、棒で叩いてやる、棒で叩いてやるぞ！ さらにロープを持ってきて、ロープで縛ってやる！ お前は修道士なのか？！」パヴェル神父は神父様の足元にひれ伏した。「お許しください、お許しをください。オサカロフカへ行きます。」彼は自分の部屋へ駆け戻り、まだ少年だった頃に父が修道生活への祝福として授けてくれたアイコンを取りに行った。それ以外は何も持たなかった。

皆、パヴェル神父を気の毒に思い、落胆していた。神父を嘆き、こう言った。「パヴェル神父は私たちにとって欠かせない存在です。彼は聖書の朗読も上手ですし、聖歌隊でも歌います。私たちには男声はほとんどいません。それに、祭壇でも聖具室でも、どこでも手伝ってくれます。まさか、全員を他へ送り出すつもりですか？ アンドレイ神父に自分で人を探して選んでもらえばいいでしょう。そうすれば、他の人たちもあなたのもとに来て頼み事をするようになるでしょう。」神父は黙っていた。

アンドレイ神父は急いで出発しようとしていた。皆がパヴェル神父を見送りに来た。皆がアンドレイ神父を非難した。パヴェル神父は呆然とし、途方に暮れた様子だった。神父様は独房から出てこなかった。

徹夜祈祷の前、神父は紅茶を飲み、誰とも話さなかった。翌日、セバスティアの四十人の殉教者の祝日だった。徹夜祈祷の間、神父は動揺しており、修道女たちが言うところの「激昂」していた。アレクサンドル神父は、「天に栄光あれ」を歌うべきか読むべきかを尋ねたことで叱られた。さらに、アレクサンドル神父とアレシャ・ヴェレテニコフも、バチューシュカが教会全体を巡って香を焚くのを止めようとしたことで叱られた。彼は怒りを込めて言った。「祝福してくれ、自分で香を焚きに行くから」。そして自ら教会全体を巡り、香を焚いた。

3月22日金曜日、バチューシュカは、まだ若かった自身の霊的な娘の一人の葬儀を執り行った。葬儀の間、彼は涙を流していた。

シベリアから悪霊に取り憑かれた女性が連れてこられた。バチューシュカは「聖体礼儀」を執り行った。その女性は礼拝の間中、時折猫のように「ニャー」と鳴いたり、羊のように「メー」と鳴いたり、あるいは雄鶏のように「コケコッコー」と鳴いたりしていた。彼女は玄関ホールへ引きずり出された。それは難しくはなかった——彼女は極度に衰弱していたからだ。

3月24日の日曜日の夕方、礼拝者たちが帰り、教会がほぼ空になった後も、神父は依然として自分の「小部屋」にいた。隅には、その憑かれた女が静かに横たわっており、彼女には付き添いの女性の一人がいた。突然、王の門が開き、司祭が完全な祭服を身にまとい、マントを羽織り、杖を手に説教壇へと現れた。憑かれた女は床から立ち上がり、吠えたりニャーと鳴いたりしながら、彼に向かって歩み寄った。神父のところにたどり着く前に、彼女は雄鶏のように大声で鳴き叫んだ。「さあ！」——神父は大きな声で言ったが、その声は誰のものか判別できなかった。憑かれた女は再び叫んだが、はるかに小さな声だった。「さあ！」——神父は繰り返した。彼女はまるで遠くから聞こえてくるかのように、ごく小さな声で叫んだ。「さあ！」——神父は三度目に言った。彼女は黙っていた。それからこう言った。「あなたはヨシュア・ナヴィンね。」——「私はヨシュア・ナヴィンではない、私はセバステアんだ」と神父は威厳を込めて言った。「明日の朝、ここへ司祭のところへ来て、懺悔し、聖体拝領をきなさい。」

金曜日、神父はミサを執り行わず、祭壇に座っていた。かつて悪霊に取りつかれていた女性は、ミサの間、静かに立ち、静かに聖体拝領を受けた。夕方、彼女はシベリアへと連行された。

第6週の日曜日、神父は礼拝を執り行わず、祭壇の椅子に座っていた。聖体拝領の後、「悔い改めの門を開いてください、命の与え主よ……」と歌うよう命じた。この日から、彼の体力が著しく衰え始めた。

3月31日午前3時、神父様は修道女を起こしてこう言われました。「これほど体調が悪いのは初めてだ。きっと、魂が体から抜け出そうとしているのだろう。」一晩中、酸素で呼吸を支えました。神父様の呼吸は穏やかになりました。

ラザロの土曜日である4月2日、神父様にとって非常に意義深く、極めて重要な出来事が起こった。深夜3時、神父様は侍女を起こし、アレクサンドル神父を呼んでほしいと頼んだ。喜びに満ち、全身を震わせながら、神父様は自分の霊的指導者であるアレクサンドル神父に何かを語った。彼らが何について話したのか、誰も知らない。わかっているのは、アレクサンドル神父がバチューシュカの告解を聞き、聖体拝領を授けたということだけである。彼は聖体拝領の後、聖所へ聖なる賜物を取りに行ったからだ。聖体拝領の後、バチューシュカは「キリストは復活された！」と歌い始め、修道見習いに命じて、聖歌隊の少女たちを起こし、自分のために復活祭の歌を歌わせるよう呼び寄せた。少女たちがやって来て、皆白いスカーフを巻いて、復活祭のトロパール、スティヒラ、カノンのイルモスを歌い始めた。歌が終わると、バチューシュカは尋ねた。「台所には誰がいる？ 卵を三種類茹でてもらうよう伝えてくれ。半熟、固ゆで、そして袋状のものだ。」その通りに行われた。

朝、神父様は修道院の女中を呼んで牛乳を持ってくるよう頼んだ。「ほらね」と彼は言った。「いつもクワスばかり、オクロシュカばかりだ。どうしていつもクワスばかり飲ませるんだ？ 牛乳をくれればいいのに。」女中は店へ行き、牛乳を持って帰ってきた。誰も神父様に異議を唱える者はいなかった。修道女はマグカップに牛乳を注ぎ、とてもおずおずとした口調で言った。「神父様、今日はまだラザレの土曜日ですし、その次は聖土曜日、そしてようやく復活祭です。もし今日が復活祭だったら、どれほどたくさんのイースターエッグがあり、どれほどたくさんのクーリチがあったことでしょう！」彼は皆を見回して言った。「ああ...そういうことか！——と、牛乳の入ったカップを脇にどかした。——牛乳は遠くへ行ってしまった！それならオクロシュカを出してくれ。」

夕方、神父は窓際のテーブルに座り、柳の枝を持った人々が教会へ向かう様子を眺めていた。「人々は徹夜祈祷会に集まっている——」と彼は言った。「だが、私は先人たちの元へ、祖父や曾祖父たちの元へ旅立たなければならないのだ。」

4月5日火曜日、追悼礼拝が終わると、神父はアレクサンドル神父にこう言った。「オサカロフカへ電報を急いで送って、パヴェル神父が完全に帰ってくるように手配してくれ。」

4月9日。受難週の土曜日。聖体礼儀の間、神父様はご自身の部屋で横になっておられた。聖体礼儀が終わると、マントと修道帽を身につけ、信徒たちに別れを告げに出られた。迫り来る祝日を皆に祝し、こう言われた。「私は皆さんから去ります。この世の生活から去ります。皆さんと別れる時が来ました。お別れを約束しましたので、今、その約束を果たします。皆さんにお願いしたいことが一つあります。平和に生きてください。平和と愛——これこそが最も大切なことです。互いの間にこれさえあれば、心には常に喜びが満ちているでしょう。私たちは今、光の早課、すなわち復活祭——永遠の喜びのための魂の救い——の到来を待っています。では、どうすればそれを手に入れられるのでしょうか？ 平和と愛、そして心からの誠実な祈りによってのみです。外にあるものでは救われません。救われるのは、自分の魂の奥底と心の中で得られるもの——平和な静けさと愛——だけです。皆さんの視線が、決して誰に対しても横目になることがないように。まっすぐに見つめ、どんな善意の返答や善行にも喜んで応えられるようにしてください。これが私の最後の願いです。そしてもう一つお願いがあります——私を許してください。」腰まで深くお辞儀をし、よろめいた。静かに、かろうじて祭壇に入り、自宅の独房まで運んでほしいと告げた。人々は散らず、皆が泣いていた。

4月10日、復活祭の夜、神父は教会まで運ばれて行きたいと願ったが、立ち上がることができなかった。彼を取り囲んでいた者たちは皆、心の動揺に襲われた。早課が行われていた。医師のタチアナ・ウラジーミロヴナは礼拝を中断し、神父のもとへ駆けつけた。神父は彼女を見て言った。「なぜ教会を離れたのですか？ 私はまだ死んではいません。まだ間に合います。ここで故人たちとキリストの愛を分かち合うこともできるでしょう。安心して礼拝に戻ってください。」

聖体礼儀が始まると、神父のもとへオルガ・フェドロヴナ医師が呼ばれた。鎮痛剤の注射を受けた後、彼の状態は落ち着き、むしろ喜びに満ちたものとなった。「教会に行きたい。以前、私は自分で上手に歌っていたんだ。復活祭の週の間、自分の修道室で『復活祭の賛歌』を歌っていた。今は、誰かに歌ってもらわなければならない。でも、ここにはいたくない。教会に行きたい。マントと修道帽を身につけて、せめてミサの間だけでも、そうして座っていたい。」修道女が彼に着替えをさせていると、彼はこう言い続けた。「皆さんにお願いします。互いに慰め合い、愛と平和のうちに生き、決して互いに声を荒げることのないように。それ以上、皆さんには何も求めません。それが救いにとって最も重要なことです。ここにあるものはすべて一時的で、移ろいやすいものです。それを気にかけたり、自分のために何かを求めたりする必要はありません。すべてはすぐに過ぎ去ります。永遠のことを考えなければなりません。」神父は服を着せられ、少年たちが彼を教会へと運んでいった。

日曜日の午後、神父はクリーム色の新しい絹の修道服を身にまとい、自分の独房に横たわっていた。「今、横になりながら思い出していたんだ」と彼は言った。「オブティナで長老たちがどのように息を引き取ったかを。ヨシフ神父は長い間病に伏していたが、アナトリー『小』神父は全く病気にならず、たったの一分たりとも病に伏すことはなかった。彼は奇跡的な最期を遂げた……この秘跡は……実に素晴らしいものだ。彼はその精神と、その偉大な謙遜さにおいて、私の師であるネクタリイ神父に誰よりも近かった。革命の後、二人の長老が亡くなり、オブティナ墓地に埋葬された。スキト長であったフェオドシイ神父は、オブティナがまだ昔のままだった1920年に亡くなりました。しかし、内戦が終わった1920年になると、すべてが変わってしまいました。特に1922年には、迫害、家宅搜索、逮捕が相次ぎました。次は長老のアナトリー神父の番となった。7月28日、彼のもとへやって来て、長い間家宅搜索を行った。その後、「さあ、荷物をまとめなさい」と言われた。彼は、朝まで猶予を与えてほしいと懇願した。彼らは同意し、クレイニク（執事）に対し、朝までに長老の荷物をまとめ、出発の準備を整えるよう厳しく命じた。

そして去っていった。長老は祈りを捧げ始めた。執事は2時間ほど待ったが、長老はひたすら祈り続けていた。そこで執事は部屋に入り、「神父様、荷造りを始めましょう」と言った。すると長老は、「行け、邪魔をするな」と答えた。執事はもう一度来て、「神父様、荷造りを始めましょう」と頼んだ。「一体、なぜそんなに騒ぐんだ？俺はあいつらとどこにも行かない。行ってくれ。」執事が三度目に来ると、アナトリー神父は自分の寝台に横たわり、両手を胸の上で組んで——亡くなっていた。そこで、ケレイニクは必要な人々を呼び、長老に法衣を着せ、机の上に寝かせ、ろうそくに火を灯し、福音書を読み上げた。ほどなくして、彼を迎えに来た者たちが「長老の準備は整いましたか？」と尋ねた。ケレイニクは「準備は整っています。お入りください」と答えた。彼らが部屋に入ると、長老は机の上で亡くなっていた。もちろん、皆、大変驚いた。アナトリー神父は、オブティナ墓地で、長老マカリイの隣に最後に埋葬された。墓を掘った際、長老マカリイの棺が破損し、長老の朽ちない聖遺体が発見された。」

4月11日月曜日、アグニア修道女から父上ヘイスターの卵が届けられた。父上は喜びに満ちた表情でこう言った。「主よ、彼女を救い、祝福してください。彼女は私たちの教会のためにどれほど多くのことをしてくれたことか！彼女ほど多くのことをした人は誰もいない。そもそも、彼女は生涯を通じてどれほど多くの素晴らしいことを成し遂げたことか。私は死にゆく。これからは、何事も彼女に相談してください。」

深夜3時、バチューシュカの喉から出血が始まった。止血剤を投与すると、バチューシュカはうたた寝をした。朝、アルマアタのイオシフ主教に電話がかかった。彼は言った。「今週中に死ぬことはないだろうが、死はすでに目前だ。そちらへ飛んでいく。」

4月12日の朝、復活祭の火曜日、神父様の体調は良くなり、呼吸も楽になっていた。「ヴェラ」と神父様は侍女に言った。「ブーツを履かせてくれ。人々に会いに行って、復活の挨拶をしなければならない。そうすれば、彼らが悲しまずに済むから。約束したんだ。みんなに一番大切なことを伝えなきゃ。」——「神父様、足がこんなにむくんでいるのに、ブーツどころかスリッパさえ履かせられません。」——「いや、いや、一番大切なことを言わなきゃ。履かせてくれ！」

ヴェラはスリッパを取り出し、側面を切り開いた。少年たちは神父を教会へと運んだ。彼はマントと修道帽を身につけていた。祭壇のそばで少し座った後、立ち上がり、ツァールスカヤ・ヴラータを通過して説教壇へと向かった。杖に寄りかかりながら立ち、再び人々に別れを告げた。「さようなら、愛する皆さん、私はもう去ります。もし誰かを悲しませてしまったなら、どうかお許してください。キリストのために、お許してください。私は皆さんのすべてを、すべてお許します。本当に、本当に皆さんがかわいそうです。一つだけ願いがあります。一つだけ懇願します。一つだけ求めます。互いに愛し合ってください。すべてにおいて、皆さんの間に平和がありますように。平和と愛を。もし私の言うことを聞いてくださるなら——私はそうお願いしているのです——皆さんは私の子供たちとなるでしょう。私は不適格で罪深い者ですが、主には多くの愛と憐れみがあります。私は主を信頼しています。そしてもし主が私をその輝かしい御国に迎え入れてくださるなら、私は皆さんのために絶えず祈り続けます。そしてこう言うでしょう。「主よ、主よ！私は一人ではありません。私の子供たちが私と共にいます。彼らなしでは入ることができません。あなたの光り輝く御許に、私一人ではられません。彼らはあなたから私に託されたのです」……そして、静かに、かろうじて聞こえるほど小さな声で、「私は彼らなしではられません」と。そう言うと、お辞儀をしようとしたが、できず、ただ頭を下げただけだった。少年たちが彼の両腕を支え、祭壇へと連れて行った。

教会では、皆が泣いていた。

4月13日（水）、ピティリム主教の妹であるナジェージダ・ヴラディミロヴナと、アカデミーのアナトリー・プロスヴィルニク（後にアルヒマンドリト・イノケンティ（†1994）となる）が到着した。主教は、晩課の後、自分の個室でナジェージダ・ヴラディミロヴナと長い間語り合った。

アルマアタから電話があった。イオシフ主教が重病で、体温が40度もあるため、飛行機で来ることはできないという。

金曜日の夜、バチューシュカはほとんど眠れず、苦しみ、息を切らしながらこう言った。「体中のどこにも、痛みがない生き生きとした場所など一つもない。背骨は赤熱した鉄のように焼けるように痛く、息もできない。そして何より辛いのは、魂の苦しみだ。」彼は何度も「今何時か」と尋ね続けた。

教会から修道女たちが彼の元を訪れた。フェヴロニア修道女が入ってくると、神父は彼女を長く、じっと見つめ、二度祝福を授けてこう言った。「主よ、あなたのすべての善行と献身に対して、あなたを救ってください。私はすべてを携えていきます。主よ、あなたを救いたまえ。」彼女が退出する際、神父は彼女の背中に向かって何度か十字を切った。

アグニア修道女から使者が来て、修道院長が自分の部屋に閉じこもり、誰にも会わせないとやってきた。

夕方、コクチェタフからディミトリイ修道院長が飛んできた。ヨシフ主教に電話をかけ、ディミトリイ神父がバトウシュカをスキマに剃髪させる許可を求めた。主教は「その必要はない。明日、モスクワからピティリム主教が飛んできて、すべてを行ってくれるだろう」と答えた。

バチューシュカには、可能であれば剃髪時の名前を変えないでほしいと頼まれた。皆がその名前で彼を知っているため、名前を変えることは皆にとっていわばさらなる苦しみとなるからだ。バチューシュカは同意し、ピティリム大主教にその旨を頼むと述べた。

「私の最期の日が近づいてきました」と、神父は周囲の人々に語りかけました。「主が私に修道服をまとうことをお許しくださったことを、心から嬉しく思います。この日を長い間待ち望んでいました。皆さんとお別れするのは残念ですが、それも神の御心です」——「神父様、私たちを誰に任せていかれるのですか？」神父は思索にふけるように黙り込み、それからこう言った。「悲しまないでください。私は皆さんを天の女王の御手にお任せします。彼女ご自身が皆さんを導いてくださいます。そして皆さんは、互いに平和に暮らし、力の及ぶ限り、あらゆる面で助け合うよう努めてください。私はあなた方を忘れません。主の前で勇気を得ることができれば、あなた方のために祈ります。あなた方も祈ってください。教会を離れず、特に日曜日や祝日には必ず参列するように努めてください。これを守れば、神の慈悲と天の女王の取り成しによって救われるでしょう。

夜遅く、タチアナ・ウラジーミロヴナ医師が神父様に点滴を打っていた時、神父様はこう語り始めました。「ほら、私の親愛なる医師よ、私の古くからの医師よ。言葉を発することさえ難しいが、あなたに伝えたいことがある。舌が動かないし、口の中は乾ききっているし、全身が痛む。針を刺しても、痛まない場所などどこにもない。足はもう私を支えてくれないし、全身がこんなに弱っていて、まぶたさえ持ち上げるのが難しい。でも頭は冴えていて、澄み切っていて、思考は明確で、深く、穏やかに流れている。意識が曇ったり、変わったりすることはない。横になって考えている：つまり、思考は体に依存しないのだ。そして脳もまた、体なのだ。私の体には、もはや思考する力など残っていなかった。思考は魂から湧き出るものだ。今、それが理解できた。さあ、主の御名に栄光あれ、かろうじてこれをあなた方に伝えることができた。」

4月16日（土）午前9時、ピティリム大主教が空港から到着した。すぐにバチューシュカのもとへ駆けつけ、その姿に衝撃を受けた。「どんな病気の時でさえ、彼をこんな姿で見たことは一度もない」と、彼は後に周囲の人々に語った。二人は二人きりで長い間語り合った。

昼食後、バチューシュカの容態は急激に悪化し、彼は至急ピティリム大主教を呼び寄せるよう頼んだ。大主教が到着すると、バチューシュカは直ちにスキーマ修道者の剃髪式に取り掛かるよう求めた。準備が始まった。大主教は全員に退室するよう求め、アナスタシア修道女だけが剃髪式の手伝いをした。

剃髪後、バチューシュカはほとんど言葉を交わさなかった。彼の顔立ち、そしてその佇まい全体が驚くほど一変していた。彼はこれほどまでに神の恵みに満ちており、彼を見つめるだけ

で魂が震え、自らの罪深さを痛切に感じさせられた。彼は威厳に満ちた長老であり、もはやこの世の住人ではなかった。

夜中の3時、神父様はアレクサンドル神父を呼び、告解を聞き、聖体拝領を授けてほしいと頼まれた。朝になる頃には、彼の命の灯はかろうじてともっているだけだった。彼は目を閉じて横たわり、荒い息をつき、まるでピアノの鍵盤を弾くかのように、指で毛布をなぞっていた。目を開けると、遠くを見つめるような悲しげな眼差しで、周囲の人々の横を通り越して見つめていた。その後、ピティリム大主教と語り合った。やがて、医師のタチアナ・ウラジーミロヴナを呼び寄せた。「私の古くからの医師よ、助けてください。とてもつらい、とても痛いのです。」——「どこが痛いのですか、神父様？」彼は、点滴の後に包帯を巻かれた両手を指さした。静脈を見つけるのもすでに困難で、薬が皮下に漏れ出し、彼にさらなる痛みを与えていた。「今すぐ、神父様、鎮痛剤の注射を打ちます。痛みは治まりますよ。」

——それが一番痛いところではありません。一番つらいのは、心の苦しみです。死なんて、冗談だと思っていらっしゃるんですか？ 私には罪が多く、善行は少ないのです。

「神父様、あなたの罪は顕微鏡で見ても見分けがつかないほど些細なもので、善行は海のように広大です。」

「いや、私は何ををしたというのか？ 厳格で質素な生活を送りたかったのに、それでも、どんな形であれ、喜びや慰めに浸っていた。そして、美しさ、とりわけ自然の美しさを多く愛でたのだ。」

—神父様、その美しさこそが、神の恵みではないでしょうか？

— 神の恵みとは、神から与えられる喜びのことです。しかし、私の功績など、何一つありません！ 偉業などありません！ 人は生きていますが、一体何のために？ すべては神から与えられたものです。では、神には何があるのでしょうか？ これはすべての人に当てはまることであり、誰にとっても死は避けられません。ここにあるものはすべて一時的で、はかないものです。人はなぜ人生の道を歩むのか？ 愛のため、善のためだ。だからこそ人は苦しみ、忍耐強くその苦しみを耐え忍ばなければならない。そして、永遠の喜びを求めて、永遠の命へと移行行くのだ。私はこれまで生きてきて、善行を積んできたと言うが、その後、罪を犯してしまった。人は過ちを犯し、残酷な目に遭い、得たものをすべて失ってしまうのだ。私はこれまで多くの苦しみを味わい、修道者としての重く厳しい十字架を背負ってきた。修道生活は厳しいが、それこそが最も安らかな道でもある。しかし、私は時折、不平を漏らしてしまった。その不平のせいで、すべてが失われてしまう。すべての功德が消え去ってしまうのだ。そして今、喜びの代わりに、魂の苦悩がある。

「神父様、私はどう生きればよいのでしょうか？」神父はしばらく沈黙した後、こう言いました。

「今まで通りに生きなさい。誰もが罪人だ。ただ、大きな罪だけは犯さないように……さて、君と話をした。今日、私は話すのも呼吸するのも少し楽になった。キリストが君と共にあるように。」

月曜日の夕方、ラドニツァの追悼式（パラストス）の際、神父は教会へと運ばれた。彼は自分の「個室」に横たわり、誰にも何も話さず、誰の顔も見ようとしなかった。頻繁に十字を切ったり、聖歌や礼拝に耳を傾けたりしていた。礼拝を司式したのはピティリム主教であった。「永遠の記憶」が歌い終わると、彼は自分を家まで運ぶよう命じた。礼拝の後、大主教と話をし、続いて夜10時にミチュリンスクから到着したイオアン神父とも話をした。神父様は喜んで彼を迎え入れ、自分が生きている姿を見てもらえて嬉しいと語った。「あなたは私に会いに間に合ってくれたし、私は今日、すべての故人たちとキリストの愛を分かち合い、彼らのために祈ることができた。ほら、なんて素晴らしい日でしょう！ 今日、主教様は私の亡き子らのために祈ってください、明日も祈ってください。私はラドニツァの日まで生き延びることができました。主は慈しみ深いお方です。そして、亡き人々にとって、生きている者たちによる彼らのための祈りは、これほどまでに必要であり、かけがえのないものなのです。私はいつも、何よりも先に故

人のために祈ってきました。そして、イオアン神父様、あなたにも遺言としてお伝えします。何よりも先に、故人のために祈ってください。すべてに神に栄光あれ！すべてに神に栄光あれ！」

バチューシュカの最期の数日間、多くの霊的な子たちは、長老の元を離れたくなく、教会のそばで夜を明かしました。4月18日、いつもの夕方の祈り（トミーの週の始まり）の後、バチューシュカは復活祭の礼拝を唱えるよう頼み、その後、皆はそれぞれの場所へ散っていきました。バチューシュカの独房のそばで見守りを続けたのは、彼の侍女たち、孫娘のタイシア、そして医師のオルガ・フェドロヴナだった。バチューシュカは安らかな眠りにつけず、寝返りを繰り返していた。午前4時、彼は独房から呼び鈴を鳴らした。オルガ・フェドロヴナはすぐに起き上がり、独房に入った。神父様の様子は苦しげだった。オルガ・フェドロヴナは尋ねた。「神父様、お元氣ですか？」神父様はうなずいて、「ええ、具合が悪い」と答えた。オルガ・フェドロヴナは注射を打つことを提案した。神父様は「ええ、お願いします」と承諾した。彼の頭と手のひらは熱かった。彼女はガーゼを濡らし、神父の額に当てた。注射の後、彼は落ち着き、痛みも和らいだ。オルガ・フェドロヴナは注射器を洗い始めた。突然、バチューシュカは激しく咳き込み、ベッドで勢いよく起き上がり、肘をついて体を支え、袋の中に痰を吐き出した。そして、疑問の眼差しでオルガ・フェドロヴナと袋の中を見やった。そこには血が混じっていた。その後、さらに二、三回痰を吐き出した。オルガ・フェドロヴナは隣のベッドに腰を下ろし、彼の背中を支えようと努めた。突然、激しい咳の発作が再び起こった。神父は勢いよくベッドで起き上がろうとし、深く息を吸い込み、目を大きく見開いた。その視線は遠くへと向けられ、まるで誰かを見て驚いたかのようなだった。それはほんの一瞬のことだった。彼の顔は死の蒼白を帯び、体はわずかに伸び、最後の息を吐いて息を引き取った。開いた瞳には、疑問と驚きに満ちた眼差しが凍りついていて、神父は4月19日午前4時45分に亡くなった。その日は火曜日、ラドニツァの日だった。

オルガ・フェドロヴナが叫ぶと、瞬く間に侍女たちやタイシアが駆けつけた。泣き声が上がり、騒ぎが始まった。ピティリム主教と、その夜近くにいた者たち全員を呼び寄せた。あとはすべて、定められた順序通りに進んだ。

5時30分、ピティリム主教が追悼の礼拝を執り行った。神父様は、白いシーツの上に、クリーム色の新しい絹の祭服を身にまとして横たわっていた。同じクリーム色の布が、神父様の顔と足を覆っていた。両手は胸の上で十字に組まれていた。そこには、どこか深遠で荘厳な静寂が漂っていた。もはや誰も泣いてはいなかった。悲しみはなく、安らぎが魂を包み込んでいた。

追悼式が終わると、皆は小部屋から出て行った。着衣の儀式が始まった。神父の体はすっかり温かく、顔はまるで生きているかのように穏やかだった。神父の体にはほとんど肉がなく、骨だけだった。彼らは神父の体をオリーブオイルで拭き、スキーマを着せた。司教は上からマントをかけ、クロブクで顔を覆った。

部屋にはろうそくの灯がともっていた。司祭が福音書を朗読していた。机の上、マントの下には、私たちのバチューシュカが横たわっていた。その愛は、この地上の人が抱きうるあらゆる愛を凌駕するものだった。彼の霊的な子供たちは、一人ひとりが彼にとって最も愛しい存在だった。最も愛しい一人ではなく、まさに「最も愛しい」存在として、一人ひとりがそうだったのだ。不可能に思えることも、神においては可能であり、単に可能であるだけでなく、理解でき、自然なことなのである。そして今、黒い布が、机の上に横たわる何かを覆っている。それがバチューシュカであることは、誰もが知っています。間違いなく、バチューシュカです。それでも、それはもはや彼ではありませんでした。黒いバチューシュカのマントの下に横たわる彼と私たちとの間には、最も深い淵よりもさらに深い、越えられない一線が引かれていました。

朝、主教はラドニツァの追悼典礼を執り行った。夕方5時、黒い布で覆われた棺が運ばれてきて、バチューシュカがそこに移された。主教はバチューシュカのカミラフカを取り外し、その頭にミトラをかぶせ、「助け手であり守護者……」と歌いながら、棺は教会へと運ばれた。その深遠さに心を揺さぶられる霊的な賛美歌の言葉が流れ、それは心を清めるような悲しみと慰めに

満ち、私たちには理解しがたい境界にまで達しつつも、すでに聖なるバチューシュカの魂には理解されていた。苦難は終わった。彼の犠牲的な愛による十字架の苦しみ、肉体的苦痛、そして「霊の憔悴」は終わったのだ。彼の霊は自由を得た。そして私たちからは、いつでも何でも神父様に尋ねることができたあの幸せが失われてしまった。何が起ころうとも、ただ彼のところへ行き、話せば、すべてが元の位置に戻り、すべてがうまくいくものだった。彼の優しい眼差し、福音書を読む際に言葉を長く引き伸ばして締めくくるその声——それもまた、失われてしまった。しかし、嘆き、泣き、嘆き悲しむことなどできるだろうか？ バチューシュカとの霊的な絆が断ち切れることなどあり得るだろうか？ 今や、その交わりは別の形——祈りによるもの——へと変わっている。

カザフスタン、シベリア、ロシアのヨーロッパ地域の至る所から、神父様の教会の恵み深い庇護の下へ、聖職者や信徒——神父様の霊的な子らが集まってきた。司祭たちは一晩中追悼の礼拝を執り行い、聖歌隊が歌った。そして人々は次々とやって来た。至聖なる総主教から電報が届いた。「慈愛に満ちた長老、アルヒマンドリト・セバステイアンの逝去に際し、同教会の信徒の皆様には哀悼の意を表します。ヴォロコラム司教ピティリム閣下には、神のもとで永眠された故人の埋葬を執り行うことを祝福いたします。総主教アレクシー。」

三日目、神父様はミハイロフスキー墓地に埋葬された。霊柩車は、幹線道路までのわずかな区間のみ棺を運んだ。幹線道路に差し掛かると、棺は両手を高く掲げた人々の肩に担がれて墓地まで運ばれた。棺は膨大な群衆の上を漂うように進み、どこからでも見えた。幹線道路の交通はすべて遮断され、人々は道路や歩道を埋め尽くすように列をなして歩いていた。家々の窓は開け放たれ、そこから人々が覗き込んでいた。多くの人が自宅の門の前やベンチに立っていた。「キリストは復活した」と歌う少女たちの合唱団が棺の後を歩いていた。「キリストはよみがえりたまえ」——数万人の群衆全員がそう歌った。行列がセメント工場の前を通ると、塀の上は座り込んだ労働者たちで埋め尽くされ、湿ったモルタルで汚れた作業服を着たそのシフトの全員が、工場の庭に溢れ出してきた。人々は棺に手を触れようと、群衆をかき分けて棺へと近づいていった。多くの人が先回りして、墓地で棺を待っていた。

神父の墓は墓地の端に掘られ、その背後には広大なカザフスタンの草原が広がっていた。棺は墓のそばに置かれ、主教が追悼の礼拝を執り行った。神父はカミラフカを身につけたまま埋葬されることを望んでいた。主教は彼の頭からミトラを取り外し、カミラフカをかぶせた。棺は墓穴に下ろされ、墓の丘が築かれ、十字架が立てられた。

慈愛に満ちた長老よ、たゆまぬ祈りの人よ、生ける水の泉よ、癒しの教えの伝道者よ——御霊から湧き出る言葉よ、あなたに永遠の記憶を。

バチューシュカの死後まもなく、ヨシフ大主教がカラガンダを訪れた〔アルマ・アタおよびカザフスタンのミトロポリット・ヨシフ（チェルノフ、1893–1975）は、強制収容所や流刑地で計20年間を過ごした。そのうち6年間をカルラグで過ごした。〕。

父神父のために追悼の聖体礼儀を執り行い、墓地へ赴いて追悼の祈りを捧げた。ある者には叱責し、ある者には謙虚にさせ、ある者には慰めを与え——すべての人に「ぶどう」を授けた。ある者には甘いものを、ある者には苦いものを。そして、出発前にこう言った。「セバステイアン神父は、敬虔で、至福の長老であり、夜な夜な多くを泣き、祈っていた。それを知っていたのは、神と彼だけだった。では、彼は何について泣いていたのか？ それは、多くの人々、指導者たちも含めて、彼に同意せず、彼の助言に耳を傾けなかったことでした。彼はすべてを謙虚に耐え忍び、すべての人の救いと悟りを求めて神に祈り続けました。そして、彼の涙と主への祈りによって、再臨の日まで、聖霊の恵みがカラガンダに注がれることでしょう。」

ヨシフ主教はカラガンダを訪れることを好んでいました。彼はこう語っていました。「カラガンダは蜜で塗られている」、「カラガンダは聖人の遺骨の上に築かれている」、そして「祝福されたカラガンダへ行こう」と。

ボルシェミハイロフスキー教区については、次のように語っていました。「神父様はここにブドウを植え、その後、涙を注いで育て上げられたのです。」「小さな教会で、地上からは見えませんが、その灯台は天まで輝いています。」

カラガンダを訪れた際、主教は各教区を巡り、神父の教会で聖体礼儀を執り行いましたが、神父の墓には立ち寄らなかった。皆が空港まで見送り、もちろん皆が悲しみに暮れた。その結果どうなったかといえば、飛行機はアルマアタまで飛んだものの、現地は悪天候で、アルマアタは受け入れを拒否したため、飛行機は引き返し、カラガンダへ戻ってきた。そして、主教は機内で冗談を言った。「これぞセバステアんだ！ 彼の墓を訪ねられなかったから、彼は私たちを連れ戻してくれたんだ！」と冗談を言われました。空港（ ）から、主教はタクシーでミハイロフカへ移動し、追悼の礼拝を執り行い、バチューシュカの墓を訪れた後、ようやく帰路につきました。

バチューシュカについて、司教は次のように語っていました。「私は、バチューシュカが聖人の列に加わっていることを疑いようもなく確信しています。」

バチューシュカの子供たち

フェオドシア・フェドトヴナ・プロコペンコ（シュヴァーゲル）

1931年8月1日、私たちはオサカロフカの第5集落に連れてこられました。 私たちと一緒にいたのは、母と私たち7人の子供たちでした。長兄のパヴリクは16歳、私は12歳、弟のジェーニャ、姉妹のナージャ、ヴァリャ、その次にヴァーニャ、そして一番下のグリシャ。大家族でした。父は先に連れ去られてしまい、私たちは父がどこにいるのか知りませんでした。

私たちはスターリングラード州に住んでいて、父は村委員会で働いていました。1929年、裕福な農民からの没収が始まったとき、父は「活動家」として登録されました。父は農民から財産を没収することを拒否し、「行かない。そんなことはできない」と言いました。すると、父も私たち家族全員も、「農民の取り巻き」として連行されてしまったのです。 私たちは小規模な農民、当時でいう「中農」でした。土小屋があり、牛一頭、馬二頭、そして羊が数匹いました。父は一年間、独房に収容されました。 私たちは最初、スターリングラードから40キロメートル離れた場所に連行されましたが、1931年には、平坦な草原が広がるオサカロフカの第5集落に連れてこられました。その集落には5万人がいました。逃げ出さないよう、周囲を馬に乗った警察が警備していました。でも、どこへ逃げられるというのでしょうか？ そこにはイシム川が流れていました。そこから水を汲み、洗濯もした。雑草を摘んで煮て食べた。草原に貯蔵庫のような穴を掘り、何かで覆って、そこで暮らした。最初の1年は皆、そうやって暮らしていた。第5集落全体で井戸は一つだけで、深さは25メートル——それは今でも残っている。 昼も夜も水を汲みに行くのに並んでいた。母がバケツを持たせて送り出し、病気の子供たちに水を運ぶためだけに、そこへ向かったものだ。トイレはなく、30メートルほど掘られた溝が、皆の共同トイレとして使われていた。そして、人々が次々と亡くなっていった——大流行した赤痢だ。毎晩、荷馬車がやってきて、死体は丸太のようにその上に放り込まれ、穴へと運ばれていった。家族全員が亡くなることもあった。そして、私たちの子供たちも赤痢にかかり始めた。 高熱が出ても医者はおらず、唇がひび割れて血が流れ出るので、水で湿らせていた。そして、8月31日に弟のジェーニャが亡くなり、その後9月11日に妹のナージャが、9月17日の朝にはヴァリャが亡くなった。 太陽が昇り、半分ほど高くなった頃、母と私はその穴を開けて横になり、ヴァリャが息を引き取っていきました。そして、太陽が丸く昇りきった頃、一番小さなグリシャも亡くなりました。棺はなく、自分たちで穴を掘り、そこに遺体を投げ込みました。 私たちには、ありがたいことに、同じ集落出身のペーチャおじさんがいた。天国で安らかに眠れますように。彼は母にこう言った。「ダシャ、心配するな。俺たちが君の子供たちのために籠を編んでやるよ」——そこには小枝があった。そして母は子供たち全員をその籠に入れた。 そして母は、あちらの農場の若者たちに頼みました。「樽の下

を掘って、そこに籠を押し込めるようにして」と。そこへさらに遺体を積み、また積み、さらに積み、上にもまた積み、さらに積み、そして最後に土を被せました。五万人のうち、半分は生き残ったのでしょうか、それとも？ 私たちには、パヴリクと私とヴァニャ、そして母と一緒に残りました。

その後、仕事に行くようになった。そこで芝を掘っていたが、私たち十代の若者たちは、12人ほどで馬車に引かれ、その芝を建設現場まで運んだ——家を建てていて、壁を芝で積んでいたのだ。しかし、私たちはそれらの最初の家には住めなかった。その後、母がチフスにかかり、2週間意識不明で寝込んでいたが、私たちはただ座っていた。

冬が訪れ、私たちの上には少し雪が積もり始めた。雪が降った頃、父が私たちのところへやって来て、家族再会の許可を何とか取り付けてくれた。父が働き始め、私たちの生活は少し楽になった。父は穴の一角に芝を敷き詰め、その上から穴を芝で覆った。父は、独房からこっそりと渡すことができた半丈の毛皮のコートを持ち帰った。私たち兄弟は、そのコートの下で冬の間ずっと横たわっていた。服は一切持たされておらず、連行された時のままの格好で連れてこられたからだ。失礼なことを言うが、誰がどれだけノミを捕まえて殺したかを数えていた。ノミが私たちの体中を這い回っていたのだ。乾燥した配給食を食べていました。そこで料理をする場所などありませんでした。レンズ豆が運ばれてくると、私たちはそれを噛んでいました。あの冬が最も過酷でした。パヴリクとヴァニャはその冬を乗り越えられず、子供たちの中では私一人だけが残りました。翌年にはすでに家に住めるようになり、5つの部屋に分けて住み、私たちは自分たちでストーブを作りました。

私たちが経験したことは、神に誓って、二度と誰にも味わわせたくない！ カザフスタンに行ったことのない人は、その悲しみを知らないだろうが、一度でも滞在した人は、死ぬまで決して忘れないだろう！」

あの墓があった場所、第5集落は、今は平らな場所になっている。集落は広いから、今となっては、どこに埋葬されたのか想像もつかない。当時は穴がたくさんあったが、今どこにあるのかは分からない。あの穴がどこにあったか、覚えている人はいるだろうか？ 私の知る限り、誰もいない。もう年配の人ほとんど残っていない。もし母が生きていたら、もしかしたら思い出してくれたかもしれない。

ニーナ・ホフルシュカ

私の名前はニーナ・ホフルシュカです。まあ、名字を言っても、私の名字を知っている人は誰もいません。私はスーム州のゼルノヴォ駅から来ました。41年、戦争が始まった時、私はテルノーピリにいました。テルノーピリから私たちはキエフへ避難させられ、キエフまで走ってたどり着いたところで、こう言われました。「できる限り、自分たちで逃げなさい」と言われました。なんとか父と母のいる実家にたどり着きました。着いた途端、ドイツ軍がやってきました。私は彼らの下で、ブーツを磨く仕事をさせられました。私の姉妹二人はすぐにドイツへ連行されましたが、私はある書類に署名するよう命じられ、ブーツを磨く仕事を続けさせられました。そして、ソ連軍が到着したとき、私は自分から、ある種の受領証に署名したことを口走ってしまいました。それがどのようなものだったのか、今でも分かりません。そして、この受領証を根拠に、私は起訴されました。後になって、私がドイツのスパイであると説明されました。そして、10年の刑を宣告されました。4年間、キロフ州で伐採作業に従事した後、カラガンダへ連行された。カルラグでは6年間を過ごした。そこで何を見たか？ 苦しみと拷問ばかりだった。私の体には3つの番号——ここにも番号、ここにも番号、ここにも番号——が刻印され、全身が封印されていた。そして、釈放された際、「アクモリンスクへの永久流刑」と書き加えられた。カラガンダからアクモリンスクへ連れて行かれたが、すぐに黄疸にかかってしまった。回復して病院を出た時、「どこへ行けばいいのだろうか？」と思った。路上に立っていると——収容所の服を着ていたため、皆が私を避けて通り過ぎていく。私はその場に立ち尽くし、苦々しく泣いていました。する

と、人々が近づいてきて、「お嬢さん、どうしてそんなに泣いているの？」と尋ねました。私は「こういうことなんです」と答えると、「えーと、お嬢さん、あなたは収容所から来たのね。私たちはここの特別移住者よ。私たちのところに連れて行ってあげるわ」と言ってくれました。これこそ神の御業です！ 彼らは私を引き取り、病院で働く手配をしてくれ、そこで私は4年間働きました。ちょうどその頃、皆が永久流刑から解放されたのです。私はアクモラから実家に戻りましたが、当時は皆から軽蔑されていました。何しろ私は収監されていた身だったからです。ところが、ブリャンスク州のブラソヴォという村に、プロシュチャンスカヤ修道院のマティ神父という老神父が住んでいました。私はその方のところへ行き、「神父様、私にはここでの生活などありません！」と言いました。すると、マティ神父はこうおっしゃいました。「あなたは、来たところへ戻りなさい。そこですべてのものを取り戻し、思いがけない喜びが与えられるでしょう！」ああ、なんてこと！ 私は震え上がってしまった！ あそこに何があるの？ どんな喜びがあるの？ 私はあそこであれほど多くの苦しみを味わい、あれほど多くの涙を流し、あそこで刑期を過ごしたのに！ アクタスで！ カラバスで！ ドリンカから釈放されたばかりなのに——「来たところへ戻りなさい」なんて。

私はアクモラに戻り、毎日教会に通うようになった。すると、ニコライ・モイセーエフ神父が私にこう言った。「ねえ、ニーナ、カラガンダに行ってみて。あそこにセバスティアン神父がいるんだ。君は一人ぼっちだ。もしかしたら、彼が君を自分のところに迎え入れてくれるかもしれないよ」と。そして、私は初めてその神父様のところへ行った。私が部屋に入ると、彼は大家族の父親のように立ち、穏やかに皆に祝福を与えていた。私がドアを開けた途端、アナスタシア修道女が「私たちの娘！ 私たちの娘！」と叫びました。その後、神父様が私をそばに呼び寄せ、私が彼の修道室に入ると、私は彼の足元にひれ伏し、ブーツに口づけをしました。何を言えばいいのかわからず、ただ苦々しく泣きながら、「親愛なる神父様！ 親愛なる神父様！」と繰り返しました。だって、このカラガンダなんて、ここに来るどころか、この世に存在することさえ思い出しくなかつたんです！ 私はここで無実の罪で、アクタスやカラバスで刑期を過ごし、ドリンカから釈放されたばかりでした。それなのに、今こうしてあなたのところへやって来たのです！ ——そう言って、すべてを神父様に話し、切なく泣きました。すると、神父様の目にも涙が浮かんだ。修道女たちも、私たちの涙を見て皆、涙ぐんだ。そして神父様は私を「受難者」と呼んだ。私は無実の罪で収監されていたのだから——「一族全体の罪のせいで」と神父様は言った。神父様は私に大きな聖三位一体のイコンを渡し、たくさんのキャンディをくれた。「これ、ニーナ、アクモラで知り合いに配ってくれ。」私はそこで二日間過ごし、帰らなければなりませんでした。見送られ、列車に寄せられたとき、神父様は「また私のところへ来てくれ」とおっしゃいました。そして、私は通うようになりました。3年ほど通った後、神父様は私がカラガンダに留まることを祝福してくださいました。それは1960年頃のことでした。私がここに来ると、神父様は私を病院で働くように遣わしてくださいました。神父様は弟子たちを皆、病院に遣わしておられました。私は小児科で働き、神父様の祝福のもと、多くの不幸な子供たちを天国へ送り出しました。すると、そこで敵が私に立ち向かってきたのです。私は吐き気を催し、ある子供に向かってこう言ってしまいました。「うっ！ 窒息して死ね、もうあなたにはうんざりだ！」我に返ると、私は神父様のところへ駆け寄りました。「神父様！ 今日、私はこんなことをしてしまいました！」神父様は私を叱ることはなく、すぐにこう言われました。「いや、それはお前がやったことか？ あれは——と神父は言いました——悪魔だ！」「子供病棟からは離れなさい。子供たちを移送したことで敵が反旗を翻したのだから。第1病棟へ行きなさい。そこには我々の仲間はいない。」そして私は第1病棟、ボトキン病棟でずっと働いていました。

私の姉マリアは、ドイツ軍にドイツへ連行されてから、15年間何の便りもありませんでした。「神父様」と私は言いました。「マリアのためにどう祈ればいいのかわかりません。彼女はドイツから戻ってきませんでしたから。」すると神父は言いました。「いや、彼女は生きているよ！」——「そんなはずはない、15年も彼女のことを聞いていないのに！」——「いや、彼女は

生きている。すぐに彼女からの便りが届くよ！」そして実際、すぐにマリアから手紙が届きました——彼女はフランスにいたとのことでした。

ある日、私が追悼礼拝堂に入ると、神父様がすぐにこう言われました。「ニーナ！あなたの家族からパンを預かったよ！」どういうこと？少し離れて考えてみても、私の家族がどんなパンを預けたのか、さっぱり分かりませんでした。家に帰ると、郵便受けに手紙が入っていました。両親からの手紙にはこう書かれていました。「私たちは神父様のために一生懸命お祈りしました！美味しいケーキを焼いて、神父様のために教会で配りました。」その時、私は理解しました。

あのマタイ長老のことはもう考えてもいなかったし、すっかり忘れていた。ところが、ふとふと思い出し、セバステイアン神父に彼のことをすべて話し、彼が私に言ったことも話した。すると神父は言った。「いや、それはいけない。君はそこへ行って、彼にプロスフォラを渡して、私のために祈ってもらってきなさい。」

私は教会に立ち、故郷への旅のことを考えていました。祝福をいただくために神父様のところへ近づくと、神父様は「どこに行っていたの？故郷へ行ってたんでしょ？」と尋ねられました。神父様は、父と母のもとへ帰ることを祝福してくださいました。「神父様、あそこでどれくらい滞在すればいいですか？」——「お母さんが許してくれるだけ、そこにいればいい。両親に砂糖を買ってあげてね。」ところが、両親からの手紙にはこう書かれていた。「砂糖を持ってきてくれ。」神父様はすべてを見通しておられたのだ。そして私が故郷に着き、長老マティのもとを訪ね、プロスフォラを渡し、神父様の写真を見せると、彼は言いました。「ああ！これは偉大な長老だ！」——そしてその写真に口づけをしました。——もうすぐ亡くなるでしょう。あなたが彼の言うことを聞かないから、5年も早く亡くなるのです。」そして、プロシュチャンスカ修道院の長老マテウスは、彼のために祈ってくれました。私は泣いていました——アクタス……カラバス……ドリンクカ……そして、この予期せぬ喜び、私が探し当てたのは——父上でした！

アナスタシア・ペトロヴナ・パルシナ

修道女エウプラクシアは、バチューシュカと同年でした。彼女は、オブティナ・プステインの長老たちの元へよく訪ねていたと私に話してくれました。当時、バチューシュカはまだ若い見習い修道士でした。ある時、彼女が訪ねてくると、彼は近づいてきて、とても優しくこう言ったのです。「私の可愛い子よ、私の可愛い子よ！」彼女はこう思いました。「見習い修道士なのに、私に『私の可愛い子』なんて！私は長老たちに会いに来たのに、なぜ彼が私をそう呼ぶの？」その後、彼女は彼に会いにカラガンダを訪れた際、バチューシュカは彼女をそこに残していきました。こうして彼女は彼の「可愛い子」になったのです。

また、エウプラクシアの母はこう語っていた。彼女は流刑に処され、その同じ地域にイエロフェイ神父が定住していた。そして、彼らと一緒に、結核で重病の若い娘セラフィマが暮らしていた。すると、イエロフェイ神父はセバステイアン神父から手紙を受け取った。そこにはこう書かれていた。「シマをソフィアという名で修道衣を着せてください。遅らせないでください。」その手紙は、ある重要な祝日の直前に届いた。「どうしよう、祝祭を中断することはできない」と考え、徹夜礼拝の直後に彼女のところへ行くことに決めた。礼拝が終わるとすぐに身支度を整えて彼女の元へ向かったが、シマは顔中を赤らめていた。イエロフェイ神父が剃髪式を執り行い、その場には母エウプラクシアと、剃髪式の際ソフィアの代母となった別の修道女が立ち会っていた。修道女ソフィアは代母に、最初の修道規則を読んでほしいと頼んだ。代母は規則を読み続ける間、修道女ソフィアは自分の寝床の上で落ち着きなく動き回っていた。代母が「どうしたの？」と尋ねると、「悪霊たちに囲まれていて、歯ぎしりをしているの。その恐ろしい歯ぎしりの音に、私の魂が揺さぶられているの」と答えた。——「彼らを恐れているのか？」——「いい

え、恐れてはいませんが、魂が不快に感じています。」そして、規則の読み上げが終わり、すでに夜が明けようとしていた頃、若き修道女ソフィアは自らの魂を神の御手に委ねた。

イオアン・ティマコフ神父、非常勤司祭、カラガンダ市

1931年の夏の半ば、私たちはサマルスカ州から草原へ、将来のノヴァヤ・ティホノフカ集落となる場所へと連れてこられた。私は若く、妻と幼い子供が一緒だった。私たちは深さ1メートルの穴を掘り、毛布で屋根を覆い、頭の上には荷物の入った袋を置いた。私たちの赤ん坊はこの穴の中で1ヶ月生き、亡くなった。そして冬、未完成のバラックに移されたとき、もう一人の赤ん坊が生まれた。最初の冬はチフスが猛威を振るい、非常に寒く、配給の食事だけでは生き延びるのが難しく、人々は衰弱していった。31年、32年には子供や老人は皆亡くなり、33年になる頃には若者だけが残り、老人の姿はほとんど見かけなくなった。そしてやがて、若者たちも死に始めた。ティホノフカでは、1日に200人もの人が亡くなっていた。3つの作業班が墓穴を掘っていた（幅2メートル、長さ5メートル）。死体を汚れた毛布に包んで穴に放り込んだ。冬になると、墓を掘る暇さえなかった。死者は家ほどの大きさの山に積み上げられ、それぞれの山には500人から700人の遺体が薪のように重なり合って横たわっていた。私たちの2人目の子供も亡くなった。妻と私が生き延びられたのは、妻が母親から受け継いだキツネの毛皮のコートを売り、そのお金でオート麦を買って、それをすりつぶして食べ、かろうじて命をつないだからだ。

私は、他の特別移住者たちと共に、キロヴァ鉱山で働いていた。鉱山から私たちの集落までは8キロの道のりだった。そして毎日、草原を往復しなければならなかった。鉱山で働いていると、天井から雨のように地下水が降り注ぐ。炭鉱から出ると全身ずぶ濡れで、長靴の中も、足袋も水浸し。乾いた上着だけを着て、摂氏マイナス30度の寒さの中、集落へ走って帰らなければならなかった。走って着く頃には、服が体に張り付いて凍りついてしまう。炭鉱労働者たちは仕事から帰る途中で、その場に倒れて死んでしまうこともあった。そして冬の間中、道端に横たわっていた。吹雪で道が見えない時でも、道しるべの代わりに死体が草原に横たわっていることがあった。春になると、彼らは荷車に集められていた。私自身も、倒れる寸前まで追い込まれた。衰弱のあまり、かろうじて生きて家にたどり着くのが精一杯だった。ひどい体調不良に悩まされ、貧血や嘔吐に苦しんだ。私は長い間、集落の司令官に、鉱山の近くの地下小屋に移り住むことを許可してほしいと懇願し、ようやく許可を得ることができた。そして、そこへ移り住んでからは、まるで楽園のように暮らすようになった。16キロも歩く必要はなくなった。鉱山から出て、道を渡れば、そのまま地下小屋へ直行できる。そこで私は少し元気を取り戻した。

1934年まで、私たちには司祭がいなかった。旧儀式派の司祭、セルギイ神父ただ一人だけが、子供たちの洗礼に訪れてくれた。そして1934年、カルラグからヤコフ・ペンコフ神父がやって来た。ブド・ゴリ村の古くからの住民たちは、アンティミン、十字架、そして司祭の祭服を保管していた。これらすべてをヤコフ神父に渡し、彼は密かに各家庭を巡って礼拝を執り行うようになった。何度もコムソモール員に連行され、司令部へ連れて行かれた。彼らは新たな逮捕をちらつかせて礼拝を禁じたが、ヤコフ神父は「私は神に誓いを立てた。礼拝を続ける」と答えた。また、知り合いの年配の女性たちには、「私は信仰のために苦難を受けたい」と語っていました。そして1937年、彼を捕らえにやって来て連れ去り、今日に至るまで彼からの便りは一切ありません。

38年までは、私たちはアクモラまで聖体拝領に行っていた。38年、カルラグからウラジーミル・ホロドコフ神父が釈放され、再び私たちは15人から20人ほどで、地下小屋に密かに集まるようになった。祝日には聖体礼儀を執り行い、聖体拝領をした。

そして戦争が始まり、スターリンが「神への祈りを許可する」という命令を出すと、ウラジーミル神父は市議会へ赴き、公然と礼拝を行う許可を勝ち取りました。すると、人々が私たちのもとに集まってくるようになりました。礼拝堂は、私たちが暮らし、働いていたキロヴァ鉱山

のそばにある地下小屋にありました。文字通り地下で礼拝を行っており、窓は天井にありました。公開礼拝を始めると、500人もの人々が礼拝に集まるようになりました。地下壕を拡張し、小屋を増築して、50年まで、大天使ミカエル教会が建てられるまで、そのように礼拝を続けていました。セバステียน神父のことは43年に耳にし、彼のもとに通い始めました。その後、神父の祝福を受けてメルコムピナートに移り住み、自分の家を建てるとともに、神父がメルコムピナートに就職させてくれた子供連れの未亡人たちが家を建てたり購入したりするのを手伝いました。時が経つにつれ、生活は徐々に軌道に乗っていきました。55年にはミハイロフカにも教会が開かれた。そして、55年の終わりに、クイビシェフから姉が手紙を送ってきた。「ヴァニャ、会いに来てよ。みんなあなたのことが恋しいわ」。私は神父様に「ご加護をください。故郷へ帰ってきます」と申し出た。すると神父は、「やめなさい、行かないで」とおっしゃいました。しかし、3週間ほどが過ぎ、1956年の元日のこと、礼拝の後、私が十字架の前に近づくと、神父が突然こう言われました。「イワン・セメノヴィチ、君はクイビシェフに行きたがっていたね。行け。ただ、早く準備をして、急いで！」そしてその晩、私は列車に乗り込んで出発した。クイビシェフに着くと、そこには奇跡が待っていた。ゾヤが立っていたのだ。[1956年、クイビシェフ（現在のサマラ）で、多くの人々を神へと導く出来事が起きた。クリスマス断食の期間中、大晦日の夜、ゾヤという少女が冒瀆的な行為に及んだ。パーティーに來なかつた婚約者のニコライの代わりに、聖ニコライのイコンと踊ることを決心したのだ。踊っている最中、彼女は突然石像のようになってしまったが、それでも生きていた。夜になると、ゾヤは恐ろしい叫び声を上げ、人々に悔い改めを呼びかけた。こうして、石化したまま、彼女は128日間その場に立ち続けた。復活祭の夜、彼女の体は蘇り、祝祭の3日目に、ゾヤは罪の贖いの厳しい道を歩み終え、主のもとへ旅立った。]

街は騒然とした。ゾイの家の前には人ばかりができ、人々は公然と教会へ向かい、十字を切つて悔い改めていた。私もゾヤのもとを訪れようとしたが、警察によって家の中へは入れなかつた。私は一週間クイビシェフで過ごし、戻ってくると、カラガンダの人々にゾヤのこと、そして罪の中に滅びゆく世界に対する神の摂理について語つた。

神父様の先見の明について、もう一つ。私の8歳の娘が結核にかかつてしまいました。医師に診てもらつたところ、「ここでは治せません。ボロヴォエの療養所へ連れて行つてください。さもないと、娘さんは死んでしまいます」と言われました。私たちは神父様のところへ行き、「神父様、保養地へ行くことをお許しください。そうしないと娘が死んでしまいます」と頼みました。すると神父様は、「そうだな……」と言ひ、「あそこへ行くよりは、ここで葬つたほうがましだ」とおっしゃいました。妻と私は悲しみに暮れました——かわいそうな娘よ！ その娘はとても良い子でした。賢く、従順で、天使のように穏やかでした。そこで私は彼女をボロヴォエへ連れて行きました。確かにそこで治つてはいましたが、保養地から戻つてきた彼女は別人のようになってしまい、まるで他人のようになってしまいました。その後、彼女はピオネールに入会し、コムソモール、そして党に入りました。そして今に至るまで、信仰に帰ることなく過ごしています。

もう一人の娘は、大人になって、ドイツ人の青年と知り合い、彼から結婚を申し込まれた。それに対し、娘はこう言つた。「私の父は信仰深い人だから、あなたが洗礼を受けていない以上、私をあなたに嫁がせることはないわ。」そして、ヴォロージャ——その青年はそう呼ばれていた——は、洗礼を受け、娘と教会で結婚式を挙げることに同意した。そこで私は神父に祝福を求めに行つたが、神父はこう言つた。「結婚式は挙げるが、彼に洗礼を施す必要はない。」

もし他の司祭がそう言っていたら、私は異議を唱えたでしょう。なぜなら、洗礼を受けていない者を教会で結婚させることはできないからです。しかし、この時は黙っていました。神父様が間違っていないと分かつていたからです。そして、ヴォロダの母親と話したところ、彼女は1942年に、彼らの特別移住者集落に という神父がやつて来て、ヴォロダを含むすべての子供たちに洗礼を授けたと語つてくれました。セバステียน神父は、ヴォロダを直接見たことはなかつたものの、そのことをすべて知つていたのです。

ヴェラ・アフアナシーエヴナ・トカチェンコ、神父の侍女

私がセバスティアン神父と知り合ったのは1939年のことでした。私は8歳で、神父は刑務所から出所したばかりでした。私はニジナヤ通りに住む叔母の家に暮らしていました。叔母は信心深い人だったので、よく神父様と一緒に家々を回って祈りを捧げていました。そして、母が亡くなった頃には、神父様とはすっかり親しくなっていました。神父様は孤児を憐れんでくださったからです。神父様はこうおっしゃいました。「もし私が孤児でなかったら、他人のことにこれほど共感することはなかっただろう。」そしてある日、神父様は「君を私のところに引き取りたい」とおっしゃいました。私はその時、もう11歳になっていました。神父様は私をある修道女のところへ預け、そこで私は神父様の見守りの下で暮らしました。そして私が16歳になった時、神父様は私を侍女としてお迎えになり、私は常に神父様のそばで暮らし、お世話をしました。

ニジナヤ通りに住んでいた頃、私たちは皆、一つの器から食事をとっていました。5、6人が食卓につき、神父様も私たちと一緒に座っていました。とてもお腹が空いているのに、皆で分け合う器が一つしか置かれなかったこともあり、「いや、これじゃお腹がいっぱいにならない」と私は思いました。ところが、まさに奇跡が起きたのです！ お椀にはまだ食べ物が残っていたのに、みんなお腹がいっぱいになったのです。神父様は一体どうやってそんなことをされたのでしょうか？ 私にはわかりません。

私たちの教会はまだ登録されておらず、10年ほどは各家庭を回って祈りを捧げていました。例えば、フェドロフカへ祈りに行くことになり、神父様が「朝、5時半に起きてフェドロフカへ行こう」とおっしゃるのです。すると私たちは皆起きて、歩いてフェドロフカへ向かいました。肩に本を担ぎ、神父様は小さな杖を手に、ヴァリャ母さん、グルシャ母さん——これが神父様の聖歌隊だ。そこで祈りを捧げ、8時半になると、神父様は私が仕事に行くのを祝福してくださった（働かないわけにはいかなかった。働かない人は迫害されたからだ）。そして仕事から帰ると——また祈りに行かなければならなかった。カラガンダの片端からもう片端へと移動していた。同じ場所で奉仕し続けることは許されなかったからだ。

神父様は並外れた人でした。泣いている人とは共に泣き、喜んで人とは共に喜びました。神父様は常に知的な祈りを捧げており、それは神父様の心の中にありました。しかし、神父様の魂の生き様は隠されていました。どのような意味で隠されていたのか——説明するのは難しいですが、身をもって感じ取るしかありませんでした。ある時、私が神父様にモスクワへの旅のことや、モスクワの教会のこと、そしてパトリアルヒの御許で祝福を受けた時のことを話していた時のことを覚えています。神父様は黙って聞いておられましたが、その内面では何かが起こっていたのです——目つきが変わり、茶色だった目が灰色に変わったのです。私はそのことを彼に伝えましたが、彼は何も答えず、ただ目を伏せただけでした。もちろん、神父様はとても賢明な方で、いつも率直に話すわけではありませんでした。しかし、私はまだ子供だったので、彼が何を言わんとしているのかを理解するのはそう簡単ではありませんでした。時には、もちろん愛情を込めてですが、私の額に軽く叩いて、何かの愚かな考えを吹き飛ばそうとすることもありました。いろんな考えが頭をよぎるものだ。例えば、「私の人生って一体何なんだろう？ 朝、仕事に出かけると祈りが聞こえ、夕方、仕事から帰るとまた祈りが聞こえる。もう耐えられない！ 世俗の世界で、何も気にせずに生きるほうがましだ」と思うこともある。すると、父神が近づいてきて、手の甲で私の額をそっと叩くのだ。

私の心配事はこうだった。聖歌隊席から祭壇の方を見ると——ああ、神父様が着替えを済ませている。私は急いで独房へ行き、神父様がお越しになった時に食卓にすべてが揃っているよう準備をしておかなければならない。神父様が食事を済ませたら、すぐに休んでいただく必要がある。ところが、そこへ人々が次々とやってくる——あの人、この人……神父様は疲れていて、時々こうおっしゃるのだ。「今は面会できない。」「神父様、では彼らにどう伝えればいいのでしょうか？」「こう伝えなさい——相手を傷つけずに、言い方を工夫して。必要なら、待たせておけばいい。」私は行って、「神父様は——と伝えます——お休み中です。」すると神父様は休んで、本を読んでいる。また、「神父様、女性が来られました」と言うと、「待たせておけ」と

。神父様は相変わらず本を読み続けている。また行って、事情を説明する。すると人々は不平を言う。「おいおい、お前が神父様に会わせたくないだけじゃないか！」私は神父様のところへ行く。神父様は、「いや、待たせておけ。まだその時が来ていない」と言う。「神父様、みんな、私があるのともへ通さないとっています。」すると彼は、「滑るのが好きなら、そりも運ぶ覚悟をしろ。私もかつてオブティナ・プスティニの老修道士のもとで暮らしていたのだから。」と。時々、私は彼女たちを全く神父様のところへ通さなかったこともありました。なぜなら、神父様が「今日はお会いできない。体調があまり良くない」とおっしゃるからです。すると人々は、「ヴェラはとても厳しい。殴られるかもしれない」とっていました。さて、こんな出来事がありました。神父様は私をモスクワへ送り出し、彼のもとには母ユリアとマリア・オブラツォワ〔マリア・オブラツォワ——神父様の第二の侍女〕が残りました。彼女たちは私に手紙を書き、「ヴェラ、帰ってきて。あなたがいないと困る」と。神父様もこうおっしゃいました。「ああ、お前たち、バカ者め！ヴェラなら、こんな混乱を許さなかつただろうに。」皆、まるで通り抜けの庭のように自由に出入りしていました。そして、神父様がすでに体調を崩されていた時、シュリクとアレシャという二人の「警備員」が立っていました。それでも彼らは手に負えず、私を呼び出しました。仕方なく「片付ける」ために行かなければなりませんでした。若者たちはもちろん穏やかでしたが、私はすでに神父様を守ることに慣れていました。人々は神父様にこう訴えていました。「神父様、どうしてヴェラはあんなに怒りっぽくて、あなたのもとへ近づかせてくれないのですか？」すると神父様はこうおっしゃいました。「修道院には、そういう者も必要なのだ。」

ある時、神父様はピティリム大主教に、タイプライターを二台送ってほしいと頼みました。それが届くと、神父様は「ほら、ヴェラ、これは君用。もう一台はマリア・オブラツォワ用だ」と言われました。私は「私にこれが必要なんて？これで何をするの？」と思いました。しかし、神父様が亡くなられた後、このタイプライターは私にとってとても必要なものになりました。私はタイピングを覚え、25年間、タイピングと事務処理の講座で教鞭をとりました。そしてマリアは「私にこれが必要なんて？」と考えていました。それは夕方のことでした。ところが翌朝、父上はマリアにこう言った。「いや、君には必要ない。君は聖歌隊の歌い手になるんだ。」そして、そのタイプライターをエレナ・アガフォノヴァに譲った〔エレナ・アレクサンドロヴナ・アガフォノヴァは現在、アルマ・アタ・セミパラチンスク教区事務局で事務員として勤務している。〕。

マリア・オブラツォワ、神父様の侍女

私が初めてティホノフカから神父様のところへ来たのは1948年のことでした。その日はキリストの降誕祭でした。私が到着したとき、小さな住居兼教会で礼拝が行われていました。その建物は柵と有刺鉄線で囲まれており、それが私たちの教会の姿でした。大晩課と聖体礼儀が執り行われました。その礼拝は私に計り知れないほどの感銘を与え、どこにいるのかさえ忘れてしまうほどでした。礼拝が終わった午前4時、私と友人はニジナヤ通りの司祭夫人の家で休むことになりました。着いてみると、小さな小屋でしたが、すべてがきれいに整えられ、ガーゼのカーテンがかけられ、敷物が敷かれていました。私たちは休んで、少し食事をとった。そろそろ家に帰らなければならない。すると、修道女たちが「あなたたちは神父様にお会いになりましたか？」と尋ねてきた。「いいえ、会っていません」。すると突然、神父様が通りから現れ、杖で窓をトントンと叩いた。私は恐怖に襲われたが、私たちのニコライ（ティホノフ出身）が言った。「こうしよう。僕たちは祝福を受けるけど、君たちは初めてだから、神父様の足元に頭を下げなさい。」神父様が入ってきて、上着を脱ぎ、皆に祝日の挨拶をした。私たちが足元にひれ伏すと、神父様は「いや、そんなことしなくていいよ。今日は大きな祝日だから。」とおっしゃった。その後、彼は皆をその場に置き去りにし、私と友人を自分の部屋に連れて行った。私はとても怖かった

が、バチューシュカは「どこに住んでいるのか、誰と住んでいるのか、家族は誰がいるのか」と尋ね始めた。私の全身が震えていた。そして、彼のもとを訪ねてくることを祝福してくれた。

神父様とお話ししてから2ヶ月間、私は喜びのあまり、まるで別人のようでした。何がそんなに嬉しかったのか？　神父様を今や私は知っているからです。そうして私は2年間、神父様のところに通い続けました。その後、神父様はこう言われました。「君はここに引っ越してくるべきだ。お母さんも来てもらおう。」母がやって来ました。神父は「子供は何人いるの？」と尋ね、「娘が4人と息子が1人です」と答えると、「じゃあ、その中から1人を引き取ろう」と言われました。「どうぞ」と私が言うと、「心配するな、君は彼女に会いにここへ来ればいいんだ。」

そして神父様は、私たち3人の娘たちのために、メルコムピナートに小さな家を買ってくれました。それは1950年のことでした。家を買って、鍵を渡し、私たちはそこで暮らし始めました。祝日にはミハイロフカに帰省し、神父様もメルコムピナートにある私たちの家に頻繁に訪ねてきてくださいました。なんて嬉しいことだったことでしょう！　神父様が来られるやいなや、まるで空を伝うように噂が広まったかのように、たちまち大勢の人が駆けつけてきました。そして神父様は、私たちのために祈祷会や追悼の礼拝を執り行ってくださいました。神父様がメルコムピナートから帰られる頃には、昼が夜に変わっていました。「神父様、私も一緒に行きます！」——「いやいや、君は連れて行けないよ。もちろん、場所がないから。」でも、慰めとして写真や絵をくれた。「神父様、サインしてください！」「おやまあ！次は連れて行けないからね。」

そして、私たちがメルコムピナートに落ち着くと（それは秋のことだった）、神父様はこう言われた。「ここに、5×5の大きな部屋を建てなさい。」そこで私たちは建設を始めた。私たちには3人の少女がいたが、神父様は私たち、同じく不器用な男性を一人付けてくれた。そして木材も運ばれてきた。そして、キリストの降誕祭の頃には、神父様はその部屋を聖別し、ミサを執り行った。当時、神父様は祝日や日曜日、土曜日には密かにミサを執り行っていた。スタハノフ地区には、小さな家に住む若い女性がいて、彼女のもとでも神父はミサを執り行いました。その後、モルドヴァ人の家の——窓もドアも歪んだ家——そこで神父はミサを執り行いました。そうして1955年、私たちの共同体の登録書類が下りるまで続けました。製粉所は、まるで聖セラフィム・ディヴェエヴォのように、彼の心血を注いだ事業だった。家が崩れかけている人、納屋に穴が開いている人、井戸が崩れてしまった人——彼はそのすべてを見守っていた。神父様がここに来ると、私たちは祈りを捧げ、さっと食卓を準備した。神父様がいれば、皆がそこに集まるのだ。

バチューシュカが座り、シュリクが座り、ペーチャが座り、そしてそこには！——あらゆる年齢層の人々がいました。あのような人も、このような人も——みんなです！それは大きな家族であり、彼らを慈しむ母がそこにいました。バチューシュカを「父」と呼ぶことはできませんでした。彼は慈しむ母そのものだったのです。

さて、ある出来事を話そう。ある日、ティホノフカから一人の女性がバチューシュカのもとを訪れた。「バチューシュカ、シュラが病気になりました」（アレクサンドラ・ソフロノフナ、彼の霊的な娘だ）。「彼女は病気で、心臓の調子が悪いんです」。バチューシュカは言った。「そうか、じゃあ明日彼女のもとへ行こう」。ところがその日は吹雪で、視界はゼロ、どの道も雪に埋もれていた。朝になると吹雪は止んだが、厳しい寒さが続いていた。それでも私たちは出かけた。バチューシュカは私と、私たちの教会で助祭を務めていたニコライを連れて行った。道中、タクシー運転手が第2鉱山まで送ってくれて、「これ以上は行けない、道がない」と言った。仕方なく、徒歩で進むことにした。その寒さは尋常じゃなかった！そこへ、小さなそりを引いた馬が通りかかった。神父様に乗せてくれるよう頼み、私たちとニコライは後ろのそり板に乗った。午後1時頃には、病人の元に着いた。神父様がドアをくぐった途端、彼女の夫が神父様の足元に倒れ込み、泣き叫んだ。「神父様！シュラが病院にいます！救急車が彼女を連れて行きました！」神父様は首を横に振って言いました。「まあ、いいのです。神の御心なのですから。」すると夫は泣きながら言いました。「シュラは私を苦しめた！一体どんな条件で神父様をここに招いたというのに、私だけ家にいないなんて！」すると神父様は私にこう言いました。「ねえ、

マリア、今晚病院へ行って、神父様は来られなかったと伝えてくれ。そうしないと、彼女はひどく心配してしまうから」……そんなことができるのは、実の母親だけでしょう。

私は夕方、病院へ行き、「アレクサンドラ・ソフロノヴナ、神父様から、道が通れないので来られないとお伝えするようにと言われました」と言いました。すると彼女は、「主よ、感謝します。昨夜は一睡もできませんでした。神父様が来られるのに、私が病院にいるなんてと思っていましたから」と言いました。そして、彼女の世話をしていた修道女がやって来て、「シュラ、結局、神父様は来ていたのよ!」と言いました。もちろん、彼女は深く悲しんでいましたが、この出来事を正しく受け止めていました。「主よ!」と彼女は言いました。「私なんて、一体何者でしょう? 私はこんなにも不適格な者なのに! それでも神父様は来てくださったのよ!」

その後、神父様は私を自分の修道院に侍女として迎え入れてくださいました。私たちは幸せに暮らしていました。私とユリア修道女は床の毛布の上で寝て、ヴェラは折りたたみベッドで寝ていました。とても寒い時には、神父様が自分の小部屋を開けて外に出てきて、寝ている私たちを修道服で覆ってくれました。時々、神父様は私を、修道女たちが住む「ニジュニャヤ」へ送り出しました。私が彼女たちに「部屋は暖かくてきれいで、夕食も素晴らしいわ」と言うと、ヴァリャ修道女はこう言いました。「一体、棒で叩いてもここへ来ないの? むしろ、敷物の上で、神父様のそばで寝たほうがましよ。」

神父様は、言葉では言い表せないような方でした。例えば、礼拝の後、少し肌寒いと、「ヴェラ、肩にかけのベストをくれ」とおっしゃることはあっても、「なぜ寒いんだ?」などとは決して言われませんでした。ご自身には厳しく、周囲の人々には慈愛に満ちておられました。何かが間違っているなどとは、決して口にされませんでした。しかし、ある時、むしろ滑稽とも言える出来事があった。水曜日の夕方、大天使ミカエルの祝日だった。私が神父様に夕食を差し出した。「神父様、ミルク入りのお茶はいかがですか?」——「いや、ミルクなしだ」。台所に戻り、アナスタシア母に言った。「母上、神父様がミルクなしのお茶を望んでおられます」——「いいえ」と彼女は言い、「ほら、ミルク入りで持って行きなさい!」——「いいえ、マチュシュカ、私は持って行きません」——「持って行きなさい、そう言ってるでしょう!」私は持って行きました。神父様は私を見て、「ミルクなしのお茶を頼んだのに」と言いました。——「神父様、アナスタシア母上が『持って行きなさい』とおっしゃったんです!」

神父様は立ち上がり、そのミルク入りのカップを手にとって台所へ運び、マザー・アナスタシアのところへ行って、彼女にそのお茶をぶちまけた。彼女は私に向かって言った。「あなた、この間抜け、どうしてミルク入りの紅茶を持って来たの?」「マザー、あなたが私に注いでくれたじゃないですか!」——「うっ! ヴェラなら私と喧嘩はしただろうけど、持って行ったりはしなかったはずよ。でもあなたは平気で持って行ったわ! ほら、今どうなったか!」

でも、もちろん、これはすべて芝居だった。彼女とバチューシュカの間には、私たちには理解できない独自の会話があった。バチューシュカは時々、「ナスティヤ、今はその時期じゃない」と言うことがあった——それは聖なる狂気を指していた。彼女は聖なる狂気を演じていたが、もちろん、自分が望んでいたほどにはできなかった。マチュシュカもまた、並外れた人生を送っていた。

ある時、彼女が病気になったが、ちょうど私の母の聖名祝日だった。母上は一日中、私たちの家でオラディ（揚げパン）を作っていたが、一日の終わりにアンティドル（聖体拝領用のパン）を頼んだ。それほど節制していたのだ。父上も食事をほとんど取らなかった。母のヴァリャはこう言うでしょう。「断食していないのに、断食していた」と。いわゆる「火のそばから」料理が運ばれてきても、彼はスプーン三杯ほど口に運ぶと、「持ち帰って」と言うのです。あるいは、例えば、大斎の初日。通常、初日はここでは誰にも食べ物を与えません。大カノンが終わった後、プロスフォラをひと切れずつ配ります。ところが、神父様は正午にジャガイモを茹でるよう命じ、午後3時にはもう冷めているので、ジャガイモを半分ほど食べては、「ほら、私の兄弟たち（共祭者たちを指して）は断食しているのに、私はしていない」と言うのです。こうして、彼

は常に自らを謙虚に保っていたのです。「私は病気だからね」と言い、「だから断食を破ってしまった」と。

彼は並外れて慈愛に満ちた人でした。例えば、アレクサンドル・ネフスキーの祝日は旧暦の8月30日でしたが、私が「神父様、家に帰ってジャガイモを掘ってきます」と言うと、「行け、行け。さもないと、お母さんが待っているだろう」とおっしゃいました。私は帰りました。畑でジャガイモを掘っていると、雨が降り出しました。でも、5時までに教会へ行って、聖母マリアの帯の奉納の祝日に間に合わせなければならなかった。私は落ち着かない気持ちでいた。すると、神父様はくつろいでいたが、やがて立ち上がり、カーテンを少し開けてこう言った。「雨が降っているのに、誰かがジャガイモを掘っているな。ヴェラ、行ってマリアに電話して、徹夜礼拝には来ないように伝えてくれ。」——「でも、誰に電話すればいいの？ みんな畑にいるわ。」——「行ってお電話して。」ヴェラは電話をかけるために私たちの家へ向かった。ちょうどその時、私の姉がドアを開けた——昼休みに帰宅したのだ。ドアを開けたその瞬間、電話が鳴った。彼女が受話器を取ると、ヴェラが言った。「あなたのイグメニャに伝えて、徹夜礼拝には来ないで、家にいてくれって。」そして姉はテーブルに「徹夜礼拝には来なくていい」というメモを残していった。もちろん、びしょ濡れで疲れ果てて家に帰り、そのメモを読んだ私は、ただただ号泣してしまった——なんて素晴らしい神父様なんだろう！ どうして彼は私のことを知っていて、私の心の奥底まで見透かしていたのだろう！

こんな出来事があった。神父が言った。「ナターシャ、オブラツォフ家に行って、牛を屠るように伝えてくれ。」それは3月のことだった。冬の間、牛を飼ってきたのに、今になって屠らなければならない。母は言った。「まあ、なんて気の毒なことでしょう！」時間が経ち、神父がまたナターシャを呼んだ。「行ってきたか？」-「行きました」——「今すぐ へ行って、牛を屠るように言ってきたさい。」ナターシャが帰ってきて言った。「何言ってるんですか、冗談でしょう？」母は言った。「まあ、仕方ないわね、屠らなきゃいけないけど、可哀想だわ。」

また時間が経ち、もう4月になった。すると神父は、とても厳しい口調で、まるで苛立ったように言った。「いつまで彼らは家畜を苦しめ続けるつもりだ？」ナターシャが来て言った。「今すぐ屠りなさい！ 屠るまではここを離れないわ」と。牛を屠ると、その胃の中から錆びた釘が出てきた。牛はそれで苦しんでいて、いずれにせよ倒れていただろうが、神父様はそれを知っていたのだ。

私たちがメルコムピナートに住み始めてまだ1年目のこと、ある日の四旬節の最初の週、昼1時にフルーツ入りのキセルを食べたところ、リンゴの芯が喉に詰まってしまう、息も吸えず、吐くこともできなかった。神父さんのところへ駆けつけたが、彼はすでに祈りを捧げに出かけており、礼拝が終わったのは夜9時になってからだった。神父さんと一緒にニジニャヤの家へ帰った。夕食の席に着いたが、私は食べられず、唾を飲み込むことさえできなかった。神父さんはナタリアに尋ねた。「何を食べたの？ いつ食べたの？」パンを小さくちぎって私に渡ししながら、「ほら、食べてごらん」と言った。私は思った。「『一体どうやって食べればいいの？』」と。小さな一片を食べてみたら、何となく、飲み込めた。それからもう少し多く食べてみたら、まるで何事もなかったかのように。私は黙っていた。そして夕方の祈りを捧げた後、私は神父様の足元に頭を下げて言った。「神父様、主があなたを救ってくださいますように！ まるで何事もなかったかのように。」すると神父様は、「ほら、神に感謝だ」とおっしゃった。

ある日、神父様が私にこう言いました。「聖下様がどのように署名されるか知りたいか？」——そして、アグニア修道女の手書きで埋め尽くされた紙を差し出しました（私はその筆跡を知っていました）。その上部には、斜めに赤い鉛筆で指示が書き込まれていました。「ほら」と神父は言った。「斜めに書かれた部分だけ読んで、それ以外は読まないで。」そう言って紙を私に渡し、小さな廊下へ出て行った。私は好奇心に駆られてたまらなかった——アグニア修道女は一体何を書いたのか、聖下はそれに署名したのか？ そしてこう思った。「なんて無恥な私だ、恥ずかしくないのか？ 神父様は読むなとおっしゃったのに。」紙を机の上に置き、その場を離れた。しかし、神父様はなかなか戻ってこない。私は気になって仕方なかった——一体アグニア

修道女は何を書いたのだろうか？ また机に近づき、また「いや、やめておこう」と引き返した。そうして三度、好奇心に苛まれた。その後、神父様が入ってきて、微笑みながら「さあ、読んでごらん！」と言われた。そこには、アグニア修道女が修道誓願を立てることを願い出る嘆願書があった。神父様はまもなく彼女に修道服を授けた。

もちろん、私たちにとって神父様の逝去は辛いものでした。皆が悲しみ、皆が泣きました。そして半年後、私の記憶から決して消えることのない夢を見ました。夢の中で、私が教会に入ると、神父様が祭壇から聖体を取り出しているのですが、その祭壇は私たちの教会のものではなく、どこか狭々しいものでした。私は入り口に立ち、祝福の仕草で手を合わせ、ささやき声で「神父様！」と呼びかけました。神父様は振り返り、私のところへ近づいてきて、祝福をしてくださいました。私は黙っていました。何を言えばいいのかわからなかったのです。たくさん話せば、神父様には時間がないかもしれないし、少ししか話さなければ、要点をどう表現すればいいのかわからず、結局黙り込んでしまいました。すると神父様は私のすぐそばまで近づき、「私は君のために祈っているよ！」とおっしゃいました。そして私は目を覚ましました。ああ、嬉しさのあまり、どれほど走り回ったことか！神父様はまるで生きているかのように感じられ、また私を慰めてくださったのです。

そして、神父様が亡くなってから一年後、受胎告知の祝日が棕櫚の日曜日に重なった。礼拝はとても複雑だった。私は詩篇朗読者だったが、二つの祝日をどう正しく組み合わせればいいのか分からなかった。すると、神父様が夢の中に現れて、すべてを順を追って説明してくれた。「よく見て、しっかりと見て。こう言われるだろう：『あれはヴァイ、これは祝日（つまり受胎告知）だ。スティヒラは祝日のものを6節、ヴァイは4節、栄光の賛歌はヴァイ、そして『今』は祝日のものだ。』またしても、神父様はまるで生きているかのようにそこにいらっしゃいました。すべてを説明してくださったとき、私は目を覚まし、すべてを記憶に留めて、その通りに礼拝を執り行いました。

父神父が亡くなる前、私たちがピティリム主教様を待っていた時のことを覚えています。夜のことでした。父神父は小部屋のストーブのそばに座っていました。ヴェラは何かを用意したり、寝具を替えたりし、オルガ・フェドロヴナは父神父の三つ編みをほどき、私は父神父の耳の後ろを拭いていました。墓場のような静けさでした……。そして父上は座ったまま、聖なる隅を見つめていました……。一見すれば、父上に何でも尋ねられそうな雰囲気でしたが、皆がまるで凍りついたかのようでした。沈黙を破ったのは父上ご自身で、こう言われました。「私が死んだら、皆さんは私の世話をしていたことを思い出すでしょう……」そして今、その思い出が私たちにとって、生涯にわたる慰めとなっています。神父様は旅立たれました。もちろん、ミハイロフカでの生活も悪くはなく、私たちは全力を尽くして維持しようと努めていますが、やはり神父様がいらっしゃらないので、以前とは比べものになりません。まあ、ちなみに、ここにいる神父たちは、神父様の教えを忠実に受け継いでいますよ、ええ、そうです。だからこそ、皆が努力しているのです。

イジュモワ・タチアナ・アルテムヴナ

私の両親は特別移住者で、1931年にヴォルゴグラード州から追放されました。母と父、そして3人の子供たちです。彼らは、テミルタウから16キロメートル離れた「第13集落」という、何もない草原に連れてこられました。その集落には2万5千人がおり、皆が草原に土穴を掘っていました。冬になる頃には、小枝で小屋のようなものを建て、この全く暖房のない小屋に10家族が暮らしていました。窓はなく、屋根もかろうじて小屋を覆っている程度で、皆、ほとんど裸同然の状態で寝台に横たわっていました。父が仕事から帰ると、母と子供たちは皆、雪に埋もれて横たわっていることがあった。父は雪をかき分け、「 」と尋ねた。「みんな、まだ生きてるのか？」——「ああ、生きてるよ。」食べるものも飲むものも何もなかった。長兄がどこかで小さな薪の

束を見つけ、父に持ってきてこう言った。「お父さん、その薪を割って、お茶を温めてくれ。」その時、憲兵隊長が近づいてきて、父の襟首をつかみ、その薪の束のせいで3ヶ月間拘留した。

春になる頃には、第13集落にはほとんど人が残っておらず、皆死んでしまった。私たちの家族は奇跡的に生き延びた——子供たちも、母も。その後、家族はティホノフカに移送された。そこには粘土とカラガンニクで作られた5世帯用の地下住居があった。そして、そこで私は1939年に生まれた。1940年、母はパンを求める列で押しつぶされてしまった。彼女は妊娠中だったが、亡くなってしまった。41年には、兄が前線に徴兵され、戦死しました。父は戦争中、炭鉱で2～3交代制で働いていました。そこは第二戦線であり、毎日炭鉱で人が命を落としていました。そして、仕事に出かけるたびに、父は私にこう別れを告げました。「さあ、娘よ。戻ってくるか、炭鉱から戻ってこないか——神のみぞ知る。」

そうして私たちは育ちました。私たちが「クーラク」と呼ばれていたことを覚えています。私はその言葉の意味がわからず、父に「パパ、どうして私たちを『クーラク』って呼ぶの？」と尋ねました。すると父はこう言いました。「娘よ、そう呼ばれるのは、私たちがロシアに住んでいた頃、枕で眠る暇もなく、野原で拳を枕にして休んでいたからだ。私たちが働き、土地を耕し、その労働でロシアを養っていたからだ。」

1955年、私がすでに16歳になっていた頃、セバスティアン神父と出会いました。その時、私は初めて教会を訪れました。礼拝が行われており、セバスティアン神父が司式していました。私は静かに立ち、その言葉を聞いていました。そして、私の若き魂の中で、ある種の再生が起こり、この世のものとは思えないほどの喜びと高揚感に、息をのむほど心を奪われました。その後、私は教会に通うようになり、神父様とより親しくなり、神父様は私をそばに引き寄せてくださいました。神父様は、とても品格があり、並外れた優しさと、非常に温かな人柄をお持ちでした。彼は人々に対してとても気さくで、温厚に接し、特に初めて訪れる人に対しては、心の温かさで迎えてくれました。私は聖歌隊の歌に慣れていきました。神父様はオブティナ修道院の聖歌を大変愛しておられ、時には自ら聖歌隊席に来て歌われることもありました。聖歌隊は修道院のように女性だけで構成されていました。修道女たちや若い女性たちが歌っていました。ここには厳密な意味での修道院はありませんでしたが、修道院の精神は確かに息づいていました。共同体は小規模で、修道女は10人から12人ほどでしたが、隠れて修道生活を送っている者もありました。神父様は長い礼拝を大変好まれました。私たちの教会では、何も省略されることも、短縮されることもありませんでした。神父様は、この教会にオブティナ・プスティニの精神を根付かせようと努め、自らも「この教会を建てるために、私はここで多くの汗を流した」と語っていたほど、多大な労力を注いでいた。

私が初めて訪れた時、神父様は「お母さんはどこにいるの？」とお尋ねになりました。私は「神父様、私の母は亡くなっていて、記憶にありません」と答えました。「葬儀は済んでいるのかい？」と尋ねられ、「いいえ」と答えると、「それなら、お母さんの葬儀を執り行おう」と言われ、神父様はすぐに私の母の葬儀を執り行い始められました。

私にはこんな出来事がありました。8歳の甥が、路上で子供たちと遊んでいる時に喧嘩をしてしまいました。家で叱られるのを恐れて、友人と一緒に家を出て逃げ出したのです。二人は列車に乗り込み、タシュケント方面へと向かいました。もちろん、家族全員が心配でたまらなかったのです。私は悲しみの涙を流しながら神父様のところへ行き、足元にひれ伏してこう言いました。「神父様、私にはとてつもない悲劇が起きてしまいました！ 甥が行方不明になって、もう一ヶ月も音沙汰がありません。」すると神父様は私の頭を撫でて、「大丈夫だよ、ターニャちゃん。神様のお力添えがあれば、きっと見つかるさ。」とおっしゃいました。時が経ち、甥がアルマアタで拘束されたという電報が届きました。姉がそこへ行き、彼を連れ帰りました。私は喜びと感謝の印として、大きなブドウの房と大きなスイカを神父様に差し上げました。すると神父様は私の頭を撫でながら、「ほら、甥っ子は見つかるって言ったでしょう。ほら、見つかったじゃないか」とおっしゃいました。そう、神父様の祈りのおかげでした。

彼は偉大でした。偉大な神の御使いであり、偉大な奇跡を起こしましたが、それは人々の目から隠された、ひそやかなものでした。バチューシュカは、その透視能力を謙虚に表現していました。少女たち、つまり彼の霊的な子供たちが彼を取り囲むと、彼女たち全員を見つめながら、時折こうおっしゃいました。「私は、あなたたちが自分自身を知っている以上に、あなたたちのことを知っているのだ。」それほどまでに、彼には偉大な洞察力があったのです。時には、重い心の重荷や心の痛みを抱え、多くの苦しみや悩み、悲しみを抱えて懺悔に赴くことがありました。しかし、懺悔をし、神父様とお話しすると、まるで翼を得たかのように軽やかにその場を後にし、すべてが過去のものとなっていました——まさにそのような感覚でした。神父様は、その言葉や触れ合いによって、人々の魂を癒やすことができたのです。頭を撫でてくれたり、あるいは、魂をたちまち和らげ、平安と安らぎをもたらすような言葉をかけたりしてくれました。しかし、人が神の御心に背くとき、あるいは神父様がその人を何らかの災いから守ろうとしたときは、厳しくなることもありました。もちろん、厳しく叱ることもありました。その後こう言うのです。「ああ、実は昨夜一晩中眠れなかったんだ。君のことを心配して、神に祈っていたんだ。」彼はすべてを非常に痛切に受け止めており、人々のあらゆる悲しみは、まるで自分のことのように身近に感じていた。彼はこう語っていた。「私自身も孤児として育った。だから孤児の悲しみは自分のことのように感じ、他人の悲しみも私の心に深く響くのだ。」

バチューシュカが亡くなった後、こんな出来事がありました。ノヴォシビルスクから一人の女性がやって来ました。彼女の名前はナデージダでした。彼女はがんを患っていました。彼女はバチューシュカの墓に倒れ込み、苦しそうに泣きじゃくりました。その後、精一杯祈り、彼に助けを求め、帰る際に墓から土を少し持ち帰りました。家に帰ると、彼女はその土をきれいな器に入れ、水を注いで、その水を飲み始めました。そして次第に彼女の病気は消え去り、彼女は自身の癒やしを証しました。

たまたま、私たちの聖歌隊が指揮者を失ってしまい、私に指揮を任せてほしいと打診がありました。それはすでに神父様が亡くなられた後のことでした。私は、果たして合唱団を率いることができるのかと大変戸惑い、神父様にこう祈りました。「神父様、これは神の御心なのでしょうか？ 私にその役目を果たせるのでしょうか？」心の中でそう祈っていると、その夜、バチューシュカが夢に現れました。彼は、お気に入りの場所であるメルコムピナートにいました。そこには小さな土造りの小屋があり、私がドアを開けて中に入ると、バチューシュカは完全な祭服を身にまとい、十字架と香炉を手にとって礼拝を執り行っていました。私は扉を開け、聖歌隊の指揮を引き受けるべきかどうかという思いを抱きながら、神父様の足元にひれ伏して言いました。「神父様、私を祝福してください！」すると、神父様は大きな十字を切って私を祝福してくださいました。私は神父様の手を口元に当てると、その瞬間目を覚まし、自分の手のひらに神父様の温かい手を感じました。私は、これこそが神の御許しであると悟りました。私は承諾し、聖歌隊の指揮を引き受け、神に感謝して、今でもその役目を務めています。

アンナ・ヴァシリエヴナ・ザイコワ

私はモルドヴィアに住んでいましたが、両親が亡くなり、葬儀のために長老ヤコブの元へやって来ました。バルカには、ヤコブという先見の明のある長老がいました。葬儀のために訪れたところ、彼は私にこう言いました。「どこへ行くつもりだ！ 道はこんなに素晴らしいのに！ 誰が君を出迎えるというのか！ 地上から天まで届く柱が君を出迎えるぞ！」私は心の中で思いました。「一体どういうこと？ 地から天まで届く柱が私を出迎えるなんて？」そうして、59年に娘がテミルタウへ行って、手紙をくれました。「お母さん、来て、お母さん、来て！」母はすべてを売り払って、ここへやってきました。でも、心には重苦しい思いがありました——やはり村で合唱団に所属していたからです。そうして、私はここに来て、まっすぐ教会へ向かった。歩いていると、二人の少年がセバステイアン神父を連れていた。人々が神父に群がっている中、神父はまっすぐ私の方へ来て、教会の真ん中で私を祝福してくれた。それ以来、私はここに通うようになり、30年間通い続けているが、なんて喜びだろう！ これほどの喜びは、他では決して味わえま

せん！　ところがここに来てみると、住む場所がありませんでした。そこで私は——主よ、お許しください——神父様に近づいて言いました。「神父様、私、結婚しました！」年配の男性と結婚したのですが、住む場所がありませんでした。神父様は言われました。「結婚したのか？　教会で結婚式を挙げないなら、出て行け。」私は家に帰って、「おじいちゃん、私、出て行くわ」と言いました。「どうして出て行くんだ？」と。「教会で結婚式を挙げないつもり？」と。「挙げるわ！」と言って、そのままここへ——結婚式を挙げに。それ以来、ずっとここに通い続けています。ところが、アナスタシアという母がやって来た時、彼女は私のことを全く見分けられず、すぐにこう呼びかけたの。「アンナ！——って、どうしてアナスタシアという名前の名付け親のために祈らないの？　彼女はあなたが生後3日目の時、教会に連れて行ってくれたのよ！　それなのに、彼女のために祈らないなんて！　彼女はもう亡くなったのよ！」私は名付け親が亡くなったことなど知らなかった。ロシアにいるのだから、どうして私が知れるというの？　私はそこに立ち尽くし、彼女をじっと見つめていた——彼女は次に何を言うつもりなのだろう？　彼女はプロスフォラを差し出して、「ほら、おじいちゃんと一緒に食べてね！」と言った。その直後、おじいちゃんは病気になった。もしかすると、彼女は彼の死が近いことを予見していたのかもしれない。ああ、あの長老たちは本当に素晴らしい方々だった……

そして、バルカのヤコフ長老も、本当に素晴らしい方でした！彼は聖人であり、墓の前で彼に祈りを捧げると癒やされるのです。ある時、私が18歳の時に彼を訪ねたのですが、ああ、主よ、私は罪ばかりでした！　当時は何も理解していなかったのです！祖母と二人で暮らしていました。祖母にはマッチがありませんでした。私は巢から卵をいくつか取ったの。おばあちゃんに聞かずにね。まあ、これくらい罪じゃないだろうと思って、巢から取って、店へ走って行ってマッチを買って、おばあちゃんに持って帰ったの。それから、ヤコフ神父さんのところへ行ったの。そしたら、神父さんが言うのよ。「卵でマッチを買ったんだね！」人の罪をすべて見抜く方だから、何も隠せない！　私は彼を見つめながら、「誰に言ってるの？」と思った。すると彼は私の顔を見て、「君に言ってるんだ」と言った。私は「えっ！　神父様！　ごめんなさい、私がやったんです！」と言った。この世のすべてを、まるで篩（ふるい）を通して見るかのように見通していたのだ！

セバスチャン神父は本当に心優しい方で、みんなを愛し、誰に対しても子供のように平等に接していました。テミルタウから帰ってくるたび、神父は私たちが怒らないようにと、私たち全員を喜ばせようと必死でした。まるで私たちが黄金の像のように扱われたのですが、私たちはただの罪人なのに！

そう、もう一度見たことがある。大勢の人がいて、神父様がそこから叫んでいた。「その場に立ち止まれ、中に入ってくるな！」どうやらその人は悪意を持って近づき、神父様のところへ入ろうとしていたようだ。神父様が手を上げただけで、その男はまるで地面に埋め込まれたかのように、その場に釘付けになり、前にも後ろにも動けなくなってしまった。神の御国がセバスティアン神父様にありますように！

そして、アグニア母上についても、忘れるわけにはいきません！私は年金を受け取るはずだったのですが、どうしても受け取れませんでした。そこで、母上のところへ訪ねて行き、玄関の段差に座って待っていました。すると、みんなが次々と母上のところに押し寄せてくるので、母上が「こっちへおいで」とおっしゃいました。私の足をそばに座らせて、祝福してくださった。「年金はもらえるよ」と言って、それから尋ねた。「あなた、イコンを作っているの？」私はイコンを額縁に収めていた。「イコンを作っているの？」と。「ええ、」と私は答えた。「お母様、作っています。　すみません、小さなイコンの写真まで撮っていました（どこにも聖人の顔が描かれたものがなかったんです）——、自分で撮ったんです。」すると彼女は言いました。「来るのが遅かったわね。そうでなければ、その時に描き方を教えてあげたのに。まあ、神の御加護を」——何かをするなら、しっかりやりなさい。

今、テミルタウに教会が建てられました。私はテミルタウに通い、もう5年間、毎日歌っています。セバスティアン神父はいつも心の中にいます。私たちはテミルタウからここへ通ってい

ます。道も快適になり、遅刻することはありません。まだ礼拝は始まっておらず、扉も開いていないのに——私たちは、神父様の祈りに導かれて、神父様の教会を訪ねてきます。ここには家族のような人たちがいて、どこにいても、ここに来ると心が痛むんです。魂のすべてがここにあるんです、わかりますか？ なぜそうなるのか？ もちろん、心が引き寄せられるんです。あそこで聖歌隊に立って歌っていても、心はここにあるんです。

マリア・ヴァシリエヴナ・アンドリエフスカヤ

私たちは31年にサラトフ州から追放されました。家畜用の貨車でオサカロフカに運ばれ、まるで家畜のように地面に放り出されました。まるで昨日のことのよう到现在でも覚えています。バケツをひっくり返したような雨が降り注ぎ、私たちは雨水を汲んで飲んでいました。当時、私は5歳、兄は私より2歳年上で、3歳の妹とさらに2人の乳児——計5人の子供たち、そして母と父、祖父と祖母がいました。サラトフ州では農業を営んでおり、いつも教会に通っていました。そして、貨物列車でオサカロフカという、何もない草原へと連れてこられました。そこで二日間、私たちは眠ることなく、父と母のそばの地面に座り、二人の足にしがみついていた。二日後、カザフ人が馬車に乗ってやって来て、私たちを乗せ、第5集落へと連れて行きました。移動中、私たちは父に尋ねました。「パパ、パパ、私たちの家はどこになるの？」と尋ねた。父は「もうすぐ、もうすぐだから、待ってて」と言った。第5集落に着くと、「家はどこ？家はどこ？」と尋ねた。しかしそこには何もなく、「第5集落」と書かれた看板が立っているだけで、兵士たちが私たちが逃げ出さないよう見張っていた。イシム川まで連れて行かれ、また地面に放り出されると、私たち子供たちは泣きじゃくった。父は行って薪を切り、四角い穴を掘り、毛布を小屋のように張った。その地中小屋の中で、私たちはポクロフの日まで暮らした。そしてポクロフの日には、50センチほどの雪が降った。ある朝、兄が目覚ましてこう言った。「お母さん、おじいちゃんが凍え死んで、僕も寒くて凍えそうだ」。駆けつけると、おじいちゃんはすでに息を引き取っていた。

私たちはバラックを建てていた。十代の若者や大人たちは、芝を背負って6キロほど運んだ。ポクロフの祭りの後、私たちはこのバラックに収容された——窓ガラスもドアもなかった。父は当時まだ生きていて、桶に水を注ぐと、水が凍り、その氷を窓ガラスの代わりに窓にはめ込んでいた。バラックには200人ずつ詰め込まれた。朝起きると、あちこちで10人、5人と死体が転がっていて、私たちは死体を引きずり出していた。このことは忘れられない。私たちと一緒にモルドヴァ族が暮らしていた——20人の家族だったが、そのうちロシアへ逃げられたのは2人だけで、残りは全員亡くなった。第5集落には1万8千人が連れてこられたが、春になる頃には5千人しか残っていなかった。私たちの場合、32年に父が亡くなり、その1ヶ月後に母が出産したため、私たち6人の子供と盲目の祖母だけが取り残された。私たちはどのように暮らしていたか？物乞いをしていて。母は盗むことを禁じていた。「いいえ、娘よ、他人のものでは決して満腹にはなれない。『それより、行って手を差し出してみなさい』と。それで私は出かけていきました。何かくれる人もいれば、何もくれず、突き飛ばす人もいました。

その後、生まれたばかりの弟と末の妹、そして祖母が亡くなりました。私たちは少しずつ成長し、児童労働隊で働き始めました。そして37年、母はコルホーズに行くよう強制されましたが、母は行きたがりませんでした。彼女にはこう言われました。「自分が何者か分かっているか？お前は『クーラチカ』だ。」そして母は3年の刑を宣告され、極東へ送られました。私たち子供たちは、取り残されてしまいました。兄は14歳、私は12歳、妹は10歳、末の弟は8歳でした。私たちは児童労働隊で働き、物乞いをしたり、子供の世話をしたり、紡ぎの仕事に行ったりしました。もらったものは何でも持ち帰り、互いに分け合って食べていました。そうして3年間暮らしました。

その後、母は釈放され、まもなく戦争が始まった。兄は徴兵され、戦場で戦死した。これが私たちの「幸せ」であり、涙と貧困と悲しみの中で、私たちの生活は続いていった。

55年、私たちはセバスティアン神父と知り合いました。そして神父様は、私たち家族全員がミハイロフカへ引っ越すことを祝福してくださいました。ええ……それからはまるで樂園のような暮らしになりました。その一年後、神父様の祝福のもと、家を建てました。それ以来、私たちは常に神父様のそばにいて、あらゆる悩みや悲しみを神父様に打ち明けました。「まあ、大丈夫ですよ」と神父様は言われました。「神を信じなさい。神はあなたを見捨てたりはしません。」そして、神父様はいつも聖なる祈りによって私たちを助けてくださいました。もちろん、私たちのような罪深い者には、その祈りに値する資格などありませんでしたが。

マトローナ・ティホノヴナ・フロロワ

1945年に戦線から故郷に戻ったとき、私は自分の人生を立て直したいと強く願っていました。そのため、誰か相応しい人を見つけようと、若者たちと熱心に付き合い歩きました。私は看護師として働いていましたが、ある日、患者さんのところにカップリング治療をしに行った際、壁に貼られた神父の写真が目に入りました。その周りには、白いスカーフを巻いた多くの修道女たちが写っていました。私は信仰心が厚く、いつも祈っていました。「この方はどなたですか？」と尋ねると、「ああ、それはカラガンダに住んでいるセバスティアン神父ですよ」と答えられました。そのとき、私の心は悲しみに満ちていました。若者たちと遊び回っていたせいで、心はすでに切なさに溢れていて、こう思いました。「ああ神様、戦場から戻って以来、私にはなんて不運ばかりが降りかかるのでしょうか！ どうにも落ち着くことができず、年ばかりが過ぎていく。」「それなら——と彼らは言った——彼に手紙を書いてみて。」私は手紙を書き、神父様は私をカラガンダへ招いてくださった。私は短期間滞在し、神父様に戦場から戻ってからの私の不運について語り始めたところ、神父様はこう言われた。「主はあなたに家庭生活を定められておらず、あなたは結婚することはないでしょう。」私は思った。「一体どういうこと？ みんなには定めておいて、私だけ定めていないというの？」すると神父様はまたこう言われた。「ロシアに戻りなさい。そこで身を引き、それからここへ来なさい。あなたには、カラガンダで暮らすという神の祝福がある。」私はロシアに戻ったのですが、長い間、ロシアからカラガンダへ出ることができませんでした。この世が私を、まるで鎖で縛りつけるかのように、強く引き留めていたからです。神父様も熱心に祈ってくださっていましたが、私がここに来ることができたのは、それから4ヶ月も経ってからでした。

洗礼名では私の名前はマトローナです。ところが、前線への登録の際、書類には「マリア」と書かれてしまいました。それ以来、私は皆から「マリア」と呼ばれるようになりました。そこで、神父様に電報を送りました。「お迎えください。マリア」と。すると神父様は家族にこう言われました。「ほら、マトローナがこちらへ来る。出迎えてきてくれ。」そして神父様は私を自宅に迎え入れてくださいました。神父様は他の誰に対してもそうはされませんでした。それほどまでに、私をサタンから守ろうとしてくださったのです。しかし、私はカラガンダに馴染むことができず、ずっとここから去りたいと願っていました。私はスーツケースをまとめ、「ここを離れなければなりません。もうここにはいられません」と言いました。すると神父様は私のスーツケースを自分の車に積み込み、また私を自宅へ連れて帰ってくださいました。そしてまた、私は彼らの家で暮らすことになった。約1年間そこに住んでいたが、神父様の周りにいた奥様たちは皆、いつも私に不満を抱いていた。というのも、私は余計なことをたくさん口にしてしまい、それが彼女たちの気に入らなかったからだ。彼女たちは沈黙の中で暮らすことに慣れており、余計な言葉は口にしないようにしていた。しかし私は、何でもかんでも口走ってしまった。主よ、お許してください！ そして、夕方に神父様が礼拝から戻られると、彼女たちは私にまつわる苦情を神父様に訴えましたが、神父様は彼女たちをなだめてこう言われました。「修道女たちよ、あなた方は大勢いるが、私は皆を我慢している。それなのに、あなたたちはマトローナ一人だけは我慢できないのか。」そうして、神父様はいつも彼女たちを諭しておられました。私がそこに住んでいた間、人々は常に私について苦情を言っていました。というのも、私の振る舞いは確かに不作法だったからです。でも神父様はこうおっしゃいました。「彼女は戦地に行っていたし、多くの

苦しみを耐え抜いた。主が彼女を守ってくださったのだ。彼女を責めてはいけない。彼女は私のところに来たのであって、あなた方のところに来たのではない。」その後、神父様は私のために小さな家を買ってくださいました。時々、私のところに来ては、菜園を見てこうおっしゃいました。「うわっ！マトローナの小さな菜園！心の中がそのまま菜園に表れているね！」と。私の菜園には、腰の高さほどもあるほど背の高い草が生えていました。神父様は、私を正気に戻そうと、多くの努力を払ってくださいました。私は神父様の前にひざまずいて泣き、心がとても苦しかった。サタンが私を激しく誘惑していたからだ。すると神父様は私ではなく、私の横を見てこう言われた。「サタン、サタン、なぜ魂を苦しめるのだ！」

私は看護師だったので、神父様に頻繁にカップリング治療を施していました。すると神父様は、「マトローナ、君は私を治療してくれるが、私は君を癒やしてあげる」とおっしゃいました。そうして、私の心はどんどん軽くなっていったのです。

神父様は私たちのためにこれほど多くの労力を費やしてくださいました。私たち一人ひとりが、神父様にとってそれほどかけがえのない存在だったのです。そして今、私が生きている限り、何の不自由も感じていません。私には誰もいません。夫も子供もいません。生涯を独りで過ごしてきました。しかし、食べ物にも飲み物にも薪にも、何一つ不自由を感じたことがありません。まるで誰かが翼で私を運んでくれているかのようです。

リディア・ウラジーミロヴナ・ジュコワ

1931年、私たちの家族はサマルスカヤ州からカラガンダへ無料で移送されました。私たち4人の子供と、母と父がいました。私たちは列車の貨物車両に乗せられて運ばれました。最初はアクモリンスクに連れて行かれ、そこで小屋のような場所で暮らしました。でも、そのことは覚えていません。母が話してくれたことです。そこでどれくらいの間、小屋で暮らしていたのかも覚えていません。3歳の幼い妹ナデジダが亡くなった時のことさえ、覚えていません。当時、私は5歳になり、さらに2人の年上の兄がいました。アクモリンスクから、私たちはコンパネイスクという草原地帯へ連れて行かれた。そして私が11歳の時、ポリシャヤ・ミハイロフカへ引っ越した際、なぜかこのミハイロフスカヤ村がプーシキンの故郷の村だと思った。

私たち全員は生き残り、この流刑を乗り越えましたが、幼いナジェージュダだけが亡くなってしまいました。両親はセバステイアン神父と知り合いました。学校を卒業する頃、授業が終わって家に帰ると、部屋中に水がこぼれていたのを覚えています。今になって、私たちの家で洗礼式が行われていたのだと理解していますが、当時はそのことを私から隠していました。私が初めて神父様にお会いしたのは、1952年、大学を卒業した後でした。両親はすでに神父様の祝福を受けてメルコムピナートへ引っ越しており、神父様もそこへ足を運ばれ、よく私たちの家で正午の礼拝や晩課を執り行われていました。メルコムピナート中から人々がすぐに駆けつけてきたので、私たちは皆を収容できる大きな家を建てた。そして、神父様は私たち一人ひとりを愛してくださいました。ある時、祈りを捧げ、夕食を済ませ、皆が帰った後、神父様が私たちの家に泊まってくださったことを覚えている。ところが、看護師のマトローナはどうしても帰ろうとしなかった。彼女は一分一秒でも早く神父様にお会いし、その声を聞きたがっていたのです。だから、誰よりも早く私たちの家に来て、誰よりも遅く帰っていました。そこで、私は洗面器に水を張り、目配せで「帰って！」と合図しましたが、彼女は帰ろうとしません。私は神父様をベッドに座らせ、靴を脱がせ、水を運んで神父様の足を洗ってあげた。すると神父様は、マトローナが覗き込んでいるのを見て、「リディア・ウラジーミロヴナ、もういいよ、マトローナにもう片方の足も洗わせてあげなさい！」とおっしゃった。

父は70歳の時に助祭となり、その後司祭になって、バチューシュカと共にミハイロフスカヤ教会で奉仕しました。母と父はこう言っていました。「私たちを追放してくれてよかった！もし追放されていなかったら、こんな素晴らしいバチューシュカに出会えなかっただろう！」——そうして神に感謝していたのです。

サマルツェフ家

ヴァシリー・イヴァノヴィチ・サマルツェフ

私たちはオレンブルク州に住んでいました。両親は深く信仰心に満ちた人々でした。1931年、父は「富農」として財産を没収され、投獄されました。そして私たち6人の子供と母は、31年5月にカラガンダ近郊の9番集落という、広大な草原の真ん中に連れてこられました。長兄は11歳、その次にゲノチカ、私は4歳、私より年下には3歳のイワン、2歳のエフゲニーがいて、末っ子のパヴリクはまだ乳児でした。私たちはコシュマとトランクを持っていました。私たちは地面に穴を掘り、コシュマを敷き、トランクを壊して屋根の代わりに立てた。それが私たちの家だった。雨や雪が降ると、穴をコシュマで覆った。こうして、6人の子供たちは、まるで母鶏のそばにいるひよこのように寄り添っていた。

その後、土壁の家を建て始め、皆を駆り立てて粘土を練らせた。監督官は馬に乗って現れ、鞭で人々を粘土の場所へと追い立てた。私たちは芝を刈り、あらゆる草や低木を切り倒した——冬までにバラックを建てなければ、私たちは死んでしまうからだ。こうして、第2鉱山にティホノフカ集落ができた。私たち子供たちに配給される食糧は、ごくわずかだった。そこには小さな小川があったが、干上がってしまうことが多く、水は足りなかった。そして冬になる頃には、壁を立て、窓やドアを作り、1つのバラックに2つのストーブを設置した。各バラックには20世帯が住んでおり、冬の間は皆、二段ベッドで寝ていた。ある家族が寝て、その隣に別の家族、さらにその隣にまた別の家族——二段ベッドがずらりと並び、その間に小さな通路があるだけだった。

1932年の冬は極めて厳しく、私は家族全員が死んでいるのをこの目で見た。人々は飢えや寒さ、そしてあらゆる病気で死んでいった——赤痢が流行し、下痢も続いたが、治療する手段もなく、パンも不足していた——飢餓だった。オレンブルクやシベリア出身の人たちは、比較的丈夫だった。しかし、タンボフ、ヴォロネジ、ペンザといった肥沃な土地から来た人たちは体が弱く、家族単位で死んでいった。埋葬はどのように行われたか？幅3メートルの穴を掘り、バラックから亡くなった家族を引きずり出し、荷車に放り込み、運んで穴に薪のように放り込んだ。私たちもその冬、たった一週間の間に、弟たちのパヴェル、イワン、エフゲニーが亡くなった。ゲノチカがどうやって亡くなったのか、私たちは聞くことさえできませんでした。食事に呼んだところ、ゲノチカはすでに亡くなっていたのです。子供たちには小さな棺を用意し、乳飲み子のパヴリカは布に包んで鉄のパイプに入れ、墓穴を掘って埋葬しました。そんな状況でした。2年後、ティホノフカに残っていたのは5千人だけでした。2万人が、スタロイ・ティホノフカのあの地に眠った。生き残ったのは、私たち兄弟二人と母だけだった。

33年に父が戻ってきたが、まもなく母は飢えで亡くなった。信仰を持つ特別移住者たちは、グループになって祈りを捧げていた。そして、ドリンカから解放された修道女のマルファとマリアがティホノフカに定住すると、彼女たちは、ドリンカからオブティナ修道院の長老セバステイアン神父がまもなく解放されると話してくれた。そこで私たちは彼を待ちわびるようになった。

戦前、パンは配給券で受け取っていました。ティホノフカでは長い行列ができていたため、私はパンを買いに町へ出かけていました。また、神父も釈放されてミハイロフカに定住した後は、自らパンを買いに出かけていました。私は街で彼に会いたいと強く願っていたが、実際に彼に出会い、近づいて話しかけた。そして、彼が私をニジナヤ通りの自宅へ連れて行ってくれたとき、どれほど嬉しかったことか。それ以来、私たちの交流が始まった。

ニーナ・ペトロヴナ・サマルツェヴァ

私は難産を経験し、その後に風邪をひいて炎症を起こしてしまいました。産院からは「もう手遅れだ」として、死ぬために家に帰るように退院させられました。すると、神父様が私のところへ通ってくださるようになりました。訪ねてくると、「果物を持って来たよ」「魚を持って来たよ」と言ってくれました。当時は四旬節の期間でしたが、神父様は鯉を持ってきて、「鯉を茹でて食べなさい!」と。でも私は何も食べられず、もう死にかけていました。病院の医師が来ては、「彼女を治療する意味があるか? もう手遅れだ」と言いました。私たちの担当医であるオルガ・フェドロヴナやタイシア・グリゴリエヴナも訪ねてきて、1日に2回ずつ注射を打ってくれました。神父様は私をとて憐れんでくださいました: 「男は強いが、女は無防備だ」と神父は言いました。私たちの家では、最初は男の子が生まれ、その後に女の子が生まれました。「神父様、私たちに女の子が生まれました!」と言うと、「まあ、女の子か! 私は女の子が大好きだ!」と神父は言いました。

父は私の枕元に少しの間座って、話をしてくれました。父の頭は少し横に傾いていて、揺れていました。そうして1ヶ月間、毎日父が私のところへ来てくれ、春になる頃には、父の祈りのおかげで私は立ち上がることができました。

ヴァレンティーナ・セルゲイヴナ・ボボヴァ

私たちはカラガンディの製菓工場で働いていました。その工場は共産主義の工場で、労働者は皆労働組合に加入していましたが、私たちは組合には入っていませんでした。工場では、私たちが信者であるという理由で軽蔑されていました。しかし、私たちは働くことが好きで、仕事もきちんとこなしていました。ある日、模範的な労働者たちを取り上げる番組を撮影するためにテレビ局がやってきました。 私たちを撮影しようとしたのですが、工場長が「だめだ、彼らは信仰者だから」と言って禁止しました。もちろん、その後私たちは長い間叱られ、嘲笑されました。「あなたたちは大きな損失を被ったね。こんなに若いのに、神を信じているなんて!」と。 私たちはセバステイアン神父のもとを訪ね、そのことを話しました。すると神父は、どんな母親も神父ほどには慰めてくれないほど、私たちを慰めてくださいました。「大丈夫だ」と神父は言いました。「少しは我慢できるだろう。君たちはやがて信頼されるようになり、彼らは君たちに鍵を預け、倉庫係に任命してくれるだろう。」

もちろん、仕事では酷使され、冬には作業場から追い出されて、屋外での建設現場で働かされました。私たちは石炭を積んだ貨車から荷を下ろし、トラックに積み込み、やらなければならないことは何でもこなしました。そしてその後、私たちは所長や主任技師のイワン・セメノヴィチと親しくなりました。 イワン・セメノヴィチは私たちのところを訪ねてきて、私たちが断食をしているのを見て、それを気に入ってくれました。断食やキリスト教の祝日についてあれこれと尋ねてきて、「あなたたちはなんて素晴らしい生活を送っているんだ! 私もそんな風に暮らしたいものだ」と言っていました。そして、私たちは倉庫係に任命され、鍵を預けられ、所長は出張の際には自分のアパートも私たちに任せてくれました。

修道女ニーナ（コルシュノヴァ）

私たちが屋外で建設現場で働いていた時、私は健康を損なってしまいました。神父様は、もう仕事に出ることを許してくれませんでした。半年間、私は病欠で休んでいました。その後、神父様が「あなたは教会で働くべきだ」とおっしゃいました。そして、私は第2級の障害認定を受けました。私は教会で働き始め、今日まで働き続けています。

ある日、私の手に巨大なこぶができてしまいました。私たちにとって、何か悲しみや困り事があれば、皆、神父様のところへ駆けつけるものです。そこで私も神父様のところへ行き、「神父様、私の手にこぶができて、どんどん大きくなっているんです」と言いました。 母は『手術

が必要だ』と言いました。すると神父様は窓の外を眺めながら、私の手を優しく撫でて、『ああ、大きなこぶだね。でも、手術は必要ないよ』とおっしゃいました。そして、そのこぶが消えたのは、その瞬間だったのか、それとも少し後だったのか、私には分かりませんが、家に着いた時には、もう手のこぶはなくなっていました。

私たちがまだ15～16歳の頃、もちろん父の許可を得ずに映画のチケットを買った。すると父はそれを予見していたかのように、私たちを連れてメルコムビナートへ行った。そこで父はある人の家を訪ね、しばらく座ったり、菜園を散歩したりしてから、また別の人の家へ立ち寄った。「まあ、僕たちは」と父は言う。「急ぐ必要はないよ。」もちろん、私たちは急いでいたけれど、黙っていた。母のヴァリヤも一緒に、彼女は「あの子たち、一体どこへそんなに急いでいるの?」と言った。父は微笑んで、さらに歩き回り、時間を引き延ばしていた。もう7時、もう8時……そして神父様は「さあ、そろそろ家に帰ってもいいだろう」とおっしゃった。そうして私たちは映画を見に行けなかった。あれは若かりし頃のことだった。

ある年のクリスマスの前、神父様は私と妹に、ペトル神父の部屋を白く塗るようお許しくださいました。朝、私たちはそこへ行き、作業を始める前に神父様から祝福をいただこうとしましたが、修道院の係の女性が「神父様は大変お病気で、お会いできません」と言いました。私たちはがっかりしましたが、作業を始めました。白塗りを終え、家に帰ろうとしてまた父上にお祈りをお願いしようとしたところ、侍女が再び「父上は病気で、お会いできません」と言いました。もう時間は遅く、外は暗くなっていました。父上の窓の前を通りかかると、明かりが灯っていて、カーテンも開いていました。見ると、修道室にはバチューシュカが座っていて、その足元にはアナトリー・プロスヴィルニク神父がいました（彼は当時まだアカデミーに在学中で、クリスマス休暇を利用してバチューシュカのもとを訪れていたのです）。私はシスターに言いました。「あら、バチューシュカが座っているのに、ヴェラが祝福を受けるのを許してくれなかったわ」。まあ、と私は思い、遠隔で祝福をもらおうと決めました。そして窓の前を通りかかった時、私が「神父様、お祝福をください!」と言うと、姉は「窓から覗き込むなんて、何をしているの? 良くないわ、神父様に怒られるわよ」と言いました。「いや、神父様は私たちのことなんて気にしないよ。グラフィラがここを走り回っているだけだと思うだろう」と私は答え、私たちは家路につきました。

翌日、私たちが教会に行くと、神父様が追悼の礼拝を執り行っておられ、グラフィラがそばに立っていた。私が神父様に祝福を請うと、神父様は私の手を握りしめ、グラフィラに向かってこう言った。「窓から覗き込んでどうしたんだ?」なんと!グラフィラは涙を流し、何が起きているのかさっぱり理解できなかった。私はアナスタシア修道院長のもとへ行った（私たちのところでは、神父様に直接話しかけられないときは、アナスタシア修道院長のもとへ行き、彼女なら何でも解決してくれるのだ）。「修道院長、こうこうなことがあって、グラフィラは何も理解できず泣いています。彼女に説明しましょうか?」と尋ねると、「いいえ、その必要はありません。何も言わずにいてください。それでいいのです」と修道院長は言った。

神父様は、私たち4人の実の姉妹が皆一緒にカラガンダで暮らすことを望んでいて、「家を買ってあげるから、そこで暮らして」と言っていました。ところが、姉妹の一人であるエフゲニアは、ツェリノグラード州のジャルティールで両親と暮らしていましたが、私に手紙を書き、結婚するつもりだと伝えてきました。そこで私は父に、ジェーニャが結婚するつもりだと話すと、父は「他に誰がいるんだ?」と尋ねた。私は「長兄がいます」と答えた。「どこで働いている?」と父が聞くと、「警察です」と私が答えると、「まあ、彼が助けてくれるだろう」と言った。私は心の中で「兄が一体どうやって助けてくれるというの?」と思った。兄はジャルティールへ行き、両親を叱りつけた。「何を考えているんだ? 彼女は18歳なのに、結婚させようなんて! 許さない! 俺が彼女を引き取って、教育して、医者にしてやる!」結婚式は中止になり、兄はジェーニャをカラガンダへ連れて帰った。その後、兄はもちろんひどく後悔した。「彼女をここに連れてくるべきじゃなかった。あそこにいればせめて結婚できたのに、ここでは教会に通うよ

うになってしまった。」そして妹は、そのまま私たちと一緒にバチューシュカのもとで暮らすことになった。

時々、神父様が私たちの家で泊まることがあった。「誰が神父様の三つ編みを編んであげる？」あの時の私たちの喜びは、言葉では言い表せないほどだった！母のバルバラはこう言った。「お嬢ちゃんたち！神父様には主の小さな一片が宿っているのよ。主ご自身はなんて愛らしい方でしょう！」髪をとかすと、神父様の髪の毛がいくつか集まるの。今でも、私は神父様の髪の毛を大切に持っています。

神父様がすっかり弱り果て、教会へは人々に抱えられて運ばれるようになった頃、侍女のヴェラは誰も神父様のそばに近づかせませんでした。でも私は、どうしても神父様のそばにいたいと強く願っていました。すると、ペーチャとシュリクが神父様を教会から運び出そうとした時、神父様が私にこうおっしゃったのです。「さあ、行こう。試練の道を案内してあげるよ。」私は「まさか？」と思いながらも彼らの後について行くと、神父様は「入って、入って」とおっしゃいました。私が中に入ると、神父様は十字を切られ、私たちも皆十字を切りました。すると、神父様が微笑んで、テーブルに近づき、私にオレンジとリンゴを差し出し、「さあ、行け！」と。でも私は行くのが怖かった。うちのヴェラはとても厳しいから。別のドアから出ようとしたが、もうフックで閉められていて、仕方なく玄関へ行くしかなかった。するとヴェラが私に飛びかかってきて、激しく叱り始めた。「どうしてそんなことをしたの？神父様は病気なのに、よくもここに入ってきたわね！」そこでペーチャが私をかばってくれ、母も駆けつけてきて、彼女と取っ組み合いになった。「何をしているの？」と。すると父が駆け寄ってきて、「このいたずらっ子、何をしているんだ？神父様ご自身が彼女を祝福してくださったじゃないか！」と。ドアにたどり着くまで、こんな「試練」があったのだ。でも神父様は微笑んで、「さあ、行け！」とおっしゃった。

神父様が病気の時は、私たちは家に帰って泊まることはせず、番小屋で寝台で寝ていました。神父様が亡くなる時、私たちがそばにいられないのではないかと恐れていたのです。そして、ラドニツァの日の午前4時45分、私は夢の中でこう見ました。神父様が追悼の礼拝堂に立っていて、侍女のヴェラにろうそくを渡しながらかう言っているのです：「ほら、みんなにろうそくを配って」——そしてご自身でもろうそくに火を灯した。私は目を覚まして、「ターニャ、神父様が亡くなった」と言った。そう言った途端、ドアを叩く音がした。「神父様の具合が悪い！」。「亡くなった」とは言わず、「具合が悪い」と言ったのだ。私たちは急いで小部屋へ駆けつけると、神父様はまだ覆いもかけられておらず、エピトラヒルを身にまとったまま横たわっていた。主教様が先頭に立ち、ヴェラ、オルガ・フェドロヴナ、グラフィラ、皆がうつむいて立っていた——神父様は亡くなっていたのだ。そして、神父様ご自身が真っ先にそのことを知らせてくれたのだ。

タイシア・グリゴリエヴナ・フォミナ

イラリオン・ヴァシリエヴィチ・フォミンは、私にとって実の祖父でした。そして、神父様も私にとって祖父のような存在でした。イラリオンおじいさんは47歳で未亡人となりました。4歳、7歳、そしてそれ以上の年齢の子供たちが残されました。彼の娘であるマリア（私の名付け親）は、当時19歳でしたが、すべての重荷を背負い、子供たち全員を育て上げ、祖父が生き延びられるよう支えました。私たちの家族は、バチューシュカの祝福を受けて、1955年8月1日にカラガンダへやって来ました。私たちはメルコムビナートに定住しました。イラリオンおじいちゃんは世俗的な人でしたが、信仰心が厚い人でした。彼はいつも祈りを捧げ、宗教書を読んでいました。若い頃から死ぬまで、一度も髭を剃ったことがありませんでした。そして、バチューシュカを深く尊敬しており、二人の間には決して不和はありませんでした。私はいつもおじいちゃんのそばにいました。彼が亡くなった時、バチューシュカが葬儀の祈りを執り行いました。

神父様には霊的な知恵があり、孤児や未亡人への愛に満ちており、たとえパンの切れ端一つでも、常に彼らを助けようと努めていました。しかし、時には神父様は非常に厳格な面もありました。私は親戚ではありましたが、神父様の前ではある種の恐れを感じており、彼の前では気楽に、気ままに振る舞うことはできませんでした。ある時、神父様がすでに体力が衰えていた頃、私は通りから彼の部屋まで見送りました。部屋に入ると、彼が服を脱ぐのを手伝ってくれる修道女がそばにいませんでした。そこで私は、今こそ自分で神父様をお手伝いしようと決心しました。すると神父様は振り返って言われました。「お前、私が自分の身の回りのことはできないと思っているのか？」私はその場に立ち尽くしたままでした。神父様はご自身で服を脱ぎ、ハンガーにかけられました。「私はまだ自分で、人々の世話をしているんだ」と。そうして神父様は、私に自分の立場を思い知らせてくださったのです。

ミハイロフカには神父様のところへ大勢の人が訪れ、シスターたちは皆を歓迎し、世話をしていた。私は当初、それを当然のことだと思っていましたが、見知らぬ人々が時にどれほど負担になるか、彼らの弱さをすべて背負い、世話をし続けることがどれほど耐え難いことかを理解するまでは。すべてのシスターたちの「旅人へのもてなし」には、称賛を捧げるべきです。彼女たちは霊的な人々であり、霊的な生き方を実践していました。

父上がお亡くなりになった際、ヨセフ主教は葬儀に参列しませんでした。しかし、そこには深い思慮がありました。ピティリム主教が参列し、ヨセフ主教もそのことを知っていたのです。ピティリム主教は神父様の霊的な子であり、さらに総主教から葬儀を執り行うよう祝福を受けていました。ピティリム主教は司教であり、ヨセフ主教は大司教でした。不和を招かないよう、ヨセフ主教は参列しませんでした。

バチューシュカの死後、私たちの間に不和はありませんでした。もし何らかの対立があったとしても、それは些細なことです。主が私たちを守ってくださっています。そして、バチューシュカの子供たちが彼の言うことを聞かなかったことについては——それは過去にもあり、現在もあり、そしてこれからも続くことでしょう。私たち人間とはそういうものです。自分たちに賛同されるのは嬉しいけれど、反対されると気に入らないものです。まあ、その後、私たちは許しを請いました。

アントニナ・イワノワ

私は10年間、炭鉱で働いていました。しかし、法令により炭鉱からすべての女性が引き揚げられたとき、私は職を失ってしまいました。すると、神父様が私を呼び出し、私は行きました。「ほら、見えるか」と神父様は言いました。「あそこに座っている女性がいるだろう？ 彼女には病気の子供、男の子がいる。君は彼女と一緒にいて、その子の世話をしなさい。」

翌日、私はその男の子に会いに病院へ向かいました。彼は7歳になる所でした。可愛らしく、行儀も良かったのですが、歩くことができず、麻痺していました。私は病院で彼のそばに泊まり込み、食事を与え、散歩に連れて行った。その後、その男の子は「回復の見込みがない」として退院させられた。セバスティアン神父はすぐにヴォロージャが生きられないだろうと予言し、両親にそのことを徐々に受け入れさせるよう導いていた。しかし、両親はそれを受け入れることができなかった。彼こそが彼らの唯一の子供だったからだ。両親はあらゆる手段を尽くし、あらゆることを試みました——多くの医師を招き、ある中国人をも連れてきました。その人は脊椎に鍼を打ち、灸を当てたり、占い師が家にやって来たりしましたが、少年の容体は回復しませんでした。

病気になる前、少年の父親はひどく酒を飲み、酔うと暴れ回り、悪態をついていた。ある日、彼は庭で隣人と口論になり、その様子を少年が見ている前で、どちらかが斧を手に取り、相手を斬りつけようとした。すると、この6歳の少年は恐怖のあまり2メートルの塀に登ってしまったが、降りられなくなってしまい、そこから引きずり下ろされた。その直後に彼は全身麻痺に陥り、その後、失明し、言葉も失ってしまった。母親は神父のもとへ駆けつけ、泣き崩れた。神父は彼女を慰めた。少年は7ヶ月間、病に伏していた。神父は頻繁に訪れ、彼に聖体拝領を授けた。

神父は、この少年はまるで殉教者のようだと語っていた。そしてヴォロージャが亡くなった時、神父はアナスタシア修道女を他の修道女たちと共に彼らの家へ遣わした。修道女たちは少年の遺体を清め、祈りを捧げ、葬儀の準備を進めた。アナスタシア修道女はしばらく黙って座っていたが、やがてこう言った。「ジェーニャ（少年の父親）がいないわ。さあ、ペーチャ、コーリャ、急いで納屋を回ってきなさい。さもないと、あと1分で棺まで用意されちゃうわよ。」そして、一番奥の納屋でジェーニャを見つけた——彼はすでに首に縄をかけていた。こうしてアナスタシア修道女は彼を救った。彼女もまた偉大な人物であり、神父がわざわざ彼女を派遣したのだ。そして、その少年が埋葬されるまで、アナスタシア修道女はどこにも去らなかった。

パノワ・ヴァレンティーナ・ペトロヴナ

私たちの家族はツェリノグラードに住んでいたが、地元の教会で、カラガンダに並外れた神父がいると聞いた。そして1955年の冬、私たちは両親と共に、その神父に会いにカラガンダへ行った。当時、私は中学3年生だった。到着して、懺悔をし、聖体拝領を受け、神父様を拝見してから帰りました。そして、その神父様は本当に並外れた印象を残しました。外見はごく普通の人でしたが、私が祝福を受けるために神父様に近づいたとき、胸が震えるような畏敬の念に満たされ、心臓が止まりそうになりました。私はその感覚に深く心を揺さぶられた。

1956年、私は学校を卒業し、絵画の才能があったため、モスクワへ行き、ストロガノフ美術学校に入学しようと決心した。その頃、セバスティアン神父のもとから親戚が訪ねてきて、神父が私の入学を祝福していないと告げた。しかし、私はすでに切符を買っていたため、モスクワへ向かったものの、入学は叶わなかった。その後、父が私をカラガンダへ連れ戻してくれた。神父は私が残ることを祝福し、「アグニア修道女のもとで暮らし、彼女を手伝いなさい」と言った。私は修道女のもとで4年間暮らした。彼女もまた、並外れた人物だった。私たちは彼女を深く敬い、彼女の言うことは疑うことなく受け入れていました。朝から夜まで、絶えず人々が彼女のもとを訪れ、私たちは皆に食事を振る舞っていましたが、その資金がどこから出ていたのか、私にはさえ分かりませんでした。マチュシュカのもてなしの心は並外れていました。ある人が去れば別の人がやってくるので、また食卓を準備しなければなりませんでした。人々をもてなす合間を縫って、母はイコンを描いていました。時々、私は「お母さん、いつ仕事をするんですか？ 私が門を閉めますよ！」と言うと、「そんなことできるわけがないでしょう」と母は答え、「人々がやってくるのだから、まずは人々をもてなさなければならぬのです」と言いました。彼女は人々への愛を何よりも優先させ、たとえ小さな子供一人でも訪ねてきたというだけで、他のすべてを後回しにすることができました。人々は他の都市から、まさに彼女、母のもとを訪ねてきました。それは、彼女の温かさ、もてなしの心、そして優しさを感じ取っていたからです。そして彼女は、すべての人に対して、慈愛と愛をもって接していました。人間が自分自身の力だけで、あれほど多くの温かさや優しさを持つことはできません。それは天から授かった、霊的な優しさだったのです。母が亡くなった時、人々は泣きながらこう言いました。「私たちの養母が亡くなった。これからは、いつ行っても受け入れてくれるような場所が、どこにあるというのか？」そして、母は私を甘やかしてくれました。母は私に何も求めず、ただ美味しい食事を用意してくれただけでした。仕事から帰ると、母は「お腹空いた？」と聞いてきました。「いいえ、母さん、さっき食べたばかりです」と答えると、「いいえ、お腹空いてるでしょ。何か作ってあげる」と言うのです。そして、病気の体でサイドテーブルに寄りかかりながら、ストーブのところへ行き、とてつもなく美味しいパンケーキを焼いてくれたのです。

母について、何か特別なことを語ることはできません。あの頃の毎日が、すべて特別な日だったのだと思います。一見、ありふれた日常のようでしたが、それはまさに日々の偉業でした。朝から夜まで、私たちの家のドアは閉まることはありませんでした。時々、私たちの少年たち——ペーチャやアレシャ——が訪ねてくると、母は彼らを敬虔な気持ちで出迎えてくれました。私たちはそれを見て、「母があれほど敬意を持って迎えるのだから、きっと彼らは神父になるのだろう」と思っていました。アレクサンドル神父がまだ十代の頃、私たちの家を訪ねてきたこと

を覚えています。母は彼に対して非常に敬意を払って接していましたが、ただ祝福を受けることだけはしませんでした。彼は当時、神父になることなど微塵も考えていなかったのですが、結局、すでに定められていた道へと進んでいったのです。

アナスタシア修道女は、もっときつい人でした。相手の目を見て、きっぱりと物を言うこともありました。彼女のその眼差しは、まるであなたの心の奥底まで透き通って見透かしているかのようでした。私は彼女を少し恐れていましたが、彼女もまたとても優しい人でした。彼女は手作りのクワスをみんなに振る舞うのが大好きでした。教会に行くと、アナスタシア修道女が道端で「クワスをどうぞ」と声をかけてくることがよくありました。「ええ、どうぞ、修道女様」と答えるのです。

私たちもアナスタシア修道女を敬っていた。しかし、時々、彼女が言うことの中には、なかなか信じられないようなものもあった。彼女は、神父様が称賛され、ここから連れ去られるだろうと言っていた。「時代が変わり、ソビエト連邦は崩壊する」とも言っていたが、当時はすべてがあまりにも揺るぎないものだったため、私にとっては空想話に過ぎませんでした。さらに、「神父様がここから連れ去られる時、私を忘れないでほしい」とも言っていました。これは私が直接聞いたことですが、当時はそんなことがあり得るとは信じられませんでした。

私は、バチューシュカが私たちの家族について語った予言さえも信じていませんでした。彼が「私たちの家族はツェリノグラードからカラガンダへ引っ越すことになる」と言ったとき、私は「いいえ、そんなことは絶対にありません。あそこには親戚がみんないますし、姉も夫もいます。パパは決して姉を置き去りにしたりしないでしょう」と反論しました。すると父は微笑んでこう言いました。「行けば家も買えるし、庭も作れるし、すべてが手に入るよ」。それは59年のことでしたが、60年には私たちの家族はすでにカラガンダにいて、スーツケースを片手に新年を迎えました。

神父様は母に、旅の途中で亡くなるだろうと予言していました。そのため、母が親戚を訪ねるために出かける時は、私たちは不安を抱きつつ見送っていました。実際に母は旅の途中で亡くなりましたが、私たちが想像していたような形ではありませんでした。母と父は1976年、ここカラガンダで、車で橋を渡っている最中に事故に遭い、共に亡くなりました。

私には素晴らしい両親がいました。とても信心深く、優しい人たちでした。しかし、私たちの長老たちは、それ以上に温かみのある方々でした。神父様はたった一言おっしゃるだけで、まるで翼が生えたかのように、その言葉に心を奪われてしまうほどでした。世俗の人間は、霊的な指導者たちが愛し、温めてくれたほどには、これほどまでに愛し、これほどまでに捧げることはできません。

フミロフ家

修道士セバスティアン（アレクサンドル・アレクセーエヴィチ・フミロフ）

1931年、私たちは農民剥奪の対象となり、タンボフ州からカラガンダへ追放された。母と私たち三人の兄弟、そして私たちの村からさらに11家族が、私たちと同じ貨車に乗って一緒に送られました。まず、ちょうど聖ペトロと聖パウロの祝日にあたる日に、ペトロパヴロフスクに連れて行かれました。今でも覚えているのですが、ペトロパヴロフスクではイラクサのスープを食べさせられました。そしてペトロパヴロフスクから、コンパネイスクまで約2週間かけて移動しました。

そこは広々とした草原、焼け焦げた草原だった。夜、雨が降る中、私たちは降ろされた。貨車から寝台として使っていた板を取り出し、それを4つに切り分けて足場を作った。それからカラガンニクを切り倒し、それを足場に被せて小屋を作った。私たちはその小屋で暮らした。全員が働かされ、サマンを作ることを強制された。私はまだ幼かったが、それでも働き、サマンをひっくり返して、太陽の下で乾くようにした。その後、サマンは建設現場へ運ばれ、それで小屋が建てられた。芝も切り取られ、それを使って家も作られた。壁を建てるのがやっと終わったとこ

ろで冬が訪れ、家には天井さえなかった。12月になると、泥だらけの環境と、味気ない食事——味気ないスープと1日400グラムのパンしか与えられなかった——が原因で、発疹チフスが流行した。人々は次々と亡くなっていった。そして、主の奉献の祝日に、私の二人の兄弟が亡くなった。彼らは病院に入院していた。場所は旧市街で、当時は第1カラガンダと呼ばれていた。母にその知らせが届き、彼女は病院へ彼らを探しに行きました。そこで「何のご用ですか？」と尋ねられると、「ええ、実は——」と母は答えました。「ここにいる家族が亡くなったと連絡があったので、彼らを探しに来たのです。」「いつ連絡があったのですか？」「昨日です」「おや！——と彼らは言った——もう探さないでください。その人たちはもういません。すでに運び出されました。今日、5台の荷馬車で運び出され、共同の穴に投げ込まれました。今、あなたの兄弟たちはそこにいます。そして、ここにはまだ新鮮な遺体が横たわっています。」「しかし、母は兄弟のうち1人の遺体を見分けました。彼を連れて行き、そりに載せて、コンパネイスクへ運んだ。そこにはすでに墓地があり、墓のような穴を掘って、兄を布に包んで埋葬した。そうやって、馬車で人々をコンパネイスクへ運んでいた。これは大きな悲劇であり、恐ろしいことで、言葉では言い尽くせない。そう、天井のない家には雪が降り積もっていた。生き残っていた人々は雪の中から這い上がった。そして、息絶えた人々は雪の下に横たわっており、彼らを引きずり出して荷車に乗せた。そして、同じように衰弱した男たちがその荷車を引いて運んだ——死体を集めて運ぶことを無理やり強制されていたのだ。こんなこともあった——手押し車を引いている最中に、引いていた人が倒れて死んでしまうのだ。彼を拾い上げ、手押し車に乗せ、また歩き出し、さらに引き続けていく。あの頃の生活は本当に過酷で、誰もがその苦難を味わった。

その後、私は成長し、1936年にはすでに16歳になっていた。そこには何の期限もなく、皆、できる限りそこから逃げ出していった。私もロシアへ逃げた。そして戦後、私が結婚した際、妻と幼い娘リュボフと共に、1951年に自らカラガンダへ移住してきた。ここでセバスティアン神父がいらっしやると聞き、彼と親しくなりました。家族は増え、子供たちは成長し、数え切れないほどの悲しみに見舞われました。神父様のところへ行き、話をし、語り合うと、彼は助言をくれ、悲しみを和らげてくれました。そして、母が病気になった時、末の娘はまだたった1歳でしたが、彼は私たちの家まで訪ねてきてくれました。私が泣くと、彼も私と一緒に泣いてくれました。彼はこう言いました。「孤児の生活がいかに辛いものか、私は知っている。」

修道女エヴニキヤ（アレクサンドラ・フロロヴナ・フミロヴァ）

1964年の冬、私は重病にかかりました。長期間にわたり肝臓の治療を続けても効果が得られなかった後、胆道に炎症が起こり、胆汁が血液中に流れ込んでしまいました。医師たちは、手術をしなければ3日以上は生きられないと診断しましたが、手術後も生存は保証されませんでした。夫が神父のもとへ行き、神父はすぐに手術を祝福してくださり、私のためにハンカチと頭巾を二枚手渡してくれました。

私は自分の病状が絶望的であることを知っていました。手術を受けるのは辛かったです。だって、もう子供たちの元には戻れないと分かっていたいながら、8人の幼い子供たちを家に残して行くのですから。その少し前、私は夢を見ました。小さな子供を抱いて家を出て、東の方へと向かう夢でした（私には生後5ヶ月の娘が亡くなっていました）。私はその夢を神父様に話して、「神父様、私は死んでしまいます！」と言いました。神父様は「なぜ？」と尋ね、涙を浮かべて悲しげにこう言われました。「それは病気の予兆です。」

手術は数時間に及びました。その間、教会では聖体礼儀が行われていました。神父様は説教壇に立ち、涙ながらにこう訴えかけました。「兄弟姉妹の皆さん！共に祈りましょう！今、多子家庭の女性が手術を受けています……」——しかし、言葉を最後まで言い終えることができず、泣き出して祭壇の中へ戻ってしまいました。その後、アレクサンドル・クリヴォノソフ神父が同じ願いを込めて信徒たちの前に現れたが、彼もまた言葉を最後まで言い終えることができず、泣き出してしまった。その後、再び神父が姿を現し、アカフィストを伴う祈祷式を執り行った。

すると、信徒たち全員（神父のいる教会はいつも満員だった）がひざまずき、神父と共に祈りを捧げた。手術は無事に終わった。

私が病院から退院したとき、長女が教会へ行った。アナスタシア修道女が「お母様の具合はどうですか？」と尋ねると、娘は「もう病院から連れ帰られました」と答えました。「ほら！」と修道女はイコンを見つめながら言いました。「神様に祈り求めたおかげで叶ったのです！」長老の愛と祈りは、それほどまでに偉大だったのです。

1962年の四旬節、私はひどい頭痛に悩まされていました。その頃、病床にある義母に聖体拝領を授けるために、神父様が我が家を訪ねてこられました。私はすぐに、夏に聖クセニア・ペテルブルクスの墓を訪ねることを神父様に祝福していただきたいをお願いしたところ、神父様はこうお答えになりました。「私は、迷わず、義人シメオン・ヴェルホトゥルスキーのところへ行くことを祝福します。」しかし、私には生後6ヶ月の赤ちゃんがいました。どうやってこの子を預ければよいのでしょうか？ところが、長老の祈りはあまりにも力強く、その夜、赤ちゃんは母乳を飲もうとせず、自ら顔を背けてしまったのです。そこで夫と二人でバチューシュカのもとへ行き、どの日の切符を買えばよいか尋ねると、彼はこう答えました。「復活祭の3日目、5月2日だ。」私たちはすぐに切符を買いに行きましたが、窓口にはその日の切符はもうありませんでした。私たちはバチューシュカのもとに戻り、「バチューシュカ、切符がありません」と伝えました。すると彼は、「行って、切符を2枚だけ頼んでください」と言いました。私たちは窓口に戻り、2枚の切符を頼みました。窓口係は、「ほら、ヴェルホトゥリエ行きの切符が2枚返ってきたわ」と言って、それを私たちに渡してくれました。

出発前に、神父様は私たちに祝福を与え、二人とも頭に口づけをしてくださいました。そして、道中ですでに、私は病気の症状が和らいだのを感じました。そして、義人シメオンの聖遺物に手を触れたとき、完全に癒やされました。

私たちがヴェルホトゥリエへ向かう際、神父様はヴェルホトゥリエの司祭であるレオニード神父宛ての手紙を私たちに託されました。その経緯はこうでした。神父様は、修道女のアナスタシアとイリーナを伴って私たちの家を訪ねてこられたのです。私たちは皆、同じ食卓を囲んでいましたが、長老が修道女たちと何を話しているのか、夫と私は理解できませんでした。私たちにはそれが神によって隠されていたのです。しかも、彼らはロシア語で話していたのに。すると、イリーナ修道女が「神父様、全部書き留めていいですか？」と尋ねると、彼は「すべて、すべて書き留めなさい」と答えました。その言葉を聞いてから、私たちにはすべてが理解できるようになりました。神父様は、イリーナ修道女が口述し、私がレオニード神父宛ての手紙を書くことを祝福してくださいました。その手紙から、私はレオニード神父が惑わしの状態にあることを理解しました。ヴェルホトゥリエに到着すると、私たちはその手紙をレオニード神父にお届けしました。セバステイアン神父は彼に会ったことが一度もありませんでしたが、手紙の中でこう述べていました。「私は、ヨアン大主教があなたを叙階された時から、あなたを知っています」——と、それがいつ、どこで起こったかを具体的に指摘していました。レオニード神父は手紙を読み終えると、「まことに偉大な方です！一度も私を見たことがないのに、私についての真実をすべて語ってくださったのです」と言いました。

このレオニード神父は立派な司祭であり、19年間も刑務所に収監されていたが、今では墮落してしまっていた。しかし、私たちの神父は、遠く離れていながらも霊的な洞察力で彼の墮落を見抜き、彼に救いの手を差し伸べたのである。

バチューシュカが亡くなってから17年後、1983年に、1962年と同じくらい耐え難い頭痛が再び私を襲った。ある日の昼、私はバチューシュカに「バチューシュカ、助けてください！」と頼み、眠りについた。夢の中でバチューシュカの姿が見えました。彼は私に何かを話していましたが、内容は覚えていません。そして、私の頭に手を触れてくれました。目が覚めると、痛みが消えているのを感じました。

私の息子ミシャ（現在はイグメン・アリストルフ）は3歳の時、重病で、ベッドに横たわりながら「聖母マリア様、バチューシュカに、ここに来てくれるよう伝えてください。私はとても具合が悪いんです！」と懇願していました。

その時、バチューシュカは修道女イライダさんと車でどこかへ向かっていたのですが、突然こう言いました。「今、病気の人のところへ立ち寄ろう。彼が私を待っている。」バチューシュカが私たちのところへやって来て、「病気の人はどこにいる？」と言いました。ミシャが横たわっている部屋へ入り、彼に祝福を与え、大きな赤いリングを一つ渡して、去って行きました。すると、その子はすぐに起き上がり、まるで病気ではなかったかのような様子でした。このように、神父様は自分の霊的な子供たちの願いを聞き入れ、それを叶えてくださったのです。そして、私の息子アレクセイが9ヶ月になった時、彼は重度の消化不良にかかりました。薬は効きませんでした。医師たちは「この子は死ぬだろう」と言い、病院に入院させるよう強く勧めました。私たちは神父様のところへ行き、「アレクセイを病院に入れるべきでしょうか？」と尋ねました。「三日連続で聖体拝領を受けさせなさい」と神父様は言われました。私たちはその通りにしました。三回目の聖体拝領の後、子供はすぐに眠りにつき、目覚めた時にはすっかり元気になっていました。現在、アレクセイはモスクワ州で助祭を務めています。

修道士セバスティアン（フミロフ）

ある晩、私は教会に行きました。すると、礼拝の最中に突然ほてりを感じ、鼻がひどく痛み出しました。私は聖油の塗布まで耐えてから帰ろうと決めました——それほど体調が悪かったのです。聖油の塗布の場面になり、神父様が私に聖油を塗ってくださった際、まるで偶然のように私の鼻に触れたのですが——なんと痛かったことか！ 出口へ向かうと、体が軽くなったのを感じた。私は足を止めた。痛みが引いていき、神父様が私の病を見抜き、癒してくださったのだと悟った。

ある時、バチューシュカは私の16歳の長女リュバを自分の修道室に招きました。彼は彼女と話をしていたのですが、その最中に突然姿を変えました。若返り、髭もなく、まるで天使のように輝き、修道室全体さえも異様な光に包まれたのです。こうして主は、長老がまだ生きているうちに、その霊的な偉大さと清らかさを示されたのです。

こんな出来事がありました。私の名付け親はトラック運転手をしていましたが、ある時、水量の少ない小川を渡らなければなりませんでしたが、岸は急勾配で、トラックが突然斜面を転がり落ちそうになった。その瞬間、彼は「神父様、助けてください！」と叫ぶと、すぐに無事に道路へと戻ることができた。神父様が、遠く離れていながらも、助けを求めて叫ぶすべての人の声を聞き、助けてくださったことは驚くべきことだった。

オルガ・セルゲイヴナ・マルティノヴァ

私たちの家族はアストラハン州に住んでいました。父、母、そして7人の子供たちです。風車、3頭の牛、雄牛、馬を飼っており、父は立派な農場主でした。家族は信仰心が厚く、神を畏れる人々でした。1930年、父はコルホーズへの加入を強制されましたが、彼は拒否しました。そして、覚えているのですが、3人の女性と2人の男性が私たちの家に入ってきて、こう言いました。

「やあ、セルゲイ・ペトロヴィチ！ 『あなたは富農粛清の対象です！』」「まあ、そうなら——と父は言った——どうぞご自由に。」そして一晩中、家財の目録作成が行われ、小さな布切れ一枚、鍋一つに至るまですべてが記録された。二人の兄は逮捕され、私たちとは別々に刑期を過ごした。父は身体障害者だったため、逮捕の対象にはなりませんでしたが。私たちの家の前に荷馬車が引き寄せられ、母、父、5人の子供たち、そして私たちと一緒に、幼い姪のクラヴォチカも荷馬車に乗せられ、アストラハンを越えた、ステップの荒野へと連れ去られました。私たち以外にも、70世帯がそこに連れてこられました。私たちは板で小屋を建て、そこで1年半暮らした。1931年8月1日、草原に住んでいた私たち全員が貨物列車に詰め込まれ、家畜のように運ばれた。私た

ちには水もパンもなく、男性、女性、老人、子供たちがごちゃ混ぜになってその貨車に乗せられ、トイレもその中にありました。貨車はまるで酔っ払ったかのように左右に揺れ、道中ですでに人々が亡くなり始めました。

18日後、私たちはカラガンダ近郊、現在のマイクドック集落がある一帯に連れて行かれ、全員を地上に降ろされた。私たちは疲れ果てて、かろうじて息をしている状態だったが、赤ん坊のクラヴォチカは口を開けて、指で「飲み物が欲しい、食べ物が欲しい」と示していた。草原にはカザフ人のユルトが並んでいた。父はそこへ行き、「水をください」と頼んだ。「ブーツをよこせ、そうすればやる」と言われた。父はカザフ語が話せた（アストラハンにはカザフ人が住んでいた）ので、懇願したところ、バケツ一杯の水をくれた。私たちには家族がいたが、他の家族もこの水を求めてくるので、ここで好きなように分け合うしかなかった。夜遅く、私たちは再び貨車に積み込まれ、プリシャフチンスクへ連れて行かれた。そこには野原と背の高いカラガン（低木）が生い茂っていた。看守たちのためにはテントが設営されていたが、私たちには何もない。死んでも構わないという扱いだった。ある責任者が歩き回り、各家族ごとに区画を歩数で測っていた。「ここから4メートル、あそこから4メートル。住所は『再建通り』12番地。実家に手紙を書いてもいいぞ」。カラガン林を切り開く道具は何もなかった。私たちは割り当てられた4×4の区画に這い込み、小さな穴を掘り始めた。穴を掘り、どこかから棒を集めて、穴の上に小屋のように立て、カラガンニクの枝で覆い、底に草を敷いた——これが私たちの避難所だった。そして私たち9人は、そこで互いに重なり合って横たわっていた。一週間後、私たちのクラヴォチカが亡くなり、その後、大人たちも次々と亡くなっていった。

冬が近づくと、人々は「zemlyanushki（土の隠れ家）」を作り始めました——カラガンニクの根から板を切り出して。そして、その板で「zemlyanushki」を建てたのですが、窓もドアもありません。例えば、あなたの毛布がドアに、私の毛布が窓にかかっている、といった具合です。しかし、体を覆うものではありません。私たちの家族には、窓やドアを覆うものが何一つありませんでした。食べるものもありませんでした。持ち出すことができたわずかな穀物だけでした。でも、食べなければなりません。そこで父は土でストーブを作りました。父はその上に鍋を乗せ、草で何かを煮てくれました。私たちはストーブのそばに座っていました。ストーブからは煙が立ち上り、窓からは雪が舞い込んでくる中、私たちはただ座っていたのです。

1932年3月18日、父がチフスにかかってしまった。病院へ運ぶことはできなかった——警察が外に出してくれなかったからだ。私は女の子だったので、警察は私を殴らなかった（当時はみんな殴られていたが、私には手を出さなかった）。そこで母が言った。「お父さんを病院へ連れて行ってきて」。私は出かけて、馬車を見つけて父を病院へ連れて行った。ところが、その病院には窓もドアもなく、建物の中は雪が積もっていて、床には氷が張っていた。父は高熱を出していたので、氷の上に寝かされた。朝、私が行ってみると、父はもう息絶えていて、氷の上で硬直していた。

春になると、みんな仕事をさせられ、サマン（土壁）作りをさせられた。子供たちは、カザフの家畜にレンガを踏み荒らされないよう、レンガの番をさせられた。子供たちは、まだ小さいけれど、600グラムのパンをもらうために出かけていく。大人には800グラムだ。草原の向こう、墓地の方を見れば、暗闇の中、死者が運ばれていくのが見える。いや、運んでいるというより、板を見つけ、そこにロープを結びつけ、死体をその板の上に載せて、ロープを引いて地面を引きずっているのだ。他にどうすればいい？ 力などなかったのだから。ここはプリシャフチンスク、ティホノフカ、コンパネイスク——ここでは、足が足と重なるように、長さ20メートル、幅3.5メートルの共同墓があった。棺などなかった。何かぼろ布やタオルで覆うだけだ。列をなして、次々と埋めていく……墓が満杯になると、そのまま埋められてしまう。

私の家族で生き残ったのは、姉と母、そしてアストラハンで投獄されていた二人の兄だけでした。

セバスティアン神父とは46年に出会った。その頃、私はすでに結婚しており、46年2月に義父が亡くなった。ある老婦人が、義父の葬儀を執り行うために神父を連れてきてくれた。当時、

私は神父の名前を尋ねる気さえなかったが、神父の方から私に近づいてきて、私の名前を尋ねてきた。その日は断食の日だったため、彼は私に断食用のパイを焼いてほしいと頼みました。追悼会には肉料理ばかりが用意されていたからです。義父の葬儀が終わると、棺をそりに載せ、馬がそれを墓地へと運んでいきました。墓地までは遠く、霜も厳しく、風も吹いていました。私たちは皆、頭からつま先まで厚着をしていましたが、神父様はほとんど裸同然の状態で、粗末な修道服を着て、古びたスカーフで頭を覆い、素手で鉄の十字架を胸の前に掲げていました。そうして私たちは、パチパチと音を立てるような厳しい寒さの中、12キロメートルを歩いて進みました。

葬儀の後、私は結局、神父様に名前を尋ねることもなく、帰路では神父様にそりに乗せてもらった。私は尋ねた。「神父様、こんな極寒の中、どうして素手で鉄の十字架をお持ちになれるのですか？」すると神父様は答えた。「そんなこと、何でもないさ！ かつて、私にはこんな訓練があった。正教の信仰を放棄するよう強要された時、修道服一枚のまま一晩中、凍てつく寒さの中に立たされ、見張りが付けられたのだ。見張りは2時間ごとに交代したが、私は一か所に立ち続け、一度も動かなかった。しかし、聖母マリアが私の頭上に、まるで「小さな小屋」のようなものを下ろしてくださったおかげで、その中では暖かかったのです。そして朝、私は尋問に連れて行かれ、『キリストを否定しなかったのなら、刑務所へ行け』と言われました。そして7年間投獄されたのです。

これが私と神父様との最初の出会いでしたが、実のところ、私はこの出会いに何の意味も与えなかったため、出会いとは言えませんでした。神父様にパイを差し上げただけで、それきりでした。

それから1年後、修道女のエウドキヤが亡くなりました。私は追悼の食事の準備のために家に行くと、神父様も来られました。私のところへやって来て、こう言いました。「ここでもオリウシュカがパイを焼いている！ でも、このオリウシュカの『シャリキ』はまだ全然うまくいっていないな。」彼は私に400ルーブルを手渡し、「この修道女の追悼会をすべてこのお金で執り行いなさい」と言いました。これがバチューシュカとの二度目の出会いでしたが、やはり何も明らかにはなりませんでした。私たちが以前と同じくらい距離があったように、その距離は変わらずに残りました。

さらに数年が過ぎ、50歳になった。私はひどい頭痛に襲われ、何日も苦しんでいたが、ある夜、頭に触れて髪を引っ張ると、片側の髪が抜け落ちてしまい、頭は半分ほど完全に禿げてしまった。どんな薬も効かず、一本の髪も生えてこなかった。医師たちは、毛根ごと抜け落ちてしまったため治療を断った。知人たちは私にこう勧めてきた。「ミハイロフカのセバスティアン神父のところへ行ってみなさい。彼なら治してくれるよ。」しかし、私はまたしてもそれを無視してしまった——「神父に治療してもらおう」なんて、どういうことだろう？ でも、さらに多くの人から勧められ、他の人たちも「神父のところへ行け」と口々に言うようになった。そこで私はようやく決心して、そこへ向かった。教会の扉を開けて神父様（彼は説教壇に立っていた）を見たとき、私はかろうじて彼だと気づいた。ただ、46年の頃はまだ少し黒髪だったのに、今ではすっかり白髪になっていた。礼拝の後、私は彼のところへ近づくと、彼は言った。「ここに泊まって行きなさい。コルニリア修道女のところへ行きなさい。」私が彼女のところへ案内されていると、神父様もそこへやって来て、私たちは一晩中語り合った。神父様は私に、どこから来たのか、どこで生まれたのか、どうやって農地を没収されたのか、どんな苦しみを味わったのか、今は誰と一緒に暮らしているのか、子供は何人いるのか、母がいること、そして母が信仰者であることを尋ねてきた。「あなたは？」——「私はあちこちを転々としていました。」

「神父様」と私は言った。「夢の中で、二十回の祈祷を捧げなければならないと見たんです。お金を払うから、一度に全部捧げてくれれば、もうお邪魔はしません。」「いや」と神父は答えた。「20回の祈りを捧げてやるが、君は20週連続して教会に来なければならない。私が直接、アカフィストを唱えてやる。」そうして神父様は私を聖具室に連れて行き、そこで私たちはひざまずき、神父様は毎週日曜日、私にアカフィストを唱えてくださいました。そうして私は神父様に慣れ、教会や聖歌隊、そしてここでの慣習にも慣れていきました。私は信仰を持つようにな

り、懺悔をし、聖体拝領をするようになりました。夫も引き連れて、私と一緒に教会へ通うようになりました。そして、子供たちも成長しました。私たちは子供たちを連れて行き、神父様は子供たちの名前を一人ひとり覚えておられました。やがて私の体調は良くなり、長老の祈りのおかげで髪も生え始めました。私の病氣を通じて、私たちの中に信仰が蘇り、神父様との絆も深まりました。

しばらくして、6歳の甥が病氣になりました。自転車から落ちて、足を引きずり始めたのです。両親はそれを気にも留めませんでした。そこで、私が自分で彼を医者へ診せに行くことにしました。外科医が診察して、「股関節が腐っている」と言いました。手術を行いました、失敗に終わりました。二度目に再び開腹し、骨を削り取りましたが、またしても失敗でした。そこで私は教会へ行き、すると突然、神父様が自ら私に尋ねてきました。「オルガ、誰か病氣の人はいるか?」「はい、甥です」と私が答えると、「彼をミハイロフスカヤ病院に移しなさい。あそこには知り合いの外科医がいるでしょう」と言われました。私は手配をして、甥をその病院に移しました。医師たちは一目見て、その子がかろうじて息をしている状態だと判断し、すぐに再び手術台に上げ、緊急手術を行いました。これで3度目の手術でした。日曜日が近づき、私は教会へ行った。神父が尋ねた。「その少年を連れてきたのか?なぜ最後までやり遂げないんだ?なぜ彼を私のところへ連れてこないんだ?モスクワやサンクトペテルブルクから人々が私のところへやってくるのに、君はすぐそばにいるくせに、彼を私のところへ連れてこない。さあ、今すぐ病院へ行って、彼を抱きかかえて私のところへ連れて来なさい。」

私は病院へ向かい、そこにはその男の子の母親がいました。私たちはミシャを抱き上げ、交代で教会まで運びました。それは晩課の前でした。教会に運び込み、神父様のところへ近づけると、神父様は「ミーシェンカ、ミーシェンカ!」と呼びかけました。しかし、彼はただ目を動かただけで、棒のようにぐったりと横たわっていた。体はすっかり乾ききって、生気がなかった。神父様は「懺悔室にある聖三位一体のイコンの前に連れて行きなさい」とおっしゃった。私は彼をその前に連れて行った。神父様は椅子を置くよう命じ、「ミシェンカを椅子に座らせなさい!」とおっしゃった。私は恐怖に襲われた!あの子の手足は棒のように細く、立ち上がったら、もう半死半生だ!すると神父様は母親を呼び、「二人で両側から支えて立たせてごらん。もっと勇気を出して、もっと!」と言われました。彼を立たせると、足が椅子に触れ、私たちが両側から支えて、背筋を伸ばして立たせました。それから神父様はさらに修道女たちを呼び、「神に祈りなさい!」と言い、ご自身も祈り始めました。私たちがミシャを支えていると、私は見守っていました。彼はどんどん固くなり、背筋が伸び、伸びて、ついにまっすぐになり、自分の足で立ち上がったのです!神父様は「椅子から降ろして、連れて行きなさい。彼は自分の足で歩ける」と言われました。そしてミシャは自分の足で歩き出したのです。皆、驚愕しました!神父様は彼に聖油を塗って、母親に「あなたは彼と一緒にここで一晚過ごしてください。明日、彼に聖体拝領をさせてあげましょう。そうすれば、彼は足を引きずることさえなくなるでしょう」と言われました。しかし、母親は残らず、喜びのあまりミシャを連れて家に帰ってしまいました。さらに神父様は、神への感謝の印として小麦粉の袋を持ってくるよう頼んでいましたが、彼女は小さな袋一つしか持ってきませんでした。そして、私たちのミシャは成長し、とても可愛らしい子になりましたが、片足を引きずっていました——母親が神父様の言うことを聞かず、彼を聖体拝領させるために残さなかったからです。

1954年のイースター、私は虫垂炎の発作を起こしましたが、手術の祝福を受けることを考えもせず、自分の意思で病院へ向かいました。礼拝中、神父様は私がいなことに気づき、ある知人にこう言いました。「ほら、プロスフォラだ。急いで病院へ行き、手術の前にオルガを連れてきてくれ。プロスフォラを食べさせてやってくれ。そうしないと、彼女の手術は重く、苦痛を伴うものになるだろう。」彼女が到着した時には、私はすでに手術室へ呼ばれていました。私はプロスフォラを食べて手術を受けました——その手術は4時間半も続きました。

しばらくして、私は妊娠した。医師たちは、出産はできず、中絶しなければならぬと言った。私は神父様に「どうすればいいですか?」と尋ね、こうお願いした。「中絶をさせてくだ

さい、お願いします！」すると神父様は、「お前は自ら地獄へ飛び込もうとして、私までそこに引きずり込もうとしている！『お願いします』なんて言うな。」そして、祭壇から美しい花束を私に手渡して言いました。「枯れた花は捨てて、生きている花だけを残し、毎日一輪ずつお茶に入れて飲んでいなさい。そうすれば、今回の出産が前回よりも辛くならないように。」『受胎告知』のアイコンを渡し、こう言いました。「あなたには息子が生まれる。美しく、賢く、皆に愛される子だ。彼を台無しにしないで。老後、彼はあなたの支えになるだろう。そして、彼の名前をセラフィムと名付けなさい。なぜなら、聖セラフィムを称える者は誰もいないし、今、誰もそんな名前をつけていないからだ。」そして実際、受胎告知の日は無事に息子を出産し、彼は今、医師になっている。

1957年、私は妊娠し、神父のもとへ懺悔と聖体拝領をしに行きました。神父は「お土産をあげよう」と言いました。当時、神父のもとにはたくさんのリングが届けられていました。神父は長い間選んでいましたが、ついに私にリングを差し出しました。片面は赤く、もう片面は緑色で、こう言いました。「これを全部自分で食べなさい。誰にもあげないで。そうすれば、女の子が生まれて、しばらくは私のところに來られないだろう。出産後に合併症が起こるから。」私にはマシャという女の子が生まれました。15年間は健康でしたが、15歳から病気になり、30歳で亡くなりました。そして、そのリングは半分が赤く、半分が緑色でした。

ある日、私が礼拝に行くと、神父様がこう言われました。「祭壇から君を祝福してから、家に帰れ。」すると、礼拝の最中に神父様が近づいてきて、「さあ、家に帰れ。ただ、家に入ったらすぐに『牛を買いたい』と言いなさい。」すると私はこう返しました。「神父様、もう一日が終わってしまいましたよ。今さら絶対に牛なんて買えません！」——「買えるさ！ただ家に入ったら、すぐに『牛を買いたい』と言うんだ。そして買えばいい。そこには赤い牛、斑模様の牛、そして毛のない牛がいるだろう。赤い牛を選べ——それが君の牛だ。そして二日後、新鮮な生クリームを私に持ってきてくれ。」

私はそこへ向かいながら、「一体どんな寓話なんだろう？」と考えていた。家に帰ると、兄夫婦が客として来ていた。私は言った。「こんにちわ！私、牛を買いたいんです！」すると兄が答えた。「何が問題なんだ？ポケットにお金があれば、庭に牛がいるさ。行こう、知り合いが牛を3頭売っているんだ。」行ってみると、神父さんが説明した通りの3頭の牛が立っていた。私は赤い牛を選び、2日後に神父様へ新鮮な牛乳を届けました。自分では行けなかったのも、近所の女性に頼みました。彼女は「他人の施しを持って神父様のところへ行くなんて、どうでしょう？」と断りましたが、結局届けてくれました。彼女が部屋に入ると、神父様は「オルガの生クリームをくれ！」とおっしゃいました。

時が経ち、私の子供たちも成長した。娘のリディアが大学に入学する時期がやってきた。私たちはバチューシュカのもとを訪ね、「バチューシュカ、リディアの大学入学を祝福してください」と頼んだ。すると神父様は、「リドチカ、どこへ行くつもりだ？」と尋ねられました。「カザフ国立大学（カズグ）の法学部へ。」「おや」と神父様は言われました。「アルマティのリングが食べたくなったのかい。でも、私が祝福するのは、カラガンダのジャガイモを食べることだ。あれは体に良い。人を裁きたいのか？私まで裁くつもりか？いや、いや。今年は家にいて、お母さんから裁縫を習いなさい。それは君にとって役に立つよ。そして来年、医学部に入学しなさい。そこに新しい学部が開設されるから、その学部に進めばいい。」しかし、娘はその年に医学部を受験しようと決心し、不合格になってしまった。その年は裁縫を習い、翌年には問題なく合格した。

その後、サーシャが大学を受験する時期がやってきました。私はサーシャに「どこの大学に行くつもり？」と尋ねました。彼は「リディアがあのようないいお告げをもらったのだから、僕は自分で決めないよ。神父様がどこに行けとおっしゃるなら、そこに行くよ」と言いました。もう一人の息子アナトリーは中学2年生を終え、専門学校への進学について神父様の祝福を受けようと考えました。私たちは神父様のところへ行き、「神父様、サーシャは大学に入学しなければなりません」と伝えました。神父様は「さあ、サーシャ、どの大学に行きたい？」と尋ねました

。「神父様、おっしゃる通りに、そこへ行きます」とサーシャは答えました。「ポリテクニク大学の建設学部へ行きなさい。そうすれば、私たちに必要なエンジニアになれるでしょう。神があなたを祝福してくださる。」（現在、この息子は市の主任現場監督を務めている。彼の協力のもと、カラガンダに聖母マリアの降誕を祝う新しい教会が建設されている。）そして、トーリカにも尋ねた。「君はどこに行きたいんだ？」「僕は専門学校です。」「専門学校？ お母さんは一生懸命教えてくれたのに、君は中学2年生で卒業して専門学校に行くのか？ 君には祝福なんてないよ。高校を卒業してから来なさい。」

さて、私のアナトリーはどうしたか？「ママ、」と彼は言う。「『神父様の祝福』って、一体どういう意味なの？」実は、私たちの親戚のおじさんが、その専門学校の入試委員会で働いていたのだ。「行こうよ、」と彼は言う。「おじさんに頼めば助けてくれるよ。そうすれば入学できて、勉強できるから。」私は承諾した。「行きたいなら、行こう。」アナトリーに試験用紙を渡すと、彼は試験を受けに行ったが——2点だった。「ママ、お願い、叔父さんのところに行って、別の試験用紙をもらってくれない？」と頼まれた。私は行った。「まあ、この子、ちょっと楽しませてあげよう」と私は思った。彼は再び受験したが、またも2点だった。3回目には叔父も彼のために奔走してくれたが、それでもまた2点だった。そう、祝福がなくても、親戚の助けも役に立たなかったのだ。こうして、私のアナトリーは職業技術学校に入学した。

1962年、彼は学校と共にメーデーのデモ行進に参加しなかった。その年の5月1日は、イースター週間と重なっていた。そして、彼は朝にデモ行進に出かけ、もう夕方になってもアナトリーは家に帰ってこなかった。「まあいいか——たぶん私の兄のところに行ったんだろう」と私は思った。翌朝、教会へ行くと、神父様が私を呼び止めてこう言いました。「家に帰りなさい、家にいるべきだ。ほら、卵をあげる」——そして、割れてしわくちゃになった卵を私に手渡しました。「どういうことだろう？」と私は思い、なんだか気分が晴れませんでした。家に帰って、「アナトリーはいた？」と尋ねました。「いいえ、来ていませんでした。」夕方、また教会へ行ったら、神父様が再び私のところにやって来て、「家に帰りなさい、今すぐ家に帰りなさい」と言いました。そしてまた、傷ついてしわくちゃになった卵をくれました。母のアナスタシアも、同じく傷ついた卵を私に渡し、「さあ、早く家に帰りなさい」と言って、私を追い返しました。私は帰った。角を曲がった途端、娘のリディアが走ってやって来て、「お母さん、大変なことになったの！ トーリカが切りつけられて、病院で意識不明のままだわ」と言った。どうやらデモの最中に、不良たちに腹部を切り裂かれたらしい。彼は手術を受けた。アナトリーは九日間意識不明のままでしたが、セバスティアン神父とアナスタシア修道女が彼のために祈りを捧げ、救い出しました。彼は死の淵にあり、絶望的な状態でした。しかし、長老たちには誰も何も言いませんでした。彼らは、その人に何が起きたのか、自分たちで知っていたのです。アナトリーは八ヶ月間病院に入院し、回復して、今も生きています。

マリア・フェドロヴナ、オルガ・フェドロヴナ・オルロヴァ

マリア・フェドロヴナ

私の両親は深く信仰心に満ちた人々でした。1931年に私たちの家族がクーラークとして財産を没収されたとき、父はこう言いました。「神が与えたこと。私たちはこの杯を飲み干さなければならない。」父は逮捕され、別々に収容され、私たちが再び一緒にできるまで長い年月が過ぎました。一方、母と私たち4人の子供たちは、コンパネイスクの何もない荒野に連れて行かれた。そこには水もパンもなかった。私たちは地面に穴を掘り、その中で暮らした。ペトル、私、オルガ、アレクサンドラ。母は妊娠中だったが、流産してしまった。母はひどく苦しんでいました。私たちの穴は血まみれで、服には血がこびりついていました。洗う場所もなく、周囲は草原ばかりでした。「娘よ」と母は頼みました。「小石を見つけて、その上にこの服を置いて、水を少しかけて、足で踏みつけてくれ」。私はまだ小さくて、洗濯の仕方も知りませんでした。

その後、土の家を建て始め、粘土を掘り出し、水を注ぎ、足でこねてレンガを作った。バラックができたが、窓もドアもなかった。バラックの中には寝台があり、人々は手近なもの何でも被って寝ていた。朝になると、死体を運び出していた。そこでは死者を悼んで泣くことはなかった。そんな余裕などなかったのだ。ただ、私たちの母だけは祈りを捧げ、アカフィストを唱えていた。私たちは母のそばに座って、「お母さん、ご飯！」 ママ、ご飯！」——「ちょっと待って、アカフィストを読み終わるから」——「ママ！」——「ほら、あと1ページ残ってるわ——」と、母は時間を引き延ばし、「今読み終わったら、神様が私たちを助けてくれるわ」と言いました。読み終わると、母はパンを1切れ取り、そこから少しずつ切り分けました。すると私たちは指をさして、「これは誰の？」と尋ねると、「これはペーテのよ。」「じゃあ、これは誰の？」「これはマリアの。これはオレの。これはシュレーの」——そんな感じだった。私たちは小さな欠片を一つひとつ集め、母は自分の配給分から何とか私たちに分け与えようとしてくれた。一体どうやって生き延びたのか、本当に?! 信じられない、あそこで生き延びるなんて不可能だったはずなのに! 私はひどい風邪をひいていて、リウマチで寝込んでいた。足は潰瘍だらけで、膿んでいた。母は座って泣いていた。ハエが群れをなして飛び回り、母はガーゼで私の足を覆ってくれた。

そして、なんと神様が私たちを助けてくださったのです! 私たちは皆、無事に成長し、全員が高等教育を受けました。ペトルはアカデミーを卒業し、オルガとアレクサンドラは医師になり、私は教育者になりました。母の祈りによって神様が私たちを守ってくださったのです。私たちが生き延びられたのは、まさに奇跡です。

オルガ・フェドロヴナ（バチューシュカの主治医）

1949年、私と妹のアレクサンドラはアルマ・アタ医科大学を卒業しようとしていた。恒久的な勤務先への配属が決まる時期がやってきた。両親と相談した結果、私たちはコクチェタフへの配属を選ぶことにした。そこには兄のペトルが家族と暮らしており、私たちは皆、兄のところに引っ越して暮らすことに決めたのだ。しかし、予期せず父から電報が届いた。その電報には、カラガンダへの配属先のみを選ぶようにと書かれており、その理由については手紙で伝えるとあった。まもなく、その手紙が届いた。父は、信仰を持つ知人の助言に従い、ミハイロフスカヤ教会のセバステイアン神父のもとへ赴き、出発の祝福を受けたと書いていた。神父は父に私たちの転居の目的について詳しく尋ね、注意深く話を聞いた後、こう言いました。「いいえ、フェドール・イヴァノヴィチ、私はあなたの出発を祝福しません。息子は息子、嫁は嫁、そして娘は娘です。今日、息子はそこに住んでいても、明日には別の場所へ引っ越してしまうかもしれません。」（そして実際、兄は家族と共にまもなくコクチェタフを去りました。）「娘たちには、カラガンダでの就職先だけを探させなさい。」父は神父様に、すでにすべてを売り払ってしまったので、これからどうすればよいのかと尋ねました。それに対し、神父様はこう答えられました。「恐れることはありません、フェドール・イヴァノヴィチ。神様が助けてくださいます。すべてうまくいくでしょう。」

姉と私は、神父様の言われた通りにした。カラガンダに到着すると、私たちはすぐにミハイロフスカヤ教会へと急いだ。神父様は明るい笑顔で私たちを迎えてくださった。私たちが中に入ると、神父様は窓辺に立っておられました。明るい祭服を身にまとい、太陽の光に照らされた神父様は、まるでご自身も光を放っているかのようでした。祝福を受けた私たちは、何の困難もなく州立病院に就職することができました。

カラガンダに落ち着くと、私は仕事が終わった後の夕方にミハイロフスカヤ教会に通うようになりました。セバステイアン神父は毎日、朝と夕方に礼拝を執り行っていました。私は、神父様の礼拝の仕方や、教会聖歌隊の歌声がとても好きでした。私は神父様を注意深く観察するようになりました。礼拝に対する神を畏れ、敬虔で、心を打つような態度や、あらゆる面で助けようと努める信徒たちへの並外れた忍耐力に、いつも感銘を受けていました。

神父様は非常に謙虚で、穏やかで、慈悲深い方でした。一度でもお会いした人なら、誰しもが心から彼を愛さずにはいられなかったでしょう。医師として、私は彼が非常に疲れており、体調を崩していることに気づきました。礼拝中、彼は頻繁に咳をし、呼吸も苦しそうでした。神父様との会話の中で、私は彼の健康状態について詳しく尋ね、医師としての私の力を貸したいと申し出ました。それ以来、私は常に彼の様子を見守るようになりました。私が教会に通い始めた頃、霊的な生活や長老の役割、そしてキリスト教の本質について、全く理解していませんでした。セバスティアン神父の霊的な洞察力に初めて直面したとき、私はそれを、自分の考えと神父の考えが偶然一致しただけだと受け止めた。しかし、次のようなことが起きた。ある日の晩課の最中、私は立ちながらこう考えていた。「ここ、本当に心地いい！ 家に帰りたくないな。ここに泊まって、教会のそばに住んでいるアンフィサ・イヴァノヴナのところで一晩過ごせたらいいのに」と。礼拝が終わり、私は帰りの支度を始めた。すると突然、神父様が私のところに近づいてきて、こう言われました。「オルガ・フェドロヴナ、あなたはここに留まって、教会のアンフィサ・イヴァノヴナのところで一晩過ごしてください。」私は喜び、「神父様！ ちょうど今、それを夢見ていたところです！ なんて不思議でしょう、私たちの考えがこんなに一致するなんて？」と叫びました。神父様は微笑みましたが、何も答えず、自分の修道室へと戻って行きました。その直後、神父様は私に告解と聖体拝領の祝福を与えてくださいました。朝、教会に行くと、懺悔を望む人が大勢いるのが見えた。私はがっかりし、もうすぐ仕事に行かなければならないので、どうやら懺悔はできないだろうと思った。すると突然、懺悔室の扉が開き、敷居のところに神父様が現れた。神父は私に手を差し伸べて、「さあ、オルガ・フェドロヴナ、懺悔に行きましょう」とおっしゃいました。どう懺悔すればいいのか、何を話せばいいのか、私にはわかりませんでした。頭の中は混乱の極みで、様々な思いが渦巻いていました。すると突然、神父がこう言われました。「ほら、オルガ・フェドロヴナ、私の頭の中にも様々な思いが渦巻いているのですよ。」そして神父様は、私を蝕み、とりわけ心を悩ませていた私のあらゆる思いを一通り挙げ始めました。私は言いました。「神父様、私にも同じような思いがあります。それって罪なののでしょうか？」すると神父様は答えました。「ええ、それは罪ですから、避けるべきですし、自分の中から追い払わなければなりません。」

別の時、私が教会で祈りを捧げていたところ、副助祭が近づいてきて言いました。「オルガ・フェドロヴナ、神父様が呼んでおられます。」私は、いつものように神父様が体調を崩されたのかと思い、急いで追悼礼拝堂へ向かいました。しかし、神父様は至聖三位一体のイコンの前にある小さな椅子に座り、膝の上に何かを載せていた。周囲には大勢の人がいたが、私はなんとか人混みを掻き分けて近づくと、神父様の膝の上には小皿が置かれており、その中にはワインを注がれた祝福されたパンが載っていた。そのようなパンを見るのは初めてだった。「なるほど、そういうことか」と私は思った。「神父さんたちはワインを注がれたパンを食べているのに、私たちには普通のパンしかくれないんだ！」その考えが、稲妻のように一瞬で私の頭をよぎった。しかし、神父は私の方を向き、隣に立っていた人々を脇へどかして、こう言った。「オルガ・フェドロヴナ、この祝福されたパンを一つ取って、召し上がってください」——そう言って、彼は私にワインを注がれたパンの一片を差し出した。神父様はそれ以降、誰にもパンを与えなかった。私の考えのすべてが神父様の前にさらけ出されていることに、私は再び驚かされた。私は恥ずかしく、そして恐ろしかった。

バチューシュカの聖なる洞察力を物語る他の例も、同様に驚くべきものです。

聖三位一体の祝日だった。礼拝は非常に厳粛に行われ、神父様は喜びに満ち、活気にあふれ、安らぎに満ちていた。聖歌隊の歌声はとりわけ素晴らしかった。聖体拝領の詩の後に『スヴェティレン』が歌われ始めた時、私は「光と光、光の与え主」と歌われている箇所言葉の組み合わせが分からなかった。「光は光より、光の与え主」なのか、「光と光、光の与え主」なのか、どちらが正しいのか分からなかった。それが気になり、正確に知りたかったが、尋ねるのにふ

さわしいタイミングがなかった。そして、祝日の直後、ある晩、私は礼拝に訪れた。神父様は礼拝を執り行っておらず、自分の部屋で礼拝の声を聞いていました。私は神父様のところへ行き、祝福をお願いしました。私が神父様に両手を差し出すと、神父様は私の手にご自身の掌を置き、微笑まれましたが、祝福はせず、こう言われました。「オルガ・フェドロヴナ、『光と光、光の与え主!』」私は驚いて、「神父様、ちょうどその部分がよくわからなかったんです!」と言いました。すると神父様は再び微笑んで、私に祝福を与えてくださいました。そしてまたしても、その先見の明に私は感銘を受けました。

32歳の時、私は女性特有の重い病気にかかりました。がんだと思い、とても不安でした。さらに、病気のため聖体拝領ができず、イコンに口づけができず、終油の秘跡を受けられず、プロスフォラや祝福されたパンを食べられず、ろうそくを灯すこともできないことに、心を痛めていました。

ある時、礼拝の最中に私はとりわけ悲しみに打ちひしがれ、心の中で主に向かってこう祈りました。「主よ、私はまるでハンセン病患者のように、長い間聖なるものに触れることができません。きっと、私はがんなのでしょう。なんて悲しみでしょう!」——そう言って、私は泣き出しました。その瞬間、追悼礼拝の部屋から副助祭が出てきて、素早く私のところへ近づき、こう言いました。「オルガ・フェドロヴナ、神父様が呼んでおられます。」私は自分の病気のことは忘れて、神父様が具合が悪いのかと思い、急いで神父様のところへ駆けつけました。部屋に入ると、神父様は椅子に腰かけて明るく、微笑みながら私にこう言われました。「オルガ・フェドロヴナ、これはすべて過ぎ去るものです。若い人にも時々そういうことはあるものです。イコンに口づけしてはいけませんし、プロスフォラを食べたり聖水を飲んだりすることもできませんが、祝福されたパンなら大丈夫です。ろうそくを捧げることはできますが、イコンのそばに置くことはできません」——そう言って、彼は私に祝福されたパンの半分を渡し、祝福をしてくれました。

私は、勇気づけられ、喜びに満ち、回復への希望を抱いて彼の元を後にした。そして、その数日後、私は本当に完全に回復した。

母が重病だった時、神父様は母に聖体拝領を授けるために私たちの家を訪ねてきてくださいました。ある時、聖体拝領の後、私たちが十字架の前に進み出た際、神父様は私の姉のエカテリーナにこう言われました。「カテーニカ、結婚してはいけないよ。」「どうして?」と姉が尋ねました。「カテンカ、結婚してはいけない。そうすれば、とても、とても悲しく泣くことになるから」と神父様は言われました。神父様は彼女の婚約者を見たこともなく、エカテリーナも自分の結婚の意向について何も話していなかったにもかかわらずです。私たちのもとを去る際、神父様は私に、「二人は一緒に暮らせず、別れてしまうだろう」とおっしゃいました。しかし、カティアは聞き入れず、結婚式の直後に神父の予言は的中してしまった。

私は、神父様が名前の日に特別な注目を浴びたり、贈り物をされたりすることを好まないことを知っていた。私は以前から、神父様に祭服用の布地を贈りたいと思っていたが、そのことを口にすることさえ怖かった。そしてある日、仕事から帰る途中、私は教会に立ち寄った。神父様の独居室の前を通りかかったとき、窓を覗き込むと、神父様が窓辺に立っていて、指で私を招いているのが見えました。私は独居室に入ると、神父様がドアを開けてこう言われました。「オルガ・フェドロヴナ、お会いできて本当に嬉しいです。どうぞお入りください。『こんな素材の祭服がどうしても必要なのです』——そう言って、神父は青みがかった白色の袖口を見せてくれました。『袖口は持っていますが、祭服そのものではありません。このような祭服があれば、聖母マリアや主の祝日に重宝するでしょう』」私は、神父様がようやく私の長年の秘めた願いに応えてくださったのだと悟り、「神父様、それでは、この生地を買うことをお許しください」と言いました。

長年にわたり神父様のそばにいて、私たちは何度も、その老神父の祝福の力を目の当たりにしてきました。神父様の祝福の力を裏付ける一例として、次のような出来事が挙げられます。

1960年代初頭、家畜の処分に関する通達が出されました。私たちは牛を飼っていましたが、やむを得ずそれを売らなければならなくなりました。ある土曜日、父は教会へ出かけました。礼拝の後、父はバチューシュカのもとへ行き、もう牛を飼うことは不可能であり、明日、日曜日にはそれを売らなければならないと説明しました。神父はこう答えました。「よろしい、フェドール・イヴァノヴィチ、祝福しましょう。明日は聖体礼儀に来てください。そして『主の祈り』が終わったら、牛を売りに行きましょう。」父は言いました。「神父様、そんなことできるはずがありません。もうかなり遅くなってしまいますし、スタロイ・ゴロドまでは遠く、市場にはもう誰もいないでしょう。」神父はこう答えました。「大丈夫ですよ、フェドール・イヴァノヴィチ。神様が助けてくださいますから、売れますよ。」そして、その通りになりました。父はミハイロフスカヤ教会から、ノヴィイ・ゴロドの馬小屋へ行き、それから家に帰って牛を連れて、ようやく旧市街の市場へ向かいました。市場までは10キロほどありました。父は牛を荷車に繋いで走った。道中、すでにバザールから帰り道の人々に遭遇したが、彼らは父を嘲笑し、「無駄な旅だ、バザールにはもう誰もいない」と言った。しかし父はそれでもバザールまで行くことに決め、現地で様子を見ることにした。バザールに近づくと、確かに人はほとんどおらず、いた人たちは、家路につこうとしていた。その時、一人の男が父のところにやって来て言った。「お父さん、牛を売りに来たのかい？」父は答えた。「ええ、売れたらいいのですが。」買い手は自分の提示価格を告げた。「駆け引きは抜きにしましょう。もし同意なら、その場で決まりです。」少し値引き交渉をした後、二人は価格で合意に達し、こうして皆の驚きをよそに、父は無事に、しかも希望通りの価格で牛を売ることができた。

私の守護聖人の日に、父が私に謙虚さを教えてくれたのです。

7月中旬のある日、私はバチューシュカの独房を訪ねました。その時、彼は侍女のマリア・オブラツォワと一緒に敷物を眺めていました。「ああ、オルガ・フェドロヴナ、どうぞ、どうぞ、お入りください！」と彼は言いました。「バチューシュカ、今何をしているのですか？」と私は尋ねました。「ああ、この敷物を眺めているところだ。だが、これには十字架が描かれているから、足元に敷くことはできないんだ。」「マリア」と、神父様は修道女に声をかけました。「この敷物を、オルガ・フェドロヴナの聖名祝日にプレゼントするのはどうだろう？」彼女は「はい、神父様、いいですよ」と答えました。「あなた、——神父様は続けた——あと数日で名前の日ですよ？ その時、私を招待してくれますか？」私の心臓は凍りついた。私は神父様を愛しているのと同じくらい恐れており、神父様が自ら訪ねてこられる時以外は、決して自宅に招待したことがなかったのだ。そしてもちろん、私はこう答えた。「もちろんです、神父様、ぜひお越しください。」

名前の日の3日ほど前、神父様は私を呼び出し、教えを授けてくださり、アカフィストと大きなプロスフォラを贈ってくださいました。こうして、これらすべての贈り物に加え、名前の日に来てくださるという神父様の約束まで受け、私は少し有頂天になっていた。

使徒同等のオルガの記念日がやってきました。家の中はすっかり大騒ぎになりました。皆で洗い、掃除をし、乳製品や果物を使った様々な料理をたくさん用意しました。そして私は教会で聖体拝領をしていました。聖体礼儀の後、皆が祝福を受けに近づきます。私も近づきました。ところが、神父様はまるで私が見えないかのように顔を背け、他の人たちに祝福を与え続けていました。私は立ち尽くし、祝福を待っていました。すると、神父様はようやく私を見つけたかのように、「ああ、誘惑か——」と言い、「あなたですか、オルガ・フェドロヴナ？」と尋ねました。そして、半身で私を祝福してくれました。（普段は大きな十字架の印で祝福してくださるのに。）私の心の中で何かがぎしぎしと鳴った。「どうしたんだろう？」と思った。気分はたちまち曇り、お祝いの日らしい雰囲気ではなくなってしまう。「神父様」と私は言った。「皆が待っています。私たちのもとへ行きましょう。」すると神父様は、「ヴェラ、準備をしてくれ。私はこれから食事をとって、自分の修道室で休むつもりだ。」私は、神父様が食事を済ませ、休ん

で目を覚まし、教会の独房に来るまで待っていた。まるで電気椅子に座っているかのように、私は座って彼を待っていた。独房で彼は誰かと長い間話し込み、それからペトルを呼び出した。「ペトル、車を準備してくれ。今すぐ行くぞ。」「神父様」と私が尋ねると、「おや、そんなことを聞くな——あなたたちのところへ？ いや、いや、いや、私たちはメルコムピナートのオルガ・ステパノヴナのところへ行くんだ。」「あ！ 神父様、私たちを待っているんですよ！」と私が言うと、神父様は聞こえないかのように無視した。私たちはメルコムピナートへ向かった。そこで追悼の礼拝と祈祷を行い、食事を済ませた後、さらにジュコフ家にも立ち寄った。すると神父が「ペトロ、行こう！」と言う。さて、もう遅くなったけれど、それでも家には着くだろうと思った。私たちの家に着き、門の前で車を停めると、神父様が言いました。「オルガ・フェドロヴナ、降りてください。」——「神父様、」と私は言いました。「そんなことでできませんよ！ 家でみんなにどう迎えられればいいんですか？！ 私は何て答えればいいんですか？！ なぜ中に入らないんですか？！」と。神父様は何も言わずに去ってしまいました。それなのに、よく私にこうおっしゃっていたものです。「オルガ・フェドロヴナ、謙虚さ——何よりもまず、将来のために。」そうやって彼は私を謙虚にさせてくれたのです。そして次の再会では、「オルガ・フェドロヴナ、私が行かなかったことをお許しください。なんだか……なぜだったかさえ覚えていないのですが……急いでいたのか……体調が悪かったのか……もう覚えていません。」——「ああ、」と私は言いました。「神父様、家でひどく叱られましたよ！」そんな感じでした。

私がミハイロフスカヤ診療所で地区担当医として働いていた頃、私の職務には、救急要請への対応や担当地区の患者への訪問が含まれていた。私は様々な出来事——まともなものも、まともでないものも——を目撃することになった。ある日、ありとあらゆることを目にして疲れた私は、翌日の聖体拝領に備えるつもりで教会へ行った。祈りを捧げ、家に帰ろうとしたその時、突然神父様の独房の扉が開き、神父様が出てきてこう言われました。「オルガ・フェドロヴナ、懺悔に来てください。」私は凍りつきました。なぜ神父様は今日、私に懺悔をさせることにされたのでしょうか？ 私は司祭の部屋に入り、司祭は私に祝福を与えてから、すぐにこう話し始めました。「オルガ・フェドロヴナ、あなたは担当区域を回り、病人を治療していますね。それはもちろん、立派なことです。しかし、あなたは様々な人生の場面を目撃しています——品のあるものも、品のないものも、魂に有益なものも、そうでないものも。不適切なものは心に取り込まないでください。」ああ！ 私の耳が火がついたように熱くなりました。だって、ついさっきまであれこれと見て回っていたばかりでしたから。「神父様、——と私は言いました——お許しください！」神父様は私の懺悔を聞いてくださり、私は部屋を出ました。その晩、神父様はそれ以上誰の懺悔も聞かず、私のために残ってくださったのです。私が、そして神父様ご自身も、魂にとって有害なことを明日まで忘れないようにと。

神父様はよく私に金を渡して、それを病人や貧しい人たちに配るように言われました。私が「神父様、一体どうやってそれをすればいいのでしょうか？」と尋ねると、「気兼ねする必要はありませんよ、オルガ・フェドロヴナ。例えば、病院で当直をしている時、患者さんのところへ行き、カルテを見て、話をしてみてください。もしその人がよそ者だったり貧しかったりすることがわかったら、気づかれなように枕の下にお金を置いておいてください。また、診療所で診察中に、患者が貧しいとわかった場合は、処方箋を書き、すべてを説明した上で、薬の値段に応じて、ご自身の判断で処方箋の中に現金を包んで差し上げても構いません。」こうして神父様はすべての人を気遣い、私も神父様の祝福通りに実行しました。

神父様の祈りによる奇跡的な癒やしの例を挙げましょう。1960年、イジェフスク市からペラギア・メルニクが神父様の元を訪れました。彼女はすでに半年間、パンも、お粥も、ジャガイモも、その他の食べ物も何も口にすることができませんでした。食事は牛乳と生卵だけでした。彼女は衰弱し、歩くのも大変でした。ペラギアが神父様の独房へ行こうとしたとき、神父様に会いたい人が非常に多かったため、通してもらえませんでした。彼女は順番を飛ばして通してくれ

るよう頼みましたが、すべて無駄でした。突然、扉が開き、バチューシュカが出てきて言った。「この女性を私のところへ通してくれ。彼女はとても病気ののだ。」小部屋に入ると、ペラギアはバチューシュカの前でひざまずき、一言も発することなく、悲しみに暮れて泣き崩れた。バチューシュカは彼女に言った。「泣かないで、ペラギア。すべては過ぎ去る。あなたは癒されるだろう。」神父は彼女に焼きたてのプロスフォラ、コップ一杯の水、大きなリンゴを渡し、「これを食べなさい」と言った。彼女は、もう半年もパンを食べておらず、喉が痛くて食べ物が喉を通らないと答えた。神父は言った。「私が祝福してあげる。洗礼堂へ行き、広いベンチに座ってこれを食べなさい」と告げた。彼女は洗礼堂へ行き、ベンチに座ると、神父の贈り物を楽々と平らげた。その後、彼女はすぐに眠りにつき、丸一日眠り続けた。神父は何度か彼女の元へ行ったが、起こすようには命じなかった。ペラギアは完全に健康な状態で目を覚ました。神父は言った。「君の仕事は大変だが、まもなくすべてが変わるだろう。」そして実際、イジェフスクに戻ってから半月後、ペラギアは自ら頼むこともなく、別の、より軽い仕事へと異動になった。

コシノワ・P・Iは次のように語っていた。彼女は直腸と腰部の痛みを訴えて神父のもとを訪れた。がん専門病院での検査の結果、直腸がんと診断され、手術を勧められた。手術の前に、彼女はバチューシュカに祝福を求め、教会でろうそくを灯し、祈祷会を執り行うことにした。しかし、バチューシュカはこう言った。「急ぐな。手術台の上で死ぬことになるぞ。まだ生きろ、君には子供たちがいるのだから。」彼女は三度バチューシュカを訪ねたが、答えは一つだった——手術は受けないこと。神父はアロエを買って、薬を作り、飲むよう勧めた。また、救世主、聖母マリア、守護天使、そしてすべての聖人への聖水祝福を伴う祈祷会を依頼するよう提案した。3ヶ月後、彼女は経過観察のためにがん診療所を訪れた。診察の結果、腫瘍がほぼ消失していることが判明した。まもなく、彼女は完全に回復した。

彼女はまた、息子のミハイルについても話してくれた。大斎の初日、ミハイルは友人を送りに行くために家を出た。母親はこれに反対しており、息子の不従順な態度を見て心配していた。息子に腹を立てた彼女は、「主よ、彼を罰してください!」と考えた。彼女は息子の帰りを長い間待ったが、無駄だった。ついに深夜12時、電話がかかってきて、息子が脛骨の開放骨折で入院していると言われた。ミハイルは約3ヶ月間入院していたが、骨折は癒合しなかった。3回手術を受けたが、偽関節ができてしまった。4回目の手術を勧められたが、ミハイルは退院し、ギブスをしたまま自宅に戻った。彼は1年以上も仕事を休まざるを得なかった。母親はミハイルに聖体拝領を勧めたが、彼は承諾しなかった。そこで母親はセバスティアン神父のもとへ赴き、すべてを話した。話を聞いた神父は、息子を教会へ連れてくるよう命じた。苦勞して説得し、彼を連れてきた。神父はミハイルに聖体拝領を授け、祈祷会を執り行うよう命じた。祈祷会が終わると、神父は椅子に座っていたミハイルに近づき、松葉杖で立つよう命じた。彼の前と後ろに十字を切ってから、こう言った。「神と共に歩みなさい。神があなたを祝福してくださる。」「これで手術をしてもいいし、しなくてもいい。」そう言って、神父は彼から離れた。2週間後、医師である隣人の女性が、手術の可否を決めるための診察にミシャを病院へ連れて行った。経過観察のレントゲン写真には、回復の兆しがはっきりと見て取れた——骨の癒合組織が形成され、骨が癒え始めていたのだ。手術は不要であることが判明した。

その女性の孫娘ターニャは、車にはねられ、足と骨盤の骨を骨折してしまった。それは聖母マリアの被昇天の前日に起きたことだった。骨折はなかなか癒えなかった。このことをアナスタシアの母親が神父に伝え、神父は少女にプロスフォラを渡して聖体拝領を勧め、それが行われた。神父はターニャに、十字架を身につけていたかどうか尋ねた……「彼女は罪のせいで苦しんでいるのだ」と神父は言った。「まあ、いい。徐々に回復するだろう」。そして、その通りになった。

マリア・フェドロヴナ

私の夫は非信者で、共産主義者であり、よく酒を飲んでいて、生活は精神的にも物質的にも大変だった。酔っていない時の夫はとても優しい人だったが、酔うと信仰を理由に私を責め立

て、恐ろしい大喧嘩を起こした。アイコンに向かって「ああ！この神様たちめ！全部捨ててやる！」と叫んでいました。すると母は、「、あなたが置いたものじゃないんだから、捨てるのもあなたの役目じゃないわ」と言うこともありました。父から『予期せぬ喜び』というアイコンを貰ったので、私はそれをクローゼットの中、人目につかない隠れ場所に置きました。そこでこっそりと祈っていました。

ある日、神父様が私の近況を尋ねてきました。私はすべてを打ち明け、「たぶん、彼とは別れることになると思います」と言いました。すると神父様は何も言わず、リンゴをくれたり、クッキーをくれたりしました。そうして時が過ぎていきました。

ある日、家に帰ると、家の中は静まり返っていた。リビングのドアを開けると、夫が開いたクローゼットの前にあるアイコンの前でひざまずき、少し酔っ払った様子で「慈愛に満ちた王よ、慈愛に満ちた母よ……」と祈っていた。それ以上は言葉が出てこず、ただこの一節ばかりを繰り返し唱えていた。私は「どうしてひざまずいているの？」と尋ねた。すると彼はこう答えた。「俺が祈っているのが見えないのか？ あそこにアイコンがあるのは知ってるんだ」。そうして、長老の祈りによって彼に畏れが宿り、祈るようになったのだ。しかし、酒を飲んだ時だけ祈り、酔いが覚めると恥ずかしがって祈らなくなっていた。その後、彼は喧嘩を止め、アイコンを捨てようともしなくなった。しばらくして、彼は突然こう言いました。「マリア、君と教会で結婚式を挙げよう。」私は驚き、信じられずに言いました。「あなた、信仰のせいで追い出されたじゃない。」すると彼は答えました。「結婚式を挙げて、もっと良い生活を送ろう。ドレスを縫ってくれ。」

そして子供たち全員をその気にさせた。私は神父さんのところへ行き、そのことを話すと、神父さんは「それは良かった。来てください」とおっしゃった。

アレクサンドル・クリヴォノソフ神父が私たちを結婚式で結び、それから夫の態度が変わり始めた。私が水曜日と金曜日に断食料理を食べないことに気づくと、仕事から私より早く帰ってきて、夕食に何か断食料理を作ってくれるようになった。子供たちが「パパ、なんで断食料理を作ってるの？」と尋ねると、彼は「もちろんさ、お母さんが食べていないんだから、私たちも断食するんだ」と答えるのです。

時が経ち、夫がインフルエンザにかかり、「うちの家系はみんな突然死ぬんだ」と言いました。私たちは彼を病院に運び、肺の陰影ががんに行進していることが判明しました。手術の前に、彼は恐れを抱きながら懺悔し、聖油の秘跡を受け、聖体拝領をしました。手術が行われましたが、彼は亡くなりました。彼の死後、私は夢を見ました。夫が家に帰ってきて、私が「ペーチャ、飲んで」と言っただけのグラスを差し出すのです。彼はそれを受け取り、洗面台に近づいて中身を流し出し、「うちでは酒は飲まないんだ」と言いました。こうして、長老の祈りによって、主は夫を救いへと導いてくださったのです。」

オルガ・フェドロヴナ

神父様はいつも、休暇の最初の2週間が大斎の最後の2週間と重なり、休暇の最後の2週間が復活祭後の2週間と重なるように取るよう、私たちに祝福してくださっていました。そして1966年、私は4月1日から休暇を取りました。4月1日の夜、教会からユレチカから電話がかかってきました。「オルガ・フェドロヴナ、神父様が具合が悪いです。ペトロがあなたを迎えに行きますから、準備をしてください。」私は薬を用意して出かけました。そして、家に着いたのは、神父様が亡くなられた後でした。

神父様は生前、皆のために祈っておられ、死後も祈り続け、助け続けてくださっています。その証として、2つの夢についてお話しします。

バチューシュカが亡くなって20日目、私はモスクワに出張中でした。すると、モスクワ時間の午前1時30分（カラガンダではすでに午前4時30分、つまりバチューシュカが亡くなった時刻でした）、彼が登場する夢を見ました。彼は陽気で笑顔を浮かべ、こう言いました。「オルガ・

フェドロヴナ、主があなたをすべて、すべてにおいて救ってくださいますように」——そう言って、私に手を振ってくれました。私も何か言おうとしましたが、言い終わる前に目が覚めてしまいました。まるでバチューシュカが生きていらっしゃるのを見たかのような、心からの喜びに満たされていました。

1994年1月、私は再び夢の中でバチューシュカにお会いしました。まるで私が教会にいるかのように、礼拝が終わり、皆が外へ出ていました。私を含め多くの人々が、バチューシュカの祝福を受けるために守衛小屋へ向かいました。そこで私は神父様の侍女であるヴェラに出会い、「ヴェラ、神父様のところに行って、必要なことを済ませてから、私にも入ってもいいか許可を取って」と頼みました。ヴェラは「はい、オルガ・フェドロヴナ」と言って、神父様の部屋に入っていました。しばらくして彼女が外に出てきて、「お入りください、オルガ・フェドロヴナ。神父様が許可してくださいました」と言いました。私は彼女に礼を言い、神父様のところへ入りました。神父様は、小部屋の前の隅にある救世主のイコンの前に座り、小さなテーブルに肘をついていました。身には、裾が床まで届く新しい美しい修道服と、同じく新しい縁取り付きのカミラフカをまわっていた。神父はどこかから来たばかりで、まだ着替えていないような印象を受けた（普段はすぐに修道服とカミラフカを脱いでいたからだ）。その姿は厳粛そのものでした。私はバチューシュカに近づき、ひざまずいて言いました。「お祝福ください、バチューシュカ」。彼は祝福してくださり、私はその手に口づけをしました。その手は、まるで生きているかのように温かく、柔らかかったのです。私はその手に顔を寄せ、「神父様、愛しい方、ずいぶんお会いしていませんでしたね。本当に会いたかったです」と言うと、喉が詰まり、今にも泣き出しそうになった。すると神父様は優しくこうおっしゃった。「ああ、そういえば、私は毎日ここに来ているんですよ。」私は「そんなはずはない、だって父上は『あちら』にいるはずなのに」と思い、「でも父上、あなたは……」と言いかけたが、父上は私の言葉を遮って言った。「そう、そう。私はここにもあちらにもいるが、毎日ここに来ているのだ。」父上はこれらの言葉をはっきりと、説得力を持って語った。そして私は目を覚ました。

このようにして、神父様は私や他の人々に対し、私たちを見捨てず、信徒たちを注意深く見守り、この地上でも私たちと共にいてくださり、助けや導きを求める祈りをいつでも神父様に捧げることができるのだと示してくださったのです。

ライサ・イヴァノヴナ・クズミチェヴァ

私たちの家族は1931年にクルスク州から追放されました。母と父、2人の幼い子供、そして義母です。彼らはコンパネイスクという、何もない草原へと連れてこられました。地平線の果てまで見渡しても、茂みも木一本もありませんでした。当初、移住者たちは簡易な小屋を建て、その後、地中小屋を築きました。衛生状態は悲惨で、衣服も食料もなく、集落全体で井戸はたった一つ、そこから缶詰の缶で水を汲んでいました。人々は家族単位で亡くなっていきました。私の両親は二人の子供と義母を葬りました。彼らはぼろ布に包まれ、共同墓地に埋葬された。両親だけが取り残された。彼らが経験したことは、言葉では言い表せないほどだった。最も過酷だったのは31年、32年、33年だった。その後、状況は少し楽になった。土造りの小屋の近くに菜園を開墾し、人々は配給券でパンを受け取るようになった。1935年に私が生まれ、1938年に弟のニコライが生まれた。1939年、母はセバスティアン神父の話を聞き、弟をボリシャヤ・ミハイロフカへ連れて行き、神父に洗礼を授けてもらった。神父自身もまだ非常に衰弱しており、その頃、ドリンカから解放されたばかりだった。ほんの少しパンを食べただけなのに、戦争が始まってしまいました。父はスターリングラードの戦いで戦死しました。母（彼女は深く信仰心に厚い人でした）は、その知らせを受けると、もちろん大泣きし、すぐに神に「肉を食べない」と誓いを立てました。そして、生涯、肉を食べることはありませんでした。

戦時中、神父様はコンパネイスクにある私たちの家へ訪れるようになりました。ご自身も非常に貧しい生活を送っていたにもかかわらず、すべての未亡人や孤児たちを自分の周りに集め

、彼らを助けようと努めていました。神父様がお越しになる日、母は私に屋根に登って、神父様が鉄道駅から私たちの家へ向かう様子を見張るように頼みました。彼が歩いてくる姿を今でも覚えています——白いひげ、白い髪、明るい色のレインコート、灰色の帽子、杖をついて歩いていました。ヴァリャのお母さん、グルシャのお母さんも彼と一緒にいて、みんな神父様の祝福を求めて駆け寄っていました。私は一目散に母のもとへ駆け寄り、母は私を15番目の集落へ送り出し、そこでも神父様が来られたことを伝えるように言いました。神父様の来訪は、私たちにとって毎回お祝いの日でした。

私たちの家族は、ほとんど飢え死にしそうなほど貧しい生活を送っていた。母は、私と弟を養うために、昼夜を問わず灯油ランプの明かりの下でミシンを回し続けていた。神父様はそれを知っていた。そして1942年から、彼は休暇のたびに私をニジナヤ通りにある彼の家に招いてくれるようになった。おそらく、半飢えの状態の子供に食事を与え、母が私に植え付けてくれた神への信仰を強めるためだったのだろう。それは私の子供時代で最も幸せな日々だった。電車での道中、これから迎える再会を思うと、私の心は喜びで高鳴り、ときめいていました。そして、土の床がトール紙や色とりどりの手編みの敷物で覆われた、小さくて清潔な家の敷居を跨ぐと——そこは私にとってこの世で最も素晴らしい場所のように思え、そこに住む人々はまるで肉体の天使のようでした。私は彼女たちに畏敬の念を抱いていた。グルシャさん、ヴァリャさん、フェクラさん——長い清潔なドレスに白いエプロンを締め、白いスカーフを巻いた彼女たちは、礼儀正しく、親しみやすかった。いつも静かに話し、決して声を荒げることはなかった。台所には、白く完璧に清潔なシーツをかけた神父のベッドが置かれており、部屋には、互いにぴったりと寄り添うようにさらに三つのベッドが並べられ、そこで神父の妻たちが眠っていた。これほど手狭な場所で暮らしながら、ただ迷惑や手間をかけるだけの他人の子供を客として招き入れるには、どれほど寛大な心が必要だったのか！そして、どうやら神父様は私だけを招いていたわけではないようだ。家にはいつも人がいて、その中には子供たちもいた。ある者は去り、別の者がやってくる。

私はおいしい食事をいただき、風呂にも連れて行ってもらった。よく神父さんと一緒にゼレンストロイへ行ったものだ。そこでは神父さんは温かく迎えられ、神父さんは私を指さしながら、優しく微笑んでこう言った。「ほら、こんな小さな女の子なのに、もう小学3年生なんだよ！」

子供の頃に神父様と知り合った私は、思わず彼が他の司祭たちとは違うことに気づきました。当時、私たちの地域には、ドリンカから解放された他の修道司祭たちも住んでいました。キファ神父、マカリイ神父、パルフェニー神父、ケッサリイ神父、パルメン神父です。彼らは皆立派な司祭でしたが、セバ스티アン神父ほど畏敬の念を抱かせる人は一人もいませんでした。彼からは恵みの波動が溢れ出ており、誰もがそれを感じていました。バチューシュカの外見さえも並外れていました。端正で精神性あふれる顔立ち、鋭い黒い瞳、まるで子供のようになめらかな髪。神父様は非常に繊細で、気配りが行き届いており、決して誰かを辱めたり、侮辱したり、言葉を遮ったりすることはなく、人の身体的な欠点を強調することも決してありませんでした。そして、神父様の前では、誰一人として、誰かが耳が聞こえない、目が見えない、足が不自由だなどと言うことなど、思いもよらなかったのです。バチューシュカの周りには高潔な気風が漂っており、その中に身を置けば、卑劣な行いをしたり、粗野な言葉を口にしたりすることは不可能でした。彼には特に寵愛する者などおらず、誰に対しても公平に接し、それによって周囲の人々をさらに強く結束させていました。どこにいても、いつでも、どんな時でも、バチューシュカは静かで謙虚であり、善行でさえも人目につかないように行うよう心がけていました。時々、祝福を求めると、彼はとても丁寧に、四つ折りにしたお金を私の手にそっと滑り込ませてくれた。よく、彼が我が家を訪ねて帰った後、夜、寝具を片付けていると、掛け布団の下からお金が見つかった。それは、バチューシュカの指示で、母のグルシャが置いていったものだった。おそらく、神父様は他者への気配りから、相手を気まずくさせたり、人前で神父様に感謝させたりしないように、そうしていたのでしょう。私が神父様と知り合ってから23年間、彼が自らを称賛した

り、他人の手本にしたりするのを一度も耳にしたことはありません。彼には自己愛や自己満足が全くありませんでした。 それどころか、よくこうおっしゃっていました。「私は学のない人間で、小学校4年生までしか終わっておらず、雄弁な才能もなければ、声も出ないのです。」説教はたいてい本に依って読み上げ、自分から何かを加えることはほとんどありませんでした。また、霊的な子供たちと食卓を囲む際、時折何かをお話しになることもありましたが、それは穏やかに、謙虚に、自分を誇示することなく行われていました。

51年、神父様はメルコムピナートに私たちのために小さな家を購入してくださった。この頃には、神父様の祝福を受けて、多くの信者たちがカラガンダの各地——マイクドゥカ、ティホノフカ、プリシャフチンスク、コンパネイスク——からすでにメルコムピナートへ移り住んでいた。 その多くは、1930年代初頭に経験した強制移住という悲劇を生き延びた家族、あるいは、より正確には、その家族の残された者たちだった。メルコムピナートの住民たちは、苦難に苛まれた心と打ち砕かれた運命を抱え、夫を亡くした未亡人や親を失った子供たちだった。 一人ひとりにそれぞれの痛み、心の傷があった。気難しい人、気まぐれな人、疑り深い人、攻撃的な人、内向的な人もいた。しかし、神父は苦しむ魂一人ひとりに寄り添う方法を見出していた。 また、長老を取り巻く人々の中には、迫害の時代にカラガンダへ追放された修道者や、後に中央ロシアから彼のもとへやって来た修道者も数多くいた。彼らはカラガンダ教会の中核を成していた。その中には、ユニークで才能に恵まれ、高い霊的生活を送る修行者たちもいた。 全体として、それは強固なキリスト教共同体であり、カザフスタンの草原に広がる「スキート（隠遁所）」であった。無神論的な共産主義体制の下で、オブティナの長老が、カラガンダの収容所という聖なる地において、この共同体を組織し、育て上げたのである。

1954年に、私が初めてクリスマス徹夜祈祷を耳にした時のことを覚えている。礼拝が行われていた家に入ると、神父の部屋の前の隅に、ヴァリャ母、グルシャ母、パシャ母、クセニア・イヴァノヴナが立っているのが見えた。 黒い祝祭用のドレスを身にまとい、美しく、威厳があり、身だしなみも整った彼女たちは、天使のような声で、調和のとれた敬虔な歌声を響かせてこう歌っていた。「神は我らと共におられる。異教徒たちよ、これを悟り、従え。神は我らと共におられるのだから！」 それはあまりにも美しい歌声で、私は呆然とし、全身に鳥肌が立ち、魂は溢れんばかりの喜びと光に満たされて歓喜した。私は静まり返って立ち尽くし、世の中のすべてを忘れ、幸せのあまり静かに涙を流していた。

また、60年代初頭の聖木曜日の夜、12の福音書の朗読が終わった後、メルコムピナートの従業員たちが皆、火のついたろうそくを手にも、教会からダムを渡って歩いて帰ったことも覚えている。 夜は静かで、私たちは長い間そのように歩き続け、ろうそくは揺らぐことなく明るく燃え続けていました。それは感動的で荘厳な光景でした。しかし、この行列の真の偉大さは、人々の精神的な一体感にこそありました。その一体感は、大小を問わず、喜びも悲しみも、あらゆる事柄や出来事の中に現れていました。 だからこそ、教区民の葬儀にはいつも大勢の人が集まりました。誰にも頼んだり説得したりする必要はなく、皆が自発的に参列しました。それが一人ひとりの聖なる義務であることを知っていたからです。1960年にクセニア・イヴァノヴナ・ドルゴヴァさんが亡くなった時、家から教会までの約7キロメートルの道のりを、皆が彼女を肩に担ぎながら歌いながら歩いたことを覚えています。

私自身について何と云えばよいでしょうか。今、私は61歳になりました。神父様の祝福により、私は生涯を看護師として働き、教会の聖歌隊で歌ってきました。そして私の心の中には、神と隣人へのキリスト教的な愛の道へと、まるで父親のように慈愛深く私の人生を導いてくださったセバスティアン神父様への感謝の気持ちが、常に温かく灯り続けています。

タチアナ・ウラジーミロヴナ・トルテンステン

私は1952年に収監から解放されました。モスクワの実家へ帰ることは許されませんでした。当初、私はコクチェタフ市を居住地として選びたいと考えていました。そこは気候が良く、森

もありましたが、そこには私の友人は誰もいませんでした。一方、カラガンダには半年ほど前に、私の最も親しい友人である医師R. G. L.が定住していました。彼女とは、収容所の病院で8年間共に働き、5年間同じ部屋で暮らした仲でした。二人で多くのことを共に経験してきた。そこで私は1952年8月31日、に彼女のもとへカラガンダへやって来た。ここには他にも定住している友人たちがいた。そして私は、煤煙が立ち込め、ほこりっぽく、石炭の匂いがするカラガンダに、廃棄山で燃える薄紫色のガス灯を背に留まることになった。もはやコクチェタブの松林の澄んだ空気に惹かれることもなく、試練を共に乗り越えた忠実な友人たちの温かい友情と心の絆から、どこへも離れたくはなかった。そして、心に響く仕事も見つかった。

10月の20日頃、R.G.はマラリアで重篤な状態になった。40～41°の熱は一時的に下がるものの、すぐにまた同じ激しい発作が繰り返された。発作を何とか抑え込んだかと思えば、今度は急性精神病を原因とする激しいせん妄が突然始まった。

彼女は私から遠く離れた別の地区に住んでいた。娘だけでは彼女を看病しきれず、「救急車」を呼び、その夜、救急車は彼女を20キロメートル離れたコンパネイスクの精神病院へ搬送した。私たちが娘と一緒にそこへ到着したとき、私たちは完全に呆然とし、打ちのめされた。それは彼女その人ではなく、その姿は恐ろしいほどだった。彼女はまるで動物のようだった。私たちが持ってきた食料品を私たちの手から奪い取り、素早く口に押し込み、また奪い取っていた。その後、四つん這いになって私たちの周りを歩き回った。看護助手が彼女を病室へ連れて行った。

娘は泣きじゃくっていました。私は彼女を自分の家へ連れて帰りました。私たちは打ちのめされ、疲れ果て、自分たちらしくない姿で帰宅しました。私の大家さんは、何が起きたのかを知ると、私にこう言い始めた。「絶望しないでください。こうしましょう。明日すぐにミハイロフカへ行ってください。そこに神父さんが住んでいて、修道士なのですが、彼は本当に特別な人です。彼にお願いすれば、祈ってくれて、あなたの病気の人の助けになってくれるでしょう。迷わず、恐れることなく行ってください。」

その翌日、私はミハイロフカへ向かった。ドアを開けてくれたのはグルシャのお母さんで、神父様はご不在だった。私は彼女に、なぜ来たのかを話した。彼女は私に親しげに接し、「ええ、ぜひ神父様とお話しになって、事情を説明し、助けてもらうようお願いしてください」と言った。彼女は、神父様が礼拝に出かけた先の住所を教えてくれ、「その家の前にベンチがあります。そこに座って待っていてください。家の中から歌声が聞こえたら、それは追悼の食事が終わった合図です。そうすれば、神父様はすぐに外に出てきます。神父様はあなたと立ち止まって話をするのではないかもしれませんが。神父様は路上で立ち止まるのがお好きではないのです。ですから、神父様の横を歩きながら、用件を話してください。神父様は歩きながらも、あなたの話に耳を傾けてくれるでしょう。」

その通りになった。私は緊張しながらベンチに座っていた。やがて家の中から歌声が聞こえ、歌が終わるやいなや、すぐに門から、白ひげを生やした小柄な老人が、長い黒いコートと黒い帽子を身につけて出てきた。目を上げることなく、私を一瞥することなく、彼は軽やかで慌ただしい足取りで通り沿いに歩いていった。私は彼の横を歩きながら、私たちの苦境について話した。彼は黙って、歩みを緩めることなく歩いていたが、私の話に注意深く耳を傾けていた。私が彼に助けを求めたとき、彼は立ち止まり、魂の奥底まで見透かすような、その優しくも並外れた瞳で私を見つめ、静かに、ただこう言った。「彼女は正教徒ではないし、信仰も持っていないでしょう。」私は驚いた。「ええ、」と私は言った。「彼女はルーテル派です。信仰に反対しているわけではありませんが、信仰からは遠ざかっています。」神父はすでに同じ速い足取りで歩き始めていた。「ルーテル派だとしても構わない」と神父は言った。「よし、私が祈っておこう。二、三日後に彼女を訪ねて、あなた自身も熱心に祈ってください。さて、私はここ、この家へ。さようなら。」

三日後、日曜日になり、私たちは朝から電車に乗ってコンパネイスクの病院へ向かった。中庭で看護師に出迎えられ、彼女は微笑んでくれた。「嬉しいお知らせがあります」と彼女は言った。「お見舞いの患者さんは、もう二日前に『目を覚ましました』。すでに療養病棟に移され

ています。あそこの建物、左から二つ目です。行ってください。彼女もあなたたちに会えて喜ぶでしょう。」

私たちはそのまま病室に通された。R.G.は自分のベッドに座り、髪を整え、身なりもきちんとし、新しいガウンを着て、以前と変わらない顔つきで紅茶を飲んでいた。私たちを見てとても喜んだ。「どうしてここに来たのかしら？ 私に何が起きたの？」と彼女は私たちに尋ねた。もちろん、私たちは喜びと驚きでいっぱいだった。たった二日で、これほどの変化が起きたのだから。

翌日、私は仕事ができず、回診が終わるとすぐに病院を出て、神父様に感謝を伝えるに行きました。家での神父様は、外で見せる姿とは全く異なり、優しく、親しみやすい方でした。神父様は私をその家に残して昼食をとらせ、何かを話してくださり、陽気な様子で、私にいろいろなことを尋ねてきました。

グルシャというお母さんが、私が神父様の夜の礼拝に訪れる際に泊まれる場所の住所を教えてくれました。やがて私は神父様の主治医となり、彼の霊的な娘となりました。私の人生は全く違う方向へと流れ始めました。私は「神父様の妻」となったのです。

私に大きなトラブルが降りかかり、大きな試練が訪れた。それも、私自身の過ちによるものだった。教会に行くと、神父様が礼拝を執り行っていた。私は右側の聖歌隊席の奥の隅へ行き、ひざまずいて、涙を流しながら熱心に祈っていた。突然、何かで突き飛ばされたかのように、私は顔を上げると、聖歌隊席の隅に立っている神父様を見ました。正確には、彼の目を見ました。彼は真剣で、不安げな表情で、私をじっと見つめていました。私は、隅にいる私は誰にも見えなかったはずなのに、神父様が私の心の状態を心配して、私のところに来てくださったのだと理解しました。彼は、自分が礼拝を執り行うときは決して聖壇には上がらなかった。しかし今、彼は私のためにやって来て、私の言葉なき物語に耳を傾けてくれたのだ。私は彼の目を見つめながら泣いたが、それはもはや悲しみからではなく、「主への聖なる愛」と、自分の魂をバチューシュカの手に委ねるのがこれほど容易だったという事実からだった。悲しみは去り、魂は喜びで満たされた。バチューシュカがいて、主が確かに「聖徒たちの中に安らぎ」にいるという自覚から生まれる、生き生きとした幸福感で。バチューシュカはすでに去り、祭壇から賛美の声を響かせていた。彼がここにいたのはほんの一瞬だった。それでも私は膝をついたまま立ち上がれず、静かに涙を流していた。

ティホノフカという集落には、修道士トリフォン神父が住んでいた。彼はよくバチューシュカのもとを訪れ、バチューシュカの聖歌隊で歌っていた。教会の開堂後、バチューシュカは教区長の助けを借りて、ティホノフカとフェドロフカに祈りの家を設立することに成功し、バチューシュカの祝福のもと、トリフォン神父がそこで奉仕していた。ある日曜日のこと、礼拝の後、彼はその日のうちにフェドロフカへ行くための祝福を請うため、バチューシュカのもとへ近づいた。バチューシュカは彼をじっと見つめ、祝福を与えながらこう言った。「私も今日、君をそこへ遣わそうと思っていたところだ。ただ、車で行くのはダメだ。ゼレントレストを通り抜けて、まっすぐ歩いて行け。」神父は厳しい口調でそう言った。トリフォン神父は驚いた。ゼレントレストを通るのが近道ではあったが、徒歩では非常に遠い道のりだったからだ。しかし、もちろん、神父の祝福通り、歩き出した。道は造林所を横切っていた。トリフォン神父がそこを横切っている間、道中で誰一人として出会わなかった。すると突然、生い茂った低木の間から、非常に興奮した様子の若くてがっしりとした男が飛び出してきて、トリフォン神父の手を掴むと、道から離れた森の中へと引きずり込んだ。トリフォン神父はひどく怖がったが、従わざるを得ず、男の後に続いて森の奥へと急いだ。「さあ、神父様、行こう——」と男は歩きながら繰り返した。「ずっと待っていたんだ、もう待ちくたびれたよ。」「さあ、これで俺の終わりだ」とトリフォン神父は思った。彼らが森の奥深くに入ると、男はトリフォン神父の手を離し、こう言った。「さあ、神父さん、この切り株に座って、私の話を聞いて、私の運命を決めてくれ。」そして、こう語り始めた。「私は妻をととても愛している。彼女は若く、美しく、賢く、家事も上手だ。私たちは仲良く、裕福に暮らしている。子供が欲しくてたまらないが、まだいない。ところが昨日、看

護師から、先週妻が中絶をしたと知らされた。妻は24時間当直で家にはいなかったため、私は一晩中、一人で思いに苛まれた。『まあ、そうまでしたということは、その子は私の子ではないし、彼女は私を裏切っているのだ』と思った。もし私の子なら、彼女は私を愛しておらず、私を捨てようとしたのだ。つまり、彼女は長年にわたり私に嘘をついていたのだ。その嘘と、待ち望んでいた子供を殺したことのせいで、私はどうしても彼女を許すことはできないと決めた。そして、彼女を殺さなければならないと決心した。うとうとしたのか、意識が遠のいたのかは分からないが、小柄で大きな髭を生やした老人の幻影が目に見えた。その老人は私にこう言った。「お前、一体どうしたんだ。自分で勝手に決めて、誰にも相談しなかったのか。そんなことは許されない。まず相談しなさい。道で最初に出会う年配の男性に、すべてを話せ。そして、その人が言う通りにしなさい。さもないと、今、熱に浮かされているお前は間違っただけの判断をしてしまうかもしれない」と、厳しく言った。

目を覚ましてベッドに座ると、誰もいなかった。でも、はっきりと声が聞こえたのに。私はベッドから飛び起き、妻が当直から帰ってくる前に家から逃げ出した。通りを歩きながら考えた。「一体どうやって、路上で誰かと話して、自分の本音を打ち明ければいいんだ？ 誰が私の話を聞いて、私の事情を深く理解してくれるだろうか？」そこで私は、ゼレンストロイへ行き、年配の方が来るのを待って、その人と話すことにした。「ただ、正直に、真実を話してくれ。私の妻について、君がどう思っているか。もしごまかそうものなら、私は見抜くからな。思うままに話せ。さもないと、君も痛い目を見るぞ。」

「お名前は？」とトリフォン神父は尋ねた。「ニコライです。」

「君の守護聖人である聖ニコライに祈ろう。私は修道士だからな。聖ニコライが私たちに真実を明らかにしてくれるよう祈るよ。」そう言って、トリフォン神父は祈りを捧げ始めた。

「さて、コリャ」と、彼は祈りの後、優しく言った。「君の妻は今、すでに後悔している。彼女は君を愛しているし、君に忠実だ。今、彼女は泣いていて、心配事のない自由な生活をもっと少しだけ送りたいと思ったことを後悔している。彼女は君を大切に思っているんだ。安心して家に帰り、妻を許してあげなさい。彼女と和解して、仲良く暮らしてください。」男は緊張した面持ちで耳を傾けていたが、その顔は次第に明るくなり、まるで狂気が消え去っていくかのようなだった。「まもなく、あなたたちには子供が生まれるでしょう。これらすべては聖ニコライが私に告げたことであり、私自身の考えではありません。」

男は全身を震わせ、泣き崩れ、トリフォン神父の足元にひれ伏し、感謝し、許しを請い始めた。

「もし妻を殺そうと決心していたら、私もお前を殺していたかもしれないんだぞ！ 証人としてお前を恐れていたんだ、私は正気を失いかけていたのだから！」「さあ、行け、コリャ、落ち着いて。」平穏に帰れ。私はお前を許す。」トリフォン神父は男に別れを告げ、我を忘れたままフェドロフカへと向かった。「まさか——と彼は考えた——神父様が、森の中を通るよう私に祝福を与えたとは？ あそこであんな危険が待ち受けていたなんて……」そして神父と再会すると、神父は微笑みながら迎えてくれた。「さあ、生きて戻ってきたか？」——「はい、神父様、生きて戻りました。でも、死んでいてもおかしくなかったのです」——トリフォン神父（ ）は、神父がすべてを知っていることに呆然とした。「何をおっしゃるのですか、トリフォン神父？ 私はずっと祈っていたのですよ。なぜ恐れたのですか？ 二人の魂を救い、あの悪魔的な憑依から解放しなければならなかったのです。」そして神父は、このことを誰にも話さないよう禁じた。「私が生きている間は、誰にも一言も言うな。私が死んだら——その時は好きにすればいい。」

1955年、祭壇係の修道女マリアの上唇が痛むようになった。腫瘍の増大により唇は変形し、青ざめてしまったため、マリアは外科医のもとへ連れて行かれた。医師は「至急手術が必要だ」と言い、腫瘍科への紹介状を出した。マリア修道女は手術の祝福を受けるため長老のもとへ行ったが、長老はこう言った。「腫瘍はすでに大きくなっている。唇を切除すれば、別の場所に再発するかもしれない。いいえ、手術はする必要はありません。追悼礼拝堂にある聖三位一体のイ

コンに祈りを捧げなさい。神の御加護があれば、治るでしょう。」一ヶ月後、マリアの母は再び教会で見かけるようになり、相変わらず活発で働き者だった。「どうやって唇を治したのですか？」と誰かが彼女に尋ねた。「私は治療なんてしていません。神父様が祝福してくださった通り、聖三位一体のイコンに手を当ててただけで、腫れが小さくなり、次第にすっかり消えてしまいました。神に栄光あれ！」

もう一つ、似たような出来事がある。亡くなった人々のために絶えず詩篇を唱えていた修道女パラスケヴァの、首の下、胸の左側に青い斑点が現れ、それが大きくなり、赤みを帯びてきた。病院では、すぐに手術を受けなければならないと言われ、それががんであることをほのめかされた。涙を流しながら、パシエンカは教会へ向かった。教会の門で、ある信徒の女性に会い、泣くのではなく神父様のところへ行くよう勧められた。パシャはその言葉に従って向かった。すると、神父様の元から、輝きに包まれて出てきた……「神父様がこうおっしゃいました。『がん……がん……——馬鹿だ。どこにも行かないで、治るよ』（神父はいくつかの言葉を田舎訛りで話していました）。そしてどうなったか？ そのしみは小さくなり、色あせ、跡形もなく消えてしまいました。それからすでに30年が経ち、この尼僧は修道生活に入り、今も非常に高齢ながら健在です。

当院の健康相談所の一つで、ソフィア・ヴァシリエヴナという看護師が働いていた。彼女の夫はトラストの主任会計士だった。この家族がどれほどの悲しみを経験したか、想像を絶する。17年前、彼らは12歳の唯一の息子を悲劇的に亡くした。その少年は、バルコニーに出てプランターの花に水をやり、何かを直そうとして手すりに身を乗り出し、5階から転落してしまった。両親は食堂のテーブルのそばに立っており、少年はバルコニーから両親と話をしていたが、突然ドアベルが鳴り、少年は亡くなった状態で運び込まれた。

その後、新たな不幸が次々と降りかかった。1937年、父親は逮捕され、10年の刑を宣告された。ソフィア・ヴァシリエヴナにとっては、孤独と迫害、失業、飢餓の年月が訪れた。しかし、二人はそれらを静かに耐え抜き、乗り越えた。そのすべてはとくに過去のものとなり、今では彼らは大きな家で裕福に暮らしていたが……年を重ねるにつれ、子供のない夫婦は男の子を引き取って育てたいと思うようになった。

クイビシェフ市には大きな「乳児院」があり、そこには7歳までの孤児たちが集められていた。夫婦はそこへ出向き、男の子を選ぶことにした。神父の「霊的な娘」の一人がソフィア・ヴァシリエヴナに、もしこの子が幸せになることを望むなら、まずセバスティアン神父のもとへ行き、祝福を請うべきだと告げた。

クイビシェフ行きの切符はすでに購入済みで、出発まであと一日を残していたため、ソフィア・ヴァシリエヴナは長老の霊的な娘と共に彼のもとへ向かった。到着すると、バチューシュカが病気で寝込んでおり、誰の面会も受け付けていないことがわかった。すると突然、バチューシュカが修道室から呼び鈴を鳴らした。誰が来たのか尋ね、訪れた者たちに入室するよう告げた。彼女たちは部屋に入り、彼のベッドのそばにひざまずいた。バチューシュカは注意深く話を聞き、枕から頭を上げることなくこう言った。「それは良い願いだ。行ってきなさい。子供を連れて行ってもよいが、女の子に限る。男の子は連れて行ってはならない。」そして、ソフィア・ヴァシリエヴナに祝福を与えながら、こう繰り返した。「3歳くらいの女の子を連れて行くことを祝福する。」長老に感謝を述べ、彼らはその場を後にした。ソフィア・ヴァシリエヴナは、夫が男の子を望むという夢をどのように諦めるのかと心配していた。

数日後、夫婦はクイビシェフから戻り、3歳の女の子を連れてきた。その子は人懐っこく、愛らしく、何よりも父親にべったりだったが、とても不細工だった。顔のパーツ一つひとつが不自然というわけではなく、すべては普通だったのだが、全体としてその子は美しくなかった。しかし、幸せな両親はそれに気づかなかった。二人は、どのようにしてその子を選んだのかを嬉しそうに語った。

彼らが「乳児院」の事務室で子供を引き取るための書類の手続きを終えると、こう言われた。「さあ、行って、気に入った子を誰でも選んでください。今、子供たちは昼寝から起きさせられて、便器に座らされる所ですから、その間を歩き回って選んでください。」 「『トイレ』の部屋の壁沿いを歩き始めたばかりだったのに」とソフィア・ヴァシリエヴナは言う。「部屋の反対側から一人の女の子が駆け寄ってきて、夫の足に両手を巻きつけ、顔を膝に押し当て、全身を震わせながら『パパが来た！ 私のパパが来た！』保育士が彼女を引き離し、抱き上げながら言いました。「気になさらないで、お選びください、よく見てください。」「いいえ」と夫は言いました。「もう選ぶつもりはありません。彼女自身が私たちを選んだのです。この女の子の手続きをしてください。」 こうして彼らは、あまり可愛くない女の子を家に連れて帰り、彼女が自分たちを「見分け」てくれたという理由で彼女を愛するようになった。家の中は喜びに満ち、女の子は陽気で、とても従順で、人当たりが良い子に育った。彼女は父親をこよなく慕っていた。父親が仕事から帰宅すると、彼女は駆け寄って彼の足から靴を脱がせ、寝室からスリッパを持ってきてくれた。母の手伝いをしようと、彼女はほうきを手に取り、床を掃こうとしたが、まだそのやり方は知らなかった。「私たちは彼女にそんなことを教えた覚えはないのよ」とソフィア・ヴァシリエヴナは言った。「すべて自分で思いついているのよ。」

もちろん、夫婦は娘に多くの温かさと愛情を注いでいた。そして、それまでそれに気づかなかった娘は、まるで花が水を吸い上げるように、両親の愛情を全身で吸収していた。4年後、少女は学校に通い始め、非常に才能があり、勤勉であることがわかった。そして、彼女は姿勢も良くなり、容姿も美しくなり、かつての「不細工さ」は消え去った。周囲の人々は「ソフィア・ヴァシリエヴナ、お嬢さんが美しくなってきましたね」と言いました。すると彼女は「彼女は昔から可愛かったんですよ」と答えました。

これこそが、神父様の祝福と、その言葉に従うことの結果だった。

しかし、神父の助言に背いた人々は、どれほどの苦難や痛み、災難に耐えなければならなかったことか。特にそれは結婚の問題に当てはまった。祝福を求めてやって来ても、神父は率直に「あの人と結婚してはいけない」と言う。しかし若者たちはわがままで、「私は彼を愛している」とか、「私が彼を更生させてみせる」などと言うのだ。そしてその後、悲劇が待っていた——耐え難いほど辛い生活が。もし家庭生活に耐え難い状況が生じた場合、神父は、たとえ子供たちがいるとしても、それをこれ以上我慢するよう決して強要しなかった。すべてを聞き終えると、「まあ、いいだろう。彼と別れても構わない。別れなさい」と言うのだ。

カラガンダでの牧会活動の初期、神父にはタネチカという霊的な娘がいた。彼女は驚くほど聡明で愛らしい少女で、繊細で優しい心を持っていた。彼女は神父に深く愛着を抱いており、神父も彼女を深く愛していた。タネチカは、アルマアタ出身の若くてハンサムな技術者と結婚しようとしていた。神父は祝福しなかった。彼女は最初は従ったが、その後また祝福を求めてきた。そこで神父は厳しく禁じた。神父は彼女と何度も話し合い、婚約者と別れるよう説得した。しかし、彼女は結局、「私は彼を愛しているし、どんなことでも耐えるわ」と言った。ターネチカが婚約者のもとへ旅立つ時、神父は涙を流し、考え直すよう懇願し、駅まで見送りに行き、そこで「アルマアタへ行って、また戻ってきてくれ」とだけ頼んだ。神父がこれほど執拗だった例は、誰も知らなかった。タネチカは戻ってこなかった。彼女の人生は極めて不幸なものとなった。彼女は多くの苦しみを味わい、結核を患い、2年半後に亡くなった。

私たちが気づかないうちに、神父様は多くの災いから私たちを救ってくださった。そして、そのことに気づいた時には、神父様の先見の明と祈りの力に驚かされた。時には私たちに何らかの断固とした行動を求めることもあったが、たいていは、川の水が流れるように、静かに、穏やかに物事が進んだ。神父様の導きと取り成しは、静かなものだった。カラガンダで三度、死が私の戸口まで迫りましたが、神父様は私を手放さず、私の命を延ばしてくださいました。

ある時、私が心の中で神父様に呼びかけた時、神父様がそれを聞き取られる様子に、私は深く感銘を受けました。

ある日、私とR.G.の二人でサラニからカラガンダへ戻っていた。バスを運転していたのはチェチェン人の若者だった。道中、別のバスに追い抜かれた。その運転手もまた若いロシア人の青年で、運転席から頭を出し、笑いながらチェチェン人に叫んだ。「老いたろくでなしの馬みたいなにのろのろしてるな！」チェチェン人の運転手は激怒し、アクセルを踏み込んで、侮辱した相手を追い越そうと車を飛ばした。すると、相手もまたアクセルを踏み込んだ。私たちのバスは猛スピードで走り、路面の凹凸で激しく揺れ、通路に立っていた人たちは頭を天井にぶつけてしまった。恐怖と不安が胸を締め付けた。そこでは、刈り取られた小麦畑を迂回するように、幹線道路がジグザグに曲がっていた。そして、恐怖に駆られながら、私たちは、運転手が距離を短縮しようと、幹線道路から外れて、でこぼこした畑の中を車を走らせているのを目にした。バスは凸凹を跳ね、左右に大きく揺れ、今にも車輪が外れてバスが転倒し、私たちの骨を砕いてしまいそうだ。子供たちは泣き叫び、皆が車掌に運転手を止めてくれるよう懇願するが、彼女自身は紙のように青ざめながら叫ぶ。「彼がこんな狂ったような興奮状態に陥っている今、一体誰が彼を止められるというの?!」私たちが死の瀬戸際にいると悟り、私は祈り始め、心の中で神父様に叫んだ。「神父様! セバステイアン神父様! 助けてください! 助けてください!」窓の外を見ると、最初のバスが幹線道路で止まっており、乗客全員が降りて、バスの周りに群がっているのが見えた。どうしたのだろうか? バスのタイヤが外れてしまったのだ。私たちの運転手は速度を落とし、幹線道路に出て、無言のまま最初のバスを追い越していった。運転席から顔さえ出さなかった。

翌日、祝日の徹夜祷がありました。私はミハイロフカに早く着き、神父様が教会へ向かうのを脇で待っていました。昨日どれほど恐怖に震えたかを神父様に話そうと思っていたところ、神父様の方からこう尋ねてこられました。「昨日、『神父様、救ってください、助けてください』と叫んでいたのはあなたですか?」——「はい、神父様、私です」——「そうか、私を呼ぶときは、誰が呼んでいるのか、何から救ってほしいのかを必ず言わなければならない。そうしないと、私には判断がつかない。『救ってください!』と聞こえるが、誰を? 何から? さて、無事に到着したか?」私はただ呆気にとられてしまった。「無事に着きました、神父様」

神父様にはいつも奇跡が起こっているのですが、私たちがそれを目にするわけでも、理解できるわけでもありません。また、時折、神父様に何かを突き詰められて尋ねられると、こうおっしゃることもあります。「私にどうしてわかるでしょう? 私は預言者ではありませんから、そんなことは知りません。」それだけの答えだ。時には眉をひそめることさえある。1956年、私は重い心臓病にかかった。家で寝込んでいたが、回復の兆しは遅々として現れなかった。突然、予期せず熱が上がった。大変な苦労の末、点滴を受けながら病院に運ばれた。容体は極めて重く、熱は40°に達していた。調べてみると、私は腸チフスにかかっていた。私の心臓がこの病気に耐えられるという希望は、ほとんどなかった。状況は絶望的だった。意識は朦朧としており、自分のことを何も伝えることができなかった。しかし、神父様は私が危篤状態にあることを自ら知り、アレクサンドル神父とアナスタシア修道女を私の元へ送ってくださった。私は隔離病室で一人横たわっていました。二人の姿が目の前に現れたとき、私の意識ははっきりしました。私は看護師に、誰も私の病室に入らないよう頼みました。アレクサンドル神父は私に告解を聞き、聖体拝領を授けてくださいました。聖体拝領の後、私は彼らを通じて送られてきた神父様からの手紙を自分で読みました。それは短い手紙でしたが、私に力と希望を与えてくれました。「キリストは我らのうちに! 敬愛すべき、そして親愛なるタチアナ・ウラジーミロヴナ様! あなたの重い病は死へと向かうものではなく、神の栄光へと向かうものです。あなたにはまだ多くの働きが待っています。私たちはこれからあなたのお世話をいたします。司祭S. フォミン」聖体拝領の後、アレクサンドル神父とアナスタシア修道女は、私の病室で長い間座ってくれました。祈りを捧げ、福音書を読みました。私はすべてをはっきりと理解していました。夜になる頃には熱が下がり、翌日にはほぼ正常な状態になりました。

1958年9月、事情が重なり、私は急遽モスクワへ休暇に行く必要が生じました。この時期は切符の入手が困難でした。駅へ行き、順番待ちのリストに名前を書き込んで、一晩中そこに座っ

ていなければなりませんでした。というのも、2時間ごとに登録者の点呼が行われたからです。それは、路上で過ごした、苦痛に満ちた眠れない夜でした。朝になる頃、私はクーペ車両の良席の切符を手に入れた。翌日、私は神父のもとへ向かった。神父は笑顔で私を迎え、「切符は手に入ったか？ よし、よし。旅人のための祈りを捧げよう。切符はいつの日付だ？」

「水曜日です、神父様。」神父様は目を上げて空を見上げました。すると突然、眉をひそめ、私の方へ視線を移して厳しく言いました。「急ぐ必要はない。水曜日に出発するのはまだ早すぎる。」「早すぎるとは、神父様？ どうして早すぎるのですか？ もう休暇が始まるんです。間に合うように戻らなきゃいけないんです。この切符、苦労して手に入れたんですから！」神父はすっかり眉をひそめた。「その切符を売らなければならない。礼拝が終わったらすぐに駅へ行って、切符を払い戻しなさい。」——「でも、それはできません、神父様。先延ばしにはできないんです。」

「チケットを返却するよう命じる！ 今日中に返却しろ、聞こえたか？」——そして神父様は怒りに任せて私の足を踏みつけた。私は我に返った。「ごめんなさい、神父様、ごめんなさい、お許してください。今すぐ行って返してきます。」——「そう、今すぐ行って、そこから私のところに帰ってきなさい。まだ礼拝に間に合うから」——と、神父様は私に祝福を与えながら言った。神父様がこれほどまでに私に厳しい態度をとったことは、これまで一度もなかった。

切符を返却して、私は教会に戻った。心は穏やかで、神父様の言うことを聞いたことが嬉しかった。さて、神父様は今、何とおっしゃるだろうか？

神父様は陽気で満足そうな様子で私のところへ出てきて、「返却したのか？ それならよかった。では、いつ出発するつもりだ？」——「出発するなんて？ もう切符を返却したじゃないですか」——「そうか、それなら明日行って、新しい切符を買ってこい。今から、家に帰る途中で駅に立ち寄って、順番待ちの登録をしておけばいい。一晩中並ばなくていいから、家に帰って寝なさい。朝になってから来て、切符を受け取ればいい。」私が口にしたのは「はい」という言葉だけだった。駅へ向かう道中、私は考えた。「神父様はいつも私を気遣ってくださっていたのに、なぜ今になってこんなに急かすのだろう？」

駅にはすでにリストを持った男性が立っていて、受付が始まったばかりで、私は7番目でした。私はその男性に、すでに一晩も苦しんだことを話すと、彼は言いました。「私はどこにも行きませんから、家に帰ってください。点呼のたびにあなたの名前をマークしておきます。『明日は朝8時までに来てください』』」と言って、私の名字に印をつけてくれました。

翌朝、私は駅に着き、列に並んで切符を受け取った。

出発前に祈祷会が行われ、神父様が私に大きなプロスフォラを渡し、祝福してくださったので、私はその場を後にした。

私たちの列車がヴォルガ川に近づき、チャパエフスク駅に停車したとき、乗客たちがこぞって自分のコンパートメントから飛び出し、廊下の窓に顔を押し付けているのが見えた。私も外に出た。「どうしたの？」と尋ねた。「」。ある乗客が私を窓際へ通してくれた。隣の線路には、乗客用車両が互いに重なり合って積み上がっているのが見えた。それらは次の線路も塞いでいた。いくつかの車両は、まるで廃品置き場のように垂直に立っていた。皆が恐怖に包まれた。乗客たちは車掌に質問を浴びせた。彼女はこう説明した。「私たちと同じような特急列車、水曜日にカラガンダを出発したものが事故に遭ったんです。全速力で貨物列車の最後尾に突っ込んでしまって、そう、車両が次々と積み重なってしまったんです。ここは本当に恐ろしい光景でした！ クイビシエフからは救急車両が運ばれてきた。でも、これらの車両はすぐには撤去されないだろう。処理に手間がかかるからね。貨物列車はチャパエフスクを通らず、迂回させられているのよ。」

私は寝台室に戻り、壁に向かって棚に横たわり、泣き出した。「お父様、お父様！ 愛するお父様！」

1959年、私はモスクワへ完全に移り住んだ。父は私を見送ってくれ、ただ「もっと頻繁に会いに来てね」と言うだけだった。私は休暇のたびに父のもとを訪ねた。父は、それがめった

にないことだと話していた。1965年、父の体調が著しく悪化したという知らせが届いた。私は手紙で、父のそばでもう少し長く暮らしたいと伝え、祝福を求めた。返事として電報が届いた。「父が許可した。来なさい、待っている。」私は1965年の秋に仕事を辞め、カラガンダへ向かった。父上は、1963年に私が最後に訪ねた時と変わらない様子に見えました。その容態は命に関わるようには思えず、父上は回復し、すべてが以前通りになるだろうと思っていました。時には、父上の容態が良くなり、まもなくまた皆に会えるようになるのではないかと思わせることもありましたが、しかし、そうはなりませんでした。

神父様が亡くなってから10日後、私はモスクワの自宅へ帰った。モスクワではカザン駅からコムソモールスク広場へ出た。すべてが子供の頃から馴染みのある光景だったが、どこか遠く感じられた。どうすれば慣れるのだろうか？ 心の拠り所であるミハイロフカからこれほど遠く離れて、どうやって生きていけばいいのだろうか？

痛みと後悔で胸が締め付けられた。バチューシュカがこう言っていたのを思い出した。「また5年も来なかったのか？」——「そんなことはありません、バチューシュカ、5年もなんて」。私がモスクワに引っ越して以来、毎年彼を訪ねていなかったことに、彼は不満を抱いていたのだ。あの年月を取り戻せたらいいのに！

プロトディアコン・ヴァシリー・デネジキン

1937年、私と姉は第58条に基づき、10年間の強制収容所への収容を宣告された。この刑期を私たちはカルラガで服役した。1943年の復活祭、第19ドリン分署に収容されていた時、私は初めてセバスティアン神父の話を耳にした。当時、カラガンダからプロスフォラと「迷わず召し上がってください。これはオブティナ・プスティニの修道士、セバスティアン神父が奉納したものです」というメモが届けられました。聖なる復活祭の日にプロスフォラで断食を解くことができ、私たちは大変喜びました。しかし当時は、神父様をこの目で見たり、私たちに必要な霊的な支えを神父様から受けたりする機会がありませんでした。

長い年月が待ち続けられました。1947年、私は収容所から解放され、ウスペンスキー鉾山への流刑に送られました。私の姉も解放されました。私たちは、妹が私と一緒にウスペンスキー鉾山で流刑生活を送れるよう、許可を取り付けました。1951年、故郷から末の妹オルガが私たちのところへやって来ました。彼女にとって、田舎で一人暮らしをするのは大変でした。知人たちがオルガに、カラガンダのセバスティアン神父のもとを訪ねるよう勧めてくれた。彼女はそこへ行き、神父は彼女がカラガンダに残り、メルコムピナートで働くことを祝福してくださった。それ以来、姉との文通を通じて、私たちも神父との距離が縮まっていった。

神父様はカラガンダだけでなく、ロシアの各地でもよく知られていました。神父様のもとを訪れ、その祝福を受け、霊的な指導と慰めを味わった人は皆、神父様への良い思い出を胸に抱いていました。私たちと親交のあったプロトディアコンのヤコフは、私がカルラガで服役していた際に共に過ごした人物ですが、その後、すでにウラジーミル教区に所属していた彼は、私たちに次のように手紙を送ってくれました。「あなた方の妹のオルガさんがメルコムピナートに就職したと書いてありますが、私も45年と47年にそこを訪れたことがあり、セバスティアン神父も頻繁にそこを訪れていました。神父にお会いし、お話を伺うことは、私にとってこの上ない喜びでした。」また別の手紙では、次のように記していました。「『新しい戒めをあなたがたに与える。互いに愛し合いなさい』。愛——これこそが真の奇跡である。セバスティアン神父が重要なのは、まさにその点にある。すなわち、彼は自らの生涯をもって私たちの生き方を肯定し、愛の教えの真の使徒となっているのだ。」そして、その後に次の詩が添えられていました：

疑念と嘘と神聖冒涇の時代、
狂気の世界が血にまみれているとき、
彼は異民族間の兄弟愛を説き、
その言葉は福音の愛に満ちている。

虚栄に満ちた不必要な論争には加わず、
彼は、十字架にかけられたキリストの弟子として、
すべての打ちひしがれた者、悲しむ者、病める者へ、
十字架の重みに耐えかねて弱り果てたすべての人々の元へ。
そして、霊的な眼で魂の奥底を見透かし、
悲しむ者と共に悲しみ、病める者を助けようと急ぐ。
彼は私たちにとって、修行者であり、預言者であり、
この暗闇の夜に、灯台のように輝いておられます。

この手紙は、私の中に神父様に会いたいという思いをさらに強く呼び起こした。そして53年、受難週に、炭鉱での事故で負った脳震盪の検査のために職場から一週間の休暇をもらおうと、私は大急ぎで荷物をまとめ、最初の列車でカラガンダへ向かった。到着すると、私はニジナヤ通りにある59番地の家を見つけました。その日は「清めの木曜日」でした。神父様は家にいませんでしたが、ほどなくして戻ってこられ、その後、洗礼を受ける乳児が連れてこられました。私は教会の儀式をあまりにも恋しく思っていたので、神父様に洗礼式に立ち会うことを許可してほしいと、あえてお願いしました。神父様は許可してくださいました。洗礼の後、神父様は横になって休まれ、修道女たちは食事の支度を始めた。そして、彼女たちは私にディミトリ・ロストフスキーの『聖人伝』を手渡し、声に出して読むよう頼んだ。長い病気の後に回復しつつある体が、貪るように食物を受け入れ、吸収するように、私もまた、霊的な糧を渴望していたため、熱心にその本の朗読に取りかかった。

ほどなくして神父様が部屋から出てきて、祈りを捧げ、私たちは食卓についた。私は神父様と会話を交わし、私たちが文通をしている知人のプロトディアコンについて触れ、食卓のその場で彼の手紙の内容を暗唱した。修道女たちはその詩を大変気に入って、書き写してほしいと頼んできた。私は神父様を見上げて、「神父様が祝福してくださるなら、書き写します」と言いました。神父様は少し間を置いて、微笑みながらこう答えました。「それだと、あなたは投獄されてしまうでしょう。」神父様は自らの名声を求めておらず、その後も私たちは何度もそのことを実感することになりました。

昼食を済ませ、礼拝——「十二福音書」の朗読——の準備を始めた。神父様は私を同行するよう誘ってくださり、私たちは西通りにある礼拝堂へ向かった。そこで私たちは小さな部屋に入り、そこには三人の修道女がいた。そのうちのひとり、アナスタシア修道女はベッドに横たわり、うめき声を上げていた。神父は「どうしたのですか、修道女？」と尋ねた。「頭が痛いのです、神父様。」「それなら、なぜストーブのそばに横になっているのですか？ここは暑いですよ。」その後、神父は祭壇に入り、礼拝に必要なものをすべて用意し始めた。その祈りの家での礼拝の許可は得られておらず、この日はポリ・モルドフカの家で礼拝が行われていた。そこには聖歌隊員たちもやって来て、3つの部屋からなるその空間は祈る人々で溢れかえっていた。私は聖歌隊員のそばに立ち、祈りを捧げながら、喜びのあまり我を忘れ、時折「これは夢ではないだろうか？」と自問していた。

聖骸布の埋葬礼の翌日、私は神父様に懺悔をした。幼い頃から懺悔に慣れてはいたが、この時、神父様の懺悔は特別であり、悲しみよりも愛に満ちていると感じた。数年の間に私の心に溜まっていたすべてを打ち明けたとき、神父様は私にエピトラヒリオンを羽織らせて、赦しの祈りを唱えてくださいました。すると、思わず涙が頬を伝いました。まるで新たに生まれ変わったかのような、心の安らぎを感じました。

聖土曜日の夕方、私は姉のオルガと共に祈りの家へ行った。そこには大勢の人が集まっており、皆、クーリチやパスカを聖別してもらうために持参していた。私たちは神父様を待っていたが、神父様はミハイロフカの各家庭を回り、パスカを聖別していた。警察がやって来たため、人々は動揺し、こう言っていた。「なぜ神父は家々を回っているのか？祈りの家で礼拝を行えばいいではないか。」まもなく神父様がお越しになり、警察が来て、祈りの家で礼拝を行うよう命じたと伝えられた。神父様も動揺され、「彼らは書面による許可を出したのか？」と尋ねられた

。「いいえ。」 「それなら、礼拝はできない。皆、家に帰ってくれ。メルトコンビナートの連中は、少人数のグループに分かれて、ニジナヤ通りにある私たちのところへ来てくれ。そこでイースターのパンを祝福してやる。」 私たちは中に入り、神父様がイースターのパンを祝福すると、メルトコンビナートの連中はダムをまっすぐ横切って家路につき、道中ずっとイースターのイルモスを歌い続けた。 夜中の2時に製粉工場に到着すると、私と姉、そして他の信者たちは復活祭の早課を歌い、昼の祈りを捧げ、断食を解いた。翌朝、少し休んだ後、グループになって製粉工場内を歩き回り、復活された主を賛美した。 夕方、私たちはミハイロフカへ向かい、そこで神父様がご自宅で晩課と早課を執り行われました。 礼拝の後、神父様は、明日の正午の礼拝をスタハノフスキー通り8番地で行うことを告げられました。朝、広々とした家の中で大勢の参列者が非常に手狭な状況にありましたが、礼拝は荘厳に、祈りの雰囲気の中で執り行われました。 礼拝の後、皆で食事を共にしましたが、そこでアナスタシア修道女のことをよく覚えています。彼女はとても喜びに満ちていて、私にイースターの料理を次々と振る舞ってくれ、私の心も彼女と共に喜びに満ちていました。

復活祭の3日目と4日目も、同じスタハノフスキー小路で礼拝が行われました。このような状況下で、長年にわたり毎日礼拝を執り行うには、どれほどの忍耐が必要だったことでしょう！

私の休暇も終わりに近づき、家に帰らなければなりませんでした。神父様から祝福を受け、妹に別れを告げて、私は無事にウスペンスキー鉾山に戻りました。そこでは姉が私を待っていました。 神から授かった霊的な慰め、とりわけ神父様との出会いに、どのように神に感謝すればよいかわかりませんでした。霊的な糧を味わった人は、長い間、心の中で神の恵みの安らぎを感じ続け、この貴重な霊的な真珠をますます手に入れようと願うものです。

1954年、私たちは大きな試練に直面することになった。モスクワから信頼される役人が鉾山にやって来て、私たちは「永住誓約書」に署名した上でここに留まることになり、無断で立ち去った場合は長期の懲役刑に処されると告げた。それは私たちにとって大きな打撃だった——何しろ、2、3年後にはカラガンダへ移住できると強く期待していたのだから。 私たちに残された唯一の慰めは、神父様のところへ行き、悲しみを打ち明けることだけだった。そして1955年のクリスマス、上層部の許可を得て、私は3日間カラガンダを訪れた。神父様は私の話を注意深く聞いてくださり、少し間を置いてこう言われた。「恐れることはありません。 これらすべては次第に過ぎ去り、あなたはカラガンダに定住することになるでしょう」と。まるで大きな重荷が私の肩から降りたようだった。

その同じ年、職場でまた休暇を取得した私は、再び神父様のもとを訪ねました。神父様は、メルコムビナートに住む姉の家に滞在することを祝福してくださいました。姉の家には、他にも3人の若い女性が同居していました。私の姉は神父様を深く信仰し、神父様に献身していました。 彼女は、バチューシュカがメルコムビナートを訪れたこと、彼の霊的な教え、そしてバチューシュカが多くの人に与えていた物質的な支援について、私にたくさん話してくれた。「ある春先のことよ」と彼女は語った。「私たちのところのジャガイモが底をついてしまったの。私たちは座って、『市場に行って、せめて少しでもジャガイモを買わなきゃ』と話していたわ。すると窓の外を見ると、そりでジャガイモの袋が運ばれてきていて、後ろではバチューシュカが杖でそれを押して手伝ってくれていたんです。」 そうして私とオルガは語り合い、彼女はこう言いました。「バチューシュカが彼の霊的な子らの葬儀を執り行うのを見ていると、私もバチューシュカに葬儀を執り行ってもらいたいという願いが湧いてくるの。 神父様が葬儀を執り行い、そのために祈ってくださる方々の魂は、きっと至福に満ちていると思います。」 そう彼女が語ったところ、主はその願いを聞き入れてくださいました。ほどなくして、私たちのオルガは肝臓がんと診断されました。姉は病気の間、驚くべき忍耐力を示しました。彼女は入院を拒み、いかなる薬も服用せず、すべてを神の御心に委ねました。 神父は頻繁に彼女を見舞った。オルガが亡くなる約3週間前、姉は夢の中で、まるでオルガの部屋にいるかのように感じ、オルガがこう言うのを聞いた。「見て、神父が私のために用意してくれたものよ。」 クローゼットを開けると、そこには黄金の光を放つ服と、同じように黄金の冠があった。 長姉はこの夢を見た翌日、すぐにカラガンダ

へ赴き、そのことを神父に話した。神父はこう言った。「私が彼女のために用意したのではない。主が、彼女の忍耐を称えて、修道服を用意するよう祝福してくださったのだ。」そして、オルガに修道服を着せる儀式を行った。オルガが亡くなった時、神父は彼女の葬儀を執り行った。それは1956年4月1日のことだった。葬儀の後、ウスペンスキー鉾山へ戻る途中、私は悲しみに沈みながらこう考えた。「いつまたカラガンダに来られるだろうか。いつ教会で祈り、神父様や、私の心に大切な存在となったすべての人々に会えるだろうか？」しかし、神の御心はそうはならなかった。2週間後、モスクワから特別な目的の小包が届き、その内容は次の通りだった。「1956年4月10日、ソ連検事総長の決定により、あなたに対する追放処分は解除された。完全な市民権を有する者として、あなたはソビエト連邦全域を自由に移動することができます。」私は郵便局員だったため、この喜びを自ら体験すると同時に、他の人々の喜びにも分かち合うことになった。ロシアの隅々まで、家族や親しい人々への電報が飛び交い、転出に伴う退職届が次々と提出され、手続きは滞りなく進められた。私も退職願を提出した。郵便局長は親しげに私の手を握り、退職願に署名してくれた。カラガンダへの移住という、私たちの念願が叶ったのだ。ささやかな荷物を急いでまとめ、車に積み込んだ後、私は姉と共にメルコムビナートのオルガのマンションへ向かった。それは復活節の七日目の水曜日だった。そして翌日は、オルガの死から40日目にあたる日だった。神父様とメルコムビナートの皆が彼女の家に集まった。

復活祭の日々が過ぎ、その後にラドニツァが訪れ、私は仕事を決める必要がありました。神父様は、教会の倉庫係として働くことを祝福してくださいました。当時の教会長老はパヴェル・アレクサンドロヴィチ・コヴァレンコ氏で、私に課された職務を順調にこなしていたため、彼は私を高く評価してくれました。しかし、知らず知らずのうちに、神父様の祝福に背いてしまうこともあった。ある秋の日のこと、使徒兼福音記者ヨハネ・神学者の祝日の前、教会管理人が私をドゥボフカの集落へ送り出した。そこでは、私たちの作業員たちが、普段神父様が礼拝を行っていた家の修繕作業をしていた。私は、作業が終わりに近づいているのを見て、作業員たちが「何時まで働けばいいですか」と尋ねてきたとき、5時頃には終わるだろうと考え、5時まで働くようにと答えました。彼らはその通りにしました。そして、ミハイロフカに到着して、同じく5時に始まった徹夜礼拝に参加した時には、すでに礼拝の半分が過ぎていた。神父様は特に聖ヨハネ・テオロゴスを敬っておられたため、私を呼び寄せて厳しく叱責された。私は謝罪したが、この出来事は長い間私の記憶に残った。

神父様は、信徒たちが休暇を利用して他の土地の親戚や知人のもとへ出かけることを好まず、よくこうおっしゃっていました。「私はここ二十五年、どこにも行っていないし、行く気もない。聖なる父たちはこう言っている。『修道院をどのような状態で出て行けば、その状態で戻ってくる』と。」旅の途中や休暇中、様々な人々と交流することで、長い時間をかけて苦労して積み上げてきた霊的なものをすべて散逸させてしまうのだ。」とある信徒はこう語っていた。「戦争が終わって数年後、親戚たちが私を呼んで、会いに来てほしいと言うようになった。私は神父様に祝福を求めに行きましたが、神父様は祝福してくださらず、『君には牛がいるだろう。国营農場に行って、冬の飼料代を稼いでこい』とおっしゃいました。」私は家に帰り、神父様が実家への帰省を祝福してくれないと家族に話しました。すると彼らは反論し、『君は神父様にうまく説明できなかっただけだ。私たちが直接行って、神父様を説得してくる』と言いました。妻と娘が行き、何年も会っていないことを理由に懇願したところ、神父様はついに祝福してくださったのです。私は実家へ行き、親族と再会した。そこでの別れの席では、すっかり慣れていなかった酒も振る舞われた。秋になって家に戻ったが、家畜には飼料が残っていなかった。しかし何より、昔の病気が再発してしまったのだ。」このことから、神父様の言葉は最初の一言から聞くべきだという結論が導き出せる。

神父様は、助けを求めてやってくるすべての人々の世話を焼いていました。そうして、オデッサで過酷な状況に置かれている、オブティナ・プスティニで知り合った半身不随の司祭が、神父様にカラガンダへ連れて行ってほしいと頼んでいることを知りました。そして神父様は断り

ませんでした。その司祭は連れてこられ、独立した小屋に収容された。そこでは手厚く世話をされ、頻繁に礼拝のために教会へ連れて行かれた。司祭は涙ながらにバチューシュカに感謝し、2年後に適切な準備を整えてこの世を去った。

しかし、時には、神父が助けた人々によって、神父に悲しみがもたらされることもあった。例えば、1950年代初頭、修道士アントニーがバチューシュカに助けを求め、バチューシュカは彼を受け入れ、共に奉仕することを祝福した。この修道士は堂々とした風貌と美しい声の持ち主だった。彼はバチューシュカの信徒たちの多く、中でも最も親しい者たちさえも、自分の側に引き込んでしまった。アントニー神父は、バチューシュカを教区外へ送り出し、自らその教区を司牧したいという願望を抱いた。その目的のために、彼はアルマアタへ赴き、ニコラエ大主教を訪ねた。バチューシュカは、彼と共に、教区助祭であり監査委員会の委員であるパヴェル・クズミッチの同行を許可した。

「私たちがニコライ大主教の応接室に入ったとき」と、後にパヴェル・クズミッチはこう語った。「アントニー神父は、セバスティアン神父は年老いて体も弱く、教区ではグルシャ修道女がすべてを仕切っている、と言い出したのです。」「そうか、わかった」と大主教は言った。「セバスティアン神父を定年退職させ、君をその後任に任命しよう。」その言葉を聞いたとき、私は涙を流し、大主教の足元にひれ伏して、キリストの名において、神父を定年退職させないでほしいと懇願した。「だって、父上は多くの人々を支えているのです。その中には病人や麻痺した人もいます。ドリンカから解放された修道士パルメンもその一人ですが、父上は彼も自分の扶養下に置いています。父上の助けがなければ、彼らは死んでしまいます。」そうして私は涙ながらに主教様を懇願した。主教は、アントニー神父が自分を欺いていたことを悟ると、椅子から立ち上がり、私のところへ近づいてきて、膝から立ち上がらせながらこう言いました。「兄弟よ、そんなに泣かないでくれ。セバスティアン神父は今の場所に留めておく。これまで通り奉仕させよう。落ち着いてくれ。」こうして、パヴェル・クズミッチはバチューシュカを守ったのです。

1957年、ペトロパヴロフスク・クスタナイ教区が設立され、カラガンダもその管轄下に入った。この教区の主教座には、カルラグから解放されたヨシフ（チェルノフ）主教が任命された。彼は頻繁に私たちのところへ訪れるようになった。カラガンダには、第2鉦山、ティホノフカ、ミハイロフカの3つの教区があった。私たちの教区は、その祈りの精神によって主教に大変愛され、カラガンダの他の教会で礼拝を執り行う際も、彼は必ずバチューシュカのところに泊まりにやって来て、しばしば彼と語り合った。

1958年、私たちの教会長であったパヴェル・アレクサンドロヴィチ・コヴァレンコが聖職に就きました。神父様は私を呼び出し、教会長の職を打診されました。私は、経理や建設業務における経験不足を理由に断り続けましたが、従順の精神からこの職を受け入れ、20年間にわたりこの分野で尽力することになりました。

父上は、アルヒマンドリトの位に叙任された際、深い謙虚さをもってそれを受け入れられました。ある日の礼拝の後、ミトラを手に持ちながら、父上はこう言われました。「ほら、これがミトラだ。これが救いになるとでも思うか？ 信仰に基づく善行だけが救いとなるのだ。」父上は、実際に福音書の言葉「あなたがたのうち、誰かが第一になりたいと思うなら、すべての人のしもべとなりなさい」を実践しておられました。」という言葉を実際に実践しておられました。彼は修道者としての安らぎを犠牲にし、感謝の代わりに非難を受けることもよくありました。聖職者や修道者の中には、長老としての奉仕の本質を理解せず、彼に「ほら、セバスティアン神父はいつも若い女性たちとつるんでいる」と指摘する者もいました。そのような場合、神父は決して弁明も自己弁護もしなかった。彼は、キリスト教徒の魂を救うことを自らの聖なる義務と考えていた。彼の牧者の心には、自己犠牲的なキリスト教の愛が宿っていた。彼は、主が彼に託された人々のため、そして人生の海の波に翻弄される全世界のために、神へと熱烈な祈りを捧げた。神父は生者のために祈り、とりわけ故人のために祈ることを愛しておられた。この愛は、彼の最

期を象徴するものだった。彼は生者たちと共に復活祭を迎え、ラドニツァの日に天の御国へと旅立ち、故人たちと復活の喜びを分かち合ったのである。

この文章を綴る者は、長老の父のような愛と祈りの力を幾度となく身をもって体験し、私たちにとってかけがえのない彼の言葉や行いを忘却に委ねることのないよう、記憶に残っていることを簡潔な物語として記した。

プロトイェレイ・エフスタフィイ・プロコプチュク、カラガンダ市 聖母マリアの降誕教会

長老や長老たちについては、幼い頃から知っていました。私はウクライナの敬虔な家庭に生まれました。私たちの家系には聖職者や修道士がおり、そのため家ではしばしば霊的な話題、とりわけ長老について語り合われていました。そうした会話の中で、私の心に一つの願いが深く刻まれた。それは、自分の人生において、どうすれば長老に出会えるかということだった。しかし、主の御心により、1945年、私の意志に反して、私は炭鉱で働くためにカラガンダへと連れて行かれた。道中、私は「この人里離れた草原には、無神論者しか住んでいないだろう」と考えていた。しかし、実際には、自由雇用者以外にも、鉱山では多くの特別移住者が働いており、その大半は信仰心のある人々だった。そして彼らから、ここ、ステップにあるポリシャヤ・ミハイロフカという集落に、セバステイアン神父という長老がいると聞いた。それを聞いて、私は彼のもとへ赴こうと決意した。ポリシャヤ・ミハイロフカはキロヴァ鉱山から10キロメートルの距離にあり、当時は馬車しか交通手段がなかったため、馬を持っていなかった私は、何とか自転車を手に入れてミハイロフカへ向かった。そこで「ニジナヤ通り」を見つけ、番地を頼りに神父様の掘っ立て小屋を探し当て、自転車から降りて、ドアの前に立ち止まった.....すると、恐怖に襲われた。私のような罪深い者が、どうして長老の部屋に入ることができるだろうか？ 私はしゃがみ込み、泣き出した.....しかし、それでも気力を振り絞って、中に入ることにした。ノックすると、マートゥシュカがドアを開け、部屋に入れてくれて、座るように勧めてくれた。バトゥーシュカは家にいなかったが、彼が戻ってきたとき、私は立ち上がって祝福を受けようとした。しかし、バトゥーシュカは私の横を通り過ぎて炭入れのところへ行き、十字を切って三度お辞儀をし、私のところに来て祝福してくれた。私は彼を見つめながら、「ほら、主が私をこの長老のもとへ導いてくださったのだ」と思った。それは1948年のことだった。私には、私生活に関する質問を神父様に伺いたいことがあった。ある女性と知り合い、彼女と教会で結婚式を挙げたいと思っていたのだ。神父様は私の話を聞き、彼女と一緒に訪ねてくるよう祝福してくださった。私たちが到着すると、バチューシュカは私たちを結婚式で結び、教えを授けてくださいました。それ以来、私たちは頻繁に彼のもとを訪れるようになり、私たちは「バチューシュカの弟子」となりました。そして、バチューシュカは会話の中で、時折私を「エフスタフィイ神父!」と呼ぶようになりました。私はこれに特に意味を見出さず、「神父」とは「一家の父」という意味だと思っていました。しかし、アレクサンドルの母がこう言った。「神父様があなたを『エフスタフィイ神父』と呼ぶのですから、きっと聖職に就くことになるでしょう」。そうして、私は神学校へ行って学びたいという願望を抱くようになった。そのことを神父様に話すと、彼は祝福してくださり、私は準備を始めた。しかし、どうしても行く決心がつかなかった。一年が過ぎ、また一年が過ぎ.....もう学ぶことはないだろうと決心していたある日、家で建築作業をしていた時、突然、信じられないほどの力で、私の意識の中に「神学校へ行く!」という考えが浮かびました。私はすぐにすべてを放り出し、ベンチに座り、再び「行かなければならない!」と呟きました。私は立ち上がり、妻のところへ行き、きっぱりとこう言いました。「勉強しに行くよ。」それだけでした。神父様が私に祝福を授けてくださり、私はそこへ向かい、入学して学び始めました。

卒業間近になった時、ロシアに残って奉仕を続けるよう提案がありました。私はそのことを神父様に手紙で伝えましたが、神父様は「彼に、ここへ来るように書き送れ」と返事をくださいました。そして私はカラガンダに戻りました。私は聖職に就く必要があり、神父様もそのことを私に話してくださり、さらに、人生をすべて神と教会に捧げるべきだともおっしゃいました。

とはいえ、父上は強く迫ることはありませんでした。父上の言葉は、「君がどうするかにかかっている」というものでした。そして私はまた躊躇し、先延ばしにしてみました。司祭になりたいという気持ちはありましたが、なぜ聖職に就かなかったのか、はっきりとは説明できません。おそらく、神の御心によって、そうなったのだと思います。しかし、私は家族を養わなければならなかったため、再び炭鉱で働き始めました。そして、暇な時間には神父様の教会へ通い、聖歌隊で歌っていました。教会では、修道女たちが私にこう言いました。「長老の祝福はそう簡単に消えるものではありません。あなたはやはり司祭になるべきです」と言われました。もっとも、鉱山の仕事も私はとても好きでした。私は最優秀の労働者と見なされ、生き延びるのが難しいような複雑な作業もこなしていました。そして仕事に没頭するにつれ、教会に行く頻度はますます減っていき、神父様の体調も衰えていきました。

そしてある日、私は早朝の5時に起きてシフトに向かおうと外に出た。外は暖かかったが、曇っていて、小雨が降っていた。空を見上げると、ふと「神父様が亡くなった!」という感覚が湧き上がり、まるで何かが途切れたような気がした。部屋に戻り、家族に「神父様が亡くなった」と告げると、彼らは「え? ということ? どうして知ってるの?」と驚いた。ちょうどその時、隣人が窓を叩いてきた。彼女も電話で「神父様が亡くなった」と知らされていたのだ。

私は炭鉱へ行き、仕事を休んでミハイロフカへ向かった。

その翌日、私たちは父を葬った。そして、墓地から帰る途中、私はこう思った。「父が亡くなった——これで私のすべてが失われた」。私の志も、神学校での学びも——すべてが無駄になった。父が亡くなった——すべてが失われ、私自身も失われたのだ。そんな気持ちに駆られ、私には何も喜びを感じられなくなった。家族も、仕事も、人生も。ついには、自分自身が救いようもなく失われてしまったのだと、この世にはもう居場所がなく、来世にもないのだと結論づけてしまった。私を待っているのは地獄だけ——それだけだ。そうして私は、父の葬儀の後、そう結論づけ、そのことについて誰にも一言も話さなかった。もう誰も私を助けてはくれないと思い、誰にも助けを求めなかった。そして、葬儀の翌日の夜、夢の中で私はある庭を見た! しかし、それがどんな庭だったか、言葉では言い表せない! その庭には、果ても縁も見えない。そして、とても背の高い木々が立ち並び、その木々の向こうには、木々よりもさらに高く、巨大な黄金のドームと、黄金に輝く十字架が見えた。私はそれを見て驚いた。なんて素晴らしい教会だろう! なんて壮大な大聖堂だろう! そして、その庭、この修道院には太陽はないのに、光が溢れ出ている。私はその庭の端っこに足を踏み入れた。前方を眺めると、バチューシュカが歩いてくるのが見えた。黒い修道服に、小さなスコフィアを被り、手には杖——いつもの姿だ。しかし、彼は輝きに満ち、若返ったようで、その身から力が感じられる。そして、一人の修道士が彼に付き添っている。まるで誰かが私にこう言ったかのようだった。「この修道士は、バチューシュカに天国の住処を見せているのだ」と。私は祝福を受けに近づくと、神父様は私を祝福し、「エフスタフィイよ、私のところへ来なさい!」とおっしゃいました。神父様はそう二度おっしゃったので、私はその手に口づけをしました——その手は、いつものように温かかったです。

この夢、この幻視、神父様の言葉と祝福が、私を完全な絶望から救ってくれたのです。

とはいえ、私は神父様の教会へ行くのをやめてしまった。職場の仲間たちが、第2鉱山の教会で一緒に歌うよう誘ってくれたので、私はそこへ通うようになった。

それから10年が過ぎた。私は相変わらず合唱団で歌い、炭鉱で働いていた。1976年、ある採掘現場で次の作業を行う必要があった。それは、6メートルの坑道天井から吊り下げられていた局所換気用ファンを、坑道掘削作業中に取り外すことだった。安全のため、ファンの下には丸太でできた棚が設置されており、万が一ファンが落下してもそれを支えるようになっていた。私は作業に取りかかった。まず、ファンから電気系統に関連するものをすべて外し、ファンは吊り金具にぶら下がったままになった。さて、吊り金具からファンを外すには、吊り金具にファンを固定しているピンに打撃を与えて、そのピンを打ち抜く必要があった。そうすれば、ファンは棚の上に落下するはずだった。私はラックを点検し、次のように計算した。隣の作業台に立ち、ピンに一撃を加えれば、ファンはラックの上に落ちる。もしラックがその重さに耐えきれず崩れても

（ファンの重さは300kgあった）、私は隣の作業台にいたので安全だ。そして実行に移した。ピンに一撃を加えると、ピンは少し沈み込み、わずかに留まった。もう一度叩くと、送風機は棚の上に落ちたが、棚はその重さに耐えた。しかし、私の足元ではすべてが崩れ、私は下へ落ちていった。そして、足元のすべてが崩れ落ちたとき、その瞬間に私の心を突き刺した最初の考えは、「これはすべて、長老の言葉を聞かなかったせいだ!」というものだった。そして私は6メートルの高さから背中から泥沼の中に転落した。投光器付きのヘルメットが横にずれて、その光が周囲を照らし出した。すると、棚の端が崩れ落ち、換気扇が梁の上をまるで滑り台のように転がり、まっすぐ私に向かってくるのが見えた。それを見た瞬間、別の考えが私の脳裏をよぎった。「左側を向いて!」これらすべてはほんの一瞬の出来事だった。私は奇跡的に横向きになることができ、送風機は私の横を通り過ぎ、骨盤をほんの少しかすめただけだった。怯えた作業員たちが駆け寄ってきた。私は立ち上がろうとしたが、足が動かなかった。「救急車」が坑道に降りてきて、私は地上に運び出され、病院へ搬送された。

そして、病院で過ごした最初の夜、私はまた不思議な夢を見た。私は病院にいるのだが、その病院は地上ではなく、空中に浮かんでいる。そこは静かで明るく、しかしその光は、この世のものとは思えないような光だった。私は横たわり、他の患者たちも横たわっている。すると、当時すでに他界していたアレクサンドル・クリヴォノソフ神父が、まさに空を歩いてくるのが見えた。開いた窓から病室に入ってきて、私のところに近づき、真っ白なりネンと白いプロスフォーを二枚手渡してくれた。そして私は目を覚ました。心が喜びで満たされ、その夢を見てから、私は精神的に活力を取り戻した。

病院では三ヶ月を過ごした。退院した時には、もう松葉杖なしで歩けるようになっていた。「なるようになるさ!」と自分に言い聞かせ、杖に寄りかかりながら、ゆっくりとミハイロフスカヤ教会へ向かった。歩きながらこう考えた。「もし聖歌隊に受け入れてもらえれば、歌うつもりだ。もし受け入れてもらえなくても、他の信徒たちと同じように、ここに通い続けるつもりだ」と。教会に着く頃には、すでにケルビムの歌が歌われていた。中に入ると、涙がこぼれ落ちた。十字を切って頭を下げ、心の中で神父様にこう訴えた。「神父様、迷い子となったこの息子を赦してください!」すると、聖歌隊員たちが私を見つけ、聖歌隊席へと呼び寄せた。そして礼拝が終わった後、聖歌隊席でアナスタシア修道女が私にこう言った。「あなたに聖職に就くよう勧められるでしょう。その時は、断らないでください。これがあなたへの最後の提案になるでしょう。」その時、私はきっぱりとこう答えた。「修道女様、私は準備ができています。」

しかし、時が経つにつれ、私は待ち続け、待ち続けたが、その申し出は来ず、他の人たちが叙階されていった。一度は私を飛ばされ、また別の時も飛ばされた。アナスタシア修道女もすでに亡くなっていたが、私は相変わらず飛ばされ続け、私は黙っていた。

そしてまた、ある夢を見た。聖体礼儀が行われている。セバステイアン神父が司式しているのだが、彼は司教の祭服——サッコス、オモフォール、ミトラ——を身にまとっており、すべてが金箔で飾られ、私がこれまでの人生で見たことのないほどの美しさだった。私は聖歌隊席に立ち、聖体拝領の準備をしていた。教会の中には子供たちしかいない。神父は聖杯を持って説教壇に上がると、子供たちが彼を取り囲み、聖体拝領を待っている。私は聖歌隊席から降りて、子供たちが聖体拝領を終えるのを待っていた。すると子供たちは突然道を空けて、私に「どうぞお進みください!」と言った。私は通り抜け、神父のもとへ近づくと、彼は私に二つの聖体を授けてくれた。そして、聖体拝領を終えると、私は目を覚ました。

そしてその同じ年、正教の勝利の週に、私は助祭の叙階を受け、その翌日には司祭の叙階を受けました。

こうして、30年間、まるで一日であるかのように鉱山で働き、すでに18年間、長老セバステイアンによって設立・建設された「聖母マリアの降誕教会」で聖職者として奉仕しています。

そして、主は、私がまだ子供の頃、長老を見つけないという私の心の願いに耳を傾けてくださり、今日に至るまで、私を憐れみ、戒めを与えつつ、長老の祈りの庇護の下で私の魂を守ってくださっていると信じています。

エレナ・アレクサンドロヴナ・アガフォノヴァ

私は1960年にアルマアタからカラガンダにやって来ました。当時、私は20歳でした。到着した日、ミハイロフカにはセバスティアン神父はおられず、製粉工場へ出かけていました。アナスタシア修道女が温かく出迎えてくれ、ボルシチをご馳走してくれた後、製粉工場にいる神父のもとへ連れて行ってくれました。私たちは4階建てのプレハブ住宅のそばのバス停に立っていたとき、マートゥシュカが私にこう言いました。「レーナ、こういう家の1階に住むのはいいわね！」当時、私はマートゥシュカの言葉を特に気に留めませんでした。今、私はまさにそんな家の1階に住んでいます。

メルコムピナートに着くと、ちょうど神父様が祈りを終えて家から出てきたところだった。その後に、彼の運転手であるペーチャが出てきました。神父様は私をとて優しく見つめ、祝福してくださり、アナスタシア母上はペーチャにこう言いました。「ペーチャ、レーナを抱き上げて、車まで運んであげて！」すると彼は答えました。「母上、でも彼女はあんなに大きくなっていないですか！」

神父様はとくに亡くなり、アナスタシア母上も亡くなりましたが、イグメン・ペトルは健在で、彼の祈りは私を大いに支えてくれています。

セバスティアン神父は、私がアグニア修道女のところに滞在することを祝福してくださり、その後、私の母が私のところへやって来て、神父は私たちのために一軒の小さな家を買ってくださいました。そして私は、バチューシュカが亡くなるまでカラガンダで暮らしました。バチューシュカと共に過ごしたこの時間は、私の人生で最も幸せな時期でした。当時は何の心配も不安もなく、バチューシュカの祈りのおかげで、あらゆる問題はごく簡単に解決されました。

ミハイロフカでは、父上のもとには多くの少女たちがおり、修道女たちもいました。長老の祈りは私たちを深く結びつけ、私たちは皆、まるで一つの家族のように暮らしていました。例えば、バチューシュカが懺悔を聞いておられる時、私たちは皆、息を殺して立ち尽くしていました。バチューシュカが誰かに戒めを与えたり、何かを語ったり、赦しの祈りを唱えたりすると、その瞬間、まるで一人の人間が立っていて、たった一人の人間が懺悔しているかのように感じられました。バチューシュカの慈しみによって、すべてが愛という一つの絆で結ばれていたのです。そして神父様は、この絆をとて大切にされ、よく私たちにこうおっしゃいました。「お嬢さんたち、食べても、飲んでも、眠っても、好きなだけいい。ただ、もっと穏やかに生きてほしい。」神父様は、人々の苦しい生活を見抜き、ご自身の気配りと心の温もりで、その苦しみを和らげようと努めておられました。しかし、もし誰かが試すような態度で近づいたり、心に何か悪意を秘めていたりすると、神父様はその時、非常に厳しくなられました。ある時、礼拝の後、祭壇から出て教会内を歩いていた神父様は、突然、私たちには見知らぬ一人の女性のそばで立ち止まり、予期せずほとんど叫ぶように言われました。「私が何を知っているというのか?! えっ?! 今日が何曜日で、何日かくらいは知っているが、それ以外は何も知らない！」と。その言葉はあまりにも厳しかったため、私たちは呆然としてしまった。実は、その女性は神父を試そうとして来たのだった。

それでも、私はアルマアタが恋しかった。食卓を囲んでいると、私がアルマアタのことをふと思い出すと、神父様が「レヌーシュカ、アルマアタが恋しいのかい？」とおっしゃる。そして、休暇にはアルマアタへ行くことを祝福してくださった。私が準備をしていると、父はたくさんのお金を渡してこう言いました。「ほら、これを受け取って、レヌシュカ。小銭に両替して、ニコルスキー大聖堂で、階段の両側に座っている貧しい人たちに配ってあげなさい。アルマ・アタの人々に私のことを知ってもらい、私のために祈ってもらえるように」と。そして神父様は、私がアルマ・アタで知り合いに配れるよう、たくさんパンをくれました。母のアナスタシアもアルマ・アタにパンを送ってくれました。また、アグニア修道女はかつて、ヨシフ主教宛ての手

紙を届けてくれました。私が主教のもとを訪れ、セバスティアン神父についてお話ししていると、主教はこう言われました。「彼を愛し、慈しみ、腕に抱いて運んであげなさい。」そして間もなく、神父のために椅子が作られ、私たちは神父を腕に抱いて運ぶようになりました。

ある時、神父様が亡くなる少し前、神父様の独房に多くの少女たちが集まり、神父様は永遠について——永遠の命や聖人たちの果てしない至福について——お話しになりました。少女たちは聖遺物について質問しました。「主はどのようにして遺体を栄光に包まれるのですか？」と。そしてバチューシュカは私たちと語り合い、すべてを語ってくださった。会話の終わりに、私たちを一瞥し、微笑んで、静かにこう言われた。「30年後、私の体は地中から引き上げられるだろう。」

1968年の夏、中華人民共和国側から、セミパラチンスク州のジョラノシュコル湖周辺でソ連国境を越えようとする試みが行われました。中国はカザフスタンの領土の一部を領有権を主張していたのです。当時、私はアルマ・アタに住んでいた。この時期、街の空気には不安が漂い、市民の顔には悲しみが浮かび、誰もが心を痛めていた。信者たちは朝、ニコルスキー大聖堂へと急いでいました。そして、聖体礼儀の後、ニコルスキー大聖堂の聖職者であるパヴェル・ミロヴァノフ神父〔修道名はイサアク修道士（†1991）〕が説教壇に上がり、祈りを捧げるすべての人々にこう語りかけました。「兄弟姉妹の皆さん！ 主にお祈りしましょう。天の女王と、神に愛されたすべての聖人たちに願い求め、主が私たちを憐れみ、この災いを私たちから遠ざけてくださるよう祈りましょう。」パヴェル神父と祈りを捧げていた人々は皆、ひざまずいた。神父は涙ながらに祈りを唱え、皆も祈りながら泣いていた。その後、皆が十字架に額をつき、パヴェル神父が全員に祝福を与えると、人々は静かに散り散りになっていった。

その夜、私はこんな夢を見た。ニコルスキー大聖堂での礼拝が終わり、皆が静かに散り散りになっていく。私が最後になって大聖堂の高い階段を降り、振り返って十字を切ろうとしたその時、手を上げて十字を切ろうとしたまさにその瞬間、セバスティアン神父が教会から階段へと出てきて、階段の上で立ち止まっているのが見えた。神父は白い麻の祭服を着ており、頭は覆われていなかった。神父からは光が放たれ、目は天に向けられ、頬には涙が小川のように流れ落ちていた。そして、彼の祈りの言葉はこうだった。「主よ、彼らをお赦してください！ 主よ、彼らを憐れんでください！」神父の祈りの声は、私にははっきりと聞こえた。そして、私は目を覚ました。時刻は午前3時だった。私はすぐに、アルマアタへ私を送り出す際、神父様が、アルマアタで自分のことを知ってもらえるようにと、パンとお金をくれたことを思い出した。

ヴァレリー・ザハロフ大司祭、アルマ・アタ市聖ニコラス大聖堂主任司祭

1970年代、アルマ・アタおよびカザフスタンのヨシフ（チェルノフ）大主教は、ある説教の中で次のように語りました。「私たちアルマアタ市民は、天山山脈の麓に住んでいます。一方で、この山々の美しさが人々の目を楽しませてくれることは幸せですが、他方で、山々は地震や土石流の危険を秘めています。しかし、アルマ・アタは決して土石流に飲み込まれることも、地震によって破壊されることもないでしょう。なぜなら、私たちには、ニコライ大主教という素晴らしい祈りの指導者がいるからです〔アルマ・アタおよびカザフスタン大主教ニコライ（モギレフスキー） 1874–1955年〕。10年間の強制収容所や流刑地での生活を経て、1945年から1955年までアルマ・アタおよびカザフスタン教区を統括した。中央市営墓地に埋葬されている。〕やスキハルヒマンドリト・セバスティアンといった素晴らしい祈りの人々が私たちにはいるからだ。」ヨシフ大主教はそう語った。私はそれをはっきりと覚えている。

ヴォロコラムスクおよびユリエフのピティリム大主教の回想録より

1966年、私は聖地へ向かう巡礼団の一員に選ばれた。当時、教会対外関係局の局長であり、現在はすでに故人となっているレニングラードおよびラドガのニコディム大主教が、私たちのグループを率いていた。この旅は極めて重要な任務を伴うものと見なされていた——私たちはエルサレムにおける私たちの「霊的使節団」に関する多くの問題を解決しなければならなかったからだ。

出発前日の4月初旬、私はカラガンダにいるアルヒマンドリト・セバスティアン神父に電話をかけ、旅路の聖なる祈りと祝福を請いました。しかし、私にとって予想外のことでしたが、という長老は、この旅を断るよう私に助言しました。「そうすべきだ。後でわかるだろう」と、彼は当時電話で私に言いました。その答えに私はただただ呆然とし、完全に途方に暮れ、困惑しました。一方で、私は常に長老の祝福を信じ、それに従ってきたのですが、他方で、「ミトロポリットにこの断りをどう説明すればよいのか」と考えていました。

決断はまったく予期せぬ形で訪れた。出発直前、文字通り前日の夜、私は激しい高熱に襲われ、体温は40度まで上昇した。行くことができないのは明らかだった。私はニコディム大主教に電話をかけ、この出来事を伝えた。どうやら、大主教は私の訪問が実現しないことに、その時とても落胆していたようだ。私たちは電話で話し、諸々の用件について話し合い、大主教は私の一日も早い回復を願ってくれた。

数日が過ぎたある日、突然カラガンダから電話がかかってきた——セバスティアン神父からの連絡で、すぐに彼のもとへ飛んでくるよう頼まれたのだ。その時、私はどれほど驚いたことか。長老は、聖地へのこのような重大な旅を文字通り「思いとどませよう」としていたのに、まさか「至急、飛んで来い」と言われるとは。しかし、私はセバスティアン神父の祝福に従うべく急いで行動し、それに、体調もすでにずいぶん良くなっていた。

4月16日（土曜日）、私はカラガンダに到着し、空港からすぐに長老のもとへ向かった。——彼の様子はひどく悪かった。完全に衰弱していた。——おそらく、どんな病気の時であれ、これほど衰弱した姿を見たことはなかっただろう……彼は私に、彼をスキーマ修道士に剃髪してほしいと頼んだ……すぐに準備が始まった。これ以上先延ばしにすることはもうできなかった——長老はひどく衰弱していたからだ。

主の御加護により、すべては極めて順調に進みました。衰弱と虚弱にもかかわらず、セバスティアン神父は意識がはっきりしており、私たちはその場で、彼を偉大なる天使の模範として修道衣を授けることができました。

私は、長老の生涯のまさに最期の瞬間まで、その傍らにいました。スキーマ修道服の授与式が行われたその夜、長老の容態は急激に悪化し、懺悔を行い、聖体拝領を受けました。長老は、心と体が衰えを感じていると訴えていました。

4月19日、長老は逝去されました……

アレクシイ1世総主教は、私の名宛てにカラガンダへ哀悼の電報を送り、セバスティアン神父の逝去に際して哀悼の意を表し、私が長老の埋葬を執り行うことを祝福してくださいました。

4月21日、私は教会の聖職者たちと共に追悼の礼拝を執り行い、その後、市内のミハイロフスキー墓地にてセバスティアン神父の埋葬を行った。

主であり、私たちの神であるイエス・キリストが、御自分のしもべであるスキアルヒマンドリト・セバスティアンの魂を、義人たちが安らぐ場所に導き、義人々と共に安息させ、また、慈愛に満ち、人を愛する御方として、私たちを憐れんでくださいますように。アーメン。

カラガンダの聖母マリア降誕教会主任司祭、アレクサンドル・キセレフ大司祭

1956年、私が15歳の時、タンボフ州から父神父の祝福を受けてカラガンダへやって来ました。私は学校を卒業し、両親のもとで暮らしていました。主の十字架の挙揚の日に、父上は私を

聖堂に迎え入れ、スティハールを祝福してくださいました。それ以来、祝祭日には聖堂で奉仕をするようになりました。

私が軍隊に行く時が来た。最初の身体検査の召集令状が届いたその日、神父様が私たちも住んでいたメルコムビナートまで来てくださった。私は父のもとへ行き、身体検査を受けるための祝福を求めると、父はすぐにこう予言的な言葉を口にしました。「神の御加護があれば、お前は徴兵されないだろう、シュラ。」そして実際、私が内科医のところへ行き、血圧を測定してもらったところ、高血圧と判明しました。医師は検査を指示し、私は1ヶ月、その後1年、さらに2年の延期を認められた。その後も毎年身体検査を受けたが、血圧は依然として高いままだった。そして数年後、私は兵役証書を受け取った。こうして、私は軍隊には行かなかった。しかし、最初に言われたのは神父の言葉だった。「神の御加護があれば、君は徴兵されないだろう。」

最初の4年間、私たちの家族は2部屋の小さな土造りの家に住んでいましたが、61年、父上の祝福を受けて、もう少し大きな家を購入しました。そして、父上がその家を聖別しに来た際、私たちの家に泊まってくださいました。言っておくが、神父様がメルコムビナートに来られると、すぐに人々が集まり、60人以上もの人が集まった。誰かを招待する必要などなかった。皆、自分の用事を放り出して、神父様と一緒に祈り、食事を共にするためにやって来たのだ。名前の日やその他の家族の祝いの日であれば、それは皆のための、全員の祝いの場となった。さて、神父様が私たちの家を聖別し、人々はすでに帰った後、私たちは神父様と夕方の紅茶を飲みながら座っていた。すると神父様がこうおっしゃった。「シュラ、君たちは窓にシャッターを付けるべきだ。」私は「神父様、ここには他にもやるべきことがたくさんあるんですよ」と答え、家の仕事山積みだったため、その言葉をあまり気に留めなかった。そして、こんなことが起きたのだ。2ヶ月ほど経ったある晩、祖父が住んでいた部屋の窓に、不良たちがレンガを投げ込んできました。そのレンガは祖父の頭の横をすり抜け、部屋の隅に落ちました。その時、私はシャッターを作るべきだったことを思い出し、叔父と二人で急いでその祝福に従ってシャッターを取り付けました。

神父様の言葉には無駄なものではなく、おっしゃったことはすぐに祝福として受け止め、実行に移さなければなりませんでした。

祖父との間にも、こんな出来事がありました。祖父は年老いており、認知症を患っていたため、時々、早起きして、こっそりとドアを開けて逃げ出してしまうことがありました。そんな時は、私は自転車に乗って、メルコムビナート中を駆け回って祖父を探し回りました。そしてある晩秋、すでに雪が降っていた頃、祖父が家を出て行ってしまった。私たちは一晩中彼を探し回り、翌朝、神父さんのところへ行った。「神父さん、祖父が行方不明で、どこにも見つかりません」——「まあ、大丈夫。神の御加護があれば、戻ってくるさ」——それが神父さんの言葉だった。おじいちゃんは二週間も戻ってきませんでした。病院や遺体安置所、警察への届け出など、ありとあらゆる場所を探し回りましたが、もうどうすればいいのか分からなくなっていました。私たちは神父さんのところへ行き、「神父さん、もしかして、おじいちゃんは殺されたのでしょうか？」と尋ねました。神父さんは、まるで同意するかのように、「殺されたのかもしれない」とおっしゃいました。「それとも、何か他のことをされたのでしょうか？」——「それもあり得る。」しかし、長老の最初の言葉は「神の御心次第で、きっと見つかる」というものだった。そして2週間後、隣人が祖父を家に連れて帰ってきた——バス停で彼を見かけたのだ。祖父が2週間の間どこにいたのかは、今でも謎のままである。

もう一つ、非常に興味深い出来事がある。ある年、カラガンダではジャガイモの不作があり、神父様は秋に信徒たちに、家族ごとに1袋か2袋のジャガイモを配った。その中には、3人家族である私たちの叔父にも1袋のジャガイモが配られた。冬が過ぎ、イースターの前、叔父が家に帰って妻にこう言いました。「シュラ、うちの隣人たちは、神父様の祝福のおかげでジャガイモが減らないんだ。一袋もらって、家族みんなで食べているのに、ジャガイモが減らないんだ。」「私たちもね」と妻は言いました。「ジャガイモを買わずに、冬の間ずっと茹でて食べていたの

に、ほら、まだジャガイモが残っているじゃない。」これこそが奇跡です。一見何気ないことのように見えますが、神父様の祝福によるものは、決して減ることはありませんでした。

私が神学校へ行った時のこと。

私は司祭になるつもりはなく、父上もそのことについて私と話すことは一度もありませんでした。父上の祝福のもと、私は職業訓練校を卒業し、家具大工の資格を取得して、家具工場で働きながら、暇な時には教会の手伝いをしていました。父が亡くなってから2ヶ月後、アレクサンドル・クリヴォノソフ神父が主任司祭に就任すると、彼は私を呼び出してこう尋ねた。「サーシャ、神学校へ行って勉強してみないか？」その質問は私にとって予想外で、そんなことは考えたこともなかったため、アレクサンドル神父には明確な答えを出さず、「母と相談してきます」と答えた。

その夜、母と私は夕の祈りを捧げました。私のベッドの上には父神父の肖像画が飾られていたので、私は父神父に、どうすべきか何らかの形で示してほしいとお願いしました。寝床につくと、不思議な夢を見ました。まるで父神父がペトル神父の家において、どこかへ出かけようとしているかのようでした。私はどうすべきか尋ねようとして神父様に近づこうとしたが、ある女性が先に質問を投げかけた。その女性は話を終えて立ち去りましたが、私はなぜか神父様に近づきませんでした。その間、神父様は小門を開けて外へ出ると、ヴェセンヌイ小路を通り、修道女たちが住む家の方へと歩いていきました。彼女たちの小門に着くと、それを開けて姿を消しました。私はペトル神父の家に戻ると、そこにはアナスタシア修道女が座っていたので、彼女にこう尋ねた。「修道女様、アレクサンドル神父が、神学校へ学びに行きたいかどうかと尋ねてこられました。」すると修道女は私の目をじっと見つめながら、こう言った。「あなたは、ここでもあそこでも、どちらでも幸せでいたいのですか？」

そして、この夢を見たとき——それは午前4時のことでしたが——私はその衝撃のあまり、家族全員を起こしてその話をしたほどでした。

翌朝、私はミハイロフカへ向かい、アナスタシア修道女にすべてをありのままに話しました。すると彼女は、「まあ、あのね——」と、田舎訛りで言い、「アグニア修道女のところへ行きなさい」と、私を別の年配の修道女のもとへ送り出しました。その方は私の話を聞いてから、「いや、私は何も知らないわ。アナスタシア修道女がどう決めるか次第ね」と言いました。お分かりでしょう、偉大な人々が自らを遠ざけるときに見せる謙虚さ。故人の神父様もまさにそうでした。よく私たちは彼を教会から修道室まで見送るのですが、途中で誰かが「神父様、私の娘が病気なんです、あるいは夫が病気なんです」と尋ねることがあります。「ええ、その場合は」と彼は言います。「医者に相談してください。あそこにオルガ・フェドロヴナがいますから、彼女がアドバイスしてくれるでしょう。」ご自身で祈りを捧げ、助けてはくださるものの、まるで自分からは距離を置こうとするのです。まさに、これらの年配の修道女たちも、まるでサッカーボールのように、互いに人を送り合っているのです。再びアナスタシア修道女のもとを訪ねて、「マトゥシュカ、アグニア修道女がまた私をあなたのもとへ送ってきました」と伝えます。—「まあ、いいわ」と彼女は言う。（ちょうどその頃、神学アカデミーの学生だったインノケンティ神父（プロスヴィルニン）が、バチューシュカの墓参りに来ていた。）「あそこの人、バチューシュカの墓に行って、くじを投げ入れて祈りなさい。『君が供え物を置き、彼にそれを受け取らせなさい』」

そして早朝、まだ夜明け前という時間に、私たちは墓地へ向かい、静かに祈りを捧げ、供物を供えました。すると、インノケンティ神父（当時はまだアナトリー・イヴァノヴィチという名前でした）がくじを引き、神の祝福により神学校へ行くことになったのです。こうして私は神学校に入学することになった。そして学生になってから、私はこの夢の意味を解き明かした。確かに、神父様のそばにいる間は、何も考えず、ただ心地よかったのだ。使徒たちが変容の日に言ったように、「ここにいられるのは私たちにとって良いことです。三つの天幕を建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために。私たちには何も必要あり

ません。あなたと共にいるだけで、これで十分幸せなのです」。私にとってもそうであり、何も深く考えませんでした。これを言葉でどう表現すればいいのか分かりません——ただ体験するしかないのです。ただ心が安らかだっただけで、心にはどう説明しようとも... だから私は神父様に何も尋ねず、神父様も私に何も言われませんでした。そして、私がすでに神学校の学生になっていた頃、ラヴラでは多くの祝典や様々な集会があり、総会——ピメン総主教の選出——も行われました。私はその直接の参加者であり、総会における特別の伝令役を務めていました。しかし、私は、まだ若かった頃、バチューシュカのそばにいた時に感じていたあの霊的な気分、あの霊的な恵み、あるいは魂の安らぎを、そこには感じるできませんでした。一見すれば、多くの司教たちが集い、すべてが厳粛で祝祭的であり、これらすべてが間違いなく素晴らしいものではありますが、それは別物でした..... バチューシュカのもとで感じていたあの静けさ、あの心の平安は、もはやそこにはなかった。

私たちの教会には、バチューシュカがオブティナから受け継いだ慣習に従って導入されたいくつかの伝統がある。例えば、聖三位一体の祝日には、ロシア全土の聖職者が緑の祭服を着て礼拝を行うが、私たちの教会では白い祭服を着る。バチューシュカは、この祝日に緑の祭服を着用するのは、自然の豊かな緑を象徴し、白は聖霊を象徴すると説明してくれました。つまり、祝日の霊的な側面が際立っていたのです。また、聖母マリアの降誕という当教会の主祭日には、青い祭服ではなく、この祝日の荘厳さにふさわしく、金色の祭服を着用します。これもまた神父様の御祝福によるものでした。「聖母マリアよ、あなたの降誕は、全宇宙に喜びを告げるものです。あなたから、正義の太陽、私たちの神キリストが輝き出されたからです.....」、つまり、ここに私たちの救いの始まりが開かれ、この日が『光の母』を世に現すのです。まさにそのように、神父様はこの祝日を神学的に理解しておられました。

故ヨシフ大主教が、当時秘書を務めていたステファン・テオドロヴィチ神父を伴って来られたことを覚えています。ステファン神父は、黄色い祭服が準備されているのを見て、「一体何を準備しているのですか？ なぜですか？ 聖母マリアの祝日なのに、大主教様は青い祭服を着られるのに、なぜ黄色いものを準備しているのですか？」と。このことを大主教に報告しましたが、大主教は異議を唱えませんでした。」——「『彼らがそうしているのなら、そのままにしておこう』とおっしゃいました。」大主教は青の祭服で奉仕され、他の全員が金の祭服を身にまといました。祭壇も教会全体も、金色で飾られていました。

そして、主の昇天は、人類の救いという神の御計画の完結を意味する。昇天の祝日には、私たちでは常に十字架の行列と共同の 식사가執り行われる。これは、まさに昇天の祝日である1955年に、教会の開設許可を得たからでもある。昇天祭の日には、いつも中庭に食卓が設けられ、希望する信徒、最大500人までが皆で食事を共にします。また、神父様の追悼日には、常にパラスタス、追悼の聖体礼儀、そして墓前での追悼式を執り行います。この日も、皆のための食事が用意されます。私たちのバチューシュカが常に皆を助け、お金を施し、手持ちのものをすべて与えてくれたように、私たちも今、バチューシュカの記念日には誰かに何かを贈れるよう努めています。バチューシュカが私たちに施しをしてくれたように、私たちも力の及ぶ範囲でそうしようと努めています。

また、日曜日の肉食期間の合間には、他の教会では皆が金色や黄色の祭服を身にまとうのに対し、私たちの教会では濃いボルドー色の祭服を着用します。復活祭のような赤ではなく、濃いボルドー色です。これもまた、バチューシュカからの祝福です。一方、モスクワでは断食期間中の日曜日に紫色や金色の祭服を着用しますが、私たちの教会では常に緑色の祭服を着用しています。

聖歌隊では、以前はオブティナ様式の旋律で歌っていました。しかし、昔の聖歌隊員はほとんど残っておらず、かつての歌もほとんど残っていませんが、残っているものは維持するよう努めています。

他にもいくつかの慣習があります。例えば、土曜日の徹夜祈祷では、大賛美まで福音書は説教壇の前に置かれたままですが、「今、聖母マリアよ、あなたは神に祝福されたお方...」という箇所になって初めて、福音書を祭壇に運び入れます。

神父様は夕方に小晩課を朗読され、朝は聖体礼儀の前に朝の祈りと二つのアカフィストが読まれました。また、祝日の前後の期間には、小晩課で三歌集が読まれ、「幸いな者たち」の箇所では、常に殉教者へのカノンの第六歌からが読まれます。神父様は、規定通りに、そして規則に従って奉仕を行うよう努めておられました。

現在、当教区の尽力により、新しい三祭壇大聖堂の建設が完了しました。その主祭壇は、聖ヴヴェデンスカヤ・オブティナ修道院と同様に、聖母マリアの神殿への奉献を記念して奉献されており、右側の小聖堂は聖セバスティアン・カラガンディンスキーに、左側の小聖堂は聖コスマとダミアン——長老の故郷であるオルロフ地方の祭壇が彼らに捧げられていた——にちなんで名付けられています。

当大聖堂は古典的な様式に基づいて建てられており、その基礎部分はノアの箱舟の形を彷彿とさせる。総収容人数は1,200人、高さは最大15メートル、ドームの最高点は30メートルである[1994年にミンスクで開催された、旧ソ連領内における建設予定の教会堂の設計コンクールにおいて、カラガンダ市の聖ヴヴェデンスキー教会堂の設計案が第1位を獲得した。]

大聖堂の起工式は、1991年7月14日、聖コスマスとダミアンの祝日に執り行われ、ちょうど4年後の1995年7月、モスクワおよび全ロシア総主教アレクシイ2世がカザフスタンを訪ねられた際（これはロシア正教会の歴史上、ロシア総主教によるカザフスタンへの初の訪問であった）、すでに建設されていた大聖堂兼宮殿の壁に面した広場にて、聖下はカルラグの無数の犠牲者のために追悼のパニヒダを執り行い、パニヒダの後、誰にとっても予想外のことながら、人里離れたミハイロフスコエ墓地へと車を走らせ、広大なカザフスタンの大草原の霊的な深淵の中心として皆に愛された長老の墓を訪れました。

神の摂理により、バトゥーシュカの墓には、社会のあらゆる階層および聖職階級のあらゆる位階を代表する人々が集まったことに疑いの余地はない。総主教、主教、聖職者、州および市の行政長官、神父の信徒たち、そしてカラガンダの正教徒全員が、ある者にとっては愛おしく忘れがたい存在であり、またある者にとってはあまり馴染みのなかった長老が、「義人の住む場所」で安らかに眠れるよう、主の御座に向かって祈りを捧げた。神父は、心を病む天の執り成し手として、また人類のために悲しみ、祈りを捧げる者として、すべての人々を一つに集めた。

長老セバスティアンに関する回想、 そして彼の霊の子たちによって記録された教え

祈りについて

祈りについて、バチューシュカはこう語りました。「祈りは、どんな場所でも、いつでも行うことができます。立っても、座っても、横になっても、仕事中でも、旅の途中でも。ただ、教会の中でおしゃべりをするのは罪です。」

礼拝中に教会内で話している人々、特に修道者たちに対して、厳しく注意を与えた。時には祭服を着たまま祭壇から出てきて、注意をすることさえあった。

バスや飛行機、乗用車などに乗る際は、たとえ他人が笑っていても、誰にも目を向けず、黙って十字を切る必要があると、何度も繰り返し説いていた。たった一人、二人、あるいは三人の信者のために、他の者たちも差し迫った災いから救われることがあるのだ。その好例が次のような出来事だった。ある晩、礼拝の後、遠方から来た数人の女性がバスで帰宅しようとしていた。神父は彼女たちに祝福を与えながら、至聖三位一体のイコンの前で長く祈りを捧げ、その様子を皆が目にしていた。そして、何が起きたのか？ 道中、バスが跳ね橋を下りていたとき、運転手が前方の道路に何か黒い物体を発見し、急ブレーキをかけた。その衝撃でバスは橋から地面に転

落したが、すぐに再び車輪で立ち上がった。すべてがあまりにも瞬く間に起きたため、乗客たちは何が起きたのか、自分たちに何が起こったのかさえ理解する暇もなかった。一人の少女と車掌が軽い打撲傷を負った以外、全員が生き残り、無傷だった。

神父と一緒に暮らしていた姉妹たちは、神父が突然聖なる場所に近づき、黙って祈り始めるのを何度も目撃していた。これは、どこか遠くから助けを求める祈りが彼に届いたという兆候である。その後、そのことが明らかになった。例えば、カラガンダから4,000キロメートル離れたタンボフ市で、仕事帰りの遅い時間に歩いていた若い女性が男に追われ、「神父様、助けて!」と叫んだところ、善良な人々によって救われた。

十字を切る行為について、神父は次のように指摘していました。「十字を切る際は、神への畏敬の念と信仰を持って正しく行わなければなりません。ただ手を振るだけではいけません。そして、その後、頭を下げれば、そこに力があるのです。」

謙遜、高慢、信仰について

神父様は、互いに傷つけ合ったことを赦し、恨みを抱かないことについてよく語り、「神は高慢な者に敵対し、謙虚な者に恵みを与える」とおっしゃいました。また、高慢な者については、「暴れ馬には深い穴が待っている」ともおっしゃいました。そして、高慢や不従順、自惚れのために、人々が転落し、誘惑にさらされることもあった。

神父様の教会で歌っていたアレクサンドラという名の聖歌隊員の一人に、ある日突然、力強く美しい声が鮮やかに「開花」した。すると彼女は高慢になり、傲慢になり、自分の声を自慢して他人を貶めるようになった。私たちの母親たち、とりわけヴァルヴァラさんは、遠回しに彼女に注意を促したが、シュラはそれを聞き入れなかった。ある復活祭の夜、セバスティアン神父は、教会に人々が収まりきらず、中庭の小礼拝堂でも復活祭の早朝礼拝が行われていたため、彼女を他の者たちと共に小礼拝堂で歌うよう送り出した。しかし、シュラは断固として行くことを拒んだ。皆は彼女の拒絶に驚き、神父様の言うことを聞くよう勧めた。だが、シュラは聞き入れなかった。すると神父様は非常に厳しい口調でこう言った。「シュラ、驕ってはいけない。神が声を奪い、もう歌えなくなるぞ!」神父様の予言は的中した! ほどなくして彼女は病気になり、病院に入院した。そして戻ってきた時には、もう歌うことができなくなっていた——声が出なくなってしまうのだ。神父様も周囲の人々も皆、シュラをととても気の毒に思ったが、彼女の健康と声は結局戻らなかった。

しかし、謙虚で慎ましい人々に対しては、神父様の祈りによって、主は奇跡を起こしてくださいました。ある少女は、まだ子供の頃に目の病気にかかり（目が腫れ上がり、まるで完全に覆い隠されてしまったかのようでした）。医師たちは治療を断った。そこで彼女は神父に助けを求めた。神父は、「悲しみの聖母」のイコンの前で聖水による祈祷会を行い、聖水で目を洗うよう祝福した。そして、皆の喜びにも、腫れは消え、目は開き、以前のように見えるようになった。

神が神父の祈りによって自分の事柄を助けてくださると、謙虚さと信仰を持って訪れる人々には、神父はより早く面会し、彼らにとって有益な言葉をかけました。しかし、神への恐れも信仰もなく、単なる好奇心や無駄話のために訪れる人々には、全く面会せず、厳しくこう言いました。「私は何も知らない。私も皆と同じように、罪深く、病弱で、無学な人間だ。私が、まるで透視能力者でもいるというのか?」「あなたたちには自分たちの司祭がいるだろう」——もし相手が近隣の別の教区の人々であれば、そう言った。

ある時、人々の気質について語り合っている最中、神父はこう言い、さらには指さして示した。「この人たちは手を出してはいけない。彼らは高慢だから、注意も叱責も耐えられない。しかし、謙虚な人たちは、その謙虚さゆえに、手を出しても構わない。」

時には、過ちや欠点を率直に指摘できない人々を諭すために、皆の前で誰か一人を（時には罪のない、謙虚で忍耐強い人さえも）厳しく叱責することもありました。そのような人々に対しては、彼自身は叱責も非難もしなかったし、他の人にもそうするよう命じなかった。ただ、そ

の人が自ら気づき、悔い改めて神と霊的父のもとへ立ち返るまで、待ち、耐え、祈り続けたのである。

精神的に強い者たちに対しては、皆の前で謙虚にさせ、虚栄心や霊的な高慢（これらがあれば、善行でさえ魂に益をもたらず、その人自身が永遠の救いから失われる恐れがある）を取り除いた。これを理解した者たちは、そのような清めを喜び、直ちに許しを請い、改心を祈ってほしいと願った。

神父様が年長者に年下の人へ謝罪を求めさせたり、傷つけられた者を謙虚にさせ、加害者を守ったりすることもありました。そこには霊的な知恵が隠されていました。経験豊富な人々はそれを理解し、腹を立てることはありませんでした。

神父様は、人が自ら徐々に自分の欠点、弱さ、悪癖に気づくことを重んじておられました。そして、自分自身に頼るのではなく、神に助けを求め、それらから解放され、赦しを請うのです。そして、悔い改めた人は、神から求めたものを授かり、謙虚さと感謝の心をもってそれを受け入れます。

もし誰かが、特に嫉妬や羨望から、隣人に対する不満を訴えに来たなら、その時点で全ては台無しだ。神父は、試練と謙遜を促すような教訓を与え、精神的な「薬」を処方するのだが、それは決して喜ばしいものではなく、二度と不満を言いたくなくなるようなものだった。神父は、そのような不満を、心の病のように、すべての人から根絶しようと努めていた。

中傷者や誹謗者に対しては、時に非常に賢明な対応をとられた。誹謗された者を、誹謗した者が予想していた以上に厳しく罰することで、誹謗した者に羞恥心を抱かせ、隣人を誹謗する習慣を改めさせたのである。

一方、隣人への秘めた怒りを抱えて神父のもとを訪れ、神父に庇護を求め、自分を正当化し、隣人を非難しようとする者がいれば、神父はそのような者を庇うどころか、皆の前で厳しく叱責し、その高慢な考えや行いに対して謙虚になるよう戒めた。

侮辱や誤解があった場合には、互いに許しを請い、恨みを抱かないよう、特に聖体拝領の前にはそうするよう教え込んだ。そして、誰もが知る二人の兄弟——ティトとエヴァグリオ——の例を挙げて説明した。

また、時には、誰に、どのような形で高慢（すべての罪の根源）が現れているかを指摘することもありました。ある者には歩き方に、ある者には声に、またある者には隠された霊的な高慢——これは人間にとって最も危険で有害なものであり、自覚し、霊的父に打ち明ける必要があると説きました。主のみが、霊的父の祈りによって、人間の魂のあらゆる隠れ場所を、その曲がりくねった部分まですべて明らかにされる。そして、そこに潜むすべての蛇が這い出し、自分自身や他者を驚かせ、恐怖に陥れることになる。

「一人ひとりにはそれぞれの接し方が必要だ。ある人にとっては有益な言葉でも、別の人にとっては害となることもある。」彼はよくこう言っていた。「互いの弱さや欠点を忍耐強く受け入れなさい——そこに救いがある。火は火で消すのではなく、水で消すものだ。そして、悪は愛によって打ち勝たれるのだ！」

祝福なしに、若い二人、あるいは年配だが裕福な二人が同棲を始めると、神父はこう言うことがあった。「年配で裕福な人が、若い娘や未亡人を家に迎え入れ、その人が働き、世話をし、言うことを聞き、あらゆる善きことを学べるようにすればいいのに。」若い二人の同棲については、決して祝福しなかった。同棲した者たちは、互いに譲り合わず、良いことを何も学ばなかったため、うまくやっていけなかったのだ。しかし、一人で暮らすことについても、特に高慢でわがままな者に対しては、誰に対しても祝福しなかった。そのような生き方の危険性を指摘した。例として、玄関先で足に擦られる輝く釘の話を取り上げた。一方、隅っこで錆びついた釘はどこかに転がっているだけで、誰も手を出さない。そして、次のようなことわざを付け加えた。「一緒に暮らす者たちは互いに擦り合う——そうすれば、皆が救われるのだ。」

誇り、傲慢、自信について、オブティナの長老たちの寓話を例に挙げた。「夏の暖かい日、一匹のカブトムシが飛んで来て、こう鳴いている。『私の畑、私の草原、私の森……』 ところ

が、風が吹き、雨が降り出すと、カブトムシは葉の下に身を寄せ、哀れそうに『私を押しやらないで!』と鳴いた。

ある精神疾患を患った女性が、皆の前で神父を侮辱し、神父やその信徒たちを罵り、彼女を世話していた人々までも侮辱した。すると神父は穏やかにこう答えた。「あなたは私がどんな人間だと思っていたのか? 私はまさにこういう人間なのだ! さあ、私より優れた人間を探してみなさい!」

「私たちはどう生きればよいのか」という問いに、彼はしばしばオプティナの長老アムブロシウスの言葉を引用して答えた。「生きるということは、嘆かないこと、誰をも非難しないこと、誰にも迷惑をかけないこと、そしてすべての人に敬意を払うことだ。」

互いに不和を抱く者たちに対しては、同じくオプティナの長老たちの言葉を引用してこう言うこともあった。「互いに擦り合えば、皆救われる!」「忍耐と勤労はすべてを乗り越える。」また、家族内や個人間の不和や誤解については、「敵からの唾」と呼んでいた。敵対していた者たちが和解したとき、彼ら自身もそれが真実だと悟ったのである。

病気について

病気を嘆く人に対しては、時折こう言った。「一つが過ぎ去れば、別のものがやってくる!」「病むことは私たちにとって必要だ。そうでなければ救われない。病気は天からの贈り物なのだ!」

年老いた人や病人、神の神殿へ行くことができないと嘆く人々を慰めるために、こう言った。「心の中で黙って祈ることを祝福する。『主よ、憐れみたまえ』、『神よ、罪深い私に憐れみたまえ』。主は聞いてくださる。不平を言わずに病に耐えなさい。病気は魂を罪から清めるのだ。」

年配の方々には、時に預言者ダビデの言葉を引用してこう答えた。「七十歳、もし力があれば八十歳、その間には労苦と病が増える。」若者は病気になるが、年寄りには、体が衣服のように時の経過で古びてしまったのだから、病にならざるを得ないのだ。」

また、ワインや肉料理を味わうことで健康を回復し、寿命を延ばそうと考える者もいます。神父はかつてこうおっしゃいました。「いいえ、肉料理は心臓や胃が健康な時には有益ですが、そうでない場合はただ有害なだけです。植物性の食事は、体が弱っている時でも消化しやすく、それゆえ有益なのです。」そして、ご自身を例に挙げていました。数多くの病を抱えながらも、肉料理は口にせず、高齢まで生き延びたのです。そしてこう付け加えました。「人は食べ物だけで生きているわけではありません。」

神父は、自分の健康を大切にしよう説いていました。厳しい寒さの中では、たとえ流行でなくても、もっと暖かい服を着て、暖かい靴を履くようにと。「自分の健康を大切にしてください。それは神からの賜物です。自分の健康を乱用することは、神の前で罪深いことです。」

一部の若者に対しては、健康状態が弱いため、神父様は10年生以上の進学を許可しませんでした。「勉強を続けたところで、健康を失ってしまう。健康がなければ、どんな働き手になれるのか? さらに、霊的な空虚さが生じ、魂は神からの最後の火花さえ失ってしまうだろう!」

冬の間、特にキリストの降誕祭の時期には、子供たちや家の健康を湿気から守るため、家の中を白く塗ることを祝福しませんでした。掃除をするだけで十分でした。時々、言うこともありました。「私たちの修道院では、部屋の白塗りや掃除は復活祭の時だけ行っていたのです。」

保養地や別荘へ出かけることも勧めなかった。「そのお金で、地元で、自宅で療養し、休息し、もっと頻繁に神の教会へ通いなさい。」そしてこうも言った。「病の時には神に感謝しなさい!」また、病気を嘆く人に対しては、時々こう言った。「では、どうやって救われたいというのか? 他に道はない。」「二つの王国を同時に相続する者などいない。ここで肉体の快樂のために生き、魂のことを忘れてしまう者は、天の王国を失うことになる。」

何らかの病気を訴えて神父のもとを訪れる人は少なくなかった。すると神父はある人にはこう言った。「私も病気だ。私も痛む。」そしてこう付け加えた。「治るよ！」するとすべてが治まり、その人は回復した。しかし別の人には同じように言ったものの、「治るよ」という言葉は付け加えなかった。つまり、治らないということだ。

誰かが頭痛に悩まされている場合、神父は「洗礼者ヨハネの首の切断」のイコンの前にあるランプの油を取り、それを頭に塗るよう勧め、また洗礼者ヨハネへの祈りを捧げるよう助言していました。

「神父様、歯が痛いんです。お祈りください」という誰かの願いに対して、神父様は「近所の人と喧嘩をせず、平和に暮らしていれば、歯は痛くならないよ！」と答えることもありました。

精神疾患や心の病を患う人々、あるいは悪霊に取り憑かれた人々について、神父はこう語っていました。「彼らの中には回復する者もいれば、時折再び病院に入院することになる者もいれば、死ぬまでその状態のままでいる者もいるだろう。」一部の憑依された人々を慰め、神の助けを借りて耐えるよう説得し、「……そうすれば殉教者たちのようになり、試練を経ることなく天の御国に入ることができるだろう」と語りました。

誰かが病気になり、家で寝込んで、「もし神父様が誰かを通じて、せめて乾パン一つでも送ってくれたら！ そうすればすぐに気分が楽になるのに」と考えることがありました。するとどうでしょう。間もなく誰かが訪ねてきて、神父様からの贈り物を届けてくれるのです。病人は大いに喜び、その人はすぐに気分が楽になるのです。

時々、こうおっしゃいました。「なぜ、ある人々は人生のほとんどを苦しみ、病に苛まれ、悲しみや恨みなどに耐えなければならないのでしょうか？ それは、両親や先祖の罪のためです。これらの苦しむ人々は、両親や先祖の罪を贖うための生きた生贄として捧げられているのです。」

病人の世話と憐れみについて

神父様は、苦しむ人々や病人、特に病院に入院している人々を忘れないよう、彼らに思いやりを持ち、憐れみ深く接するよう説いていました——そうすれば、私たち自身もそのような境遇になるかもしれないからです。多くの若い女性たちに対し、病院で働くことを祝福されました。「最も冷酷な心でさえ、そのような苦しむ人々を見れば、和らぎ、隣人に対して共感と憐れみを抱くようになるかもしれない。魂の救いは、これに懸かっているのだ。」

一方、裕福な暮らしを羨む人々に対しては、しばしば、地中に掘った小屋で暮らす、子供連れの最も貧しい未亡人たちのところへ、奉仕活動に連れて行きました。そしてこう言いました。「ほら、人々がどのように暮らしているか見てごらん！ あなたは立派な家や裕福な暮らしを見るのが好きで、救いなどないものを羨んでいる。救いはここにあるのだ！ こここそが、思いやりと善行を学ぶ場だ！ 嫉妬を根絶するには、自分より貧しい人々の生活を見るべきだ。そうすれば、心には安らぎが訪れ、動揺はなくなる。そして、嫉妬するのをやめるだろう。」

無欲の益について語る際、神父は、ある知人の司祭を例に挙げました。その司祭は、亡くなった後、お金も物も何も残していませんでした。「なんと素晴らしいことか！ 余計なものが何もないとき、死ぬのはなんと容易なことか！ そして、天の御国に安住の地が与えられるのだ。」

神父ご自身が慈悲深く、病人や貧しい人々に対して思いやりを持っていたため、他の人々にも同じことを教えていました。「これこそが、私たちの救いなのです。」「もしあなたが隣人を憐れまず、さらに悪いことに許さないのなら、どうして主から自分への慈悲や赦しを請うことができるのでしょうか？」

しかし、神父は理由もなく施しをすることはなく、他の人々にも注意を促していました。特に酒飲みを避けていました。吝嗇や、必要のない浪費も是としませんでした。「何事においても中庸を保つべきだ。」

次のようなケースもあった。病気の親族の世話をしている人々が、次第にその世話にうんざりし、親族を傷つけ、涙を流させるほどに追い詰めてしまうのだ。たとえ彼らが神父から遠く離れて住んでいたとしても、神父は靈感でそれを察知し、突然その家族のもとを訪れた。病人と傷ついた人を慰め、皆を和解させ、主が病人も、その世話をする人々も、魂の救いのために忍耐と愛を授けてくださるよう祈った。

聖体拝領と断食について

聖体拝領の前に、司祭の祝福なしに独断で断食する者（つまり、1日、2日、あるいは3日間、食事を摂らない者）に対しては、厳しく叱責した。そのような者には、聖体拝領さえ許さなかった。一方、体力が弱く病弱な人々に対しては、聖体拝領の前夜であっても、体力が衰えたり朝までに体調を崩したりしないよう、温かいお湯を一杯飲み、パンを少し食べることを許可していた。

また、胃や肺が弱い人々に対しては、聖体拝領後の断食期間中、薬として牛乳やミルクティーを飲むことを許可していた。ただし、その後、告解の際に司祭に、病気や体の弱さゆえにこれを許されたことを伝え、神に許しを請うよう求めている。

世俗の生活において、規則に反して昼食に肉料理を口にしていた年配の修道女たち（その年齢では、断食食でさえも適量に留めるべきであるにもかかわらず）に対し、神父は厳しく注意を促した。また、若い修道女たちには一定の年齢に達するまでは肉食を禁じず、その後徐々に肉食をやめるよう指導していました。神父様は、何事においても節度を重んじていました。

「理由もなく断食を守らないと、時が来れば病に襲われる。そうなれば、自分の意志とは関係なく断食することになる。主は罪の報いとしてそれを許されるのだ」と、何度も語っていました。

また、教会にめったに来ない人や、めったに、あるいは全く聖体拝領をしない人（特に高齢者）について、残念そうに語っていました。例として、教会のすぐ近くに住んでいる人々を挙げました。「礼拝の間中、ベンチに座りっぱなしなのに、教会には来ない。それなのに、自分たちはキリスト教徒だと名乗っているのだ！ 一方、教会から遠く離れた場所、何キロも離れたところに住んでいる人々は、魂の救いのために時間を作り、祝日には教会に来て祈っている。」 また、教会に来る男性が少なかったことも嘆いていました。「ほとんど女性ばかりだが、男性はどこにいるのか？」と。時々誰かが「今年は教会に来る人が増えたね！」と言うと、彼はこう答えます。「あれは私たちの人ではなく、よそから来た人たちだ。私たちのノヴォイ・ゴロドからは、数人の女性を除いて、以前も今も誰も来ていない。」

時々、四旬節の時期に誰かが「今日は聖体拝領する人が多かったね」と言うと、彼はこう答える。「聖体拝領する人は多いが、真に聖体を受けた人はほとんどいない。」

「適時に聖体拝領を行う者を誇りに思う必要はなく、また、事情によりそれができない者を嘆く必要もない。時には、まさに死の直前に、人は魂の救いのために聖体拝領に与るにふさわしい者とされることもあるのだ。」

彼はよくこう言っていた。「大切なのは始まりでも、途中でもなく、終わりである。」そして、霊的な道のりの初めには熱心に祈りや断食などに取り組み、しかも司祭の祝福も受けずに始めたにもかかわらず、後に熱意を失い、その道を捨ててしまう人々の教訓となる例を数多く挙げていた。一方、節度を持って、粘り強く、忍耐強く歩む者たちは、誰よりも優れた成果を上げる。神父はあらゆる事において中道を重んじ、「すべての聖なる父たちは、王の道を歩んだ」と語った。「最初から段階を踏んで進み、最初の段から二、三段を飛び越えることなく、最後まで急がずに一つずつ着実に進んでいく者こそ、救われるのだ。」

「節度、自制、分別、適時性、漸進性は、すべての人にとって、あらゆる面で有益である。」無知ゆえに、一部の初心者が懺悔をせずに聖杯に近づこうとするケースがあった。神父はすぐに厳しく「懺悔はしましたか？」と問い、聖体拝領を許さなかった。そして礼拝の後、聖なる秘跡を受けるためにどのように準備すべきかをその人に理解させた。特に、正当な理由もなく礼

拝に遅刻し、十分な準備もせずに、しかも健康な状態で、告解と聖体拝領を要求する者に対しては、神父は決して容赦しなかった。「病人のみに聖体拝領を許すものです。あなたは健康でありながら、数多くの罪を背負っています。準備をし、悔い改めによって心を清め、時間通りに教会に来て、説教と礼拝に耳を傾け、懺悔をした上で、神への畏敬の念を持って聖杯に近づく時間を、どうしても作れないというのですか！」そして、そのような人々を聖体拝領には許しませんでした。さらにこう付け加えた。「聖体の杯に近づくことは、食卓でスープの碗や紅茶のカップに近づくのと同じことではない。」

病人がすでに舌も動かさず、正気を失っているにもかかわらず、聖体拝領をさせるために司祭を呼び出す病人やその親族に対しては、非常に憤慨していた。場合によっては家族に非があり、またある場合は患者自身が信仰を持たず、「私を葬りたがっているのか？」と非難めいた口調で拒むこともあった。聖体拝領の後、彼は死ぬという迷信に囚われていたのだ。

ある時、全く身動きの取れない若者に告解の秘跡を授けようとしたことがあった。彼には（彼自身の話によると）、告解が終わると、妻や子供たちが、まるで死にゆく者のように彼に別れを告げに来るかのように思えたという。しかし神の御加護により、告解と聖体拝領の後、彼は回復し、完全に元気を取り戻して働き始め、神の教会に通うようになった。

セバスティアン神父は、「告解は死にゆく者のためだけに行われる」という信念から、告解を望まない人々を快く思っていなかった。また、他の人々の中には、告解を受けた後は地面を歩いてはいけないという迷信を抱いている者もいたが、それに対して神父は不満げにこう言った。「それなら、歩くことができないのなら、飛んで行けばいいじゃないか。」また、神父は若者たちにも聖体拝領を勧めていました。なぜなら、ほとんどすべての人が心身ともに病んでいるものであり、信仰を持って聖体拝領を行う者は、癒やしと力づけ、そして忘れ去られた罪の赦しを受けるからです。

祝日と聖人の崇敬について

神父様は、苦難や病気、誘惑に直面した際、祈りの中で神に愛されたすべての聖人を呼び求め、その記憶を尊ぶよう、しばしば説いていました。同様に、自分の名前の由来となった守護聖人の日（名日）を尊ぶべきであり、誕生日そのものを祝うべきではないとも説いていました。

神父様は、守護聖人の日ではなく誕生日を祝う人々を快く思っていなかった。そして、誕生日の宴の席で聖ヨハネ・バプティストの首を刎ねるよう命じたヘロデを例に挙げていた。

神父様は、民衆の間で、聖母マリアの奇跡を起こすイコンの祝日が、聖母マリアの降誕という十二大祝日よりも崇敬されており、その日には教会に訪れる人が少なかったことを、大変嘆いておられました。

聖母マリアの誕生を称えるため、この祝日に合わせて祭壇が奉献され、それに伴い主教が訪れ、盛大な祝典が行われました。

また、司牧活動を通じて、神父は信徒たちに聖使徒ヨハネ・神学者（神学者ヨハネ）の重要性和偉大さを深く認識させ、その記念日に教会へ参拝するよう導きました。神父はよくこう語りました。「あなた方の家庭には、互いへの平和も愛もありません。聖ヨハネ・テオロゴス、すなわち『愛の使徒』である彼以外に、誰があなたたちを助けてくれるというのか？『子供たちよ、互いに愛し合いなさい！』」

また、神の懲罰を避けるため、祝日には市場や店などへ出歩かないよう、しばしば懇願し、非常に厳しく警告されました。祝日の教会礼拝を大切にし、それを世俗的で魂を傷つける何ものとも交換しないよう、信徒たちを導かれました。「教会においてのみ、人は魂を新たにし、その悲しみや病に安らぎを得るのです。」

十二大祝日の際には、教会内がすべて厳粛かつ祝祭的な雰囲気になるよう、また人々が祝日にふさわしい服装——たとえ新品でなくとも、明るい色の服——を身につけるよう、細心の注意を払っていました。さらに、食事においても祝祭の日を祝うよう心がけていました。一方、断

食期間や平日に、理由もなく明るい色の服を着ている人に対しては注意を促しました。霊的なことにも、この世の生活的なことにも、あらゆることに細心の注意を払っていました。

また、特に祭壇では、ろうそくが純粋な蜜蝋で作られているかどうかにも注意深く見守っていました。「蜜蝋のろうそくの芳しい香りには、神の恵みが降り注ぐ」——そう神父は語り、勤勉なミツバチを称えていました。そして、怠惰で不真面目な私たちに対して、しばしばミツバチを模範として挙げました。『ミツバチはどれほど多くの恵みをもたらすことか——神には蜜蝋を、人には薬となる蜂蜜を』また、両親、とりわけ母親を敬わない子供たちには、ミツバチが女王蜂をいかに守っているかを手本として示しました。ミツバチたちは女王蜂を慈しみ、女王蜂が病気になる時にはその周りに集まり、羽ばたきながら女王蜂の苦痛を和らげようとするのです。

神父様は何度もこう説いておられました。「教会のためには最高の品を用意し、自分の分にはそれより劣るものを残すべきだ」と。「しかし、私たちは逆です。自分には良いものを、教会には劣るものを用意しています。」そして、良心に従って、できる限り最善を尽くして働くべきだと。

アイコンについて

神父は、いかなる理由があっても、信徒から歪んだアイコン（つまり、規範に従わず、雑に描かれ、聖人の顔立ちが歪んでいるもの）を受け取ることを決して許しませんでした。もし古くから伝わるアイコンが贈られたものの、所々損傷している場合は、それを修復させてから、それを必要としている人々に贈っていました。神父は古くからのアイコンを非常に大切にしておられました。誰かに祈りの記念としてアイコンを贈る際、「これは昔ながらの、絵の具で描かれたアイコンですよ」とおっしゃることもありました。また、アイコンを鮮やかな紙の花で飾ることを許されませんでした。

礼拝から戻ると、神父はしばしば、家庭でアイコンがどれほど粗末に扱われているかについて嘆いていました。アイコンが1つか2つあるとしても、それらは煤にまみれ、ほこりをかぶったまま、誰にも見られないように、汚れたカーテンの下、部屋の奥の隅に掛けられているのです。それなのに、自分や子供たちの写真は、まるで最も神聖な場所にでも飾るかのように掲げられている。

教会での作法について

礼拝の後、神父は直ちにドアや換気口を開けて、室内の換気を行うよう指示していました。警備員や当直員向けのスケジュールさえ作成されており、礼拝終了後何時間、礼拝開始前何時間（天候や季節を考慮して）開けるべきかが定められていました。清掃係の女性たちには、掃除の際にはほこりを巻き上げないように、またアイコンや金箔をほこりや煤から守るよう求めた。彼はすべてのサービススタッフを観察し、誰がどのように働いているか——誰が誠実に、誰が怠惰に、あるいは不注意に——を見極めていた。夜には、自分の独房の小さな窓から警備員たちを見守り、時にはこう言うこともあった。「この警備員は一晩中中庭を歩き回っていた。窓から見ていたんだ。」また、別の警備員については、「この者は一晩中小屋から出てこなかった。つまり、勤務ではなく眠っていたのだ。」と言い、そのような者は雇うなと命じた。同様に、教会や教会の庭で行われていること——良いことも悪いことも、是正が必要なことも——すべてを観察していた。、神への恐れもなく教会内を早足で歩き回り、さらに手を振り回したり、他人を押し回したり、あるいは庭や通りでそのような振る舞いをする者がいれば、皆の前で注意を与え、全員への戒めとした。特に、聖なる人々を真似て走り回ったり、足を踏み鳴らしたり、騒いだりする者たちに対しては、神父様は厳しく禁じていました。歩き方や身振り手振りから、神父様は人の性格や魂の内面を見抜いていたのです。「静かに、落ち着いて歩かなければなりません。大きな歩幅で歩いたり、足を踏み鳴らしたりしてはいけません。特に教会内では、たとえ急いでいてもです。何しろ、世間は私たちを見て、手本にしているのだから。」ケルビムの賛歌から聖体礼儀が終わるまで、教会内でのあらゆる動き（ろうそくの販売や祈願の申し込みなど）は禁じられていた

。神父様は、祈祷会が終わるまで教会に留まるよう指導されていたため、祈祷会が終わってから初めて十字架に接吻することを許された。神父はよくこう繰り返していました。「私たちは皆、年老いて、弱く、不自由で、病弱で、動きが鈍く、何をするにも時間がかかります。だからこそ、礼拝も長く続くのです。一方、若くて力強く、丈夫な司祭がいるところでは、すべてが素早く行われ、礼拝も早く終わります。」（残念ながら、今ではその通りだと痛感しています。）

歌について

神父は、祈りに満ちた、心を打つような聖歌を好んでいました。「大声で叫んだり、ましてや足を踏み鳴らしたりするのは、神の御心に適いません。神は耳が聞こえないわけではなく、すべてを聞き、私たちの思いもご存知なのです。」

神父様は、聖書の朗読や聖歌隊の歌唱を非常に注意深く見守り、神への畏れを持ち、敬虔かつ祈りの心をもって朗読し、歌うよう心がけていました。一人の声が他の全員の声を掻き消してしまうような大声での叫びは決して許しませんでした。聖歌隊員の努力と忍耐を高く評価し、彼らを大切にし、できる限り配慮を払っていました。祝日にはお茶を振る舞い、手土産を配りました。特に神父様は、頭巾やハンカチを配るのが大好きでした。時には配りすぎて、もう何も残らなくなってしまうこともありました。そんな時は、誰かに金を渡して、配るためのハンカチを買わせていました。

服装について

修道服を派手に着こなすことを好む修道女たちや、黒の服を着る世俗の未亡人や未婚の女性たちを厳しく戒めました。「青や灰色の服を、控えめに着るのが一番良い。黒は救わず、赤は破滅させない」と語った。若者たちには、職場で疑われたり、不当に非難されたりしないよう、色とりどりの服を着るよう助言した。

さらにこうも言っていた。「若者は自分の外見にあまり気を遣うべきではない。あまり身だしなみに気を遣う必要はない。頻繁に体を洗ったり、おしゃれに着飾ったりせず、魂や良心を乱すことなく、他者にとってつまずきの石とならないよう、もっと気楽に振る舞えばよい。自分自身が救われたいなら、他人の邪魔をしてはならない。一方、年配者は、人に嫌悪されたり、背を向けられたりしないよう、清潔で身だしなみを整えておくべきだ。」

孤児について

孤児たちに対しては、深い共感と憐れみを持って接した。彼らに出会うと、まず食事を与え、慰め、頭からつま先まで様子を確かめ——何を着て、何を履いているかを確認し、あらゆることを尋ね、言葉と行動、そして祈りをもって助けた。まるで実の父や母のように、彼らの世話をした。

子どものしつけについて

時折、神父様は結婚の絆や夫婦の義務について語られた。それは、貞節、信頼、そして配偶者や子供の誰かが病気になった際の忍耐についてであった。恩知らずな子供たちを叱り、親の苦勞——彼らの苦勞、愛、子供が病気の時の揺りかごのそばでの眠れない夜、子供たちの命と健康への不安——を思い出させた。「主は、そのような子供たちから幸福を奪われるだろう」と神父は言われました。「父と母を敬え。そうすれば、地上で長生きするだろう。」神父は、両親の存命中に敬い、死後も彼らのために祈る子供たちを模範として挙げられました。

乳児の頃から子供にわがままや自己中心的な態度を教え込もうとする親たちに対し、神父は繰り返し警告した。「今や、子供たちが親に従うのではなく、親が子供に従っているのだ。」そして、少年が祖母や母親の手を引っ張って、「家に帰ろう、あるいは外に出よう！」と言うのを目にすることもありました。ただ教会から出たいだけなのです。そして親たちはその言葉に従い、立ち去ってしまいました。

神父は、子供たちへの過度な偏愛や執着、さらには神の代わりに子供たちに祈りを捧げようとしているかのような親たちの態度について、何度も親たちに注意を促した。「彼ら自身は素朴で読み書きもままならない農民であり、服や靴は手当たり次第に適当なものを選び、子供たちを都会の知識人と同等に服を着せ、靴を履かせ、教育させるために、自分たちは食事を削っている。しかし、子供たちは教育を受けると、親の無学さやみすばらしい服装を軽蔑し始め、さらには親を恥じるようになる。」

ヨシフ（チェルノフ）大主教は、乳児の頃から、ゴキブリや虫、小鳥、猫、犬といった生き物を殺さないよう、親が子供を躰けるよう説いていた。そうすればやがて人間にまで及ぶようになり、親自身でさえもその残虐さから免れなくなるだろう。「神の創造したあらゆる生き物を愛し、憐れみ、傷つけないように教えなさい。植物も例外ではない。」しかし、ヨシフ大主教の説教を嘲笑する熱心な母親たちもいた。「ゴキブリや虫なんて、一体何のこと？」と。彼女たちはその真意を理解しようとしなかったし、ましてや子供たちに有益なことを教えることなど考えもしなかった。（その後、荒々しく育った息子や孫が、彼女自身のしつけについて一喝した時、ようやく理解した母親もいたかもしれない。）

従順について

仕事や家庭でのトラブルを避けるため、訪れた人々が急いで帰ろうとするケースもあった。しかし、彼らの希望に反して、神父は彼らを1日か2日引き留めた。神父様の言葉に従って残った人々は無事に帰還し、家庭でも職場でもすべてが順調にいった。一方、従わずに立ち去った人々には、旅の途中や自宅、あるいは職場でトラブルが降りかかった。そして彼らは、神父様の言葉に背いたことを後悔した。

祝祭日の時期には、誰一人として旅立ちの祝福を与えなかったが、自らの意思で旅立った者たちもまた、悲しみや災難を免れることはなかった。

神父はわがままを言う者を良しとせず、彼らの結末は悲惨なものだった。ある年配の娘が、祝福を受けずに結婚しようと企てた。他の者たちがそのことを神父に告げると、神父はこう答えた。「夫なんてものか？ ろくでもない奴だ！」そして彼女自身にも、その男と結婚しないよう懇願し、哀願した。「結婚すれば、苦しむことになるぞ！」その後、まさにその通りになった。

かつて、神父様は皆の前でこうおっしゃいました。「両親や同輩、年上の人、さらには年下の人たちの言葉に耳を傾けることを学ばない者は、大人になっても誰の言葉にも耳を傾けず、その結果、将来、誰もその人の言うことを聞かなくなるだろう。」

葬儀について

神父様は、愛する人を失って絶望し、ヒステリー状態に陥り、故人の棺の前で叫び声を上げる人々を嘆いておられました。神父様は、そうした人々は信仰のない人々だとおっしゃいました。「信仰を持たない者が、家族や富を残して死ぬのは辛いことだが、信仰を持たない家族にとって、この世の幸福のすべてを託していた愛する人を失うこともまた辛い。主は彼らの希望を打ち碎かれるが、彼らは神の御心理解できないのだ。信者たちの間では、親族たちは故人を悼んで泣くものの、それは控えめで、悲しむのも節度を保っている。すべてが祈りと、神の助けへの希望に包まれている。信者は眠りにつくかのように安らかに息を引き取り、死後、その顔には守護天使による最後の口づけが刻まれるのである。」

非信者や不慮の死を遂げた人の葬儀の後、時には耐えきれずにこう言うこともあった。「このような人々の葬儀を行うのは、なんと辛いことか！」（悔い改めもキリストの聖なる秘跡の聖体拝領もなしに亡くなった人々については、遺族を慰めるためだけに葬儀を行っていた。）また、（遺族を慰めるために）信仰を持たない故人の前で詩篇を朗読する人に対しても、同じようにこう言っていた。「彼らのために詩篇を朗読するのは、なんと辛いことか！」

もし神父が、敬虔に生涯を全うした高齢者の葬儀を執り行った場合、葬儀の後でこう言うことがありました。「熟した穀粒が、永遠の穀倉へと沈んでいった！」と。また、別の人については別の言葉をかけました。彼には、亡くなった人の魂の行方が分かっていたのです。

特に、生前も死後も誰にも葬儀を執り行ってもらえなかった亡くなった乳児たちについては、深く嘆いていました。「洗礼を受けさせるために連れてくることはあっても、葬儀を行うことは極めて稀だ。それなのに、亡くなる子供たちは決して少なくないではないか？」

聖歌隊の誰かが神父を気の毒に思い、故人の不在での葬儀を翌日に延期しようと提案することもあったが、神父は厳しくこう答えた。「あちらで彼がどうなっているか、君たちは知っているのか？ 延期することはできるが、自分自身が死ぬ可能性もあり、そうなればその魂は葬儀を受けられずに残ってしまうのだ。」

また、追悼の席ではワインを飲まないよう、ましてやウォッカは絶対に飲まないようにと、何度も説いていた。「断食期間中は、断食用の食事で故人を偲び、普段の日も、より質素に、料理の品数も控えめにすべきだ。故人たちはそんなものは求めていない。」そして貧しい人々に対しては、三、四人に温かい食事を振る舞うだけで十分だと祝福していた。

一人息子を亡くした悲しみに暮れる女性が、「彼を思うと悲しいです。彼は善良で、親孝行で、誰に対しても礼儀正しく、信心深かったのです」と言うと、神父はこう答えました。「それなら良かった。、あなたには彼に対する良い思い出が一生残るでしょう。もし生きていたら、1年か2年もすれば友達と酒に溺れ、魂は永遠に失われていたでしょう。」

「鉦夫たちは、もし悪口を言わず、神を畏れていれば、まるで殉教者のように、死を覚悟して地下へ降りて働きに行くことになるだろう。彼らがそこから生きて戻れるかどうかは、誰にも分からないのだから。」

神父の懺悔について

かつて、心に重荷を背負い、誰かへの恨みを抱き、さまざまな考えがハンマーのように頭を打ち続ける人が、神父のもとを訪れることがあった。あれを神父に話そうか、これを話そうかと。しかし、神父の姿を見て祝福を受けると、重荷も考えもすべて煙のように消え去ってしまう。神父の優しく温かい眼差しに、魂も心も温められる。心が軽くなり、喜びが湧き上がる——もはや語るべきことも、誰かに不満を言う相手もいなくなる。皆が善良な人々に変わっているのだ。まるで黒い雲の向こうから太陽が顔を出し、罪人にも義人にも、すべての人を温め、照らし出すかのようだ。そして、その光の中で、人は自分こそが他者よりも劣っていることに気づくのである。

幻視について語られるとき、彼はただ一つの答えを返した。「私は何も見えない！」そして、聖なる教父たちの言葉を引用した。「天使を見る者ではなく、自分の罪を見る者こそが、より高き者である」と。

饒舌について

彼は、実益も目的もなく、ましてや非難を目的として（神よ、どうかそうならないように）多くを語る者を決して許さなかった。そのような時には、即座にそのことを悟らせ、謙虚にさせるよう促した。彼自身は、むしろ黙って耳を傾け、最後に一言か二言で全てに答えることが多かった。

饒舌、とりわけ空虚な言葉に対しては、次のように注意を促した。「君が饒舌なのは知っている——と、彼は皆の戒めとして誰かに言うことがあった——だが、私には歯がなく、喉も痛むので、話すのが難しいのだ。」饒舌や空虚な言葉の後には、まるで魂に砂をまかれたかのような重い後味が残る、たとえ魂を救うような会話の後であっても、その感覚は消えない。

神父はさらにこうも語った。「多くを語り、無駄話をし、冗談を言うことを好む者からは、人生の終わりに主が言葉を奪い取られる。」（実際、一部の人々にはそのようなことが見られた。）

笑いと無作法な振る舞いについて

神父様は笑いと無作法な振る舞い、特に誰かを突き飛ばしたり引っ張ったりすること、また冗談や嘲笑などを決して許されませんでした。その例として、決して笑わず、泣かれた救い主を挙げられ、その証人は弟子たちであったと語られました。また、神の御母が笑っているのを見た者は誰もいませんでした。

冗談であっても嘘をつく者を、神父は是認しなかった。「常に真実と真理を語り、笑ってはならない。笑いと無作法には、淫行の始まりがある。」

神の助けと墮落について

時々、こうおっしゃいました。「死ぬその日まで、墮落を恐れ、自分の力に頼るのではなく、ただ神の助けを頼り、謙虚に祈りの中で神を呼び求めなさい。」

ある若い女性（親しい霊的な仲間ではない）の墮落について、彼は他の者たちに厳しい訓戒を与えた。「放置され、化膿した傷は、肉体の医師からも霊的な医師からも隠されてしまうと、治療や癒やしが難しくなる。誘惑のまさに初期段階、私が助けられたはずの時に、あなたたちはそれを隠し、私に何も話さない。そして、トラブルに首まで浸かってしまってから、ようやく泣きながら『神父様、助けてください！』と懇願する。しかし、すでに手遅れになってしまっただけで、私がどうやって救えるというのか！」そして彼はこう付け加えた。「最も凶暴な情欲は、淫行である。それは、病床や死の床にある人間さえも蝕む。特に、この世での生涯を老いるまで節制なく過ごしてきた者たちを。この情欲は骨の髄にまで染み込んでおり、あらゆる情欲の中で最も恥知らずなものである。誰も自力ではこれを取り除くことはできない。涙と砕かれた心をもって主に立ち返るとき、主だけが救い出してくれるのだ。この戦いについては、死ぬその瞬間まで心に留めておく必要がある。ほんの少し気を緩め、祈りを怠り、神への畏れを失うだけで、すぐにその存在を露わにする。絶え間ない祈り、神への畏れ、死の自覚、そして審判、地獄、天国への思いだけが、それを追い払うのである。」

時折、誰かが自分の欠点や弱さを嘆くと、こう言われることがあった。「本を読み。そこにはすべてが書かれている！」また、ある人には聖人の伝記を読むよう勧め、別の人には聖なる教父たちの著作を読むよう勧められた——人それぞれに有益なものを与えられたのである。

「自らの救いのために、聖なる教父たちや聖なる殉教者たちの助けを求めることを忘れてはならない。彼らの祈りによって、主は私たちを情欲から救い出してくださる。しかし、自分の力だけで情欲から解放されるとは、誰も思っていない。情欲との戦いにおいて、死ぬその瞬間まで自分自身に頼ってはなりません。主のみが、御自分に助けを求める者を情欲から救い出す力をお持ちです。そして、死ぬその瞬間まで平安を求めてはなりません。」

人々や悪魔、情欲などによる不安を嘆く者たちに対し、神父は度々こう答えていました。「『聖徒たちと共に安らかに眠れ……』と歌われる時、初めて安らぎが訪れるのです。それまでは、死ぬまで安らぎを求めてはなりません。人は安らぎのために生まれたのではなく、来世の（安息）のために、労苦し、耐え忍ぶために生まれたのだ。ここでは、私たちは旅人であり、よそ者であり、客である。そして旅人には、異国の地や他人の事柄の中に安息はない。彼らは一歩一歩踏み出し、より早く故郷、すなわち神の家、天の御国に到達するために、ひたすら前へと進んでいくのだ。もしここで、この地上の苦難の谷、快楽に満ちたこの世で足を緩めてしまえば、夕暮れ（すなわち、人生の黄昏）は気づかぬうちに迫り、死は準備ができていない魂を、善行を積むことなく捉えてしまうでしょう。そして、それを成し遂げる時間はもう残されていないのです。死は容赦ありません！ いかなる富める者もその富によって、金銭を愛する者もその金によって、力ある者もその力によって、王も、戦士も、死から逃れることはできず、彼らの中で誰一人として、自ら得たものを何一つ持ち去ることはできない。人は裸で生まれ、裸で去っていく。信仰と善行、施しだけが、彼と共に来世へと続く。そして、友も親族も、誰も助けてはくれないのだ。」

非難について

神父は、他の司祭たち（自派の者であれ他派の者であれ）を、彼らから祝福を受けずに非難したり貶めたりすることを厳しく禁じていた。そのような者たちには、彼自身も祝福を与えなかった。「私が、誰がどのような人物か、どうして分かるというのか？　もしかすると、彼は私たち全員よりも優れているかもしれないのに、私たちが彼を非難することになるかもしれない。私たちが彼の魂をどうして知ることができるというのか？」「外見や行いだけで判断すれば、誤りを犯す可能性があり、それは大きな罪である。」

「なぜ私の司祭たちを、まるで少年たちのように扱うのか？　お前たちを土下座させてやる！」——彼は、司祭たち（若くても年配でも）を、自分より下か同等であるかのように扱う者たちに、このように言った。

誰かを称賛したり、非難したり、断罪したりすることを決して許さなかった。彼は、最も卑しく弱々しい者の中にも良い資質を見出し、称賛される者の中にも欠点を見つけ出し、高慢を謙虚にし、虚栄を打ち砕いた。

彼は、ある「先見の明のある」人々に対してこう指摘した。「私も人々の欠点には気づいているが、黙って、非難はしない。人々が自らの欠点に気づくよう、黙って祈るほうがよい。いわゆる『軽々しく』非難するのは、他人の気力を失わせ、絶望に陥らせる恐れがあるからだ。」

時折、神父はこうおっしゃいました。「他人を教えることは、鐘楼から石を投げ下ろすようなものだ。しかし、自らそれを実践することは、鐘楼へ石を運ぶようなものだ。」

節制について

また、特に不作の年には、皆に儉約と節制を心掛けるよう教えられました。ある貧しい未亡人が、家でジャガイモの炒め物を食べたことを自慢しました。それに対し、神父様はこう指摘されました。「他の人たちはスープに入れるジャガイモさえ持っていないのに、あなたはそれを美味しそうに食べていた。それも、キリストの御名において誰かがあなたに与えてくれたものののに。」

昼食の際、お茶と一緒に甘いパンが出され、さらにバターが添えられることもあった。神父は異議を唱えることはなかったが、バターには手をつけなかった。その様子を見て、人々はバターが贅沢であり、節度を欠いているものだと察した。

時折、家主たちが神父様だけを食卓に招くことがあった。しかし、神父様は、その場に居合わせた全員に席に着くよう勧められるまでは座らず、それから初めて皆と一緒に席に着いた。遅く寝て遅く起きることを、神父は良しとしなかった。「早めに寝て、遅くとも6時半までには起きるべきだ。規律と一貫性を身につけるのだ。」

神父様は、必要以上に物を蓄える人々を良しとせず、また、分別なく浪費し、手持ちのすべてを捧げて自分に必要なものまで奪ってしまう人々を称賛しませんでした。「中庸を保つべきだ。両極端は破滅を招く。中庸は、この世のあらゆる事柄において、とりわけ天上の、霊的な事柄において重要である。先走って急ぐ者は、止めなければならない。一方、怠慢や無力さゆえにあまりにも遅れを取り、魂の救いを顧みない者には、眠りから覚めて立ち上がり、中庸な者たちと肩を並べて歩み、先走らず、後れを取らないよう助けるべきだ。」

神父はこうおっしゃる。「私たちの罪や情欲の責任は、他人が自分を正当化しようとするように、ワインでも、女性でも、お金でも、富でもなく、私たちの節度のない行いにある。酔っ払いはワインのせいにするし、淫婦や淫男は男性や女性のせいにするし、金に執着する者はお金のせいにするし、金持ちは富のせいにする、といった具合だ。つまり、もしワインや女性、金、富が存在しなければ、罪人たちは罪を犯さなかったということになる。神は、すべてを極めて賢明かつ美しく整えておられる。しかし、物事を不適切に扱ったり利用したりすることで、悪が生じるのだ。」

また、何度もこう語った。「悪は他の人や、あなたが正しく扱うことができなかった物の中ではなく、自分自身の中にあるのだ。まるで子供が火や剣を扱うように、自分自身を焼いたり、自分自身を切ったりしてしまうのだ。」

自分自身について

ある時、「なぜここに集まったのですか？」という質問に対し、ある女性が率直に「あなたを見に来たからです」と答えた。神父は「私を見るなんて、あなたたちの目は悪いですね」と返した。

彼はしばしば教会評議会や主教宛てに書面で、職を辞して隠遁生活を送りたいという意向を伝え、「自分の屋根が露わになっているのに、他人の屋根を覆い続けるのはもう十分だ」と述べていた。しかし、返答はいつも「死ぬまで奉仕しなさい」というものであった。

死が近づいていることを感じると、彼はしばしば、たとえ弱く、不自由であっても、自分たちの仲間を司祭や指導的な役職に就かせるよう繰り返し訴えた。そうすれば、神父様がおられた頃と同じように、すべてがこれまで通り変わらないだろうと。

大きな祝日には、聖歌隊員たちに菓子を振る舞った。そして追悼礼拝の後には、自ら両手で出席者全員にそれを配りながら、「私が生きている間はこうする。どうぞ召し上がれ。私には家族がいないのだから」と言った。

「こんなものを集めても、私には何の必要もない。」しかし、人々は涙ながらに、せめて何かを受け取ってほしいと懇願した。そこでバチューシュカは、ある人々からは受け取り、祝福して、その人たちに返した。ある人々からは受け取って、すぐに他の人に渡した。また、ある人々からは、彼らが不満を抱いていても、一切受け取らなかった。もし何か置いていっても、彼は長い間それに触れず、その後、困っている誰かに渡した。

プロスフォラ（聖パン）は、特に遠方から訪れた人々を含め、皆に喜んで、そして愛を込めて配った。復活祭の週には、礼拝の後、教会や追悼礼拝堂に座り、その傍らに復活祭の卵が入ったかごが置かれると、彼は祝福を添えて一人ひとりに復活祭の卵を一つずつ手渡し、皆に喜びと慰めを与えた。

修道生活と世俗について

ある時、彼はこう語った。「私たち修道士と世俗の間には、深い溝がある。世俗の人々は私たちの生活を決して理解できず、私たちも彼らの生活を理解できない。もし修道士たちが、狭きながらも救いへの道でどれほどの誘惑や苦難が待ち受けているかをあらかじめ知っていたなら、誰も修道院には行かなかただろう。そして、もし世俗の人々が修道生活における将来の恵みを知っていたなら、皆が修道院に駆け込んだだろう。」

「なぜ修道院は解散させられたのか？ それは、修道士たちが三頭立ての馬車に乗り回り、ウールのコートを着るようになったからだ。かつて修道士たちは麻の修道服やムホヤロの修道衣を身にまとい、誠実に働いていた。彼らこそが真の修道士だったのだ。貴族出身の修道院長（イグメニア）は、自分たちの修道女たちではなく、無情な態度と残酷さによって、見習い修道女たちをあっという間に天国へと追いやった。貧しい修道女たちはキャベツで腹を満たしていたが、修道院長は上層部に気に入られようと、彼らにはすべてを与え、自分たちの修道女たちからは必要なものさえ奪っていた。」

彼はよくこう繰り返していた。「主人の意志を知りながらそれを実行しなかった奴隷は、主人の意志を知らなかった奴隷よりも、より激しく打たれるだろう。」そして、ある者たちには率直にこう言った。「お前はすべてを知りながら、神をこの世と引き換えにした（あるいは引き換えた）のだ。」「この世は金を約束するが、与えてくれるのは泥沼だ。」「独身者は神を思い、既婚者は妻を思う。」「家族の絆に縛られていない者は、常に自由である。唯一の関心事は魂の救い。人生の目的は清らかさ、その結末は天国である！」

神父がもっと若く、健康だった頃、彼は交通機関を利用することを拒み、「私は修道士だ。乗ってはいけない、歩いて行かなければならない」と言っていた。そして、フェドロフカ、メルコムピナート、ゼレントレスト、キルザヴォドなどの集落まで、長い距離を歩いて行ったものだ。そして、時々こう言うこともありました。「私は、ゼレントレストの郊外にある湧き水まで、やかんを持って歩いて行くのが好きだった。道中、『主よ、私たちを見守ってください!』と歌いながら……」

二人の若い女性が、修道見習いたちに自分たちのことを神父様に報告してほしいと頼みました。それに対し、神父様は少し考えてからこう言いました。「どうすべきか分からないだろう…… 温かく迎え入れれば、彼女たちはさらにあなたに執着するだろうし、受け入れなければ、傷ついてしまうだろう!」この言葉で、神父様は、後に司祭となった若者たちに、若い女性たちから司祭への、また司祭から若い女性たちへの過度な執着は危険であることを示した。しかし、無愛想すぎるのも危険だ。やはり、称賛すべき「中庸」が大切だ。「神の助けを借りてそれを成し遂げられる者は、多くの誘惑を避けることができるだろう。」

ある時、ある家で、少女たちは一つの部屋で、女性たちは別の部屋でお茶を飲んでいて（少女たちにはあることを、女性たちには別のことを説く必要があったからだ）。すると突然、女性の一人が少女たちのいる部屋に入ってきて、そこには神父も座っていた。神父は彼女を厳しく見つめ、こう言った。「ここには若い娘たちしかいない。女性たちは別の部屋にいるのだから、あなたもあちらの女性たちと一緒に座りなさい。」彼女は不満そうに、涙を浮かべて傷ついた様子でその場を去った。それに対し、神父はこう言った。「何で傷つくの? 私は『あなたは女性だから、女性たちと一緒に座りなさい』と真実を言っただけだ。彼女を『男性』だなんて言っていないのに、どうして傷つくの?」

ある日、女性と少女たちが一緒に座っている食卓で、ある女性が「神父様は女性よりも少女たちを可哀想に思っている」と指摘した。すると神父様は、周囲の顔色をうかがうことなく、彼女に率直にこう言った。「あなたは何度結婚したのですか? あなたはあらゆる慰めを受けてきたのに、少女たちは何もありません! 彼女たちは、神父様の残したスープをスプーン一杯ずつ食べさせてもらえるだけで喜んでいて。それこそが彼女たちにとって大きな慰めなのだ。」

彼はしばしば、心の思いや心の清らかさに気を配り、狂信的な処女たちのようにならないよう戒め、「善行と心の清らかさがなければ、貞操は救いにはならない」と語った。「内面が汚れ、情欲が断ち切られていなければ、外見の美しさは何の役にも立たない。」「救い主が神学者ヨハネを愛されたのは、その清らかさ、貞潔、愛、忠実さ、優しさ、そして従順さのためでなければ何のためでしょうか! すべての弟子たちが十字架上のイエス・キリストを見捨てた中、神学者ヨハネだけが恐れを知らずに十字架のそばに立っていたのです。」そして神父様は何度もこうも語られました。「愛はすべての美德に勝るものです。」「神は愛である」「愛がなければ、たとえ肉体を全焼の犠牲に捧げても、すべては無に等しい」「愛のあるところに神がおられる」「神がおられるところに、平和、調和、静寂がある。愛のないところには、対立、争い、不和、裏切り、中傷がある。」「愛は寛容であり、悪を覚えず、怒らず、苛立ちもせず、自分の利益を求めない。愛は隣人のため、さらには敵のためさえも益を求める。」神父は、愛によって弟子を盗賊の一味から教会の懐へと連れ戻した聖ヨハネ・テオロゴスを例に挙げていた。

神学者ヨハネの「子供たちよ、互いに愛し合いなさい!」という言葉、神父はしばしば繰り返すのが好きだった。この言葉を通じて、神と隣人への愛を思い出させてくれた。その愛がなければ、労苦も、祈りも、断食も何の益ももたらさないのだ。

悔い改めた罪人についての説教

「罪人よ、あなたの情欲と罪深い習慣を捨てなさい。天は、九十九人の義人よりもあなたを呼んでいるのだ！ ただ一人の悔い改めた罪人のために、天の天使たちは喜び祝っている。天はあなたの救いを求めている。ただ悔い改め、立ち返り、罪から離れよ。あなたのために、主ご自身が言葉を持たない馬小屋に生まれ、苦難に遭われたのだ。耳を引き裂かれ、唾を吐きかけられ、いばらの冠を被せられ、ご自身の被造物の手によって十字架に釘付けにされた。苦難に遭い、死なれたのは、後に栄光を受け、昇天するためであった。さて、人よ、あなたには、永遠にふさわしい自分自身のものが何一つないというのに、何を誇れるというのか。富も、名誉も、栄光も、健康も——それらはすべて一時的なものに過ぎない。未来のために富を蓄えよう。貧しい者、困窮している者、病める者たちを通じて、そこに自分の富を集めよう。あなたは天の住人であるのに、なぜこれほどまでに地上に執着するのですか！？ あなたは天の御国の相続人であり、御独り子ご自身が十字架の死によって贖われた不滅の魂を持っているのです。」

1960年1月31日

守護天使について

「守護天使は、汚れなき心と清らかな良心を持つ人のそばに留まる。心と良心に耳を傾ければ、常に真理へと導くその声を聞くことができるだろう。霊的な飢え、すなわち自らの魂の霊的な感覚を覚える者は、肉体的飢えの際、人が満腹するために食物を求めるのと同様に、ここでも神の言葉という糧をもって魂を満たそうと求めるだろう。霊的な感覚が抑え込まれ、情欲によって目がくらまされている者は、肉体的飢え以外の飢えを覚えることはない。一方、肉体的な飢えを忘れ、霊的な飢えを癒そうと努める者もいます。情欲は、次第に考えを植え付け、それに同意させ、行為へと駆り立てることによって、魂を盲目にします。その結果、1) 病の兆し、2) 病氣、3) 魂の死へと至ります。一つの情欲がはたらくところには、聖霊と守護天使が退き、人の魂は死んでしまいます。おお、主よ、これらすべてから私たちを救い給え！ 聖なる守護天使たちよ、私たちのために神に祈ってください！」

日付不明。大天使ミカエルの祝日。

隣人への愛についての説教

「全宇宙、目に見えるものも見えないものすべて、そしてあなた自身をも創造された、創造主である御方を、どうして愛さないことができようか。主は人を創造し、その内に命を与える霊を吹き込み、自由意志と 知性を与え、神の賜物を楽しむことのできる心を与えられた。創造主ではなく被造物を愛するとは、すなわち、生ではなく死を愛し、自らを愛さず、自らを敵とすることである。隣人を自分自身のように愛さないとは、すなわち、創造主を自分に敵対させることである。創造主を愛するには、全き魂と全き力と全き思いをもって、神と、神が私たちに授けてくださる恵みについて、思索し、考え、論じなければならない。なぜなら、神は、神自身と、その救いのために——自分自身のためではなく——愛すべき隣人に対する、私たちのすべての思い、願い、意図を見通しておられるからである。」

日付不明。

夕暮れ、番小屋でのセバスティアン神父の言葉

「『予期せぬ喜び』という聖母マリアへのアカフィストを読み、長い間語り合った。「アーヒマンドリトの位を受けてから、もう3年目、4年目が過ぎたが、謙遜と忍耐を身につけることはできなかった。せっかちで、怠惰で、不真面目で、おしゃべりだ。しかし、歩むべきは狭い道であり、二つの天の御国などあり得ない。洗礼の際に与えられた自分の十字架を、生涯の終わり

まで不平を言わずに担い、神から送られるあらゆる苦難に耐えなければならない。主ご自身も耐え忍ばれた。飼葉桶で生まれ、貧しさと無名の中で育ち、その後、説教に出かけ、奇跡を行い、庶民を啓蒙された。しかし、ユダヤ人たちは嫉妬から、主を十字架に磔にした。そして、すべての使徒たちは殉教の死を遂げ、初期のキリスト教徒たちは皆、血を流しました。それなのに、私たちはほんの少しの苦難さえも耐えようとも、背負おうともしません。

主よ、憐れみ給え！ 最も愛すべきイエスよ、私たちをお赦してください……常に、すべてのことに神に感謝しなければなりません。」

1960年6月26日

神学者ヨハネ——愛の使徒——の記念日

「初めに、御言葉があった……最も清く、最も誠実で、最も優しい者として、救い主は彼に御母を託された。雷の子よ、あなたは幸いである。驚のようにすべての人より高く舞い上がり、その教えをもって雷のように轟かせた。」

1960年5月25日

大齋の始まり

「悔い改めの門を、命の与え主よ、私に向けて開いてください……」自分の罪深さを深く自覚し、痛感しながら、徴税人は悔い改めていた。ファリサイ派のように、高慢で誇り高く神に語りかけることはなかった。打ちひしがれた心で、天を見上げることもできず、胸を叩きながら、徴税人は主に向かって叫んだ。「神よ、罪深い私に憐れみをお与えください。」これこそが真に悔い改めた者の姿である。悔い改め、もはや以前の罪には戻らず、新たな精神で新しい人生を始めよ。」

1960年7月2日

アルヒマンドリト・セバスティアンの説教

「…神の御前に歩み、その御心を心に抱くこと。神は、高慢や淫行、不潔、その他の悪徳や罪に染まっていない清らかな心の中に入られる。主よ、私たちの心をお掴みになり、清めてください！ 主は、私たちが謙遜、忍耐、清さ、貞潔、柔和、善行、隣人への愛、とりわけ神への愛、従順、祈り、心と体の感覚や思いの自制によって、主への入り口を開くとき、私たちの心にお降りになります。私たちは、自制心の欠如、感情や思考の不純さ、苦難や病気に対する不耐性、不平、感謝の欠如、悪に対して悪で報いることによって、主の御心を閉ざしてしまっているのです。」

日付不明。

アルヒマンドリト・セバスティアン神父の守護聖人の日

セバスティアン神父ご自身が礼拝を執り行いました。神は彼の弱った健康を強めてくださいました。M.マリアは、彼の意向に反して、彼にフェロンを撫でさせるように強要しました。すると彼は、そのわがままと不従順に対して、即座に私たちの兄弟を謙虚にさせました。祭服を身にまとい、礼拝の際、フェロンに腰を下ろした（通常、この場合はいつも少し持ち上げていたのだが）、そしてそれをくしゃくしゃにしまい、以前よりもさらにひどい状態にしまった。これが教訓だ。ミサはかつてないほど厳粛に行われ、祈祷会も同様であった。そして最後に、名前の日の主人公への祝福と、数え切れないほどの感謝の意と願いが寄せられた。しかし、その人はいつものように、称賛されればされるほど、自らを謙虚にし、自らを卑下する。そして、長々とした言葉や空虚な言葉に憤りさえ示し、「私は皆さんから何も必要としません（贈り物も、称賛も、感謝の言葉も）。私を喜ばせるのは、平和、愛、そして皆さんの間の調和です……」と語った。

1959年12月31日

サマリアの女について

「主なる神ご自身が、魂の真の幸福であり、真の慰めであり、真の善であり、救い主がサマリアの女に差し伸べたものであった。一方、他の人々は、粗野な肉体の官能的な快楽や、富、名声、地上の権力の中に喜びを求めている。幼少期の欲望や行いは少年には滑稽に映り、少年が望んだものは青年には滑稽に映り、青年がこれほど熱烈に望んだものは成熟した年齢には滑稽に映り、成熟した者が望んだものは老人には滑稽に映る……私たちは、果てしない欲望の充足によって感情を満たすが、魂を空虚にしてしまう。感情は満たされ、魂は空っぽだ。「わが主は偉大であり、その要塞も偉大であり、その知恵は数えきれない。」

1959年5月31日

主の昇天

「かつては地の上にふさわしくなかった者も、今や天において礼拝にふさわしい者となった。かつて失ったものは、今得たものに比べればわずかなものである。神は、かつての私たちのすべての苦難を、私たちのために益となるよう整えてくださった。天の来世におけるいのちを相続するにふさわしい者となるために、聖なる時を過ごし、清らかな人生を送ろう。昇天されたイエスよ、私たちの魂と心を、闇、虚しさ、暗黒、この世への執着、肉、世界、そしてその儂い魅力から引き上げ、主イエス・キリストが御自身の血によって私たちを贖い、備えてくださった永遠と将来の祝福へと導いてください。」

日付不明。

聖使徒アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの記念日

「彼は最初にキエフの山々に十字架を立て、この場所とこの国全体が、いつの日か正教によって栄えるだろうと語った。そして、自らの磔刑のために用意された十字架を見つめながら、十字架を通して天の御国でキリストと結ばれるという希望に胸を躍らせ、霊において喜び、歓喜した。私たちもまた、霊的な喜びと、将来の恵みに対する喜びを追求すべきである。」

「聖なる愛とは、完全性の総体である。神の母は、まさにそのような愛を持っておられた。『天の奇跡、天の聖性』である。」

「私の魂の花婿は、私が彼以外の何かを愛するならば、彼を愛していないのと同じくらい嫉妬深い」（『パテリカ』より）。「十字架の上で、救い主は叫ばれた。『渴く！』……」。彼は私たちの救いを切望しておられた……」

1958年12月13日

守護天使について

「守護天使は、洗礼を受ける瞬間にすべての人に与えられる。魂と守護天使との結びつきをどのように守ればよいのか。守護天使は、良心と心を通じてその働きを行う。人が魂の救いを大切にし、良心を保ち、あらゆる罪を避けるとき、その人は自分の守護天使を感じるのだ。守護天使はその人をあらゆる善へと導き、善き考えを送り、悪から戒めてくれます。私たちがこの世を去る日、守護天使に会うことになるでしょう。しかし、その再会がどのようなものになるかは、私たち自身と私たちの行いにかかっています。守護天使は、私たちの無頓着な生き方に喜びを示すのでしょうか、それとも悲しむのでしょうか？ 守護天使は、自分自身も守護天使も認めなかった者たちから離れ、良心に反してあらゆる行いをした者たちから離れ、罪を重ね、悪に深く染まり、良心を押し殺し、心を硬くした者たちから離れます。守護天使が去ると、闇の霊——悪魔——が近づき、人をその奴隷にしてしまう。そして、人の魂は滅びてしまう。守護天使は去り、その魂のために涙を流す。

それゆえ、私たちは守護天使に心を配り、あらゆる善行における助けと、あらゆる罪からの解放を、祈りを込めて彼に願い求めましょう。彼が私たちを絶えず主のもとへと導いてくださるようお願い求め、私たち自身の行いによって彼を恥じさせないようにしましょう。」

1958年11月21日

「主は六日間かけて宇宙を創造し、七日目に休まれた。そして人類に対し、六日間は働き、七日目は休息し、神の名を賛美し、自らの魂の救いのために、その時間を神に捧げるよう命じられた。しかし、人類の敵は嫉妬から、私たちにこの戒めを守らないよう唆している。救い主キリストの到来以前、主がアロンを通じてファラオに、犠牲を捧げるための三日間の祭りの間、民を荒野へ解放するよう求めたとき、ファラオはそれどころか、民に労働と監視を課した。そして、私たちが自分の魂の荒野へと去らないようにと、ファラオ（あるいは悪霊）はこう言います。「商売に行け、自分の用事を済ませろ、上司に気に入られろ、あるいは子供たちにパンや衣服を手に入れろ。お前に祝日など必要か？」と。私たちは自分の用事に費やす時間を神から盗んでいるが、神はそれを呪い、成功を許さない。しかし、その用事を神の御手に委ねれば、神はそれを善きものへと導き、豊かに満ちし、幸いな結末をもたらしてくださる。それだけでなく、私たちは6日間謙虚に働くだけでなく、7日目の日には、神の恵みに感謝し、神に捧げ物を捧げるために神殿へ行く代わりに、無頓着に、怠惰と酒宴に時間を費やしているのだ。」

1959年1月14日

日曜日

「心は石よりも硬く、金床よりも硬い。邪悪な良心、肉欲的・感覚的な罪への墮落した習慣から生じる魂の荒廃、そして悔い改めの欠如。彼は死者の姿を見て笑い、他者からの指摘や非難に耳を貸さず、病み、悪意に満ちた良心によって苦しむ。金槌で金床を砕くことよりも、人間の心を砕くことの方が容易である。愛する者の死、他者からの論し、裁きや地獄についての教会の教え、病気、悲しみ——これらはすべて、心に打ち下ろされる金槌である。しかし、心は屈服せず、悪に固着してしまっている。まるで酒に酔った者のように、その心はあらゆる善や人間らしさに対して狂気じみた状態にある。主よ、私たちに肉なる心をお与えください。石のような心を取り去り、打ちつける槌を感じさせてください！「彼らは私をののしり、私を打ったが、私は痛みを感じなかった。」「祭壇よ、祭壇よ」——預言者は、その心が祭壇の石よりも硬い王や民ではなく、祭壇に向かってこう呼びかけるのである。

1958年12月8日

「神の御心を行う者は幸いである。自分の肉欲にかなう意志を行う者ではない。主よ、私は魂と心のすべてをあなたの御心に委ねます。あなたの御心にかなうように、私を導いてください。自分の意志を行う者は、奴隷のような恐れを抱き、地上の富に執着しています。神への畏れを持たない者は、神の御心を行うことはできません」...

1958年9月9日

洗礼者ヨハネの首の切断

「洗礼者ヨハネは、正義と真理のために、時より早く殉教者として亡くなりました。真理は、そのために人が命を捧げる時、喜びを現すのです。そうでなければ、誰もが不法に生きててもよいと考えてしまうでしょう。もし正義と真理がなければ、この地上に生命など存在しなかったでしょう。皆、自らの不法の中で滅びてしまったことでしょう。私たち皆が真理と正義に従って生き、それによって他の人々に模範を示さなければならない。真理、清らかさ、愛、貞潔は、主にとってこれほど愛すべきものである。聖なる殉教者たちは、真理と正義のために苦難へと歩み出し、偽りと不法を恥じ入らせたのである。」

1958年9月11日

「時間」についての言葉

「この世で最も尊いものは何でしょうか？ それは時間です！ そして、後悔もせず、無駄に失っているものは何でしょうか？ それも時間です！ 私たちが最も大切に失く、最も軽んじているものは何でしょうか？ やはり時間です！ 時間を失うことは、自分自身を失うことです！ すべてを失うことになる！ 私たちは、最も取るに足らないものを失ったときでさえ、それを探し求める。しかし、時間を失っても、そのことにさえ気づかない。時間は、魂の救いと来世の獲得のために正しく用いるよう、主から与えられたものである。時間は、賢明な家主がそれぞれの硬貨を、何に使うかを見極めて配分するように、配分されなければならない。彼にとって、それぞれの硬貨にはそれぞれの用途がある。それと同じように、時間も有益なことに配分し、空虚な遊びや娯楽、おしゃべり、宴会、遊び回りに費やしてはならない。主は、私たちが自分の気まぐれのために時間を盗み、神のためにも魂のためにも使わなかったことを責められるだろう。」

1958年8月9日

大天使ミカエルの祝日

「天にも地にも平等などなく、あり得ない。平等は唯一の聖なる三位一体にのみ存在する。大天使ミカエルは、謙遜と忍耐、そして勇気をもって明けの明星を打ち負かした。大天使ガブリエルは、神の神秘と奇跡の先駆者である。そして、すべてにそれぞれの義務がある。」

1958年11月21日

日曜日

「ヤイロの娘は死に、主は彼女をよみがえらせた。このように、人は魂において死ぬのである。罪深い思い、罪を犯そうとする意志、そして罪を犯すこと。そうして恵みは去り、魂は死ぬ。これこそが、私たちの魂に対する怠慢である。病気が始まったばかりで、容易に癒やされる時期に、私たちは医師のもとを訪れない。病気の最中にも訪れない。しかし、娘（魂）がすでに死んでしまったとき、ようやく魂と肉体の医師である主のもとへ駆け寄り、「私の娘が死にました」と言った。「死んではいない、眠っているだけだ」と主は言われた。

若き日から、青春の盛り、健康、清らかさ、活気ある精神に満ちている時に、自分自身を主への捧げ物として捧げるべきであり、悪魔に仕えてこれらすべてを失ってからでは遅いのだ。

「日が（命が）あるうちに働け」と主は言われる。なぜなら、夜、すなわち老い、死が訪れ、その時にはもう手遅れになるからだ。そうして、愚かな乙女たちは油を持っていなかった。花婿が来た時にはすでに夜であり、油を買う場所がなかったからである。彼女たちは一日を無頓着に、怠惰に過ごし、その灯は空っぽのままとなり、婚礼の殿堂の扉は彼女たちにとって閉ざされてしまった。それゆえ、私たちもまた、主に対して、不自由なものでも、歪んだものでも、盲目なものでも、腐ったものでもなく、健全で、清く、原初的なものを捧げなければならない。預言者が言うように、ある人が土地を耕し、畑に種を蒔き、それを手入れし、雑草を取り除き、水をやり、実を収穫しに来たとき、何も見つからなかった。所々で畑に麦の穂があり、所々でぶどうの木に実があった。しかし、主の敵たちがやって来て、すべてを盗み、持ち去ってしまった。それゆえ、人は自らの魂の畑において、無駄な労苦をせず、敵——この世、悪魔、肉、そして死——がやって来て、それを奪い去らないよう、自分自身に注意を払わなければならない。この世が来ると、富や贅沢、野心で人を誘い込み、自分の分を奪い取る。悪魔がやってくると、残りのすべて——清さ、貞潔、無垢、神への恐れ——を奪い去る。老いと死が訪れ、人は自らの畑で何かを収穫しようと願うが、何も得られない。罪深い生活の中で、時折、善行を為そうとする善意があったに過ぎない。そして人は、人生を過ごしたにもかかわらず、来世のための善行を積むことができなかったことを悔やむ。死が訪れ、悔い改めや涙、祈りのための時間はもう残されていない。特に不慮の死は危険である。それゆえ、肉体にも精神にも力が残っていない老後まで、悔い改めや善行を先延ばしにしてはならない。すべては敵に奪われ、自分には何も残らず、灯は消

え果ててしまう。神への愛をもって祈り、すべての行いを祈りから始めよ。祈りなしには、ただ虚しい行いしか生まれない。祈りにおいては、私たちが望むことではなく、神の御心と御戒めの成就を願い求めよ。神を絶えず愛し、絶えず祈らなければならない。真に愛し、信仰をもって祈れば、主はその慈しみをもって私たちを見捨てない。「私が目を向けるのは、柔和で心謙虚な者以外、誰だろうか。」自らを低くし、万物の創造主である主の前での自分の無力さを自覚すること。「もし彼が私を愛さないなら、私も彼を愛さない」——これは悪魔の言葉である。たとえば彼があなたを愛さなくても、あなたは愛をもってその憎しみに打ち勝ちなさい。真の愛と神への畏れをもって、憎しみの情に打ち勝ちなさい。

「人は外見を見るが、主は心を見る。」「神は知性には教えを、心には靈感をもって語りかける。」

1958年11月11日

復活祭

「神に心の清さと罪の赦しを求めなさい。自分の行いを悔い改め、自分を誰よりも劣った者に見なして、心を砕きなさい。そうすれば、主ご自身があなたのところに来られ、あなたは世が知らないような喜びを心に感じるでしょう。神に従い、神のために行動しなさい。愛すべき人々のためではなく、彼らからは逃げなさい。「神を求めよ。そうすれば、あなたの魂は生き続ける。」良心の清さを保ち、汚れのない心を培わなければならない。そしてそこから、私たちの行いや振る舞いはキリストの戒めにかなうものでなければならない。そうしてこそ、人々が私たちについてこう言わなくなるのだ：『しかもキリスト教徒を名乗り、しかも祈っているのに、一体何をしているのか?』と言われることのないように。敵が私たちからほんの少しでも利益を得られないよう、また良心が私たちの生き方を責めることのないよう、清さと汚れのない良心を保つ必要がある。そうすれば、心に平安と喜びが訪れるだろう。」

日付なし。

「聖霊よ、母が子を抱きしめるように、私たちを受け入れてください。来て、私たちの中に宿り、私たちの心に住まいを築いてください。不純な思い、感情、欲望、そして私たちを汚すあらゆるものから、私たちの心、魂、そして精神を清めてください。主よ、御恵みをもって私たちをお助けください。それなしには、私たち自身では救われ、守られることはできません。至聖なる三位一体、私たちの神よ、あなたに栄光あれ！「あなたの戒めの岩の上に、揺れ動く私の心を堅く立ててください。」

日付不明。

カラガンディの修道女たち

修道女アグニア

修道女アグニア（アレクサンドラ・ヴァシリエヴナ・スタロドゥブツェヴァ）は、1884年4月15日に生まれた。彼女は生まれつき盲目であったため、両親は彼女をヴォロネジにある聖ミトロファンの聖遺物の元へ連れて行った。その聖遺物の前で、少女は癒やされ、目が見えるようになった。

両親は早くに亡くなった。まず父が亡くなり、アレクサンドラが14歳の時には母も亡くなった。アレクサンドラは姉と弟と残された。姉は弟の世話を引き受け、アレクサンドラはギムナジウムを中退し、親族に懇願して、有名なイコン画学校があったズナメノ・スホティンスキー女子修道院へ連れて行ってもらった。彼女はこの修道院で21年間を過ごし、アグニアという名で修道士（リャソフォール）の戒律を受け、イコン画の技法を学んだ。

アグニヤの母は、長老ヴァルソノフィイの霊的な娘であり、毎年休暇を得ると、オブティナ・プスティンにある彼の元を訪れていた。彼女はヴァルソノフィイ神父と共に肖像画を描き、

その作品は後にトレチャコフ美術館から寄贈を依頼された。ヴァルソノフイイ神父は、亡くなる少し前に、自身も大変大切にしていたこの肖像画を彼女に譲った。その肖像画は、カラガンダにあるマートゥシュカの独房に常に飾られていた。彼女はこう語っていた。「この肖像画を描いたのは私ではありません。ヴァルソノフイイ神父が、私の手を使って描いてくださったのです。」

修道院長はオブティナ・プスティニのセバスティアン神父をよく知っており、修道院が閉鎖されるまで毎年彼と会っていた。彼女は、セバスティアン神父は若い頃とてもハンサムで、特に明るい顔立ちをしており、来訪者に対して親しみやすく、優しく接し、皆のためにできる限りのことをしようと努めていたと語っていた。長老ヴァルソノフイイは彼を「恵まれた人」と呼んでいました。長老ヨセフは彼を大変愛し、「彼は優しい心を持っている」と言っていました。

ある時、こんな出来事があった。アグニア修道女が長老たちの元を訪れ、粗末な小屋の応接室に立っていた。そこへ修道見習いのステファンが近づき、そっと彼女の手を軽く触れた。修道女は、修道見習いのその振る舞いを、自分には無礼に思え、心の中で憤りを感じた。しかし、後の出来事が示したように、将来の長老はすでにその時点で、彼女を自分の霊的な子として見抜き、彼女の手が聖なるイコンで教会を美しく飾るために大いに尽力することになることを予見していたのである。

1919年11月、ズナメノ＝スホティンスキー修道院はボルシェビキによって解散させられ、アグニア修道女はヴォロネジ州のノヴォホペリスク市に定住した。この時期、アグニア修道女は日記に次のように記している。

「主よ、この状況を乗り越えられるよう助けてください。私に力と忍耐をお与えください。今、私は見知らぬ地で一人きりとなりながら、重大な問題を自ら決断するための知恵を必要としています。」

1929年2月18日。」

修道女は多くの悲しみ、苦難、屈辱に耐えなければならなかった。しかし、彼女はそれについて一言も口にしなかった。

1952年、セバスティアン神父は、祈りの家のためにイコンを描くよう、彼女をカラガンダに呼び寄せました。そして1952年1月4日、急行列車第32号が母アグニアをカラガンダへと運びました。彼女にとってカラガンダでの生活に慣れるのは難しく、当初はノヴォホペリスクに戻ろうと考えていましたが、神父様の祈りによって留まることになりました。当初、彼女は教会の管理人小屋に住み、そこでイコンを描いていた。彼女が最初に描いたイコンは、イコノスタス用の「福音書を持つ救世主」のイコンで、アトス山のイコン『速やかに聞き入れる方』と同じ大きさで制作された。マートゥシュカがこのイコンを描いている間、セバスティアン神父は頻繁に近づいてきて、そばに立っていた。そして、イコンが完成に近づいたある時、神父は「もういい、これ以上筆を動かすな」と言いました。彼女が描いた他のイコンには、至聖三位一体、主の昇天、エジプトへの逃避、キリストの復活などがあり、それらは教会全体を飾っています。また、カラガンダの主の御使ミカエル教会、シュチチンスク、ボロフスコ村、オサカロフカ、その他の都市や集落にある教会も、彼女のイコンで飾られている。アルマ・アタでは、ヨシフ主教のために多くのイコンが描かれ、その中にはトボリスキの聖ヨハネのイコンも含まれていました。1956年、アグニア修道女はアレクシオス総主教の祝福を受け、修道衣をまといました。

アグニア修道女は、才能ある画家であるだけでなく、賢明な老女でもあった。彼女は透視の賜物を持っていたが、それを人々に隠しており、質問してくる人々には時々こう答えていた。「どうしたの？ 私は年寄りだし、何も知らないわ。ストーブのそばに座っているだけで、どこにも出歩かないのよ。」しかし、彼女自身はすべてを知り、すべてを見ていた。

ライサ・ニコラエヴナ・アニシモワ、チェリャビンスク市

1966年9月、私たちはチェリャビンスクからヴェルホトゥリエへ、ヴェルホトゥリエの聖シメオン大修道士を偲ぶ記念式典に参加するためにやってきました。ヴェルホトゥルスク教会のア

レクシー神父は私たちにこう尋ねました。「カラガンダには行きましたか？ そこにはセバステイアン神父がいらっしゃいます。私は彼の祈りのおかげでしか生きていられません。ぜひ彼に会いにいてください。」

私たちは長い間準備に手間取り、旅を先延ばしにしていましたが、ようやく1967年8月、聖母被昇天祭を目前に控えた頃、5人でカラガンダを訪れました。そこで、その神父様がすでに一年以上前に亡くなっていたことを知りました。ミハイロフスカヤ教会では、アナスタシア修道女が出迎えてくれ、彼女の修練生であるアンナ・シドロヴナに、私たちをアグニア修道女のもとへ案内するよう命じました。私たちは彼女の家へ着くと、マートウシュカは歩行補助用の小さな台に寄りかかりながら、中庭に出てこられました。彼女は私たちを、まるで魂を貫くような鋭い眼差しで見つめたので、私は「今、私のすべての罪が見透かされてしまう！」と思い、皆の後ろに下がりました。マートウシュカは言われました。「明日、また来てください。聖体拝領を受けてから来なさい」

翌日、聖体拝領を済ませた私たちは、マートウシュカのもとを訪ねた。修道院の修練生マリアから、修道院長が私たちのために一晩中昼食を準備していたことを知りました。修道院長は私たちを食卓に着かせ、ご馳走を振る舞ってくれました。スープ、お粥、スイカ、メロン、ブドウ、お茶——彼女が私たちのために用意し、調理しなかったものなどありませんでした。修道院長は私たちに食べさせ続け、私たちは食べ続け、もうお腹がいっぱいになったのに、それでも食べ続けていた。その間、修道院長は自分の部屋の入り口に立ち、私たち一人ひとりをじっと見つめていた。それから雑誌や本を取り出し、必要なページを開いて、一人ひとりに読ませてくれた。読み終わると、私たちにプレゼントを配り始めた。ある人にはスカーフを、ある人にはドレスの生地を。私たちは「いいえ、結構です。私たちにはすべてありますから」と断りました——なぜ、修道院長様から物をいただく必要があるのか、と私たちは思ったのです。すると、彼女の修練生であるマリアが、「修道院長様が祝福してくださったのですから、受け取ってください」と言いました。

私たちは彼女に手紙を書く許可をいただき、私はこう書きました。「マートウシュカ、あなたの作った昼食を思い出します。なんて美味しかったことでしょう！」すると彼女は、「また昼食を食べに来てください」と返事をくれました。そして毎年、休暇のたびに私たちはカラガンダにあるマートウシュカのところへ訪ねていきました。

修道院長には、その優しさと慈愛に惹かれました。私は若く、霊的な生活に足を踏み入れたばかりでしたが、信者の中にも時に冷酷で粗野な人々に出会うことができました。しかし、修道院長は、その親しみやすさで私たちをすぐに惹きつけてくれました。時が経つにつれ、この優しさこそが、御霊に導かれた彼女の高潔な生き方の賜物であることに気づきました。

マートウシュカは私を霊的に育ててくださり、こう教えてくれました。「十字架なしでは、十字の印なしでは何もできない。すべてを父と子と聖霊の御名によって祝福しなければならない……この地はすべて悪魔の網に絡め取られている。常に祈りを絶やしてはならない」——といった具合に、彼女はいつもそう語っていました。しかし当時の私にとって、祈りや十字架はあまり意味を成さず、周囲に一体どんな悪魔がいるのか、どうしても理解できませんでした。

カラガンダからチェリャピンスクへは、夕方の列車で出発した。その日、私たちは聖体拝領を受け、見送られてから車両に乗り込んだ。切符は二段ベッドの席だった。寝具を受け取り、それぞれの席に横になった。

私は眠っていたが、「ツェリノグラード」のアナウンスが聞こえた。大勢の人が乗り込んできて、ギターを持った若者たちが私たちのコンパートメントの横の席に座った。見ると、彼らと一緒にたくさんのベセトが乗り込んできた。とても小さくて、爪で棚にしがみつき、尻尾をくるくると巻き、頭を振り回して、どこに飛び降りようか探している。そして下の床には彼らが大群で、足を置く場所もないほどだ！私はこれらすべてを夢の中で見ていて、目を開けようとしても開けられない。恐怖で全身が縮こまった：「まさか、私たちの方へ飛び移ったりしないだろうな」と。一匹の悪魔が棚から離れ、私のほうへやってきて、足元に這い上がろうとする。私は足

をすくめて、悪魔に向かって「父と子と聖霊の御名によって」と十字を切って祈った——母が、十字で身を守るようにと言っていたからだ。そして、悪魔たちが私に這い寄ってくるという恐怖から目が覚め、目を開けると、まだそれらの悪魔が見えていた。その後、まるで何かのベールが私から取り除かれたかのように、悪魔たちは消え去ったが、見ると、車内には本当に大勢の人が乗り込んでおり、ギターを持った若者たちが側席に座っていた。

私は朝まで横になったままで、足を伸ばすのが怖かった。朝、同行者たちが起きて朝食の準備を始めたが、私は床に降りるのが怖かった——だって、そこにはたくさんの悪魔がいるのだから！ 女の子たちが「どうしたの？」と聞いてきた。私は泣きじゃくりながら、聖体拝領の後に悪魔を見たのだと語った。しかし、私たちと一緒にいた信心深い女性が、この幻視は私の疑いから生じたものであり、主が母の祈りによって、この世がどれほど網に絡め取られているか、そしてどれほど多くの墮天使が私たちを取り囲んでいるかを私に明らかにしてくださったのだと、私を慰めてくれた。

母上は私に信仰、謙虚さ、そして忍耐を教え込んでくれました。しかし、母上がいつも率直に話してくれたわけではありませんでした。たいていはこうでした。何か尋ねると、母は「わからない」と言うのです。そして、その後、母の教えを深く理解している修道女たちを通じて、すべてを明らかにしてくれました。母は私にこう言いました。「ライサ・ニコラエヴナ（母は皆、若者も含めて、名前と父称で呼んでいました）、行って、横になって、休みなさい、休みなさい。」私が部屋に行って横になると、彼女たちは会話を始めます。そしてその会話を通じて、私は自分のあらゆる考えや疑問に対する答えを得ることができました。あるいは、セバスティアン神父の墓参りに行くよう祝福してくださることもありました。私はそこへ行き、祈りを捧げます。そして、私が墓の前で何を祈ったかについて、マトウシュカはまるで何気ないふりをして、徐々に答えを授けてくれたのです。

当時の私は、従順についても、長老の祝福についても何も知らなかった。

ある日、修道院長がマリアに「牛乳を買ってきてほしい」と言いました。私は「あら、修道院長が牛乳を欲しがっている！ 行って買ってあげよう、修道院長のために善行をしよう」と思いました。そのために祝福を受ける必要があるとは考えず、こっそりと善行をしようと決めたのです。店に行きましたが、牛乳はありませんでした。中央の店に行っても、やはりありませんでした。町の半分ほどを歩き回りましたが、牛乳は見つからず、手ぶらで戻ってきました。修道見習いのマリアが「どこに行っていたの？」と尋ねると、「母上のために牛乳を探していました」と答えました。「なんてことをしたの」と彼女は言いました。「祝福も受けずに外に出るなんて。祝福をもらわなければいけないのよ。」私は修道院長のもとへ行き、「お店へ牛乳を買いに行かせてください」とお願いしました。すると彼女は「神の御加護を」と言い、お金をくれました。店に着くと、ちょうど乳製品が入荷したばかりでした。そして私は、修道院長がくれた金額と、コペイカ単位までぴったり合う分だけを購入しました。彼女は、私に必要な金額を正確に知っていたのです。

他にもこんな出来事がありました。9月21日、聖母マリアの「しるし」のイコンを祝う日、この祝日が、母が長年過ごし、修道女となったズナメノ・スホティンスキー修道院の守護聖人の日だと聞かされました。この機会に、私は花束を買って母に持っていき、お祝いの言葉をかけました。母は修練生に「マリア、これを持って、花を飾って」と言いました。マリアは花を受け取り、大きな「速やかに願いを聞き届ける聖母」のイコンがある聖なる隅に飾りました。私は修道院長のもとを後にし、「ほら、カラガンダの人たちは誰も修道院長にお祝いを言わなかったのに、私は言った！」と考えた。すると、修道院長が「マニャ！ その花を片付けなさい！ 持って行って、ストーブの上に置いてきなさい！」と、とても厳しい口調で叫ぶのが聞こえた。私は廊下に出て、大泣きしてしまった！ 自分の高慢さと虚栄心をこれほどまでに悔やんだことはなかった！ 泣き尽くして落ち着くと、母が優しく「マリア、その花をこっちへ」と言うのが聞こえた。こうして母は私を戒め、謙虚にさせてくれたのだ。

私は10年間、母のもとを訪ね続けた。最後に母のもとを訪れたのは1975年の秋だった。母は92歳だった。母は重病で、水腫を患っていた。時折、穿刺をして体液を抜き取っていた。母のもとには非常に多くの人々が訪れ、他の都市、特にチェリャビンスクからやって来る人も多く、何ヶ月も母の家に滞在していました。夕方、最後の訪問客が帰ると、母は修道見習いを呼びました。「マリア、私の足を上げて。寝よう。」しかし、母自身ではもうベッドに足を上げることもできませんでした。

ある時、多くの訪問客がいたため、修道院長は私たちを自分の部屋の床で寝かせました。夜、激しいノック音で目が覚め、私はぞっとしました。修道院長の寝台の方を見ると、修道院長が座っていて、杖を手に持ち、それで床を叩いているのです。朝になって、私は尋ねました。「マトゥシュカ、眠っていなかったのですか？ 何かドンドンという音がしていました。」すると彼女は言いました。「こんなにたくさんの人がやって来て、みんな話をするから、悪魔たちはその場に居座ったまま、私は彼らと戦い続けなければならないのよ。」

ある朝、母はマリアを呼びつけてこう言いました。「外へ行って、中庭に立っている女性に、私は占いなどせず、人々のために祈っているのだと伝えてくれ。」その女性はその後、信仰を持つようになり、今となっては、母が生きていた間に彼女を訪ねなかったことを深く悔やんでいます。

マトゥシュカは家の中で動物を飼ったことは一度もなかったが、晩年になって猫を飼うようになった。彼女は自分のカップから猫に餌を与え、撫でてやると、猫たちは彼女に従順で、並外れて賢かった。彼女が猫を飼い始めた時、多くの人々はマトゥシュカが老いて正気を失ったのだと考え始めた。しかし、そうではなかった。アグニア修道院長は賢明な老女であり、猫たちを通じて人間の罪を多く暴いていました。ある日、セルギエフ・ボサドから二人の神学生が休暇でカラガンダを訪れました。修道院長は彼らが到着する前にマリアに言いました。「猫たちを部屋へ連れてきて。」マリアが二匹の猫を連れてくると、彼らはテーブルの上に横になりました。修道院長は「新しいタオルで彼らを覆ってあげなさい」と言いました。マリアがタオルをかぶせると、猫たちはそのまま横たわっていました。神学生たちが到着し、十字を切ってから修道院長の部屋に入りました。そのうちの1人がテーブルに近づき、「なんて無礼な、テーブルの上に猫がいるじゃないか!」と言い、猫たちを振り落とそうとしました。しかし、もう一人が制止した。「触るな、これらは私たちの罪を暴き、私たちの謙虚さを試しているのだ。」そして、神学生たちが修道女のもとにいる間、猫たちは従順にテーブルの上で横たわっていたが、彼らが去ると、猫たちは立ち上がり、部屋から出て行った。

修道院長の家では、一見すると偶然の出来事のように思えるが、実は一定の意味を持つ出来事が起こっていた。チェリャビンスクからゲオルギーという名の若者が修道院長の元を訪れた。それは冬のことだった。彼は修道院長の部屋に入り、頭からウサギの毛皮の帽子を脱いでベッドの上に置いた。すると突然、修道女の飼い猫がその帽子に近づき、ベッドの上で転がし始め、やがて床に落とした。修道女の侍女が帽子を拾い上げ、猫を叱った。ゲオルギーは修道女のもとを後にし、教会へ向かった。玄関のコート掛けにコートと帽子を掛けたが、礼拝から戻って服を着ようとしたところ、コート掛けにはコートしかなく、帽子は盗まれていた。」

ドリンカから、20歳の娘タチアナが修道院長のもとを訪ねてきた。修道院長がタニャを天国へ導いたというこの話について、カラガンダの人々の間では様々な説が語られている。ある者は、タニャには船乗りの婚約者がいて、彼と交際し結婚する予定だったと言う。また、他の人々は、修道院長がタチアナの気を、彼女が知っている若者たちからそらすために、今は遠く離れた場所にいる婚約者について語ったと主張している。その婚約者は船の船長として勤務しており、彼女を花嫁として、修道院長のように自分の船に乗せて航海に連れて行くというのだ。そして、彼女にロザリオを贈った。修道院長は、この婚約者の美しさを語り、その姿は彼女の口から語られる限り、まさに我らの主イエス・キリストそのものの姿にふさわしいものであった。

いずれにせよ、母は1年後に「結婚式」の日を8月2日と告げた。父はタチアナに美しいベールを買ってくれたが、靴やウェディングドレスについては、母は買うことを許さず、「まだ時期

尚早だ」と言っていた。ところが7月末、母はタチアナに、ベールに合わせる蠟の花冠を急いで買いに行くよう命じました——「もう時期が近づいている、これ以上先延ばしにはできない」——そして「結婚式のために」と3本のろうそくを渡しました。タチアナは首をかしげました。「なぜ母は結婚式のために3本のろうそくを渡したのだろう？ 母は私をどこへ備えさせようとしているの？ 結婚させるつもりではないと思うけど、一体どこへなのか——わからない。」

8月2日、道路で事故が起きたとき、修道見習いのマリアは教会へ向かおうとしていた。「マニャ！ マニャ！」と修道院長は彼女に叫んだ。「ターニャの魂が天に昇ろうとしている！ 急いで教会へ行き、殺害されたばかりのターニャの安息を祈るよう伝えて！」

そして、次のような出来事が起きた。タチアナはバスに乗っていたが、そのバスは石炭を積んだトレーラー付きダンプカーを追い越そうとしていた。追い越しの最中、トレーラーがダンプカーから切り離され、バスに衝突した。乗客は全員無事だったが、タチアナだけが亡くなった。

彼女は白いベールと蠟の花輪を身につけて埋葬され、棺の三方の側面にはターニャの結婚式用のろうそくが灯されていた。

イグメン・ニコライ（カルポフ）、シュチチンスク市

アグニア修道院長夫人とは1973年に会った。当時の私は全くの世俗人で、教会とは無縁の生活を送っており、彼女のもとへは（私生活に関すること）文句を言いに行ったのだった。ところが、修道院長夫人との会話を通じて、私の人生は一変し、魂が安らぎを得た。彼女は90歳近い老婦人だったが、その瞳は清らかで澄み渡った青い目をしていて、一見すると、どこにも通って学ばず、14歳から修道院で暮らしてきたおばあさんが、一体何を知っているというのか、修道院を離れた後の人生について、一体何を語れるというのか、と思われがちです。それにもかかわらず、私のあらゆる質問に対して、彼女は、教養のある人でさえ彼女のように答えることのできないような答えを返してくれたのです。

私が訪ねると（これはまだ兵役に入る前のことだった）、祖母は私と話をし、お茶を振る舞って、教会へ送り出した。「教会へ行って、祈りなさい」と。どうやって祈ればいいのか？ まあ、子供の頃、母に連れられて教会に行き、聖体拝領はしたものの、それ以来、教会で祈ったことは一度もありませんでした。教会に行くと、人はほとんどおらず、おばあさんたちが私をちらちらと見ていました。まるで皆が自分を見ているような気がして、一体どうやって祈ればいいのか？ そこで、私は柱の陰に立ち、できる限り祈りました。祈りを終えて、修道院長のところへ行った。彼女は私に紅茶を振る舞い、ご馳走をしてくれ、自分の過去——どのように生きてきたか、どうやって修道院に入ったか——について話してくれた。そしてこう言った。「私の知り合いに貴族がいたの。とても気高い人だったけれど、教会に来ると、みんなが自分を見ているように感じてしまうの。彼は柱の陰に隠れて、ただ立っているだけだったわ。」私は最初、その意味が分からず、「その方の名字は？」と尋ねました——歴史上の誰か、見覚えのある人物かと思ったのです。しかし、彼女は答えず、話を続けました。後になってようやく、彼女が私のことを話していたのだと気づきました。

修道院長は、私にアルマアタへ行き、ヨセフ主教と面会してほしいと望んでいた。「私たちには」と彼女は言った。「素晴らしい主教がいらっしゃいます。」修道院長は彼に温かい思いを抱いており、彼も彼女を深く尊敬していたため、カラガンダに来るたびに必ず彼女を訪ねていた。しかし、私は母に対して大きな信頼と親しみを感じるようになっていたので、母にこう言いました。「あなたを知っているだけで十分です。他の人たちは、正直なところ、必要ありません。」そして、軍隊に入るまで、私は結局、大主教にお目にかかることはできませんでした。

軍隊での勤務はわずか1年でしたが、除隊するとすぐに、ザゴルスクへ行き、神学校に入学しようと決めました。すぐに、まだパスポートも受け取っていないうちに、カラガンダへ行き、母から学業への祝福をいただくことにしました。その頃、母の家にはアルマアタから来た、ヨシ

フ大主教の知人であるエフストリア・イヴァノヴナ・レシェーヴァが滞在していました。すると母上は彼女にすかさずこう言いました。「彼女もアルマアタへ行くのだから、あなたも彼女と一緒に大主教のもとへ行っておいで。行って、行って！」母上が私をそこへ送り出すという以上、他に選択肢はなく、私は向かいました。

大主教は私をととても温かく迎えてくださった。目の前にいたのは、普段着のポドラスニクとフファイカを着た長老だった。私はこの大主教を他の大主教たちと比較することができなかった。まだ大主教を見たことがなかったからだ。大主教の注意深い眼差しと目が合い、彼はすぐに、自分のところへ来たのがどんな人物なのかを理解しようとしていた。私はすでに彼について多くの話を聞いていたので、母がこれほど敬虔に慕っていたこの長老を、私もまたじっと見つめていた。彼は少し興奮していた（後になってその理由を知った——大主教の侍者が去ろうとしていたのだ）。大主教は私にあらゆることを尋ね、しばらく滞在するよう勧めてくださった。私が帰ろうとしたとき、彼は「また私のところへ来てくれるかい？」と尋ねた。「主の御心次第ですが」と私は答え、「いつかまた訪れるかもしれません」と言った。

私はチェリャビンスクの自宅に戻り、パスポートを受け取ると、そこからすぐにモスクワへ向かうつもりで再びカラガンダへ向かった。そこに着いたばかり（午前10時のことだった）ところ、ヴァリャ・ヴェレテニコヴァが入ってきて、妙な目つきで私を見つめる。彼女は私の少し前に母のもとを訪れ、その後、用事で司教に電話をかけるために公衆電話ボックスへ向かったのだが、司教はこう尋ねた。「母のもとにいるあの男はどこだ？ ——なんだか奇妙な言い方だった——「あいつはどこにいるんだ？ 俺のところに来させろ、彼が必要なんだ」と。するとヴァリャは「彼はいません。ずっと前にウラルへ行っちゃいました。私は母上のもとから来たばかりですが、そこにはいません」と答えた。「いや、あそこにいる、あそこに。そして母上に伝えてくれ——彼を俺のところへ送らせろ」と。すると彼女が部屋に入ってきて、目を丸くした——私は母のところに座ってお茶を飲んでいたので。そして母に、主教様が私に会いに来てほしいと伝えた。「まあ、神の御心は何かを変えるものね」と母は言った。「あなたもアルマアタへ行かなければならないわ。」私はザゴルスクに行くつもりでいたのに、今度はアルマアタだ。あれこれと変わりやすいものだ。「まあ、母上、お許しいただければ、その通りになりますように」と私は言い、二日後にはすでにアルマアタで主教様のもとにおりました。

主教様はとても落ち込んでおられました。侍者が去ってしまったのです。しばらくお会いしていなかったのですが、彼はすでに老い衰えた老人のようでした。どうやら、深く心を痛めておられたようです。

主教は「私のところでしばらく暮らしてください」とおっしゃいました。そして私は、主教が亡くなる日まで、8ヶ月間、主教の元に暮らしました。

この方たち、ヨセフ大主教とアグニア修道女には、ある特質がある。それは、人の魂をただその手に取り込むだけで、それだけで、人は知らず知らずのうちに変わり、生まれ変わるのだ。彼らには、他人の魂に恵みをもたらす力がある。人が何らかの心の重荷を抱えていたり、心が乱れていたり、人生で何かを探し求めている時に、たまたまこのお二人の元を訪れると、すぐに心が落ち着き、探していたものを見つけたと直感するのです。この特質はアグニア修道女にも、ヨセフ大主教にもあり、それは非常に鮮明に現れていました。私にもそうでした。私は、どう生きていけばいいのか、どこへ向かえばいいのか分からなかったが、アグニヤの母に出会い、彼女の善行を目の当たりにして、彼女を模範とし、何かしら彼女に倣いたいと思った。当時は教会とは縁が薄かったにもかかわらずだ。そして、ヨシフ主教も同様で、彼は私をその手の中に迎え入れてくれた。

彼は実に際立った人物でした。大主教の死後、私だけでなく多くの人々に深い印象が残りました。彼が亡くなった時、誰かが電話をかけてきて、「まさか、イワン・ミハリーチが亡くなったって本当か？」と尋ねてきました（彼の世俗名はイワン・ミハイロヴィチでした）。「本当です」と私が答えると、「ああ……」と、受話器の向こうから深い嘆きが聞こえてきました。「

立派な人だった！」と。教養が高いとか、そういう表現は使われず、その言い回しは私にはあまり文学的ではないように思えました。電話をかけてきたのは、おそらく教会とは無縁の人で、もしかするとかつて人生で一度だけ道が交わっただけの人だったのかもしれませんが、それでも「立派な人だった」という深い嘆きが伝わってきました。

ヨシフ主教とアグニア修道女——二人は互いに深く尊敬し合っていた。どちらがどちらをより尊敬していたのか——主教がアグニア修道女を、それともアグニア修道女が主教を——私にはさえも判断がつかない。ある時、私は主教の許可を得て、カラガンダにいる修道女のもとへ数日間行こうとしていた。その時、主教は私に修道生活についてこう話してくれた。「私が君を剃髪し、証明書も渡そう。だが、それが公開されるのは私の死後になる。」私は断った。修道生活は自分には向いていない、自分の力では無理だと考えていたからだ。すると主教は、おそらく私が単に自分から剃髪を受けるのを嫌がっているだけだと思い、こう言った。「まあ、いいだろう。私から受けたくないのなら、アグニア修道院長に剃髪してもらえばいい。行け、彼女がやってくれる。私は自分の手で認証してやる。」私もそれを断りました。今でも、尼僧が男性を僧侶として剃髪する権利があるのかどうかは分かりませんが、とにかく私にはそのような祝福があったのです。

アグニア修道院長は、大主教に対し、彼に総主教の座が打診されるだろうと予言していました。彼女はそれを比喩的に話していましたが、大主教はすぐに彼女にこう言いました。「修道院長、黙ってください。さもないと、あなたを教会から破門します。」そして実際、その後、大主教は総主教の座の候補者として指名されましたが、彼はそれを断りました。

母アグニアは、私の人生においても、彼女自身の人生においても、多くのことを予見していました。私の母は、私が母アグニアと知り合う前から彼女を訪ねており、母アグニアは、私の不信仰が消え去り、私が聖職に就くことさえあると予見して、私のために救世主のイコンを託してくれたのです。

母上の洞察力は、時折、まるで何気ないふりをして現れることがありました。ある時、とても貧しく、重病の女性が訪ねてきたのを覚えています。母上は言いました。「ニコライ・ミハリーチ（私はまだ22歳の若者でしたが、母上は私の名前と父称で呼んでいました）、ニコライ・ミハリーチ、あそこに卵があるでしょう、彼女に卵をあげなさい。」「いくつですか、マチュシュカ？」「あなた、そこにいくつあるか数えてごらん、数えて。」私は数えてみた——十五個。「ほら、彼女にあげなさい。」「では、私たちには——」と私が言うと、「私たちには持ってこられるから、心配しないで。」2時間ほど経つと、別の女性がやって来て卵を持ってきました。「お母さん、卵を受け取って。」「ニコライ・ミハリチ、」と母は言いました。「受け取って、いくつあるか数えて、数えて。」私は数えてみました——15個でした。そんな感じでした。一見何気ない出来事のように思えるが、よく考えてみると……あるいは別の時のこと。私はチェリャピンスクの自宅へ帰るつもりで、「マトウシュカ、家族に知らせるために電話をかけに行かなくては」と言った。「まあ、」と彼女は言った。「行ったら、駅で電話すればいいわ。礼拝に行って、心配しないで、駅に着いたら電話して。」私は祈りを捧げ、礼拝から帰る途中、こう考えた。「駅に着いてから電話するって、いつだ？ まだ切符も買ってないし。今すぐ行って電話しよう。」公衆電話に行ってみたが、閉まっていた。バスに乗って別の公衆電話へ向かい、何度も電話をかけてみたが、通じなかった。母の言葉を思い出し、「まあ、どうせ無駄だろう」と思い、母のもとへ向かった。着いてみると、寒さで身が凍りつき、母には何も言えず、お茶を飲んでから出発の準備を始めた。駅に着いたのは遅く、列車の出発15分前だった。駅を歩いていると、電話ボックスが見え、ドアが開いていて、誰もいない。そこへ駆け込み、番号をダイヤルして、二、三言話すと、列車に乗り込み、家路についた。電話をかけるのに、文字通り二、三分しかかからなかった。

アグニア修道女とヨセフ主教——このお二人は、私の人生を変えた方々です。私だけでなく、お二人の恵みと謙虚さ、忍耐、そして祈りによって、非常に多くの人々の人生を変えました

。聖セラフィムが言ったように、「平和な心を持ちなさい。そうすれば、あなたの周囲の何千人もの人々が救われるでしょう」。そして、このお二人は、まさにその周囲で何千人もの人々を救った方々なのです。

アグニア修道女は、スキマ（修道服）を纏った状態で、1976年3月17日に亡くなりました。臨終の病に倒れた際、40日間食事を摂らず、死が近いことを予感して、「棺が二つあるだろう」と予言しました。

3月17日、聖体拝領の後、アグニア修道女は安らかにその魂を主の御許に委ねた。姉妹たちが彼女を清め、衣を着せるためにやって来た。彼女たちと共に、セバステイアン神父がカラガンダで投獄されていた頃に彼のもとを訪れた4人の修道女のうち、最後に残っていたフェヴロニア修道女（修道名はフェクラ）もやって来た。アグニア修道女の着衣の最中、フェヴロニア修道女も突然この世を去った。アグニア修道女は、彼女を嘆きの谷から、永遠の喜びに満ちた天の宮殿へと連れ去ったのだ——修道女たちはそう解釈した。二人はミハイロフスキー墓地に並んで埋葬された。

修道女アナスタシア

（修道女ユリアが、修道女アナスタシアの語りを書き留めた。）

アナスタシア・イヴァノヴナ・シェヴェレンコは、1888年にヴィテブスク州の靴職人の家庭に生まれた。彼女の幼少期は極めて過酷なものだった。父は酒を飲み、暴言を吐き、殴り合いの末に命を落とした。アナスタシア自身は、父の死を悲しんで泣かなかったばかりか、母に対しても「これでパパはもう怒鳴らないよ」と言って、泣かないように説得していたと回想している。母には8人の子供がおり、皆まだ幼かった。彼女は母のことをとても良い思い出として語っていた。母はいつも穏やかで、非常に信心深かった。母はアナスタシアを学校に通わせたが、彼女は勉強をしたくなかった。「初めて読み上げを命じられた時」と母は回想していた。「『庭では霜がパチパチと音を立てていた...』という、私が暗記していた詩が出てきた。本を読みながらとても上手に読み上げたら、すぐに2年生に飛び級させられた。しかし、次に呼ばれたとき、知らない詩が出てきました。私はそれを読むことができず、また一年生に戻されてしまいました。でも、私は勉強したくなかったので、学校を辞めてしまいました。」

母は自分の子供時代についてこう振り返っていた。「昔はどの家庭にも『長老』がいて、母の言うことが絶対だった。『ママ、あそこにある光は何？』『特別な人たちが祈っているのよ』。『それ、私にも見られる？』『いいえ、あれは神に選ばれた特別な人たちだから』すると、ペーチャが走ってきた。「お母さん、おバカなペーチャが走ってくるよ」「彼はバカじゃないよ」「でも、子供たちは彼をそう呼んで、石を投げつけてくるの」「あいつらこそバカよ」と母は言った。「ペーチャはキリストのために聖なる愚者なのよ」そして私は思った。「私だって、キリストのために『おバカさん』になれるかもしれない？」そして、神に感謝して、私は『おバカさん』として生きてきた。（その間、主は知性の一部を取り去られるのだ。）」

アナスタシアが10歳になったとき、父の妹である叔母が彼女を引き取り、商売の手伝いをさせた。そして14歳のとき、兄が彼女をワイン工場に皿洗いの仕事として雇わせた。そこで彼女は3年間働いた。その後、アナスタシアは家を出たが、見つかって家まで連れ戻された。この時から、彼女は狂人だと見なされるようになった。まもなく、彼女は再び水を汲みに行き、井戸のそばにバケツを置いて、二度と戻らない旅に出た。18歳の若い娘は、身を寄せる場所もなく、放浪の身となった。

「毎晩、」と母は回想した。「寝床を探さなければならず、朝になるとまた歩き出さなければならなかった。とても辛かった。特に一度、寒くて汚く、雨が降りしき中、私は全身が凍えるほどだったのを覚えている。どこへ行っても断られた。胸の重さは耐え難いものだった。野原で小さな小屋を見つけ、頭を小屋の中に入れ、体は外に出したままにした。その状態で一晚を過ごした。翌朝、教会へ向かった。教会の玄関に足を踏み入れた途端、司祭が『ああ、至甘く、至慈愛に満ちたイエスよ……』と読んでいるのが聞こえた。私はその場に崩れ落ち、涙が川のよ

うに溢れ出た。「主よ、あなたのことなどすっかり忘れていました！」するとすぐに助祭が近づいてきて、自分の家へ招いてくれた。その後、皆が私を呼んでくれるようになった。こうして主は私たちを試み、苦難を通して「君主や人の子ら」に頼るのではなく、ただ唯一の主だけに頼ることを教えてくださるのだ。

その後、イヴァノフスク州のシュユ市にある叔母の家へ行った。叔母は私を、ある工場主の家にメイドとして紹介してくれた。仕事は楽だったが、そこで2週間過ごした後、主人からの嫌がらせのせいで辞めてしまった。その後、叔母は、長老アムブロシイの霊的な息子であるある地主の家に私を雇ってもらった。

そこで私は6年間、家政婦として働きました。仕事は山ほどありましたが、なんとかこなしていました。とても祈りたい気持ちでしたが、その時間はありませんでした。女主人は正午まで寝ていました。「まさか、彼女には時間を惜しむ気持ちがないのだろうか？」と私は思いました。私は泣いて教会へ駆け込み、教会の玄関先で貧しい人たちに、皆に十分に行き渡るように少しずつお金を配りました。そうして私は自分の罪を償っていたのです——自分の代わりに祈ってくれる人々を雇っていたのです。そしてやがて、ある種の切なさが襲い、深い絶望に包まれ、生きることも不可能に思えるほどになりました。「まさか——」と私は思った。「一生、こんなふうに過ごさなければならぬのだろうか？」しかし、慈悲深い主は、悲しむ者たちのすぐそばにいてくださる。ある修道女、ルフィーナが、オプティナ・プスティンの長老たちのところへ行くよう勧めてくれた。私はそこへ向かった。敵は「引き返せ」という考えで私を惑わせたが、なんとかたどり着いた。そして、ジズドラ川にたどり着き、片足を渡し船に乗せた途端、すぐに心が軽くなった。アナトリー神父は、私が以前の場所で暮らすことを祝福し、家主に私を愛情を持って受け入れてくれるよう手紙を書いてくださった。家主は私を受け入れてくれ、私はそこでさらに2年間暮らした。その後、ポロツク修道院へ行き、そこで修道女の位を受けた。ある日、そこである修道女と口論になった。その修道女がある日、熱湯の入ったやかんを運んでいた。私は飛び上がってやかんを奪い取り、横へ投げ捨てた。皆、その行動に驚いた。しかし、少し時間が経つと、その修道女は私の足元にひれ伏し、私を熱湯でやけどさせようとしていたと告白した。

修道院で2年間過ごした後、放浪の旅に出ました。オプティナ・プスティニでは、アナトリー長老が私を「聖なる狂人」となるよう祝福してくれました。彼は私に二人の同行者を付け、ティホノヴァ・プスティニへ行くよう命じました。少し歩いたところで、私はひどい赤痢にかかってしまいました。歩くことができず、森の中で横になっていると、帽子をかぶっていない父が歩いてくるのが見えました。父は「ここに留まらず、一番近い村へ行きなさい」と言いました。そして私たちは歩き出しました。最初の小屋にたどり着くや否や、私は敷居に腰を下ろし、目が閉じ、意識を失った。すると突然、ある目に見えない力が私に触れ、手の代わりに力強い翼が現れ、両側に広がった。霊的な目が開かれ、私は、私を引き裂こうと待ち構えている無数の悪魔たちが私のそばを通り過ぎているのを見た。しかし、私は聖体拝領者であり、体で十字を切り、翼を交差させていたため、悪魔たちは私に手を触れることができなかった。そして、最後の一匹、最も重要な悪魔がトランプの束を取り出し、私の顔をそれで殴ろうとしたが、かすただけだった。その時、私はトランプで遊んでいたこと、そしてそのことを悔い改めていなかったことを思い出した。

私たちはそこで一晩を過ごした。朝、私の同行者たちはティホノフの隠修院へと向かったが、私は起き上がることができなかった。しばらくして起き上がり、行こうとしたが、納屋の中で再び顔から牛の糞の中に倒れ込んでしまった。どうやら長い間横になっていたようで、体についたものはすべて乾ききっていた。その時、幻が見えた。黒い衣をまとった女性——聖母マリア、そして飼料桶の下には修道士、イエロディアクンのパヴェルがいた（彼を最後に見たのは、彼がこの世にいない頃のことだった）。その後、体を洗ってもらい、食事を与えられ、私はゲオルギー・チェクリャコフスキー神父の兄弟が住む集落へ向かった。日が暮れた。「どこで一晩過ごそうか」と考えた。教会へ向かい、扉を軽く押してみると、鍵がかかっていなかった。私は喜

び、教会に入り、寝る準備を始めた。上着を脱ぎ、長袖の白い下着だけになった。夜がどのように過ぎていったのか、私は気づかなかった。朝、番人がやって来て、真っ白な姿の私を見て、幽霊かと思って怖がった。彼は逃げ出し、ゲオルギー・チェクリャコフスキー神父の弟とその若い妻を連れて戻ってきた。彼らは私を捕まえ、警察へ連行した。道中、パスポートを求められた。私は「パスポートはないけれど、紙切れならある」と答えた。（私がポロツク修道院を去る際、ある聖女が、修道院から紙を受け取るようにと私に言っていたのです。）そして彼らがその紙を読んだとき、若い奥さんが「あら、かわいそうな子！」と言いました。（母は、この言葉を聞くとたびにいつも泣いていました。）彼らは私を自宅に連れて行き、肉入りのボルシチを出してくれました。彼らの心遣いを見て、私はボルシチをすべて平らげました。その後、彼らは私をゲオルギー・チェクリャコフスキー神父のもとへ連れて行ってくれました。私は神父に、放浪の旅がいかにも大変かを打ち明けました。神父は言いました。「それは、頭上に屋根がないからだよ。もしよければ、ここにいてくれ。」しかし、そんな言葉などどこへやら！すぐに気が軽くなり、私は飛び起きて、また放浪の旅に出ました。歩き続け、森で道に迷ってしまった。寒く、すでに雪が積もっていたが、薄着だったため、体が冷え始めた。横になりたいと思い、ほとんど横になりかけた。二人の男性を見かけ、彼らから逃げ出して道に出た。最初に見つけた小屋に駆け込み、そこで靴職人が私を温めて食事を振る舞ってくれた。」

オブティナに住んでいた頃、セバステイアン神父は長老ネクタリオの修道見習いだった。そこでは、破れた赤いスカートをはいて歩いていた。時折、主が誰かのこの悪やあの悪を暴かれることがあり、そのたびに彼女は皆の前でその人を糾弾し、そのせいで殴られることもあった。[特に、カラガンダの人々が語る修道院長夫人に関する話には、次のような事実が知られている。ある時、徹夜祈祷の最中、彼女は聖句を読んでいた修道士に飛びかかり、胸を露わにして、その腕を掴むと、そのまま説教壇まで連れ回した。また、変容祭の十字架行列の際、木に登って聖職者たちにリンゴを投げつけ、それによって修道院の近いうちの閉鎖を予言した。]。しかし、セバステイアン神父は修道院長を殴ったことは一度もなく、修道院長が長老の独房に忍び込んだ時だけ、彼女の足を踏んで追い払っただけだった。

「なあ、ナスティア、覚えているか」と、ある時神父はこう回想した。「君が長老のベッドの下に隠れた時、私がオブティナで君を突き飛ばしたことを。君は階段を転げ落ちた。するとネクタリイ神父が私に言ったんだ。『さあ、ステファン、その言うことを聞かない娘を突き飛ばしてやれ。ほら、隠れているじゃないか！彼女を懲らしめてやれ！どうせ聖愚者になるんだ、他に道はないんだから。』そこで神父は黙り込み、それからこう言った。「あの時、君がどれほど可哀想だったことか！だが——従順が第一だ。」しかし、母は聖愚者になることを拒み、泣きじゃくっていた。（彼女は美人で、頬は赤く、三つ編みは長かった。）すると、ネクタリイ神父はこう言った。「神に従わないなら、地獄の方が楽だと思うのか？」

ある時、森へ行き、ベリーを摘んで座り、少し食べた後、ひどく喉が渴いた。すると突然、地面から泉が湧き出ているのを見つけた。水は美味しくて透き通っていた。私はその水を桶に汲んで、思い切り飲んだ。それから森の中を歩き回り、精一杯歌を歌った。それ以来、歌うようになった。また喉が渴いたので、あの場所へ行ったが、泉はもうなかった。

ある時、オブティナで私は靴を脱いで氷の上を走っていました。友人が近づいてきて、靴を履くよう諭しましたが、私は走り続けました。その後、教会へ行き、それぞれのイコンの前で三回ずつお辞儀をしました。すると、私の足はまるで木のように固くなり、曲がらなくなってしまう。それをある長老が気づきました。彼は私のところへやって来て、こう尋ねました。「どうして足が曲がらないんだ？」私は「お辞儀のせいです」と答えると、彼は「いや、足を冷やしてしまったのだ。これから痛むだろう」と言いました。私はひどく悲しみに打ちひしがれ、足を失ってしまうのではないかと恐れて、一瞬にして美少女から恐ろしい姿へと変わってしまいました——悲しみとは、これほどまでに人に影響を与えるものなのです。

当時、私は二十六歳だった。秋、オブティナ近くの森で道に迷ってしまった。雪が降り始めたが、私は裸足だった。長い間出口を探し続け、夜になってスキート（小修道院）にたどり着

き、鑄鉄のストーブの上に座った。修道士たちが私を見つけ、小屋に招き入れてくれた。私は修道士たちのところには行かず、修道院へ向かった。扉を叩くと、「誰ですか?」と尋ねられた。私は正体を明かすことなく、製材所へ向かった。そこには番人の小屋が空いていたが、暖房は入っていなかった。ストーブの上に登ったが、体を覆うものは何もなかった。そうして朝まで過ごしていたところ、知り合いに見つかり、家に連れて行ってもらった。そこで、まるで木のように冷たくなっていた私の足、特にふくらはぎを温めてもらった。でも大丈夫、痛みはなかった。痛みを感じたのは、1964年のカラガンダでのことだけだった。

キリスト教徒への激しい迫害があった頃、私はカルーガのある修道女の家身に身を寄せていた。体調が非常に悪く、生き延びられないかと思われた。ある朝、その家の主人が教会へ出かけた後、私はまるで聖母マリアのイコンの前で祈りを捧げているかのように感じ、キオットの中の聖母が微かに動いたのを見た。すると、聖母が白い使徒服を着てテーブルのそばに立っていて、私を見つめているのに、聖像箱の中は空っぽでした。私は聖母に言いました。「聖母様、一体何が起きているのですか?」(キリスト教徒への迫害のことを指していました。)すると聖母は、「洗礼の水とプロスフォラを飲みなさい」とおっしゃいました。そして再び聖像箱の中に入っていました。」

それ以来、アナスタシア母は、洗礼の日に向けていつも大量の水を蓄えるようになりました。カラガンダでは、水を輪状に凍らせておき、一年中、皆に洗礼の水とプロスフォラを振る舞っていました。

迫害の時代、修道院長は強制収容所に収容されていた。

釈放後、彼女はコクチェタフに連れて行かれ、定住することになった。「家々を回った。ある家に行くと、『パンはない』と言われた。でも、ジャガイモとクワスを振舞ってくれた。別の家に行くと、すぐに捕まり、警察に連行されそうになった——その家では下着がなくなっていたのだ。しかし、近所の人たちが庇ってくれたおかげで、私は解放された。さらに先へ進むと、三軒目の家でまた捕まった——小麦の袋がなくなっていたのだ。また私を責められた。大変なことになりかけたが、あるおじさんがかばってくれたおかげで、解放された。だって、刑務所を出たばかりの私は、確かに不良みたいに見えていたんですから。さて、外は夜。どこで寝ようか? ある修道女たちのところへ行ったのですが、ドアをノックする勇気はなくて、彼女たちの庭で寝ました。雪が降り出し、私を分厚い雪の層で覆いましたが、私は暖かかったです。」

カラガンダでは管理人小屋に住んでいて、みんなに食べ物あげるのが好きで、自分はほとんど食べなかった。誰かが何かをくれたら、まるで自分が必要としているかのように喜んで受け取った。そして、すぐにそれをすべて他の人たちに分け与えた。最初は、自分の持ち物が保管されていた浴室で寝ていた。その後、寒い隅に様々なものを積み上げて、長く横になれないようにした。夕方から寝て、夜は働いていた——寝台の下で掃除をしたり、クワスを煮たりした。彼女が作るクワスはとても美味しく、みんなに振る舞っていた。時折感情が高ぶり、何らかの理由で一部の姉妹を泣かせてしまうこともあった。服装は、片方の足にガロシャ、もう片方にヴァレンクを履いていた。冬にはガロシャとブーツを、夏にはヴァレンクを履いて歩くこともよくあった。ドレスはいつも汚れており、きれいなものを着ても長くは持たなかった。頭にはスカーフか布を巻いており、ほとんどいつも乱れていた。彼女を片付けようとする、「あっちへ行って!」と追い払われた。聖体拝領の前だけ、きれいな服を着て、少しはきちんとした振る舞いをした。

母は透視の賜物を持っていた。ある時、私に重苦しい気分がのしかかり、頭の中が考えでいっぱいになって、祈ることができなかった。すると突然、後ろから誰かが私の肩を強く叩いた。「見つかったの? 私は一晩中あなたを探していたのよ!」——アナスタシア修道女が大きな声で言った。するとすぐに、私の心は軽くなった。彼女は祈りを込めて手を叩くことで、悪霊を追い払ってくれたのです。何度も私の心に浮かぶ思いに答えてくれました。私は辛かった。「母上は私を見てくれない」と、私は思っていました。すると、彼女はすぐに近づいてきて、無言で私の目を見つめました。私は言いました。「お祈りください、心が重いです。」「ほら、神父様

が一人で部屋にいらっしゃるわ。早く神父様のところへ行きなさい。」行ってみると、神父様は微笑みながら尋ねました。「どうしたの？」——「心が重いんです」と答えました。神父は手を胸に当てて、「悪霊が、わが子よ、安らぎを与えてくれないのだ。やがて過ぎ去るさ」とおっしゃった。そして、本当に、すべては過ぎ去った。

1970年。棕櫚の日曜日

聖体礼儀の最中、ある老婦人が気分を悪くしましたが、大勢の人で溢れていたため、外に出ることはできませんでした。マトゥシュカは左側の聖歌隊席に座っており、私たちにその老婦人を聖歌隊席まで連れて行くのを手伝ってほしいと頼みました。そして、彼女を自分の隣に座らせ、老婦人の頭を自分の肩に乗せました。10分も経たないうちに、その老婦人は立ち上がり、マトゥシュカに感謝した——彼女の体調はすっかり良くなっていたのだ。しかし、マトゥシュカは体調を崩してしまった。彼女はしばしば、周囲の人々の病気を自分のものにしてしまうことがあった。彼女にとっては辛いことであり、ある時こう打ち明けたことさえあった。「重病の人のことを憐れんでしまったから、今こうして苦しんでいるのよ。」

1970年8月、神父が生前に取り壊すことを許さなかった教会の番小屋を解体する計画が立てられた。明日、作業員が来て解体作業を開始する予定だった。私たちは皆、神父の祝福が破られることを嘆いていた。その前日、アナスタシア修道女は重病になり、部屋を閉め切って誰も入れないようにしてほしいと頼んだ。そうして彼女は一晩中、昼の3時まで横になっていた。昼の3時になると、彼女は飛び起き、部屋から駆け出してきてこう言った。「さあ、もう大丈夫、楽になったわ。」するとすぐに、村長と担当官が入ってきて、担当官は番小屋を解体したり、建設工事を始めたりすることを禁じた。もちろん、マトゥシュカの祈りのおかげである。

偶然か、それとも奇跡か

7月、聖セルギイ・ラドネジスキーの聖遺骨移送の祝日に際し、母上は私たちにこう言われました。「明日は、マトゥシュカが流刑生活を送ったドリンカ村の修道院へ、聖人のもとへ集まってください。」私たちは、教会の塗装という重労働に追われていてとても疲れていたため、この祝福をあまり喜んで受け入れませんでした。「疲れているし、休みたい」と断り始めましたが、修道院長はこう言われました。「あそこで休めばいいのよ。家よりも、そこで頭をすっきりさせられるわ。」

聖セルギイの祝日の朝は曇り空で、小雨が降っていた。ところが、祈祷会が始まると、土砂降りの雨が降り出した。私たちは皆、「これで行かなくて済む、休める」と喜んだ。祈祷会が終わると、今度はマトゥシュカのもとへ行き、もう旅行への祝福は下さないだろうと期待した。しかし、ドアを開けた途端、彼女はすぐにこう言いました。「さて、行くの？」私たちは戸惑い、顔を見合わせ、こう答えました。「ご祝福をいただければ。」「今すぐ、一分たりとも遅れることなく、出発しなさい。神の御加護を！」しゅしゅ荷物をもとめ、出発しました。ただ、その前に、セバスティアン神父の墓に立ち寄り、祝福を受けました。

ドリンカに到着すると、私たちは目的地である、神父が収監の最後の数年を過ごした分署へ向かった。森まで長い道のりを歩き、その後森の中を進んだが、雨は降り続いていた。私たちは歩きながら自然の美しさを堪能し、の囚人たち——その中には私たちの神父様も含まれていた——が植えた並木道が、どれほど巧みに、整然と植えられているかを眺めた。その後、木陰に座って食欲をそそる食事を取り、一休みしてから再び歩き出した。私たちは、降り続く雨のことをすっかり忘れていました。気分は最高で、心には温かさ喜びが満ち溢れていました。歩きながら、バチューシュカのことを思い出していました。足元には水たまりや泥がありましたが、歩くのは楽で、まるで歩いているのではなく、飛んでいるかのようにさえ感じられました。夕方5時頃、バチューシュカがいる病棟に到着しました。するとすぐに雨が止み、太陽が顔をのぞかせ、受刑者たちが植えた森に囲まれたその場所は、実に素晴らしい光景に見えた。そして帰り道になると、また雨が降り出した。しかし、一日中雨の中にいた私たちなのに、まったく濡れていなかった

た。私たちはとても満足し、喜びに満ち、心が軽やかで、頭もすっきりしていた。夜遅く家に帰り、母にそのことを話すと、母は「神父様ご自身があなたたちと一緒に歩いて、雨から守ってくださったのよ」と言った。私たちは皆、このような休息を与えてくれた母に心から感謝した。

ある夏の日のこと、ニジナヤ通りに住む神父の娘たちが、畑ヘジャガイモを掘りに出かけることになった。アナスタシアの母も一緒に連れて行ってほしいと頼んだ。彼女は大きな袋を取り出し、その中に長靴、スカーフ、セーター、ストッキングなどを詰め込んだ。袋はパンパンになるまで詰め込まれた。娘たちは笑いながら言った。「お母様、何をしていますんですか？ その袋、重くて持ちきれませんよ」——「大丈夫、持っていくから、行こう！」畑に着いて、作業を始めた。すると突然、雲が立ち込め、風が吹き、雨が降り出し、たちまち冷え込んだ。お母様は私たちに服を着せ、手近なものを使って体を覆ってくれ、袋の中身をすべて配り尽くした。私たちは皆、お母様に感謝した。

タイシア・グリゴリエヴナ・フォミナ

アナスタシア修道女とはとても親しかった。彼女は私にとって、神父様よりもさらに身近で、家族同然の存在だった。アナスタシア修道女——彼女はまさに「真の愛」そのものだった。他の人には怒鳴りつけることもあったが、私に対しては生涯を通じて慈しんでくれた。彼女は聖なる狂人の道を歩んでおり、その行動を理解するのは難しかった。例えば、彼女の実の兄（サントペテルブルクに住んでいた）は、彼女を狂人だと思っていた。家族は彼女をととても愛していたが、彼女が奇妙な振る舞いをするようになると、皆が彼女のことを嘆いた。マートゥシュカは自分の家族を憐れんでおり、彼女の妹マリーナは、まだバチューシュカが存命の頃に、ここへ三度訪ねてきた。私たちの家族も、彼女の兄を訪ねてサントペテルブルクへ行き、兄に会いました（彼は彼女に似ていて、彼女は若い頃とても美しかったのです）。そして、兄に聖体拝領を授けました。しかし、彼らは彼女が正気であることを理解できませんでした。

彼女は自分のことをひそかに言い、自分の知恵を露骨に見せることはなかった。時には、そのせいで殴られたり、叱られたり、あるいは厳しすぎると見なされたりすることもあった。母が、ある姉妹が許可なく何かを取ったことを叱りつけたのを覚えている。「あんたはこんな風で、あんな風で、手がつかないようにしてやる！」すると私が近づいてこう言いました。「お母さん、私も一度、許可なくお母さんから何かを取ったことがあります。」母は振り返って言いました。「ここは私の場所、これは私の持ち物よ。欲しいものは何でも持って行きなさい。私に言う必要はないわ。」母は、その姉を何かで謙虚にさせなければならなかったのです。しかし、母自身には何も持っていなかったのです。誰かが何かを持ってくると、彼女はすべてを欲しがり、すべてを受け取る。しかし5分もすれば、もう何も残っておらず、すべて配り尽くしてしまう。そして、大きな困窮や悲しみに直面している人に対しては、他の人よりも手厚く世話を焼いた。誰かが「あの人をそんなに優遇するなんて」と文句を言うこともあったが、その人には、どんな喜びも感じられないほどの悲劇が降りかかるのだ。

あるいは——さあ、食卓に着いたとしよう。母は一人に食べ物を与え、別の人にはお皿を差し出し、また別の人にもそうし、まるで自分も座って食べているかのように振る舞う。しかし、母自身は空腹のままだった。ある時、母は私にこう言った。「ターシャ、私は一度もパンを腹いっぱい食べたことがないのよ。」

母は若い頃から女性特有の病を患っており、手術を勧められたこともあったが、その病気が彼女に激しい肉体的苦痛をもたらしていたにもかかわらず、彼女はそれを拒み続けた。彼女がまだ若かった頃、この件についてオブティナ・プスティニの老僧に相談したところ、彼はこう言った。「それは君にとっての『鎖』だ。」そして、母はこれらの「鎖」を最期まで背負い続けた。さらに、彼女の足は病んでおり、ひどくむくんで静脈が浮き出ており、恐ろしいほどの痙攣に悩まされていた。彼女は耐え忍び、決して薬には頼らなかった。これこそが彼女の労苦であり、

生涯にわたる偉業であった。おそらく、彼女がヴァレンキやガロシを履いていたのは、他の靴が合わなかったからだろう。

マトウシュカは聖歌隊で歌い、その声は美しかった。彼女がどのように祈っていたかは誰も見ていなかったが、彼女が皆のために祈っていることは誰もが知っていた。

教会では、母は休む間もなく働き、あらゆるものを洗い、片付けていました。彼女はとても美味しいクワスやオート麦のキセルを作りました。神父様について行くときは、必ずキセルを持って行きました。神父様が製粉工場へ行くときは、彼女も後を追いました。彼女は徒歩で行くこともでき、神父様が立ち寄る家々をすべて知っていました。ある時、神父様はメルコムビナートにあるアレクサンドラ・ソフロノヴナの家へ行った。彼女の夫は食道がんを患っており、神父様は彼に聖体拝領を授け、祈祷会を執り行うためだった。彼らが家の中で祈っている間、マトウシュカは菜園の世話をしに行った。すると、ソフロノヴナが外に出て菜園を見渡したとき、気分が悪くなってしまった。マトウシュカは、もう花が咲くはずだったキュウリをすべて引き抜き、葉っぱの部分の部分を地面に突き刺し、根を上向きにしていたのだ。「お母さん！一体何をしたの！棒でも取って叩いてやりたいくらいだ！」ところが翌日、激しい霜が降り、菜園の作物はすべて凍りついてしまった。母はあらかじめソフロノヴナの菜園から収穫を済ませておいたが、彼女に何の損害も与えなかった。

それどころか、彼女は時々、人の家に来て働き、できる限りのことをして、その後、褒められないように、他人のヴァレンカを履いて帰ってしまうこともあった。「お母さん、どうして他人のヴァレンカを履いたの？」——「あら、そのヴァレンカが惜しいの？」バシッ！片方のヴァレンカを片方に投げ捨て、もう片方を反対側に投げ捨て、裸足で去っていった。彼女に感謝すべきか、叱るべきか？皆が困惑している——実に難しい問題だ。

もう一つ、こんな話があります。母が教会の中を歩いていて、みんなを押しつけていくのです。タマラおばさんのところに近づくと、彼女を椅子から突き落とした。「さあ、立ちなさい。病気の人を座らせてあげるわ！」年老いたタマラおばさんを追い出し、彼女よりずっと若いリザおばさんを座らせたのです。姉妹たちは不平を漏らしました。「お母さん、一体何を馬鹿な真似をしているの？」そして、どうなったと思いますか？リザおばさんはまもなく病気になりました。体調はどんどん悪化し、病院に入院しましたが、そこでも状態は良くなりませんでした。その後、がんが見つかりました。マトウシュカは手術を許可しませんでした。彼女は、その人が死ぬことを予見していたのです。そして、若くて健康だったリザおばさんは半年後に亡くなりました。一方、母タマラはその後にもさらに15年生き続けました。以上です。私たちには奇妙なことに思えますが、彼女には彼女なりの法則があったのです。しかし、母は——まさに愛そのものであり、今やこの世にいないような人でした。

アントニナ・イヴァノヴァ

モスクワから神父のところに客がやって来た。駅でタクシーに乗り、ミハイロフカに着く前に、車が穴にはまってしまった。（当時は道路の状態が悪く、でこぼこで、泥は膝まであった。）車は空転して、抜け出せなくなってしまった。

そこで母のもとへ人が来て、「お母様、客がやってくる途中、穴にはまって抜け出せません」と言った。「まあ、引き出しましょう」と母は言った。服を着て、シャベルを肩に担いだ。車のところへ行き、様子を見て、シャベルで荷台の後ろをトントンと叩き、運転手に言った。「おい、おじさん、乗って走れよ、何で掘ってるの？」彼は彼女をとても不思議そうに見つめたが、エンジンをかける気配はなかった。彼女は再び、「エンジンをかけなさい！」と、今度は命令口調で言った。そして、母が命令口調で言うとなれば、誰も逆らえない。運転手の背筋に鳥肌が立った。彼は車に乗り込み、エンジンをかけ、車は穴から飛び出した。運転手は呆然としていた。彼は客を教会まで送り届けると、そのまま走り去った。

翌日、彼は修道院長に感謝を伝えに訪れ、手土産を持ってきて、「どうやって車を引っ張り出したのですか？ここにはブルドーザーが必要だったはずですが」と尋ねた。彼女は「ほら、主が助けてくださったのよ！」と答えた。

アンナ・シェフチュク

私がカラガンダに来た時には、セバスティアン神父はすでに他界しており、アナスタシアとアグニアの両神母も亡くなっていた。私はウクライナから通信制の大学に入学するためにやって来て、試験期間中はミハイロフカにある神父の霊の子たちの家に身を寄せた。当時は宗教とは無縁な人間でしたが、時々ミハイロフスカヤ教会に立ち寄るようになりました。

カラガンダに初めて訪れた時（それは12月のことでした）、教会で「明日は神父様の名日であり、今晚はパラスタスが執り行われる」という会話を耳にしました。当時、私は教会の慣習を知らず、「パラスタス」が何なのかも理解できませんでした。そしてその夜、私はある夢を見ました。教会の庭を、ある司祭に手を引かれて歩いていると、周囲には人々が群がっていたが、その光景はまるで霧の中のようにぼんやりとしか見えなかった。ただ、人々が「セバスチャン神父様、セバスチャン神父様！」と呼ぶ声が聞こえるだけだった。神父はまるで手を振って——「待って、今は忙しいんだ」と言わんばかりに——私を中庭へと案内し、あちこちを指さして説明してくれました。「ここはプロスフォリア（聖体用パンを焼く場所）、ここは食堂だ」。そして、通りへと続く門のあたりには、まるで芝生のような場所があり、小さな小川が流れていて、二人の修道女が座って飲み物を注いでいました。人々は彼女たちを名前で呼んでいた。アグニア修道女とアナスタシア修道女だ。神父は足を止め、修道女たちが小川の水で私に飲ませてくれた。そして、私は教会の中にいた。教会の中央には、私たちの司祭たち——ペトル神父、アレクサンドル神父、パヴェル神父、そしてウラジーミル神父——が立ち、祈りを捧げながら、セバスティアン神父を偲んでいた。そして、私は目を覚ました。

私が住んでいた家の壁には、ある神父の肖像画が飾られていました。目を覚まして、「これは誰の肖像画ですか？」と尋ねると、「セバスティアン神父です」と家主たちは答えました。「今、夢の中で彼を見ましたよ。」「そうか」と彼らは言いました。「それなら、あなたは『私たちの一員』ですね。』

そして数年後、大学を卒業した私はカラガンダに残り、今日に至るまでミハイロフスカヤ教会で会計係として働いている。

教会で働き始めた最初の年、私はまだ習慣で化粧品を使っていた。ある復活祭の週、店に立ち寄ると、そこでフランスのフェルトタイプのマスカラが売られていた。買いたいと思ったが、手持ちのお金がなかった。「まあいいや、また今度来て買おう」と思ったのです。すると、また夢の中で教会が見えました。皆がキスを交わし、「アナスタシア母さん、アナスタシア母さん！」と言っています。そして、修道院長も皆とキスを交わしていました。「私のことなんて、彼女は知らないだろうな」と私は思いました。すると突然、彼女が私のところに近づいてきて、「キリストは復活された！」と言いながら、自分のイースターエッグで私のエッグを叩き、割ってしまった。彼女はとても嬉しそうで、私を抱きしめてくれた。その時、アレクサンドル・キセレフ神父が私たちのところにやって来て、私の化粧ポーチを手を持ちながら言った。「マトゥシュカ、これじゃ救われないよ？」と。見ると、そこにはあのパフ付きマスカラが入っていた。私はとても恥ずかしくなった。「マトゥシュカ、」と私は言った。「買わなかったんです、ただ考えていただけなんです！」すると彼女は私を抱きしめて、「いいのよ、いいのよ」と——まるで化粧をする必要はない、と言わんばかりに。そして、何かを食べさせてくれた。

そのすべてに私は深く心を打たれた——だって、私はただ通りすがりに店に立ち寄っただけなのに、母はすべてを知っていて、心配してくれていたのだ。

そして、アナスタシア修道女は私を教会の聖歌隊に加わらせてくれました。私が祈りに来る時は、ただ立って静かに歌を口ずさんでいた。ところが夢の中では、教会が人で溢れかえり、

司祭たちが聖堂の中央に、まるで式典に出席するかのように立っていて、聖歌隊席にはマートゥシュカが（普段よく着ていたような）素朴な世俗の服を着て立ち、私を呼んでいる。私は怖くなくなってしまいました——行ったら、ここに神父様たちが立っているのに！　すると、アナスタシア修道女は私の手を握り、聖歌隊席へ連れて行き、救世主のイコンの前に立たせて、「『主の祈り』を唱えなさい」と言いました。そして、私が唱え始めるのを待っていました。そこで私は大きな声で唱え始めました。その夢以来、聖歌隊の皆さんが私を聖歌台に引き寄せ、『歌いなさい』と言うようになりました。そしてアレクサンドル神父には、「なぜあの娘が立っているのですか？」と尋ねられました。こうして私は聖歌台に立たされ、そのまま聖歌台に定着することになったのです。

マリア・フェドロヴナ・オルロヴァ

私は重病——皮膚病——を患っていました。助教授や教授たちに治療を受け、少しは良くなったものの、その後また手に大きな傷が現れるようになりました。長い間教会に行っていまいませんでしたが、行ってみると、アナスタシア修道院長が「どうしてこんなに長く来なかったの？」と尋ねてきました。「修道院長、もう本当に参ってしまいました。私の手を見てください！ 仕事にも行けなくて、みんな私を避けてしまうんです」と言うと、彼女は「ふん！ そんなの何でもないわ！ 大したことじゃないわ！ 『指に唾を吐いて、その唾で傷口に十字を切って塗ってみなさい』」と言われました。私はすぐに修道女さんの前でその通りにしました。家に帰っても、延々と唾を吐き、塗りました。すると、傷はあっという間に治りました。本当にあっという間の出来事でした！ 赤く腫れていた傷は、最初は黒ずんで、その後青くなり、傷口が縮んでいき、神様に感謝して、すべて治りました。こんな話です。でも、病院に行ったときは、まるで珍しい標本のように椅子に座らされ、学生たち全員に、どれほど珍しく、滲出性の紅斑がひどいかが見せられていたんです。

オルガ・セルゲイヴナ・マルティノヴァ

私の姪のイリーナは倉庫長として働いていました。ある日、その倉庫に輸入のベッドカバーが30枚入荷しました。イリーナと彼女の部下が不正を働こうとしたのか、それとも何か別の理由があったのか——神のみぞ知りますが、店の従業員たちが倉庫に来てそのベッドカバーを受け取る際、受領の署名をただけでした。書類は店に運ばれたが、ベッドカバーは倉庫に残されたままだった。納品書はあるのに、ベッドカバーがない。しかし、誰かがこのことを口走ってしまったため、店はすぐに閉鎖され、封印され、監査委員会が店に張り付いた。姪はその夜一睡もできず、早朝に私のところへ駆け込んできた。「こういうことになったんだけど、どうすればいい？」と彼女は言った。私は彼女に何も助言できなかった。「行こう、アナスタシア修道院長に会いに行こう。彼女が何と言うか聞いてみよう」と私は言った。私たちはそこへ行った。アナスタシア修道院長は聖歌隊席にいらっしゃった。私たちは彼女のところへ近づき、書類は店にあり、ベッドカバーは倉庫にあり、この件が明るみに出れば投獄される恐れがあることを説明した。どうすればいい？「大丈夫よ！」と修道女は言い、イリーナにこう指示した。「さあ、今すぐトイレの汚水を汲み出すのに使う車を探して、ベッドカバーを持って、あの店へ行きなさい。中庭に入って、そこで待っていて。店からバケツを二つ持った掃除婦が出てきたら、その掃除婦には近づかないで。しばらくすると、また別の清掃員が、やはりバケツを二つ持って出てくる。そいつには素早く近づいて、カバーを渡してこう言いなさい。『どこにでも放り込んでいいから、とにかく建物の中に入れておいて』」

イリーナはそのまま実行した。必要な車を見つけ、店に到着すると、その車は不審に思われることなく中庭へ通された——トイレを掃除しに来たのだと思われたからだ。イリーナは最初の清掃員を見送り、2人目のところへ駆け寄り、その人がカバーを受け取って店の中に放り込んだ

——それで終わりだ。これで一連のトラブルはすべて終わった。録音もカバーも、その場所に無事残った。

もう一つこんな話がある。私の息子、ステパン・ステパニッチが大学に入学する時期がやってきた。私は母のもとへ行き、「お母さん、ステパンが大学に入学するんです。彼を助けてあげないと」と言った。すると母は、「あら！ それはとても簡単よ。彼が試験を受ける日を調べて、その期間に教会に来て、10コペイカのパンを40個ずつ持ってきて。私たちがここで祈ってあげれば、彼は『4』の成績を取れるわ。」そこで私は、その通りにした。最初の試験が終わると、40個のパンを持っていった。それらはあっという間に奪い合われて、配り尽くされてしまった。息子が試験から帰ってきて、4の成績表を持ってきました。次の試験でもまた同じようにしました。全部で4回の試験があり、そのたびに40個のパンを運び、息子はすべての試験で4の成績を取りました。こうして、母の祈りのおかげで、ステパン・ステパニッチは大学に入学することができました。

ニーナ・ホフルシュカ

ある金曜日のこと、私が働いていた病院の同僚たちに、ソーセージを食べようと誘われた。翌日、私は教会に行き、聖体礼儀に参加した。聖体礼儀の後、アナスタシア修道女が皆に聖水を配り始め、私に「こっちへおいで」と言った。私が近づくと、彼女は私を殴り始め、教会中に響き渡るように叫んだ。「ああ、豚め！ ああ、豚め！」私は怖くなった——「豚」とはどういうこと？ 「マチュシュカ、聖水をください！」と叫んだが、彼女は渡そうとせず、殴り続けた。人々が駆け寄ってきて、「ウクライナ娘が殴られている！」と叫びました。するとマトゥシュカは「こいつは豚だ！」と叫びました。どうやら、そのソーセージは豚肉で作られていたようです。

そうして母に鞭打たれた後、私は落ち着きを取り戻し、セバスティアン神父のもとへ祝福を求めに行きました。神父に近づくと、彼は言いました。「ニーナ！ 今日は君の聖名祝日だ！——鞭打たれたということか——さあ、これを受け取れ、プロスフォラだ！」そうやって二人は心を通わせていたのです。

修道士セバスティアン（フミロフ）

ある日、右側の聖歌隊が立つポーチからアナスタシア修道女が降りてきて、教会の中を歩きながらこう叫んでいた。「誰にスカーフ？ 誰に黒いスカーフ？」と。もう一方のポーチに近づくと、そこにはモティア・ミナエワがいて、「マトゥシュカ、黒いスカーフをください。私には黒いスカーフがないんです」と言う。すると彼女は、「いいえ、あなたにはいらないわ」と言って、そのまま先へ歩いていった。そして出口のドアのそばに、私たちの乳母が立っていて、震えながらこう呟いた。「ああ、きっとあの方が私に黒いスカーフをくれるのね。きっと何か恐ろしい出来事が予兆されているに違いない。」アナスタシア修道女が彼女に近づき、「スカーフが必要？」と尋ねた。「いいえ」と私たちの乳母は答えた。「私には黒いスカーフが三枚もあるから、いらないわ。」

「まあ、3枚もあるなら、これもお渡ししましょう。」そして、黒いスカーフを彼女に渡した。彼女は、私たちの乳母が修道女になることを予見していたのだ。

修道女エヴニキヤ（フミロワ）

アナスタシア修道女はこう語っていました。「私が聖なる狂人となるよう祝福を受けたとき、最初の課題は、袋を持って物乞いに行くことでした。でも、私はやりたくなかったのです。『どんな仕事でもやりますから、物乞いだけは勘弁してください！』と言いました。すると、『いいえ、いいえ、仕事ではなく、物乞いに行きなさい』と言われました。」私は小袋を持って出かけた。ちょうど何かの祝日だったようで、若者たちが集まっていた。私はボロ服を着て、小袋

を提げて歩いていると、若者たちが「なんて美しい娘なんだ！」と囁いているのが聞こえた。私は「どうしよう？ 私のことについて話しているんだ」と思った。すると彼らは、「もし彼女をきれいに着飾ったら、なんて素敵なお嬢さんになるんだろう！」と言った。そこで私はある物置に登り、鼻をかんで、その鼻水を自分の顔に塗りつけた。すると彼らは、「おっと、彼女、汚い！ 汚い！」と言った。その瞬間、私はほっとして、その場を離れた。「あ！——と思ったの——私はもう『ブス』なんだ！ それなら、これからは『おバカさん』でいよう。」そうして、一生を過ごしたの。」

オブティナ・プスティニでは、セバスティアン神父が長老の独房を暖め、彼に続いて教会へ向かった。ところが、長老はナスタが独房で何をしているかを見抜いており、教会から出てこようとしなかった。彼女はドアを開け、敷居に座り込み、ドアを塞いでじっと座り続けていた。外はひどい天気！ 雪が降りしきる中だった！ セバスティアン神父が薪をくべるためにやってくると、小部屋は雪でいっぱいだった。ナスタはドアのそばに、ドレスとスカーフだけを身につけたまま座っていた。彼女はドアを塞いで座り込み、閉めさせようとしなかった。神父は「さあ、ナスタ、ドアを閉めさせてくれ！」と説得した。しかし彼女は黙ったままだった。そこで神父は彼女をそっと抱き上げ、別の場所へ移動させ、扉を閉めてストーブに火を入れ始めた。彼女はそこで追い立てられ、殴られていたが、神父は彼女を殴らなかった。彼はその時からすでに、彼女の人生を見通していたのだ。そして彼が小部屋を暖め終えた頃、教会の長老がやって来た。

そして、カラガンダでは、母が時々彼女を叱ることもあった。メルコムビナートには私たちの家族が一人住んでいて、彼らは牛を一頭飼っており、その牛から得られるもの——サワークリームも牛乳も——をすべてバザールで売っていた。彼らは少し欲張りだった。ある時、売りに出すサワークリームを用意しておきながら、自分たちはどこかへ出かけてしまった。アナスタシア修道女が来て、そのサワークリームで生地をこね、山のようにたくさんの揚げパンを焼いて、「どうぞ、食べて！」と言った。サワークリームを全部使い切ってしまった。もちろん、家主たちは彼女に文句を言った。ところが、彼女がまた別の日に、彼らがバザールに行っている間に訪ねてきて、菜園のキュウリを摘んで山積みにした。彼らが帰ってきて、ひどく腹を立てた（がっかりした。——編注）：「一体どういうことか！ どれほど歩き回り、どれほど手入れをしたことか！」それは夕方のことだった。ところが夜になると、突然——霜が降り、菜園の作物をすべて真っ黒に枯らしてしまった。彼らは不平を漏らしたが、母上は『主が明日も明後日も何を与えてくださるかは、私が知っている』と示された。」

また、時には神父様ご自身が、母を通じて人々の罪を糾弾されることもあった。ある時、まだ教会が建っておらず、神父様がメルコムビナートで祈りを捧げていた頃、夕食の後、神父様は皆の寝場所を決め始めた。アナスタシアの母に、「あなたはステパニダのところで泊まりなさい」と言いました。彼女はステパニダの家へ向かいました。「一晩泊めてください！」とドアを叩きましたが、「ここには場所がない」と答えられ、中に入れてもらえませんでした。冬のことだった。しかし、ステパニダの家で泊まるよう神父から祝福を受けていた彼女は、凍えそうになってもそこを離れようとはしなかった。そして、ドアの敷居の上に横になった。だが、もちろん、神父の祈りのおかげで、彼女は凍えることはなかった。朝、家主たちが起きてドアを開けようとしたが、ドアは開けなかった——アナスタシアの母が敷居の上に横たわっていたのだ。夜中に雪が降り、彼女は雪に埋もれてしまった。彼女は飛び起きて、雪を払いながら言った。「あら、ごめんなさい、お邪魔してしまいました。」しかし、神父はわざと彼女を送り込み、この人々の冷酷な心を傷つけるためだったのだ。すると彼らはマートゥシュカのもとへ駆け寄った。「アナスタシア母さん！ なんてこと！ なんてことだ！」彼女は病気で、ほとんど裸同然だったのに、冬の夜は寒かったのだ。彼らももちろん胸が痛んだ。「私たちがあんな態度をとってしまった。私たちに泊まる場所があったのに。」その後、彼らは神父のもとへ懺悔しに行った。やはり、何が問題だったのかを感じ取ったのだ。

別の時、神父様が教会で追悼の礼拝を執り行った際、アナスタシア修道女が飛び起きて、追悼の祭壇から何かを掴み取った。すると神父は杖で彼女を叩きながら言った。「お前、取った

ものを戻したか？」——「いいえ、神父様、戻していません。」「では、なぜ取るのか？ 追悼式には聖火がある。追悼式から何かを取るなら、祈らなければならない。お前は祈ることができるか？」アナスタシア修道女なら、もちろんできたはずだ。それに、このドーナツなど彼女には必要なかったのだ。神父とアナスタシアの母は、追悼式に忍び込んで物を奪う者たちを厳しく非難した。彼らにとってこれは教訓となり——追悼式には神聖な力があることを心に刻み、神父がアナスタシアの母を棒で叩いた光景を長く記憶に留めたのである。

母を葬った時、葬儀の後、私と、葬儀の手伝いをしてくれた神の僕ナデージダさんの両方の右足に、シベリア病のような青い斑点が現れました。かゆくてたまらず、吐き気があり、頭痛もしました。そして9日目まで苦しめられ、足は腫れ上がり、彼女も私も体調が悪かったのです。九日目に、アナスタシア修道院長が追悼会にやって来ました。「修道院長、」と私が言うと、「葬儀の後、私たちの足に何か変なものができてしまったんです。」すると彼女は言いました。「ほら、ブーツよ。私のブーツを履いてごらん。」そのうちの片方は布製の、とても大きなブーツで、もう片方は左足用の革製で、そちらは少し小さめでした。母は私にその布製のブーツを渡して、「ほら、履いて。さあ、今すぐ晩課に行こう」と言いました。でも、そんなものでどうやって歩けるというのでしょうか？ そのブーツは、3、4本の足が入るほど大きかったのです。ナディのものは、左足用で、それより小さかったのです。私たちはマトゥシュカに、私の父の金具付きブーツを履かせたところ、彼女は母イリーナ〔スキイグメニア・イリーナ（コロレヴァ）、1916年—†1993年10月17日。ミハイロフスキー墓地に埋葬。〕にこう言った。「あの子たちに杖を渡してあげて。」すると、母は庭から何か不格好な杖を取り出した。私の杖はやはり少しマシだったが、ナディのは本当にくねくねしていた。そして、私たちは杖と、あの長靴を履いて教会へ向かった。私は黒いパンバーハットのドレスを着て、新しい白いバティストのスカーフを巻いていた。一方、母のイリーナは、ボロボロで破れた汚いショールを頭にかぶっていた。私が「なんでそんなぼろ布をかぶってるの？ 私は彼女の足に巻きつけてあげたのに。かぶるものがないの？」と言うと、「いいえ、いいのよ、いいのよ」と母は言った。まあ、母がそれでいいと言うなら、私にも文句は言えない。教会に着いた。医者のもティアが私たちを見て、「わあ！——と叫んだ——『聖人ごっこ』してる！『聖人ごっこ』してる！」彼女は、アナスタシア修道女が私たちを癒やしてくれていること、私たちの足がひどく痛んでいることを知らなかったのだ。その後、私がろうそくに火をつけようとしたら、自分のバティストのスカーフに火をつけてしまった。イリーナ修道女が駆け寄ってきて、「おや、おや、おや！」と言いながら、私のスカーフを外した。「ほら、これ、私のを」と言って、自分の破れた半ショールで私を覆ってくれた。私は聖油の塗布を受けに行かなければならなかったが、教会は人でいっぱいだった。もちろん、少し恥ずかしかったわ。みんなが「どうしてそんな順不同な格好をしているの？」と言うの。でも、どうしようもないわ。足が痛いんだから。まあ、いいわ。家に帰ると、アナスタシア修道女が言った。「明日は行かないで、家で横になって、一日中何も食べないで（その日は洗礼者ヨハネの首切断の祝日だった）。そうすれば、あなたの足も治るし、頭も痛くならないわ」と。ナデージアと私は教会から帰ってきて、足を見てみると——何ともなかった！すべてが治り、痛みも消えていた。

マリア・ニキティチナ・オブラツォフ

アナスタシアの母は、いたずらっ子だった。ある時、神父様がどこかへ出かけようとして、車いっぱいの若い女性たちを連れて行き、信徒の女性たちも乗せたが、アナスタシアの母だけは連れて行かなかった。すると彼女は「うっ！」と車を叩いて叫んだ。「何か着るものをくれ！」つまり、何か着るものをくれ、ということだ。彼女にとっては冬でも夏でも関係なく、ほとんど裸同然の状態で神父さんの前を走って先回りしていた。神父さんが到着する頃には、彼女はすでにその場にいた。決して遅れることはなかった。しかし、彼女は神父さんに誠実に仕えていた。そして神父さんも彼女を愛していた。

リディア・ウラジーミロヴナ・ジュコワ

母ユリアが亡くなる時、彼女は私にこう言いました。「リダ、アナスタシア母上も体調が悪かった時、『マチュシュカがオブティナ・プスティンに連れ去られる時、私のことを忘れないで』と言っていたわ。そうやってアナスタシア母上はユリアを叱り、ユリアは今度は私を叱ったのよ。」

1975年、ミハイロフスカヤ教会に、ミトロポリト・イオシフ（チェルノフ）が再び訪れました。大主教はしばしば修道院長夫人についてこう語っていました。「アナスタシア修道院長夫人は預言している、預言しているのだ。」そして、彼とのこの面会の際、マチュシュカは別れを告げました。「ご加護を、大主教様。お許しください。もうお会いすることはないでしょう。」しかし、大主教はこの予言を受け入れようとはしませんでした。夏、アルマアタでモスクワ神学校の学生たちが彼を訪ねてきた際、大主教は食卓に着きながら、その中のひとりであるベトル・ヴェレテニコフにこう語りかけた。「さあ、ペーチャ、ツェリノグラードへ行こう。そしてツェリノグラードからカラガンダに立ち寄り、アナスタシア母を糾弾しよう。」しかし、それは実現しなかった。事情がそうさせたため、大主教はツェリノグラードから直接アルマアタへ飛び立ち、1975年9月4日、ヨシフ大主教は手術中に病院で逝去した。

アナスタシア修道女は1977年4月13日に亡くなった。死の直前、スキーマ（修道服）を授かった。ミハイロフスキー墓地に埋葬された。

ミハイル・ネイグム大司祭

私は、アナスタシア修道女が聖なる人であることを確信している。その聖性は、一見して目につくようなものではない。重要なのは、彼女が常に自らの霊性を隠していたということです。当時の彼女の霊性がはっきりと現れるのは、例えば、何らかの予言や預言が的中した時だけでした。そして概して、彼女はむしろ意図的に少し無愛想な振る舞いをし、腰を揺らして歩き、常に足を引きずり、誰にでも様々な小言を言っていたと思います。もし彼女の外見や振る舞いだけで判断すれば、精神的に高尚な生き方など微塵も感じられなかっただろう。彼女はセバスティアン神父の死後になって初めて「普通」に振る舞うようになったが、それまでは全く受け入れがたい存在であり、彼女をあまり知らない人々は、彼女を狂人だと見なしていた。しかし、神父が亡くなり、聖人の傍らで暮らしていた人々が突然互いに不和になり始めたとき、アナスタシア修道女は、その状況をあまり目立たないように仕向けた。彼女は皆をなだめ、すべてを和らげた。そして、彼女を取り巻く人々の大半は、その愛と優しさを身をもって体験したのである。

私はルーテル教徒の家庭に生まれました。セバスティアン神父が亡くなってから数年後、教会に通い始めました。その後、軍隊に入隊しましたが、戻ってきた頃、私は「混乱」に陥り、誰の言葉も聞かず、一時はまったく手に負えない状態でした。多くの身近な人々が、まるで私から距離を置いたかのようでした。母は、私に機械油を塗ったジャガイモを食べさせたり、大の苦手だった生卵を飲ませたり、まるで私が何か異常者であるかのように、女性のショールを羽織ってバスに乗せたりしたものです。それでも構わず、当時すでに大人だったにもかかわらず、私は女性のショールを羽織って街中を歩き回った。母が「さあ、片足で小道を走ってきなさい」と言えば、私は教会を取り囲む小道を片足で歩いては走ったものだ。なぜ走っていたのか？ それは、私がマチュシュカに対して、この世の誰に対しても感じたことのないような内なる親近感を抱いていたからに他ならない。それは間違いなくそうだ。さらに、彼女の素朴さと少々無骨なところがありながらも、マチュシュカはとても繊細な人だった。そんな人物がいるなんて、想像することさえ難しいほどだ。

私は母をととても愛していた。とはいえ、もしかすると、私が愛していたのはアナスタシアという母そのものではなく、私に対して示してくれたその優しい心遣いだったのかもしれない。実のところ、私は彼女の顔を見たことがなかった。私が目にしたのは、ガロシャを履いた彼女の

大きなヴァレンカだけでした。皆が彼女を深く尊敬していること、彼女が私を身近に迎えてくれたこと、そして彼女が私に優しく接してくれることを、私は誇りに思っていました。私は彼女と過ごす時間がとても長かった。彼女がどこへ行くにも、私は後をついていった。二人はエウドキア修道女のもとへ行き、そこで食事をし、聖人の伝記を読み、私はいつもそこに一緒にいた。私はただ無意識のうちに、聖なる人々のそばにしようとしていた。修道院長はあまり話さず、何も語らなかった。そして、そこではすべてが静かに、静かに流れていた。私はどこにも行きたくなく、家にも帰りたくなかった。ただ彼女のそばにいたい——それだけだった。それ以上、私に何も必要なかった。

その後、私は神学校に入学した。ある時、休暇からセルギエフ・ボサドに戻る必要があり、モスクワ行きの飛行機のチケットを買った。ところが、母は私を行かせようとしなかった。まるで私をからかうかのように、無理やり行かせなかったのだ。彼女は私を自分の部屋へ連れて行き、話し始めた。でも、私は従順なふりをしていたんです——片足で跳ねたり、生卵を飲んだりして。とても従順なふりをしていたんです。だから、母が私に話しかけてきた時、一度だけ「飛行機のチケットを持っているから急がなきゃ」と言いました。でも、母はそれを気にも留めませんでした。あの時、僕はモスクワに行きたくてたまらなかった。どうしてもそこへ行きたかったのだ。だから、彼女が僕を引き留めて、遅刻しそうになると、当然ながら気分は最悪だった。私は腹を立て、歯ぎしりした。その瞬間、私は母の 聖性や先見の明さえ疑ってしまった。心の中でさえ、母を侮辱していた。しかし、母はただ私の航空券を取り上げ、行かせなかった。

そして、その飛行機が離陸直後に墜落し、全員が死亡したことが判明したとき……そう……そのときは全く別の話だった……。私は彼女に、そんなことが起きたことさえ伝えなかった。彼女も私に一言も言わなかった……。私はその翌日、同じ便で飛び立った。

私は時々、アグニア修道女のもとを訪ねた。彼女に対しては少し違った思いを抱いていた。彼女は非常に病弱な人だと分かっていたからだ。彼女の指はすべて曲がっていた——多発性関節炎を患っており、水腫やその他の病気もあり、ある高いテーブルを杖代わりにしてかろうじて移動していたが、痛がっている様子を一切見せなかった。そして、この人（後で思い返したのだが）も、私の心を深く揺さぶった。普段、女性たちはアグニア修道女やアナスタシア修道女について、「あの修道女たちって、すごい！ 本当にすごい！」とひそひそと囁くのが好きだった。私は特に気にしていなかったが、それでもアグニア修道女は私の心を深く揺さぶった。アグニア修道女は、まるで小さな赤ん坊のようだった。とても繊細な赤ん坊で、とても、とても年老いていた。彼女の声は小さな赤ん坊のようで、私と話す時もまるで小さな赤ん坊のようだった。

修道女たちについて、特に何か特別なことを語ることはできません。ただ、彼女たちの特筆すべき点は、本当に透視能力があり、本当に神に愛された存在だったということです。外見上は、謙虚で物静かなおばあさんのように振る舞っていました。確かに、アナスタシア修道女は時々怒ることがあり、つまりとても厳しい口調で話すこともありました。でも、それは私には関係ありませんでした。私に対しては、彼女はいつも愛情深いおばあさんのようでした。ある時、アグニア修道女も誰かに少しきつい口調で話しているのを感じたことがありました。しかし、それも私には関係ありませんでした。彼女は私を怖がらせないよう、愛情を持って接してくれました……他宗教から来た少年を、怖がらせないようにするためでした。

今、私は自分の人生を振り返り、私の人生には罪以外何もなかったこと、そして修道女たちに対して非常に大きな罪を犯していることがはっきりと分かってきた。そして、彼女たちの祈りのおかげで、私はまだこの世に生きているのだと、私は確信している。私の人生に、そのような人々と共に過ごせた時があったことに対し、神に心から感謝する。私は、今も、そしてこれからもずっと、彼女たちと共にいるのだと思う。彼女たちと交流しない日は一日もなく、私は毎日、彼女たちに助けを求めている。